青森県埋蔵文化財調査報告書第71集

下北地点原子力発電所建設予定地内
埋蔵文化財試掘調査報告書

昭 和 56 年 度

青森県教育委員会

下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
例言	24	山内静男	山内清男
挿図目次		図25 ……46	……47
〃		図26 ……47	……46
〃		図111　浜通遺跡陶磁器出土比率	図111　浜通遺跡出土古銭
4	1	第II章　各遺跡の調査	第II章　各遺跡の調査概要と調査成果
12	図5	小グリッド小文字「C」を入れる	
14	10	Nd－50区	Nd－49区
〃	23	第　図	図7
15	9	P－45区	O－45区
23	20	西寄りの	西寄りに
〃	〃	確認された	確認された。
32	16	伊藤信雄	伊東信雄
41	14	前坂下(1)	前坂下(6)
47	図25	I H	1 H
58	図31	（グリッドナンバー）85	86
59	図32	部に炭化粒	一部に炭化粒
70	13	器形胴部上半	胴部上半
74	14	晩期からの	晩期から
82	10	後藤　隆	須藤　隆
90	6	集落後	集落跡
99	14	石鍾	石錘
115	図63	「I」層の位置を最上層に上げる	
123	図70	大グリッド大文字「I」を入れる	
135	図73	（大グリッド文字）F	E
140	4	共同基地	共同墓地
154	図84	十腰内1式	十腰内I式
175	2	1　遺跡の自然的環境	1　遺跡の立地
187	9	およそ15m	およそ5m
189	9	中礫を含む。暗褐色粘土質	中礫を含む暗褐色粘土質
〃	15	火山灰で	火山灰質で
202	25	完成品は	完形品は
210	4	写真34	写真33
211	図110－2	産地未群	産地未詳
〃	〃	51.6%の上に「唐津」を入れる	
212	図111	北来天禧元年	北宋天禧元年
〃	2	16世紀の	16世紀後半から17世紀前半にかけての
225	6	竪穴の住居跡	竪穴住居跡
232	3	ピットでは	ピット2は
243	16	『北奥古代文化』の後に「第6号北奥古代文化研究会」を入れる	
251	14	場合の	場合に
252	2	「青森県埋蔵文化財調査報告書第67集」を入れる	

青森県埋蔵文化財調査報告書第71集

下北地点原子力発電所建設予定地内
埋蔵文化財試掘調査報告書

昭和56年度

青森県教育委員会

序

本報告書は、下北地点原子力発電所建設事業に伴い、その用地内に所在する埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和52年度の分布調査に引き続き、昭和55年度に実施した試掘調査の結果をまとめたものであります。

今回の調査によって、当地における縄文時代、弥生時代、古代、中・近世における生活様式の一端をとらえることができました。

この成果が、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

最後に、この調査に参加された調査員をはじめ、種々御指導、御協力をいただいた関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年３月

青森県教育委員会

教育長　二ツ森　重　志

例　　言

1　本報告書は、昭和55年度に実施した下北地点原子力発電所建設予定地内に所在する、20遺跡の試掘調査報告書である。

2　本報告書の執筆者の氏名を、それぞれの文末に付した。

3　見知川山遺跡の試錐調査は、弘前大学教育学部助教授塩原鉄郎氏に、銅屋(3)遺跡第１号住居跡出土の炭化材の樹種同定については、元奈良教育大学教授嶋倉巳三郎氏に依頼した。

4　本報告書の遺構、遺物の挿図及び写真縮尺は、原則として次のとおりである。

（1）挿図縮尺

住居跡、小竪穴遺構、遺物出土状況図……1/50

炉石、かまど断面図……1/25

土器実測図、土器投影図 ……1/3

陶磁器実測図 ……1/2

剥片石器実測図 ……1/1.5

礫石器実測図 ……1/3

（2）写真縮尺

土器 ……1/3

剥片石器 ……1/1.5

礫石器 ……1/3

（写真14－３） ……1/4

古銭 ……1/1

鉄製品及び鉄滓 ……1/3

陶磁器 ……約1/2

木製品 ……1/3

5　縄文土器の観察表に使用した用語は、山内静男著『日本先史土器の縄文』を参考にした。

6　発掘調査ならびに本報告書の作成にあたっては、次の諸氏から御教示を賜わった。

藤野道生（弘前大学人文学部教授）　　橘　善光（むつ工業高等学校事務長）

林　謙作（北海道大学文学部助教授）　　工藤竹久（八戸市教育委員会主事）

7　中、近世陶磁器の鑑定については、金沢大学助教授佐々木達夫氏、東北歴史資料館考古科長藤招邦彦氏、浪岡町教育委員会工藤清泰氏に、また、石器の石質鑑定については、八戸高等学校教諭松山力氏に、それぞれ依頼した。

8　引用、参考文献は、各節の末尾に収録した。

目　　次

序
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項 …… 2
第１節　調査に至る経過 …… 2
第２節　調査要項 …… 2
第Ⅱ章　各遺跡の調査概要と調査成果 …… 4
第１節　銅屋(1)遺跡 …… 4
1　遺跡の立地 …… 4
2　調査経過と調査方法 …… 4
3　試掘の状況 …… 4
4　小結 …… 7
第２節　銅屋(2)遺跡 …… 10
1　遺跡の立地 …… 10
2　調査経過と調査方法 …… 10
3　遺跡の層序 …… 13
4　検出遺構と出土遺物 …… 14
5　小結 …… 15
第３節　銅屋(3)遺跡 …… 18
1　遺跡の立地 …… 18
2　調査経過と調査方法 …… 18
3　遺跡の層序 …… 18
4　検出遺構と出土遺物 …… 21
5　小結 …… 31
第４節　前坂下(1)遺跡 …… 41
1　遺跡の立地 …… 41
2　調査経過と調査方法 …… 41
3　遺跡の層序 …… 41
4　検出遺構と出土遺物 …… 44

5　小結……48
第５節　前坂下(2)遺跡……51
1　遺跡の立地……51
2　調査経過と調査方法……51
3　遺跡の層序……52
4　検出遺構と出土遺物……54
5　小結……54
第６節　前坂下(3)遺跡……56
1　遺跡の立地……56
2　調査経過と調査方法……56
3　遺跡の層序……56
4　検出遺構と出土遺物……59
5　小結……79
第７節　前坂下(4)遺跡……90
1　遺跡の立地……90
2　調査経過と調査方法……91
3　遺跡の層序……91
4　検出遺構と出土遺物……93
5　小結……93
第８節　前坂下(5)遺跡……95
1　遺跡の立地……95
2　調査経過と調査方法……95
3　遺跡の層序……95
4　検出遺構と出土遺物……98
5　小結……99
第９節　前坂下(6)遺跡……103
1　遺跡の立地……103
2　調査経過と調査方法……103
3　遺跡の層序……103
4　検出遺構と出土遺物……107
5　小結……109
第10節　前坂下(7)遺跡……114

1　遺跡の立地 ……114
2　調査経過と調査方法 ……114
3　遺跡の層序 ……115
4　検出遺構と出土遺物 ……115
5　小結 ……117
第11節　前坂下(8)遺跡……119
1　遺跡の立地 ……119
2　調査経過と調査方法 ……119
3　遺跡の層序 ……119
4　検出遺構と出土遺物 ……122
5　小結 ……123
第12節　前坂下(9)遺跡……126
1　遺跡の立地 ……126
2　調査経過と調査方法 ……126
3　遺跡の層序 ……126
4　検出遺構と出土遺物 ……129
5　小結 ……130
第13節　前坂下(10)遺跡 ……133
1　遺跡の立地 ……133
2　調査経過と調査方法 ……133
3　遺跡の層序 ……133
4　検出遺構と出土遺物 ……135
5　小結 ……136
第14節　前坂下(11)遺跡 ……140
1　遺跡の立地 ……140
2　調査経過と調査方法 ……142
3　遺跡の層序 ……142
4　検出遺構と出土遺物 ……144
5　小結 ……148
第15節　前坂下(12)遺跡 ……152
1　遺跡の立地 ……152
2　調査経過と調査方法 ……152

3　遺跡の層序 ……155
4　検出遺構と出土遺物 ……156
5　小結 ……158
第16節　前坂下(13)遺跡 ……161
1　遺跡の立地 ……161
2　調査経過と調査方法 ……161
3　遺跡の層序 ……161
4　検出遺構と出土遺物 ……164
5　小結 ……168
第17節　南通遺跡 ……175
1　遺跡の立地 ……175
2　調査経過と調査方法 ……177
3　遺跡の層序 ……177
4　検出遺構と出土遺物 ……178
5　小結 ……178
第18節　見知川山遺跡 ……180
1　調査経過と調査の方法 ……180
2　見知川山遺跡の積石塚について ……180
第19節　浜通遺跡 ……193
1　遺跡の立地 ……193
2　調査経過と調査方法 ……193
3　遺跡の層序 ……198
4　検出遺構と出土遺物 ……198
5　小結 ……214
第20節　アイヌ野遺跡 ……222
1　遺跡の立地 ……222
2　調査経過と調査方法 ……222
3　遺跡の層序 ……225
4　検出遺構と出土遺物 ……227
5　小結 ……242
第III章　まとめ ……250

挿　図　目　次

図１　下北地点原子力発電所用地内遺跡分布 …… 1
図２　銅屋(1)遺跡地形 …… 5
図３　第１号トレンチ・層序 …… 6
図４　銅屋(2)(3)遺跡地形 …… 11
図５　銅屋(2)遺跡グリッド・遺構配置 …… 12
図６　グリッドの呼称 …… 13
図７　銅屋(2)遺跡出土遺物 …… 15
図８　銅屋(3)遺跡グリッド・遺構配置 …… 19
図９　銅屋(3)遺跡基本層序 …… 20
図10　第１号竪穴住居跡 …… 24
図11　第１号竪穴住居跡カマド …… 25
図12　第１号竪穴住居跡遺物出土状況 …… 26
図13　第２号竪穴住居跡 …… 28
図14　第３号竪穴住居跡平面及び出土遺物 …… 29
図15　時期別遺跡範囲推定図 …… 31
図16　第１号竪穴住居跡出土土師器 …… 33
図17　出土遺物(1) …… 34
図18　出土遺物(2) …… 35
図19　出土遺物(3) …… 36
図20　出土遺物(4) …… 37
図21　前坂下(1)遺跡地形・調査区配置 …… 42
図22　前坂下(1)遺跡グリッド・遺構配置 …… 43
図23　前坂下(1)遺跡基本層序 …… 44
図24　前坂下(1)遺跡第１号住居跡 …… 45
図25　前坂下(1)遺跡出土土器・陶磁器 …… 46
図26　前坂下(1)遺跡出土石器 …… 47
図27　前坂下(2)遺跡地形・調査区配置 …… 51
図28　前坂下(2)遺跡基本層序 …… 52
図29　前坂下(2)遺跡風倒木痕断面 …… 53
図30　前坂下(3)遺跡地形・調査区配置 …… 57
図31　前坂下(3)遺跡グリッド・遺構配置 …… 58
図32　前坂下(3)遺跡基本層序 …… 59
図33　前坂下(3)遺跡第１号住居跡 …… 61
図34　前坂下(3)遺跡第１号住居跡 …… 62
図35　前坂下(3)遺跡第１号住居跡遺物分布 …… 65
図36　前坂下(3)遺跡第１号住居跡遺物出土位置　66
図37　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(1) …67
図38　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(2) …68
図39　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(3) …69
図40　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土石器(1) …71
図41　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土石器(2) …72
図42　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土石器(3) …73
図43　前坂下(3)遺跡第２号住居跡 …… 77
図44　前坂下(3)遺跡第２号住居跡出土遺物 …… 78
図45　前坂下(3)遺跡遺構外出土土器 …… 79
図46　前坂下(3)遺跡遺構外出土石器(1) …… 80
図47　前坂下(3)遺跡遺構外出土石器(2) …… 81
図48　前坂下(4)遺跡地形・調査区配置 …… 90
図49　前坂下(4)遺跡基本層序 …… 91
図50　前坂下(4)遺跡小竪穴遺構・風倒木痕 …… 92
図51　前坂下(5)遺跡地形・調査区配置 …… 96
図52　前坂下(5)遺跡グリッド・遺構配置 …… 97
図53　前坂下(5)遺跡基本層序 …… 98
図54　前坂下(5)遺跡出土土器 …… 99
図55　前坂下(5)遺跡出土土器・石器 …… 100
図56　前坂下(6)遺跡地形・調査区配置 …… 104
図57　前坂下(6)遺跡グリッド・遺構配置 …… 105
図58　前坂下(6)遺跡基本層序 …… 106
図59　前坂下(6)遺跡第１号住居跡 …… 107
図60　前坂下(6)遺跡第１号溝状ピット …… 108
図61　前坂下(6)遺跡出土土器 …… 109
図62　前坂下(7)遺跡地形・調査区配置 …… 114
図63　前坂下(7)遺跡基本層序 …… 115
図64　前坂下(7)遺跡溝状ピット …… 116
図65　前坂下(8)遺跡地形 …… 120
図66　前坂下(8)遺跡グリッド・遺構配置 …… 121
図67　前坂下(8)遺跡基本層序 …… 122
図68　前坂下(8)遺跡出土遺物 …… 124
図69　前坂下(9)遺跡地形 …… 127
図70　前坂下(9)遺跡グリッド・遺構配置 …… 128
図71　火山灰堆積状況・焼土遺構 …… 131
図72　前坂下(10)遺跡地形 …… 134
図73　前坂下(10)遺跡グリッド・遺構配置 …… 135
図74　前坂下(10)遺跡基本層序 …… 136
図75　前坂下(10)遺跡遺物分布 …… 137
図76　前坂下(10)遺跡出土遺物 …… 137
図77　前坂下(11)遺跡地形・調査区配置 …… 140
図78　前坂下(11)遺跡グリッド・遺構配置 …… 141
図79　前坂下(11)遺跡基本層序 …… 142
図80　前坂下(11)遺跡第１号小竪穴遺構 …… 143
図81　前坂下(11)遺跡出土土器(1) …… 145
図82　前坂下(11)遺跡出土土器(2) …… 147
図83　前坂下(12)遺跡地形・調査区配置 …… 153
図84　前坂下(12)遺跡Ａ地点グリッド･遺構配置 154
図85　前坂下(12)遺跡Ａ地点基本層序 …… 155
図86　前坂下(12)遺跡Ｂ地点基本層序 …… 155
図87　前坂下(12)遺跡出土土器 …… 157
図88　前坂下(13)遺跡地形・調査区配置 …… 162
図89　前坂下(13)遺跡グリッド･遺構配置･基本層序 …… 163
図90　前坂下(13)遺跡出土土器 …… 167
図91　前坂下(13)遺跡出土石器 …… 169
図92　前坂下(13)遺跡出土陶磁器 …… 170
図93　南通遺跡地形・調査区配置 …… 175
図94　南通遺跡グリッド・遺構配置 …… 176
図95　南通遺跡基本層序 …… 177
図96　見知川山遺跡地形・グリッド配置 …… 181
図97　見知川山遺跡積石塚（孤立丘）配置 …… 182
図98　見知川山遺跡第１号積石塚 …… 183
図99　見知川山遺跡トレンチ内礫群出土状況 …185
図100　浜通遺跡地形・調査区配置 …… 194
図101　浜通遺跡グリッド・遺構配置(1) …… 195
図102　浜通遺跡グリッド・遺構配置(2) …… 196
図103　浜通遺跡Ａ地点基本層序 …… 197
図104　浜通遺跡Ｂ地点基本層序 …… 197
図105　浜通遺跡第１号集石遺構・第１号土坑 …199

図106　浜通遺跡第２号集石遺構 ……200
図107　浜通遺跡出土遺物 ……203
図108　浜通遺跡出土陶磁器(1) ……206
図109　浜通遺跡出土陶磁器(2) ……209
図110　浜通遺跡陶磁器出土比率 ……211
図111　浜通遺跡陶磁器出土比率 ……212
図112　浜通遺跡出土鉄器 ……213
図113　アイヌ野遺跡地形・調査区配置 ……223
図114　アイヌ野遺跡グリッド・遺構配置 ……224
図115　アイヌ野遺跡基本層序 ……225
図116　アイヌ野遺跡第１号住居跡 ……226
図117　アイヌ野遺跡第２号住居跡 ……228
図118　アイヌ野遺跡第２号住居跡平面・カマド断面 ……229
図119　アイヌ野遺跡第２号住居跡主柱穴配置と柱痕跡 ……230
図120　アイヌ野遺跡第２号住居跡遺物出土位置　233
図121　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土遺物分布　234
図122　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(1) …235
図123　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(2) …236
図124　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(3) …237
図125　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(4) …238
図126　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(5) …239
図127　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(6) …240

表　目　次

表１　前坂下(3)遺跡第１号住居跡ピット一覧 …60
表２　前坂下(3)遺跡第１号住居跡堆積土一覧 …63
表３　前坂下(11)遺跡遺構等一覧 ……144
表４　浜通遺跡ピット一覧 ……202
表５　アイヌ野遺跡住居跡(凹地)確認状況一覧　243
表６　下北地点原子力発電所建設予定地内における遺跡形成時期一覧 ……253

写　真　目　次

写真１　銅屋(1)遺跡 ……9
写真２　銅屋(2)遺跡・出土遺物 ……17
写真３　銅屋(3)遺跡第１号竪穴住居跡 ……38
写真４　銅屋(3)遺跡・出土遺物 ……39
写真５　第１号竪穴住居跡出土炭化材顕微鏡写真 40
写真６　前坂下(1)遺跡第１号住居跡 ……49
写真７　前坂下(1)遺跡出土遺物 ……50
写真８　前坂下(2)遺跡 ……55
写真９　前坂下(3)遺跡第１号住居跡 ……83
写真10　前坂下(3)遺跡第１号住居跡 ……84
写真11　前坂下(3)遺跡第１号住居跡 ……85
写真12　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土遺物 …86
写真13　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土石器 …87
写真14　前坂下(3)遺跡第２号住居跡出土遺物 …88
写真15　前坂下(3)遺跡遺構外出土遺物 ……89
写真16　前坂下(4)遺跡 ……94
写真17　前坂下(5)遺跡出土遺物 ……102
写真18　前坂下(6)遺跡 ……111
写真19　前坂下(6)遺跡第１号住居跡 ……112
写真20　前坂下(6)遺跡 ……113
写真21　前坂下(7)遺跡 ……118
写真22　前坂下(8)遺跡 ……125
写真23　前坂下(9)遺跡 ……132
写真24　前坂下(10)遺跡 ……139
写真25　前坂下(11)遺跡 ……149
写真26　前坂下(11)遺跡出土土器(1) ……150
写真27　前坂下(11)遺跡出土土器(2) ……151
写真28　前坂下(12)遺跡 ……159
写真29　前坂下(12)遺跡出土土器 ……160
写真30　前坂下(13)遺跡全景 ……172
写真31　前坂下(13)遺跡出土土器 ……173
写真32　前坂下(13)遺跡出土石器 ……174
写真33　南通遺跡 ……179
写真34　見知川山遺跡 ……191
写真35　見知川山遺跡礫群出土状況 ……192
写真36　浜通遺跡 ……216
写真37　浜通遺跡 ……217
写真38　浜通遺跡第１号土坑 ……218
写真39　浜通遺跡出土遺物 ……219
写真40　浜通遺跡出土陶磁器(1) ……220
写真41　浜通遺跡出土陶磁器(2) ……221
写真42　アイヌ野遺跡第２号住居跡 ……244
写真43　アイヌ野遺跡第２号住居跡 ……245
写真44　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土遺物 …246
写真45　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器(1)247
写真46　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器(2)248
写真47　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器・須恵器 ……249

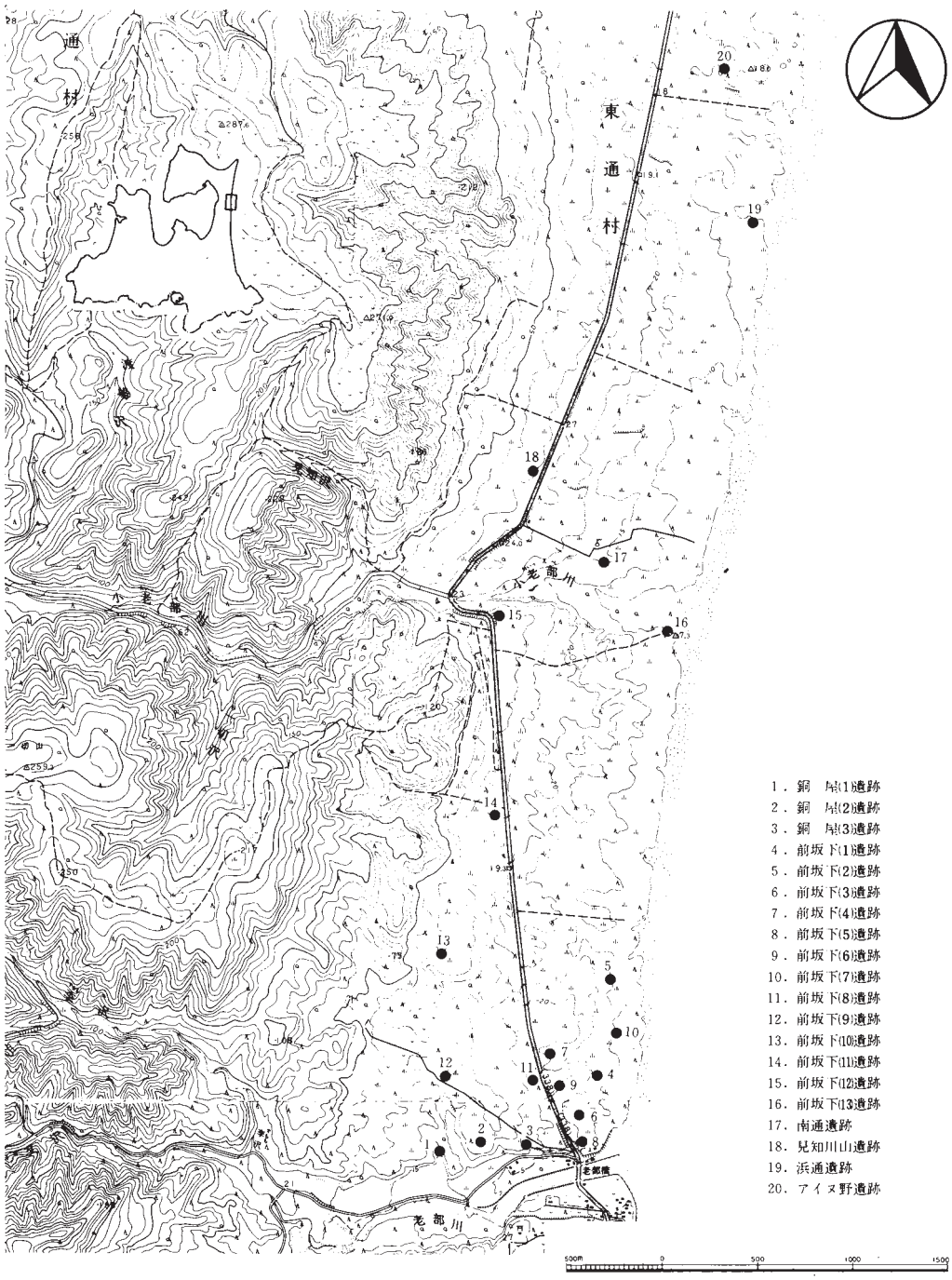


図１　下北地点原子力発電所用地内遺跡分布図

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

下北郡東通村内に原子力発電所の建設が決定されたのは昭和45年である。昭和52年に入って東京電力株式会社と東北電力株式会社から建設予定地内における埋蔵文化財分布調査の依頼があった。そこで、青森県教育委員会は、両電力株式会社と調査日程、調査費用等についての協議を行ったうえ、昭和52年４月11日から28日まで分布調査を実施した。

その結果、建設予定地内には、これまで、周知の遺跡とされていたアイヌ野遺跡・見知川山遺跡のほかに18地点で土器・石器・焼土遺構・館跡等が確認された。しかし、これら20遺跡の性格・範囲・密度等については、分布調査の性格上、詳細に把握するまでに至らなかった。これについては、昭和53年に青森県教育委員会から「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書」が刊行されている。

昭和54年、両電力株式会社から、この20遺跡の性格・範囲・包蔵状態等の確認のための試掘調査の依頼を受け、昭和55年５月７日から同年10月31日までの予定で、試掘調査を実施することにした。

第２節　調査要項

１　調査目的

下北地点原子力発電所の建設に伴い、消滅するおそれのある遺跡を、工事に先立ち試掘調査して、遺跡の規模、種類、及び性格などを確認し、その保護と活用などを講ずる資料を作成する。

２　遺跡の所在地

下北郡東通村大字白糠・同小田野沢

３　調査期間

昭和55年５月７日～昭和55年10月31日

４　調査依頼者

東京電力株式会社、東北電力株式会社

5　調査担当者

青森県教育委員会

6　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

7　調査関係協力機関

東通村企画課、東通村教育委員会

8　調査参加者

調査指導員

村越　潔（弘前大学教授、青森県文化財保護審議会委員）

調査補助員

内村三千夫、三戸孝、中嶋久彰、千葉正人、須藤節子、鈴木ひとみ、嶋中峰子、佐藤ゆかり

青森県埋蔵文化財調査センター

北山峰一郎	所長
古井睦夫	次長
新谷　武	調査第一課課長
三宅徹也	調査第一課主査
大瀬秀男	〃
三浦圭介	調査第一課主事
白鳥文雄	〃
高坂一夫	臨時職員
豊島広美	〃

第Ⅱ章　各遺跡の調査

第１節　銅屋(1)遺跡

1　遺跡の立地

本遺跡は、下北郡東通村大字白糠字銅屋24～10ほかに所在する。老部川の北岸、河口から900mほど上流の舌状台地上に位置する。標高約28m、下面の河岸台丘面との比高差は約18mである。台地先端部は、老部川に臨み、北側及び北西側は吹越山地へと続く。東側及び南西側は沢地である。

2　調査経過と調査方法

本遺跡は、昭和52年度の分布調査（青森県埋蔵文化財調査報告書第43集）で、台地先端部を主体部とする「館」跡として確認された。現在、台地上面及び斜面は、植林後10年から30年を経た杉林となっている。今回の調査では「館」に伴う施設の検出に主眼が置かれたが、主体部と推定される部分は、調査対象区域外であり、立木及び下草の繁茂等によって諸施設の踏査は、非常に困難であった。また対象区域が東北電力株式会社所有地内に限られ、「館」主体部から大きくはずれた地点であるため、調査も外郭施設の確認に限定せざるを得なかった。このため、昭和52年度の分布調査において掘跡の可能性が指摘された沢目にトレンチを設けることとしたが、立木及び下草等の状況から、境界杭敷設のために刈り払いの行われた範囲に限定された。また、台地縁辺部に犬走り状の段差が確認されたために、この部分にもトレンチを設けた。

3　試掘の状況

第１号トレンチ

空堀の掘り込み等を確認するために、台地平坦部から東側の沢地に走向する谷地形に、これを横断する形で設けたトレンチで、幅約１m、長さ約21mである。谷の形状は、東側に比して西側の斜面は、低く、底面はほぼ平坦であった。

図2　銅屋(1)遺跡地形

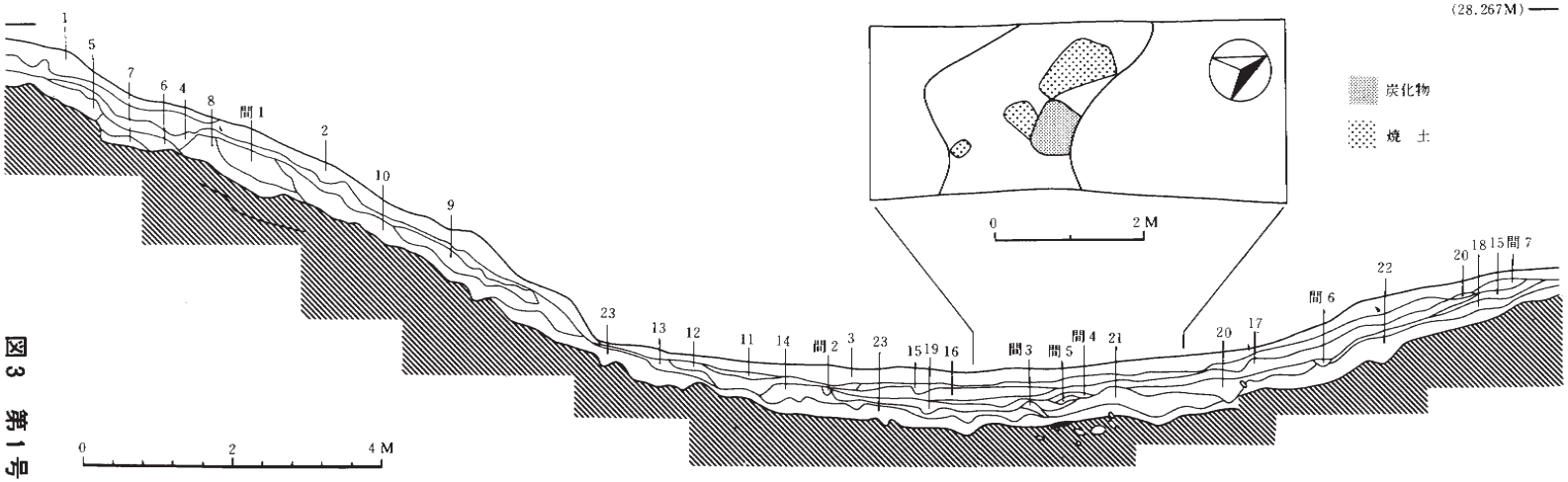


図3　第1号トレンチ・層序

1層　暗褐色土　草木の根が多く混入、ごく少量のローム粒子を混入しまりあり、粘性少ない。
2層　黒褐色土　草木の根が多くもろい。湿性、粘性少い。少量のローム粒及び焼土を含む。
3層　暗褐色土　草木の根が多く混入、2～5㎝大のローム粒がしもふり状に混入、粘性なし。
4層　褐　色　土　1㎝大のローム粒を混入、粘性あり。部分的に暗褐色土及び黒褐色土がしみ状に混入。
5層　黄褐色土　2～5㎝大のローム粒を含む。粘性あり。
6層　褐　色　土　ローム崩壊土との暗褐色土との混合土、もろい。
7層　黄褐色土　ローム崩壊土、非常にもろい。
8層　黄褐色土　粘性あり、部分的に明るい色の部分がみられる、しまりがある。
9層　褐　色　土　粒子が均一であり、混入物も少く、非常にしまりがある。
10層　褐　色　土　粒子は均一であり、しまりがある。部分的に暗褐色土のしみがみられ、ローム粒が少量混入している。
11層　黒褐色土　1㎜大程のローム粒子混入、粒子は細かくシルト質である。粘性・湿性なし。
12層　暗褐色土　ローム崩壊土と暗褐色土との混合土。粘性なし、部分的にもろい。
13層　暗褐色土　ローム粒の混入が多い。粘性ややあり、もろい。
14層　褐　色　土　1㎝大のローム粒子混入。粘性あり、しまりがある。
15層　暗褐色土　3層よりやや明るい。ローム粒混入粘性なし。
16層　黒褐色土　2層とほぼ同じである。シルト質であるが、部分的にロームと褐色土が混入している。
17層　暗褐色土　0.1㎜～3㎜大のロームが混入している。粒子はこまかく均一であり、しまっている。焼土及び炭化物が混入する。
18層　褐　色　土　粘性あり、ローム粒混入。
19層　褐　色　土　粘性あり、しまっている。14層より明るい。
20層　褐　色　土　ローム粒子を多量に混入、粘性あり。
21層　褐　色　土　粒子は均一であり、しまっている。粘性あり。
22層　明黄褐色土　粒子が荒くもろい（ローム）
23層　明黄褐色土　粘性あり（ローム）砂粒を多く混入する。
24層　明黄褐色土　砂粒を多く混入する。硬くしまっている。自然礫を多く混入。
間1　褐　色　土　4層よりやや黒っぽい。1～2㎝大のローム粒を含む。黒色土がしみ状に混入粘性ややあり。
間2　明黄褐色土　ロームブロック
間3　明黄褐色土　ロームブロックであるが、非常に粘性がある。
間4　褐　色　土　シルト質であり、しまりがある。1㎜大のローム粒がしもふり状に混入。
間5　明黄褐色土　間3層と同様である。
間6　明黄褐色土　ロームブロック
間7　黒褐色土　ブロック状に混入、非常にもろい。

たが、黒褐色土中に焼土及び炭化物の検出を見た。焼土は、厚さ約５㎝で堆積しており、炭化物と混じった状態で検出したが、掘り方及びその範囲を確認するには至らなかった。

第２号トレンチ

台地東側縁辺部に沿って、幅1.5mほどの段を確認できたため、犬走り状の段築の可能性が考えられた。このため、斜面に垂直に、幅約１m、長さ２mのトレンチを設けた。表土下30㎝ほどに礫の堆積が見られ、石積みによる施設が考えられたが、この礫層は１mほど掘り下げた部分でも途切れず、また、第１号トレンチ北側部分においても礫の堆積が確認されていることから自然礫層と断定した。表土下が、もろい礫層で、立木の根元部分も歪曲していることから、この犬走り状の段差は、地滑りによるものと思われる。

４　小結

調査の主目的は、本台地上における「館」の性格と、その諸施設の確認にあったが、調査区域及び立木、下草等の問題によって充分な踏査を行うことができなかった。前述のとおり、「館」主体部と思われる場所は、調査対象区域から離れており、テストトレンチの設定も、境界杭敷設のために刈り払いの行われた地点に限定せざるを得なかった。このため施設として推定された部分においても、その構築の規模を把握することはできなかった。

今回の調査において設けた２本のテストトレンチの内、第１号トレンチは、当初、空堀跡と推定された部分に設置したが、精査の結果、人為的なものは確認できず、また、第２号トレンチも同様であった。このため、今回の調査範囲が「館」の外郭施設に含まれるか否かは不明である。しかし、精査範囲が狭い範囲であったために、人為的な構築部分からはずれたことも考えられ、館の構築時期が把握できない現状においては、自然地形を利用した縦堀等の可能性も考えられる。したがって、テストトレンチにおいて人為的な構築を確認できなかったために、外郭施設でないとは言い切れない。また、その施設のほとんどを自然地形に依存した館跡の存在も考えられ、時期差はあるものの、焼土の検出により、何らかの形で、人間が介在していたことも事実である。

前述の、施設と考えられた地点のほかにも、国道付け替えに伴う予定路線部分において緩斜面にテラス状の段差を確認した。この地点も、道路センターライン部分の刈り払いが行われているだけであり、この非常に狭い範囲にテストトレンチを設けて、その結果をもって、この地点の性格づけをすることは非常に危険なことであると思われる。このため、この地点の精査は行わないこととした。

調査対象区域内において、焼土遺構を除いては、何ら遺構は確認できなかったが、前述のと

おり、限られた範囲での調査であったために、本遺跡全体について論述することはできない。

今後、より広い範囲での調査結果を待ちたい。

（白鳥　文雄）

写真1　銅 屋 (1) 遺 跡

第２節　銅屋(2)遺跡

1　遺跡の立地

本遺跡は、下北郡東通村大字白糠字銅屋24～101に所在する。老部川北岸の標高27mの台地上に立地し、同台地の東側には、銅屋(3)遺跡が所在している。遺跡は老部共同墓地向かいの農道を西方へ約500m進むと、その農道の南側に隣接している。この台地は、東側にゆるく傾斜しているが、比較的平坦である。遺跡の南側は、老部川の沖積段丘面に対し急崖を呈し、その比高差は約18mである。西側には沢があり、その沢を隔てた台地には、銅屋(1)遺跡が立地している。遺跡内とその周辺は畑地であったが、現在では耕作されておらずカヤなどが繁茂している。

2　調査経過と調査方法

遺構・遺物の確認を主体に、遺跡の性格を把握することにした。調査は、カヤの刈り払い作業から始め、順次グリッド設定を行った。グリッド設定にあたっては、同台地上にある銅屋(3)遺跡との中間点において、土器片が採集され、遺跡が連続している可能性が考えられるため、銅屋(3)遺跡と同一の基準線を使用することにした。原点は、東北電力株式会社の境界杭「外23」とし、この点を基準に方位に従って１辺４mのグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で表示することとした。しかし、両遺跡を同一基準を用いて表示するためには、あまりにも広大である。このため、東西方向は20m毎の大グリッドに大文字を、この間の４m毎の小グリッドにはａ～ｅまでの小文字を用い、この両者の数字の組合わせによってグリッドを表示することとし、（Ａｃ－６，Ｃｄ－９等)、20m毎の大グリッドは、Ａ－５・Ｃ－10等と表示することとした。（第６図参照）

また、便宜上Ｋラインをもって、本遺跡と(3)遺跡との境界とした。

銅屋(1)～(3)遺跡内には、国道の付け替え道路が予定されているため、この路線内については、特に綿密な調査を行うこととした。このため小グリッドの軸線に沿って１m×４mのトレンチを交互に設け、１大グリッドには、最大13本のトレンチを設定することにした。また、他の調査区には、大グリッドの軸線に沿って幅１mのトレンチを設定した。長さは地形により不等長である。しかし、遺構検出及び、遺物出土の際には適宜に拡張することにした。調査は銅屋(3)遺跡から開始し、前述の１m×４mの小トレンチを多く設けたが、本遺跡においては、大グリッドに沿ったトレンチにより、遺跡の性格を把握することとした。

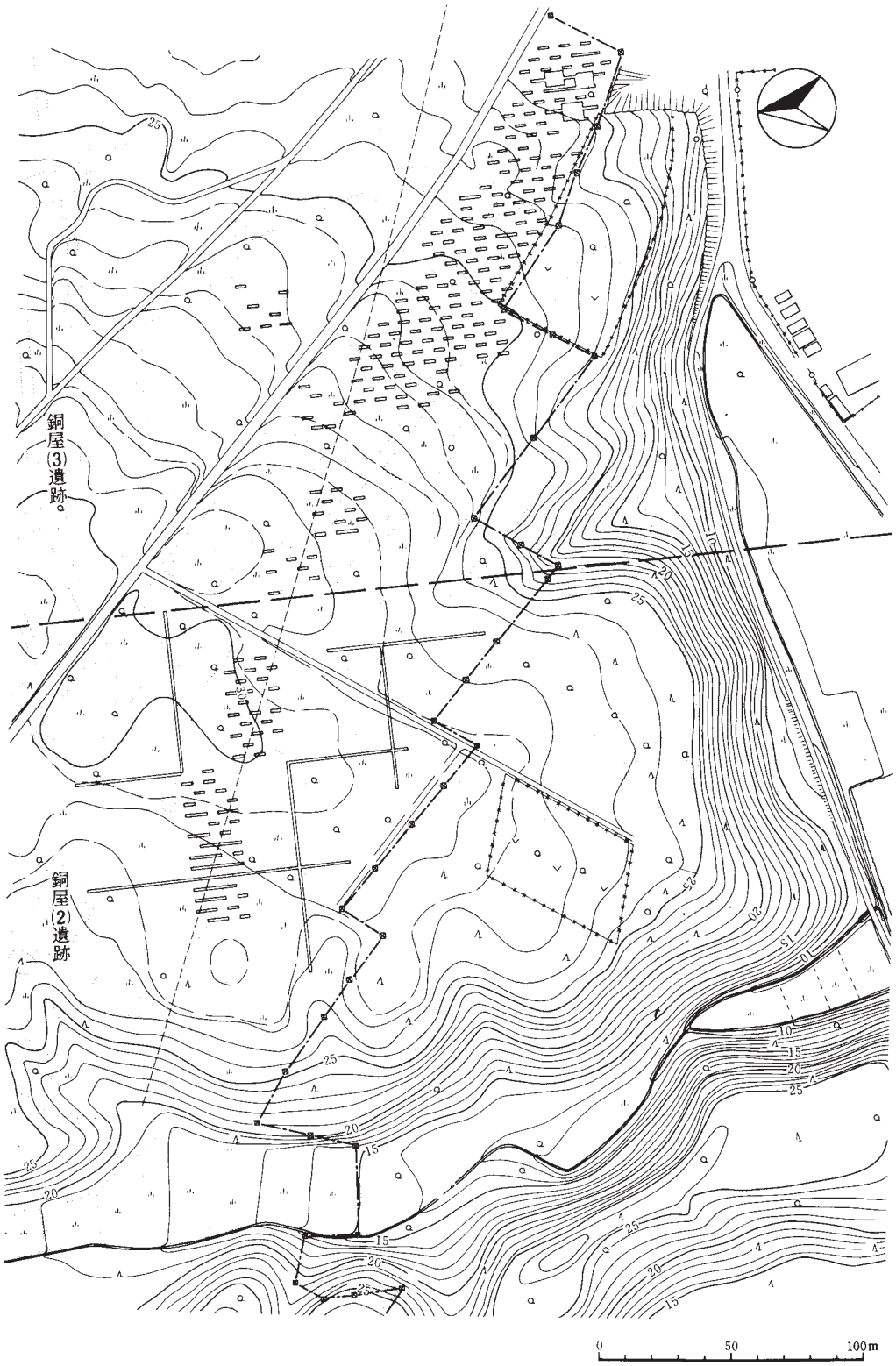


図4　銅屋(2)・(3)遺跡地形

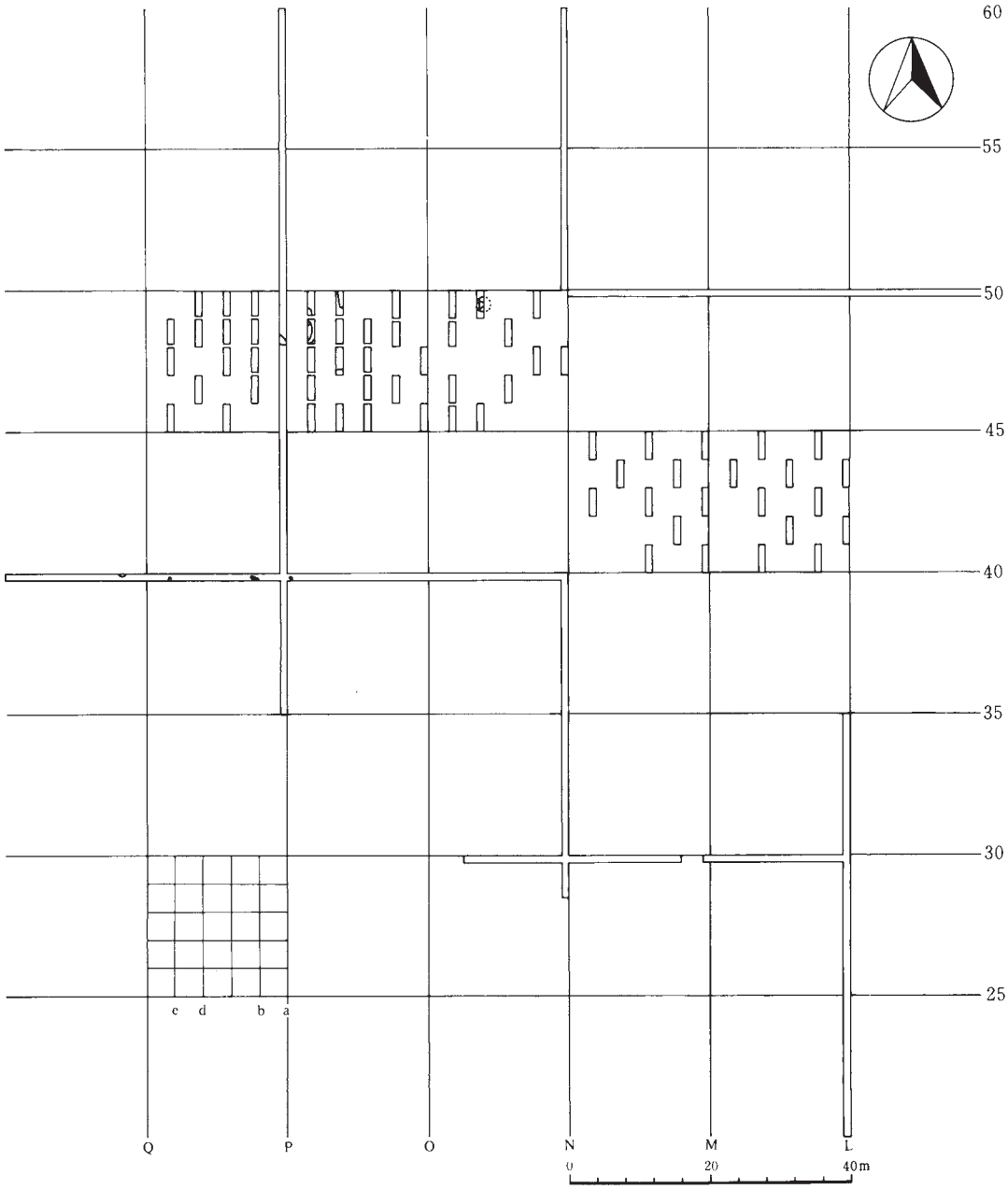


図 5　銅屋(2)遺跡グリッド・遺構配置

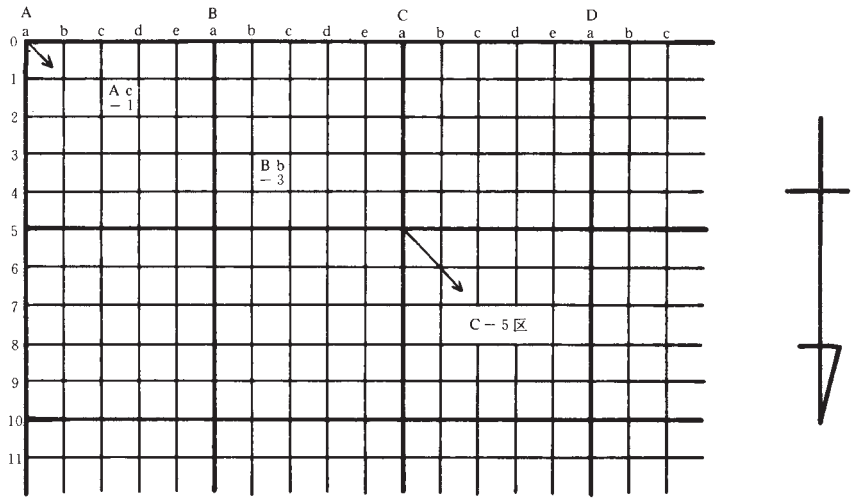


図 6　グリッドの呼称

調査も 5 月末頃になると、調査区の西側において焼土遺構が確認されはじめ、L 6 区においては、縄文時代前期初頭の土器片が数点出土した。また、他の調査区からも、土器片の出土がみられたが、合計21点である。いずれも散発的に出土しており、遺跡の中心部となるところには、ついに当たらなかった。

調査は、 5 月20日から始め、 6 月 4 日で終了した。試掘調査面積は476㎡である。

3　遺跡の層序

本遺跡は、東側にゆるく傾斜している台地であり、凹凸面が少なく比較的平坦である。層序は基本的に第Ⅰ層から第Ⅴ層まで分層される。

第Ⅰ層は黒褐色土で、砂粒大の浮石粒を若干含み、全体に細砂を含む土質である。この層は耕作土であり、第Ⅱ層との分層面は比較的明瞭に区分されるものである。層厚は20.1㎝である。第Ⅱ層は褐色土で、砂粒大の浮石粒を若干含み、カーボンも微量ながら混入していて、かたくしまっている。この層は、遺跡全体に堆積しているものではなく、地区により堆積していない部分もみられる。層厚は約11.1㎝で、薄い層である。第Ⅲ層は暗褐色土で、全体に砂粒大の浮石粒を多く含み、部分的にロームブロックが混入している。この層は縄文時代前期の遺物を包含している。層厚は約16.3㎝である。第Ⅳ層は暗褐色土で、多量にロームを含み、第Ⅴ層の漸移層である。第Ⅴ層との分層面は、凹凸に富み、不明瞭である。第Ⅴ層は黄褐色土で、ローム層である。若干の小礫・微砂を混入している。この層はいわゆる地山であり、各地区とも凹凸

などは、比較的みられず、層厚は約14.6㎝で平均した堆積状態である。調査は、第Ⅴ層上面まで掘り下げることを基本とした。

以上、各層の特徴を述べたが、比較的おだやかな堆積状態であり、人為的に攪乱を受けた所もなく、保存状態は良好である。

4　検出遺構と出土遺物

検出遺構

調査区の西端部に合計11基の焼土遺構を確認した。このうち、精査したのは1基であり、ほかは表面観察にとどめた。

焼土遺構

Ｎｄ－50区で検出した。精査は約半分しかできなかったため、全体の詳細は不明である。平面形は、ほぼ円形に近い形状と思われる。断面形は、鍋底状を呈している。壁・底面とも確認し難く、特に底面は、凹凸が激しく不明瞭である。覆土は、第１層から第８層まで分層されるが、焼土は、第４層上面と第５層下面にみられる。炭化物は、第７層上下面にみられる。炭化状態は悪く、内部まで炭化しておらず生焼けである。焼土・炭化物は、互層をなしている。堆積状態は、各層とも凹レンズ状を呈していることから、ほぼ自然堆積と思われる。遺物等の出土は全くみられなかった。掘り込み面は、標準土層の第Ⅱ層である。以上のことから、本遺構は、比較的新しい時期の所産のものと思われるが、用途・性格等については不明である。

出土遺物

縄文時代前期と縄文時代後期の土器片と、陶磁器の破片が出土した。ほかは、使用痕跡をとどめていない自然礫である。

縄文時代前期の土器は13点で、うち口縁部４点、胴郡９点、底部１点で個体数は２～３個体である。器形は、尖底深鉢形である。口縁部は平縁で、若干外反するものである。口唇部文様は、竹管刺突文で、１～２条横環している。第　図は、口縁部上端にも竹管刺突文がみられる。胴部文様は、ＬＲ、ＲＬの結束の羽状縄文であり、胴部下半まで施文されている。底部は尖底であり、砲弾形を呈するものと思われる。胎土・焼成はともに不良で、胎土には植物性繊維を多く含む。これらの土器片の特徴から、編年的位置づけをするならば縄文時代前期初頭の早稲田６類式に比定されるものである。

縄文時代後期の土器片は８点で、うち口縁部１点、胴部７点である。個体教は３個体で、いずれも十腰内Ⅲ式である。口縁部破片は、無文で、口縁部上端が内側にふくれているものであ

る。器厚は薄く、胎土・焼成ともに良好である。胴部破片は、無文と、羽状縄文があり、無文の土器は、胎土・焼成ともに良好である。羽状縄文を施文した土器片は2点であるが、いずれも、十腰内Ⅲ式の特徴である。一種類の原体を異なった回転方向を加えて羽状縄文を構成しているものである。原体は（LR）である。

陶磁器では、染付の破片（皿）が1点出土した。給付の手法から、近・現代のものと思われる。

5　小　結

検出遺構はすべて焼土遺構で、合計11基検出した。焼土遺構は、遺跡全体に広く分布しているものと思われるが、特に大グリッドＰ－45区に集中してみられた。これらの遺構は、一定の平面形を持たないものであり、用途・性格等についても不明である。また、基本層序の第Ⅱ層を掘り込んでいることなどから比較的新しい時期のものであることが考えられる。

出土遺物は、縄文時代前期初頭の早稲田6類式に比定されるものが、比較的にまとまって出土したが、縄文時代後期の十腰内Ⅲ式に属する土器片は、かなりの距離をおいて出土しただけで、遺跡の中心部となる場所は、ついにとらえることができなかった。しかも、今回の試掘調査は東北電力株式会社の買収地域内の一部で北側の台地にかぎられ、遺跡全体を試掘したもの

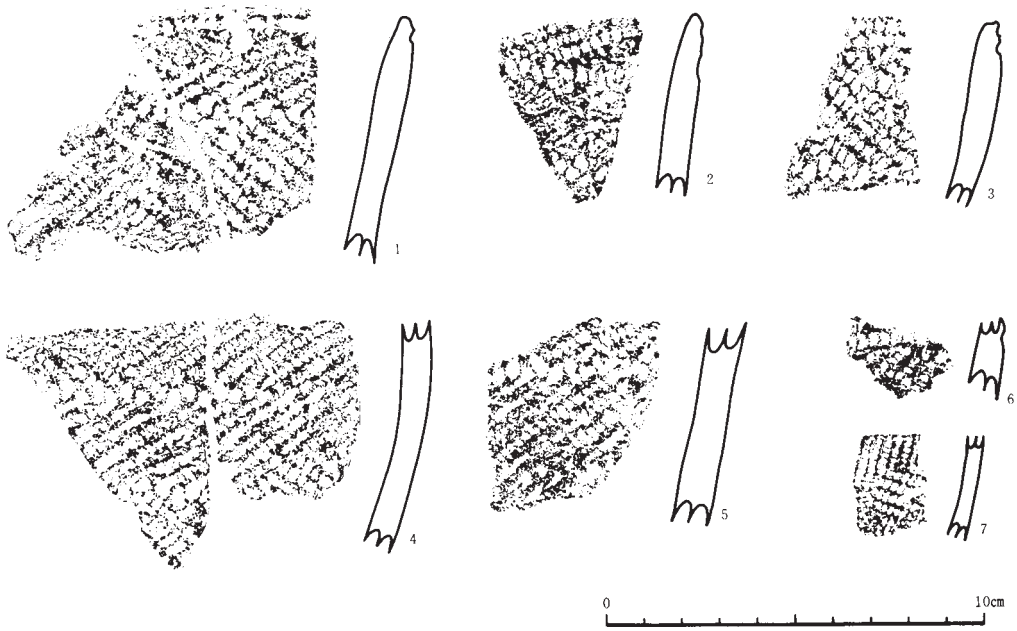


図7　銅屋(2)遺跡出土遺物

ではないため、試掘箇所は生活圏の一部分に過ぎないものと思われる。むしろ、老部川に臨む南側の舌状台地に、遺跡の中心部が存在する可能性は大であるといえよう。

（豊島　広美）

写真 2　銅屋(2)遺跡・出土遺物

第３節　銅屋(3)遺跡

1　遺跡の立地

本遺跡は、下北郡東通村大字白糠字銅屋24～60ほか・白糠字前坂下542ほかに所在する。老部川北岸に位置し、同一台地上には銅屋(2)遺跡が隣接している。遺跡の南側は老部川に臨み、下面の河岸段丘面とは比高差約15mの急崖を呈しており、東南部は、一部土採りが行われている。また、農道北側部分は、削平されており、ローム面まで露呈している。

2　調査方法と調査経過

銅屋(2)遺跡と隣接しているため、同一基準線を用い、グリッド設定及び調査方法も同一のものとした。本遺跡の調査は(2)遺跡に先行したため、両遺跡の性格を把握するために削平部分を除いて、小トレンチを多く設け、堆積状況及び遺構の確認につとめた。

雑草・雑木の刈り払い後、大グリッド設定を行った。このグリッドに１m×４mのトレンチを最大13本の割合で設けた。表土剥ぎ作業中、特にA－０・A－５・B－５の各大グリッドにおいて多くの遺物の出土が見られ、遺構の存在が考えられた。このため随時、拡張を行うこととし、遺構の確認につとめた。この結果、歴史時代住居跡３軒が、前述の３グリッドから確認された。この内の１軒を今後の本調査の目安とするために、精査することとした。また、A－０・A－５・B－５・B－10・C－10にわたって溝状の落ち込みが確認された。この溝は、歴史時代住居跡のカマド煙出し部を切り込んでいる。また、農道北側部分にも、同様にトレンチを設けたが削平による攪乱土層がその大部分を占め、遺構・遺物は全くみられない。

歴史時代住居跡（第１号住居跡）の精査と併行して、標準土層の観察・記録を行い、調査を終了した。

3　遺跡の層序

６層の堆積状態が確認できた。第Ⅰ層・Ⅰa層は、ともに耕作土で、若干の炭化物を含む。Ⅰa層は、部分的に確認できた。第Ⅱ層から第Ⅵ層までは自然堆積で、Ⅴ層及びⅥ層は地山である。Ⅲaとした層は、非常にかたくしまっており帯状に長く延びている。

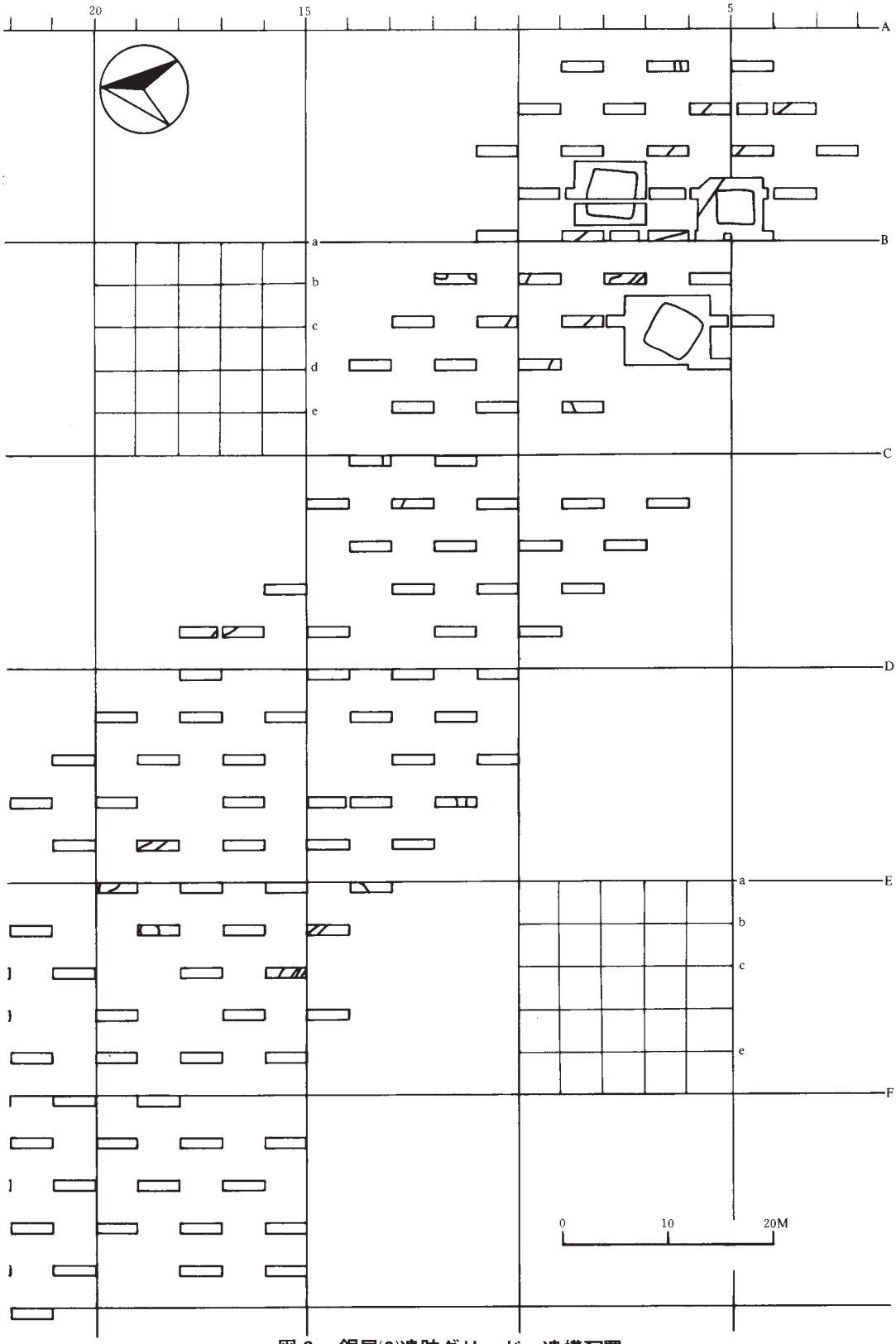
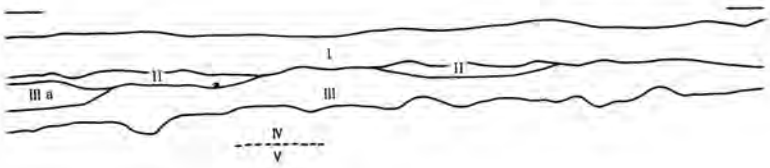
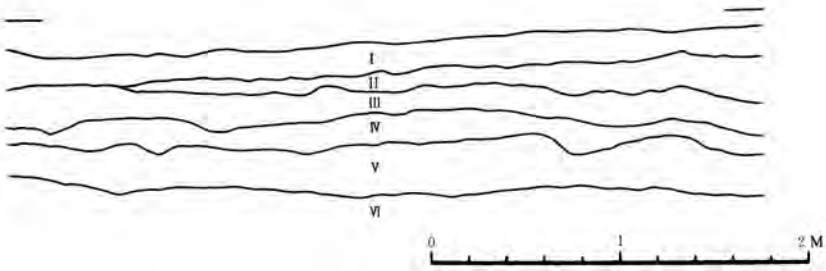


図 8　銅屋(3)遺跡グリッド・遺構配置



Fe－26　グリッド西壁層序



Cb－14　グリッド西壁層序

層　位	色　調	注　　記
第Ⅰ層	黒褐色土	耕作土、少量のローム粒子およびカーボンを含み全体的に細砂を含む。
第Ⅰa層	暗褐色土	若干のカーボンと多量のローム粒子を含む。耕作土であるが、途中で切れている。
第Ⅱ層	褐 色 土	ローム粒子および焼土粒子が若干混入しており、カーボンも微量ながら散在する。しまり大。
第Ⅲ層	暗褐色土	全体にローム粒子を含むが、部分的にローム・ブロックもみられる微量のカーボン含む。
第Ⅲa層	褐 色 土	部分的に多量の炭化物を含み、焼土粒子および小ブロック（2～4㎜）が、レンズ状に堆積。Ⅱ層よりしまり大。
第Ⅳ層	暗黄褐色土	多量のロームを含む漸移層である。
第Ⅴ層	黄褐色土	ローム層である。若干の微砂を含む。地山。
第Ⅵ層	黄褐色土	Ⅴ層に類似するが、しまりが強である。

図9　銅屋(3)遺跡基本層序

4　検出遺構と出土遺物

検出遺構は、歴史時代の住居跡３軒・溝１本である。出土遺物は、縄文時代土器片・弥生時代土器片・土師器などであるが、土師器がその大部分を占める。

（1）検出遺構

（ｉ） 第１号竪穴住居跡

Ａｄ－４・５、Ａｅ－４・５に位置し、黄褐色土（地山）面に黒褐色土のプランとして確認できた。確認時に、土師器片の出土とともに炭化物及び火山灰を検出したが、カマドの位置は不明である。

〔平面形〕

南北にやや長い長方形で、南壁に比して北壁が短いため、若干ゆがんでいる。東壁約3.8m、南壁約3.2m、西壁約3.9m、北壁約2.9mである。主軸方位はＮ－15°－Ｅである。

面積は、カマド部分を除いた掘り込み面が約12.9㎡で、周溝・ピット・カマド火焼部を除いた実質床面積は9.2㎡ぜである。

〔堆積土〕

７層に分層された。

１層から３層までは黒褐色土層で、４層から７層までは暗褐色土である。３～５層には炭化物の混入が認められ、３層及び４層からは炭化材を多く検出した。４層及び５層には火山灰が混入しており、火山灰は、白色のものと、淡黄色のものとの２種類が見られた。この２種類のものは、レベル的には、ほとんど差がない状態で堆積しているが、淡黄色のものが白色のものより上面で確認できた。

これらは、ブロック状に混入しているが、第５層全体にわたって堆積している。

〔壁〕

地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がるが、北東コーナーでは非常にゆるやかに立ち上がる。

〔床面〕

かたくしまっており、ほぼ平坦であるが、壁際にはやや柔い部分がみられる。

〔柱穴〕

11個のピットを検出したが、柱穴と断定できるものはない。

〔周溝〕

東壁及び西壁下で検出した。

幅は、東壁際が 8 ㎝～10㎝・西壁際は 6 ㎝～10㎝で、全周していない。

〔カマド〕

北壁ほぼ中央に位置し、煙出し部分が後世の溝によって攪乱されていることを除けば、残存状態は非常に良好である。袖部分は、石を芯材とし、これに浮石の多く混じった粘土をかためて構築している。芯材は、床面に若干の窪みをつけて据えつけられているが、掘り方等は確認できなかった。火床部は、床面をやや掘り窪めて構築しており、焼土も厚く、しまっている。

煙道部は、一部、根による攪乱を受けているのを除いて、ほぼ完全な形で残っており、天井部は、ロームと暗褐色土との混合土で作られており、よく焼化されている。煙出し孔は、攪乱のため確認できなかったが、煙出しの立ち上がりは確認できた。

本カマドは、住居壁面から地山を掘り込み、これに粘土等を使用して構築した半地下式の形態を持つものである。

〔出土遺物〕

本住居跡の内外から多数の土器片が出土したが、そのほとんどは土師器である。数点であるが弥生時代の土器片及びすり石が覆土中から出土した。

〔土師器〕

すべて破片であるが、長胴甕 4 個体が復原できた。ほかは接合するものが少く、総個体数は不明であるが、口縁部片から見て長胴甕 6 個体以上、坏 1 個体と推定される。

Ｐ－１（第16図－１）

南壁際の覆土中から出土した。口縁は平坦で、長く外反する。胴部は、やや膨みがあり、上半部に最大径を持つ。底部は平底で、底部付近がが〻く状に張り出す。最大径を口縁部に持ち、底径との比は約 3 対 1 である。胎土に細砂・石英等を含み、焼成は非常に良好である。色調はにぶい黄橙色である。内外面ともナデが施されており、口縁部は指ナデであるが、他はヘラ状工具によるものである。特に胴部においては、強いヘラナデが施されている。胴部下半は熱のために赤変しており、全体に炭化物の付着がみられる。

Ｐ－２（第16図－２）

Ｐ－１と同様、南壁際の覆土中から出土した。口縁は平坦で、長く外半する。口唇部にやや膨みが認められる。胴部は膨みを持っており、上半部に最大径を持つ。底部は、中央がやや薄くなっており、底部付近はが〻く状に張り出す。最大径を口縁部に持つ。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。内外面ともナデが施されており、底部直上ではケズリの後が認められる。口縁部は横位の指ナデであるが、胴部外面はヘラナデが施されている。胴部内面は縦位にヘラナデが施されている。胴部下半を除いて炭化物の付着がみられる。

Ｐ－３（第16図－３）

床面直上から出土した。口縁部は平坦で、長く外反する。胴部は膨らみを持ち、上半部に最大径を持つ。底部は、中央部がやや薄くなるが平底で、底部付近ががく状に張り出す。最大径を口縁部に持つ。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。内外面ともナデが施されており、口縁郡は横位の指ナデ、胴部はヘラナデが施されている。底部直上でケズリの痕跡がみられる。全体に炭化物が付着している。

Ｐ－４（第16図一４）

床面直上で出土した。口縁部は平坦で、内湾する。胴部は膨らみがあり、上半部に最大径を持つ。底部は平底で、底部付近ががく状に張り出す。焼成は良好である。内外面ともナデが施されており、口縁部外面は横位の指ナデで、胴部内外面ともにヘラナデである。全体に炭化物が付着しているが、特に胴部上半においては非常に密に付着している。底面には木葉痕が見認められる。

Ｐ－５（第17図一11）

底部片であるが器形は不明である。高台風の底部で、非常に大きく開く。内外面とも、ヘラナデが施されている。

Ｐ－６（第17図－４）

カマド内から出土した口縁部片である。焼成は良好で、内外面ともヘラナデが施されている。内外面とも炭化物が付着している。

炭化材

住居跡中央西寄りの、炭化板材が確認された３・４層中に集中している。

１は、木の株のようなもので、人工的な細工があるように見受けられる。一部生焼の状態である。

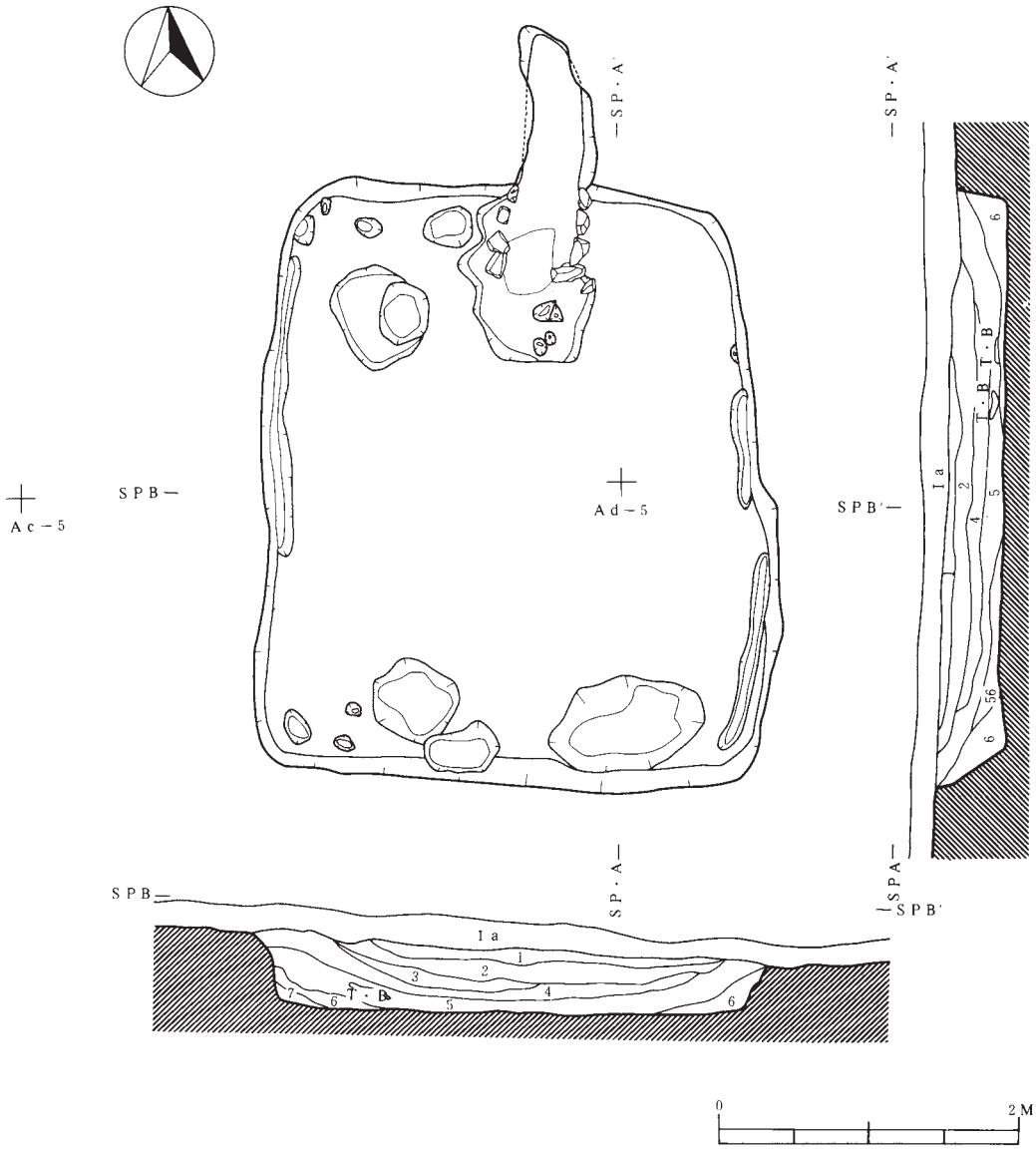
３は、厚さ１㎝～２㎝で丸木を輪切りにした状態のもので、２及び４と接している。

２・４は、ともに厚さ１㎝程の板材で、３と接している。２の直下には板材がかさなった状態で出土した。

石器

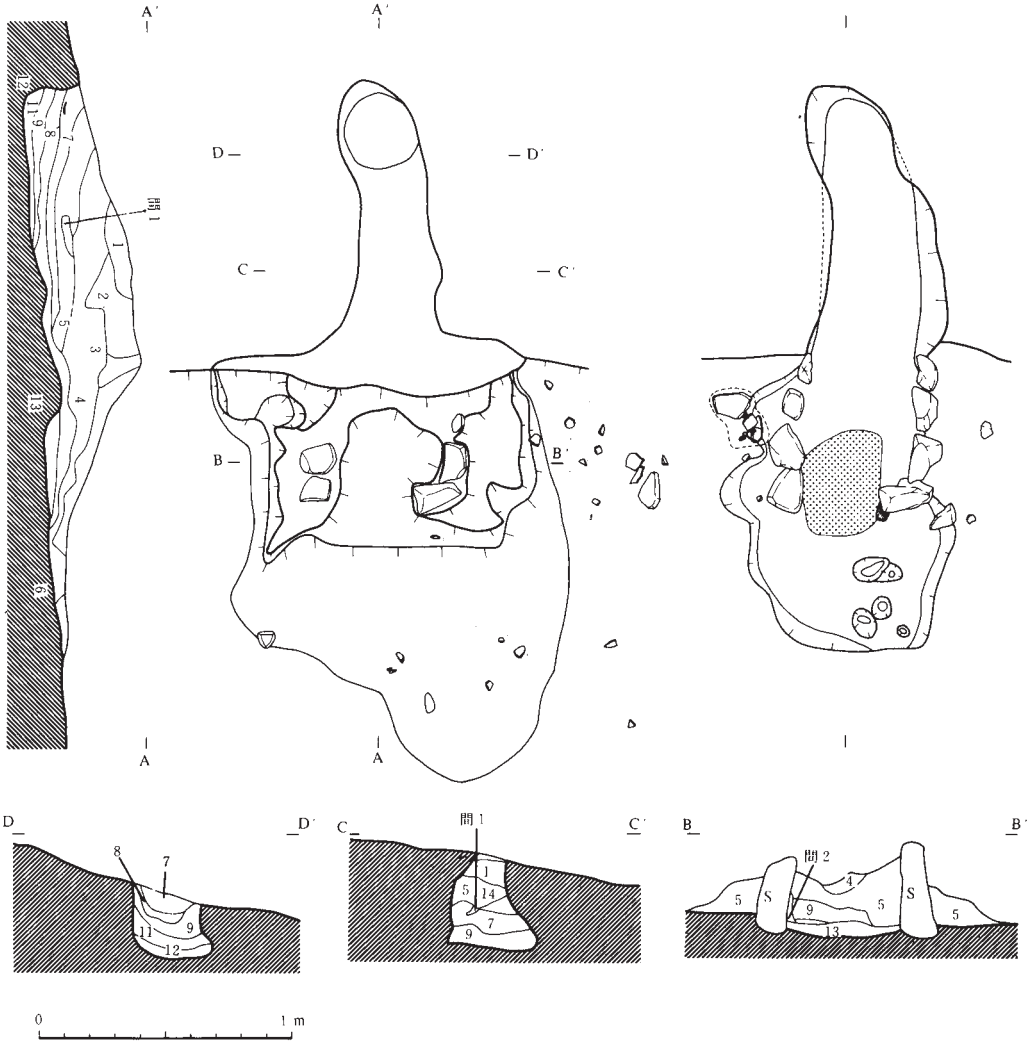
９点出土したが、内１点は竪穴外からの出土である。（表１～９）

１・２はスリ面を持つが、むしろ砥石としての可能性が強い。３は円礫で、磨石である。４はスリの痕跡があるが、台石、又は砥石の可能性がある。５はスリ面があり、ススが付着している。６はスリ及び敲打痕が見られ、台石、又は砥石と考えられる。７は石皿、又は台石と考えられる。８は磨石である。９は竪穴外から出土したもので、片面にスリの痕跡、片面にスリ及び敲打痕が見られる。スリ面の状態から見て台石、又は砥石と考えられる。（白鳥　文雄）



第 1 層	黒褐色土	全体的に浮石粒を含み、粗砂を若干含む。
第 2 層	〃	1層に類似するが炭化物を多く含み1層に比して色調が暗い。
第 3 層	〃	多量の浮石粒及び粘土粒を全体に含み、炭化物を若干含む。
第 4 層	暗褐色土	3層に比してカーボンを多く含む。
第 5 層	〃	多量の浮石粒と炭化物を含み、細砂、火山灰をブロック状に含む。
第5b層	〃	5層に比して色調がやや暗く、しまりややあり。
第 6 層		浮石粒及び粘土粒を多く含み、しまりなし。
第 7 層		浮石粒及び粘土粒を多く含む、しまりややあり。
T、B		火山灰ブロック

図10　第1号竪穴住居跡



1層	暗褐色土	天井部として構築されている、ロームブロックと暗褐色土との混合土
2層	〃	ローム粒の混入が少く、もろい
3層	暗赤褐色土	ロームブロックと暗褐色土との混合土で焼化されている
4層	褐色土	炭化物が少量混入硬く粘性あり、均一の土層である
5層	暗褐色土	焼化されたロームブロックとの炭化物混入、混合土、硬くしまっている部分ともろい部分がある
6層	褐色土	焼土混入、しまりなく、パサパサしている
7層	暗褐色土	ロームブロック及び炭化物混入
8層	黒褐色土	ローム粒及び焼土ブロック混入
9層	黄褐色土	ローム崩壊土、粘性あり
10層	暗褐色土	ローム粒を混入、もろい
11層	〃	黒、色土と炭化物混入
12層	黄褐色土	ローム崩壊土、ブロック状のロームと褐色土
13層	赤褐色土	焼土、ロームブロックと焼土粒混入
14層	暗褐色土	焼土粒
間1		ロームブロック
間2		焼土

図11　第1号竪穴住居跡カマド

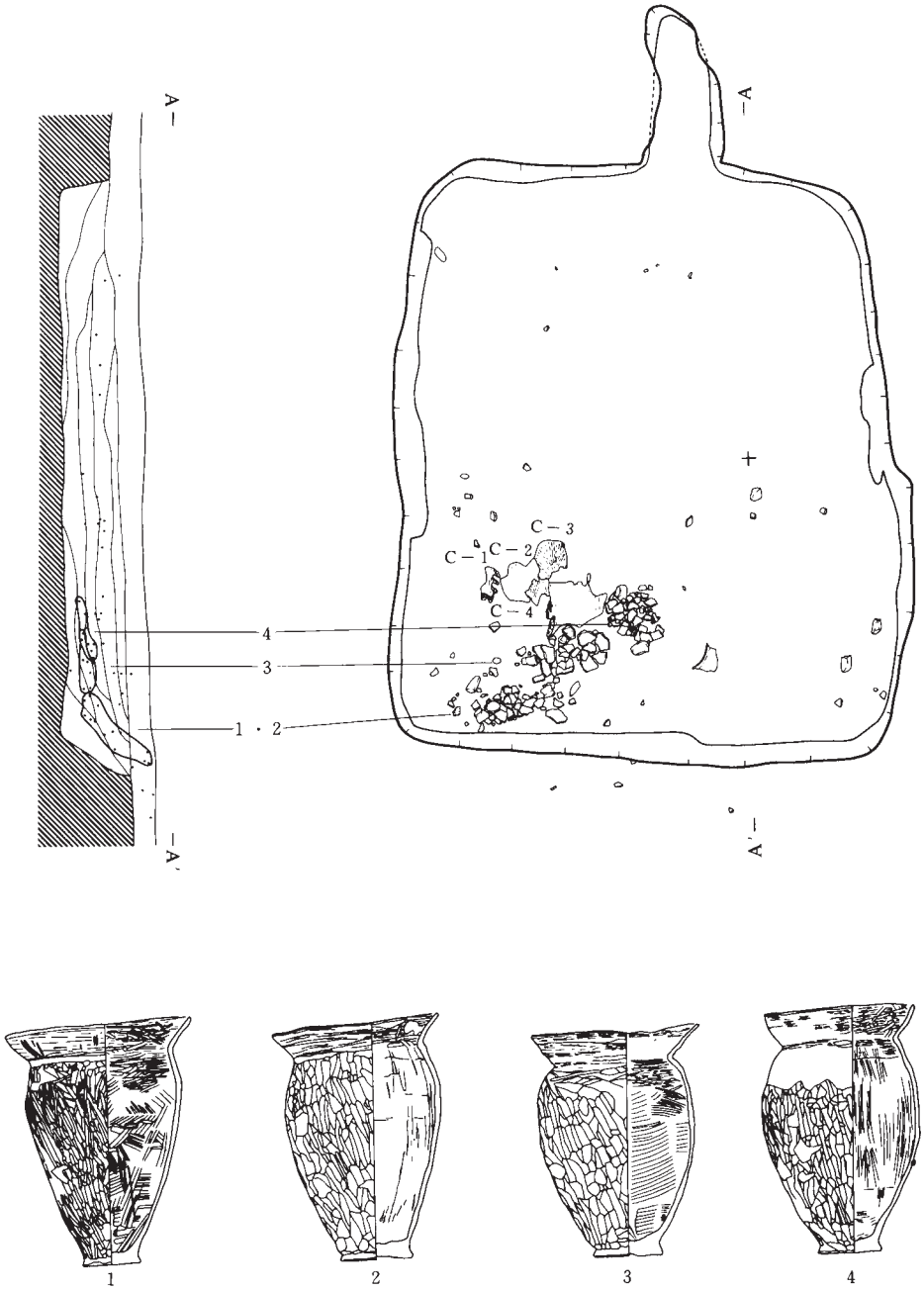


図12　第１号竪穴住居跡遺物出土状況

炭化材の樹種同定について

調査者　嶋倉　巳三郎

青森県下北郡東通村銅屋(3)遺跡（平安時代）から出土した木炭の樹種を調査したが、その結果は次のとおりである。

出土遺物名	樹　　種	試料番号
第１号住居跡Ⅱ	アスナロ	№６
第１号住居跡Ⅲ	アスナロ	№７
第１号住居跡Ⅲ	サクラ類とアスナロ	№８

アスナロに同定した炭化木は、晩材部のやや狭い針葉樹材で、放射組織の分野にはクプレソイドの壁孔があり、ヒノキより幾分大きい。樹脂細胞は炭化のため確認できなかったが、それらしいものがある。

サクラ類に同定したものは散孔材で、道管は単穿孔、壁面にラセン條がみられ、２～３個連接して配列する。放射組織は１－３列で異性。この属（Prunus）には多くの種類があるので、単にサクラ類とした。

（ⅱ）　第２号竪穴住居跡

Ａｄ－７・８、Ａｅ－７・８に位置し、黄褐色土（地山）に黒褐色土の広がりとして確認できたが、カマドの位置は確認できなかった。プラン確認時に土師器片が出土したことから歴史時代の住居跡と推定される。確認面において、火山灰がブロック状に混入していた。

〔平面形〕

一辺約４mの方形である。プラン確認面における面積は約16㎡である。カマドの位置は不明であるが、南壁に黒褐色土のふくらみが認められた。

〔覆土〕

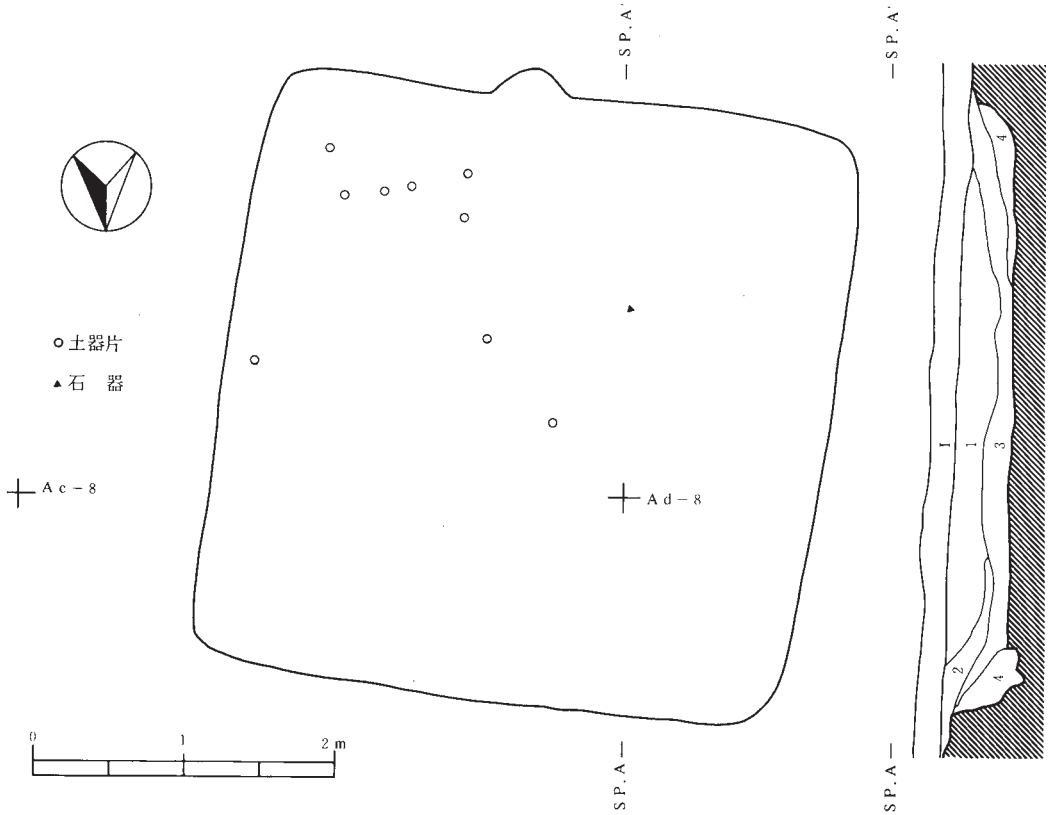
本遺跡の南北標準土層観察用のセクションベルトが、本住居跡の中央部を横切ったために、掘り込み面及び堆積状態を確認することができた。

堆積土は、４層に分層される。第３層には、火山灰がブロック状に堆積している。第１号住居跡と同様に、白色と淡黄色の２種が確認できた。

〔出土遺物〕

プラン確認面までの黒褐色土中から出土したものである。すべて土師器片であるが復原できたものはない。長胴甕の破片がほとんどであるが、口縁部から見て２個体分のものと思われる。

Ｐ－１（第17図－５）は、他の長胴甕・口縁とは異なり、口唇部中央がやや窪んでおり、両



1 層黒褐色土　多量の炭化物、ローム粒と若干の焼土粒子を含む。
2 層暗褐色土　（標準土層のⅢとほぼ同じである。）
多量のローム粒と若干の炭化物を含む。
3 層暗褐色土　多量のローム粒をしもふり状に含み、若干の炭化物と火山灰を含む、しまりなし。
4 層黒褐色土　ローム粒及び粘土粒を含む、しまりなし。

図13　第２号竪穴住居跡

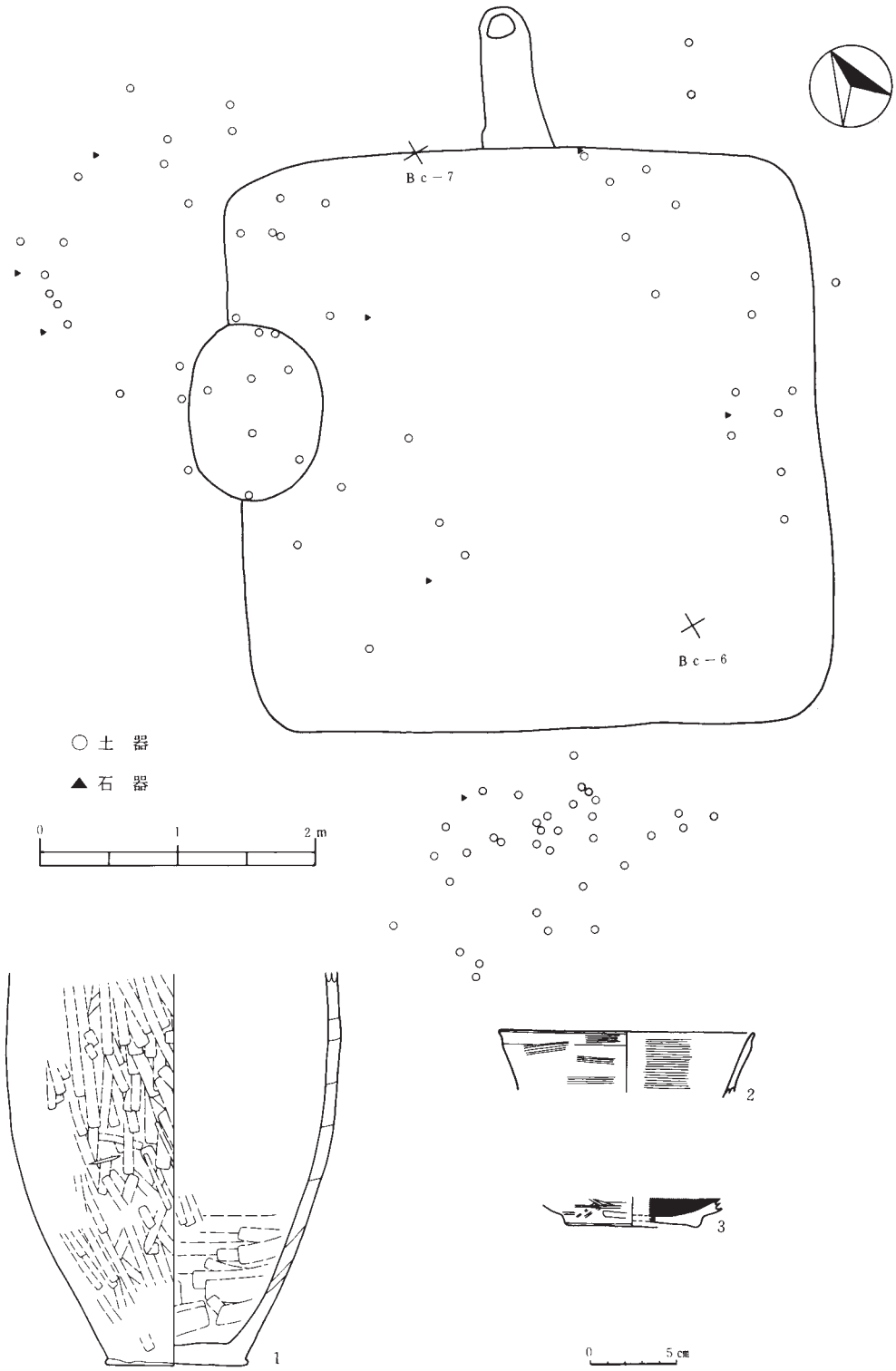


図14　第３号竪穴住居跡平面及び出土遺物

端がやや突出している。焼成は良好で、内外面ともヘラナデが施されている。煤状炭化物の付着がみられる。

(iii) 第 3 号竪穴住居跡

Ｂｂ－５・６、Ｂｃ－５・６・７において、黄褐色土（地山）に黒褐色土の広がりとして確認できた。プラン確認時に、土師器片を中心として、土器片及び石器を出土した。

〔平面形〕

一辺約 4 mの方形である。北壁中央部にカマドと思われる焼土及び黒褐色土の広がりが見られた。確認面での面積は、約17㎡である。

〔覆土〕

プラン確認に留めたため、堆積の状態は不明であるが、平面上に、１Ｈ、２Ｈと同様に火山灰の散布が見られる。

〔出土遺物〕

プラン確認面及びその周辺から出土したもので、土器片はすべて土師器片である。長胴甕 5 個体以上の破片で、復原できたものは 2 個体であるが、完形品にはならなかった。ほかに砥石２点が出土した。

Ｐ－１（第14図－１）

底部から胴部上半までの個体である。胴部は、やや膨らみがある。底部は平底で、底部直上から内湾する。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は赤橙色を示し、二次的な火熱によると思われる赤変が認められる。内外面ともヘラナデが施されており、煤状炭化物の付着もみられる。

Ｐ－２（第14図一３）

坏底部と思われる破片である。内面はミガキの痕跡がみられ、黒色処理が施されている。

外面はナデの痕跡がみられる。

Ｐ－３（第14図一２）

坏の口縁部片である。口唇部がやや外反する。横位に指ナデの痕跡が見られる。熱のため赤変している。

(2) 遺構外出土遺物

遺構外出土としたものは住居跡の周囲に散在していたため、前述の遺構に伴う可能性が大である。

土器片はほとんどが土師器片で土師器片以外の土器は総数74片である。縄文後期十腰内Ｉ式かと思われる破片が１点あるが、器面が非常に荒れているため文様等明らかでない。

ほかはすべて弥生時代の土器片である。細片も多いため明確でないが、約10個体と考えられる。第17図一１～２は鉢形土器の破片と思われる。８条の横位平行沈線と４条の斜位沈線が認められ、変形工字文的な文様を構成するものと考えられる。横位沈線文下には小さな連続鋸歯文が、上方には刺突文が加えられている。全面に施文されている縄文は縞縄文であろう。ほかに胴部破片が９点出土した。

３～５は同一個体であり、小形の鉢あるいはボール形の器形をなすと思われる。緩い鋸歯状文のみを数段施文するもののようである。

７～11は口縁部が外反し、肩部から胴部が若干膨らむ甕形土器片である。底部は上げ底を呈する。破片数は37点であるが、その大きさ等は不明である。口唇部に刻目を有する。ほかはすべて縞縄文であるが、肩部付近は横走、それ以外は縦走している。

６は変形工字文を構成するものと思われるが、器形は不明である。

5　小　結

遺跡の範囲

調査の成果は、歴史時代住居跡３軒の検出と縄文時代土器片・弥生時代土器片・土師器片が

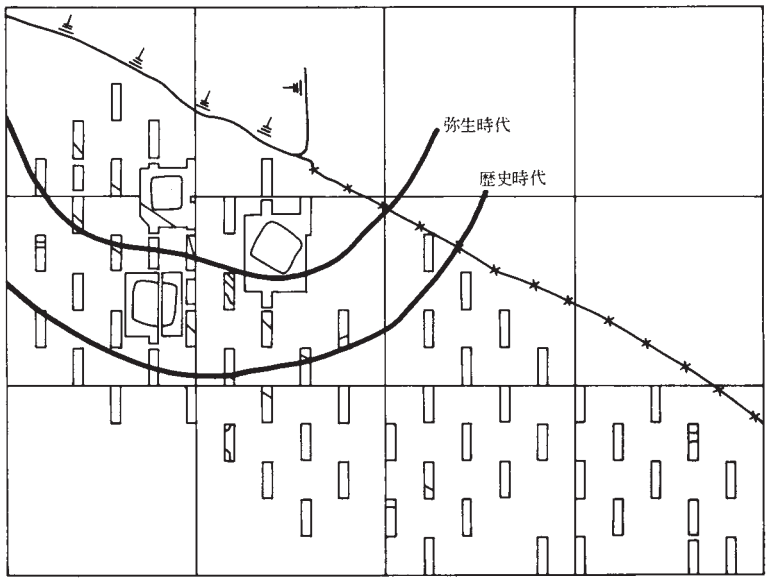


図15　時期別遺跡範囲推定図

出土したことである。このことから本遺跡は、幾時代かにわたって生活の場となっていたことが推測される。また、遺構の位置及び弥生時代土器片、土師器片の出土状況から第15図のような時期的な広がりが推定できる。これらから考え合わせて本遺跡の主体部は、現在土取りのため急崖を呈している部分及び、その北側の畑地に広がるものと思われる。

弥生時代の土器

本遺跡出土の弥生時代の土器片は、その数が少なく、また、器形・文様等を知ることができないが、幾つかの注目すべき特徴を有している。小さな連続鋸歯状文を有する土器は二枚橋式（須藤：1970)、田舎館Ⅰ（宇鉄Ⅱ－三宅他：1979）には存在せず、田舎館Ⅱ式（伊藤：1950)、恵山ＡＢ式やＢ式（峰山：1968，中村：1973）に多く見られる。また、刺突文のあり方や縞縄文・更に上げ底を呈する甕形土器なども二枚橋式～田舎館Ⅱ式には認められないものである。資料数が少ないため断定はし難いが、これらの要素からするならば、恵山系統の土器で、恵山ＡＢないしＢと考えられ、特に後者の可能性が強い。

（白鳥　文雄）

〔引用・参考文献〕

須藤　　隆　（1970）「青森県下北郡大畑町二枚橋出土の土器・石器」考古学雑誌56－２

三宅　徹也　（1979）「宇鉄Ⅱ遺跡発堀調査報告書」青森県立郷土館調査報告書６

伊藤　信雄　（1950）「東北地方の弥生文化」文化２－４

峰山　　厳　（1968）「恵山式土器」北海道考古学４

中村　五郎　（1973）「北海道南部の続縄文土器編年」北海道考古学９

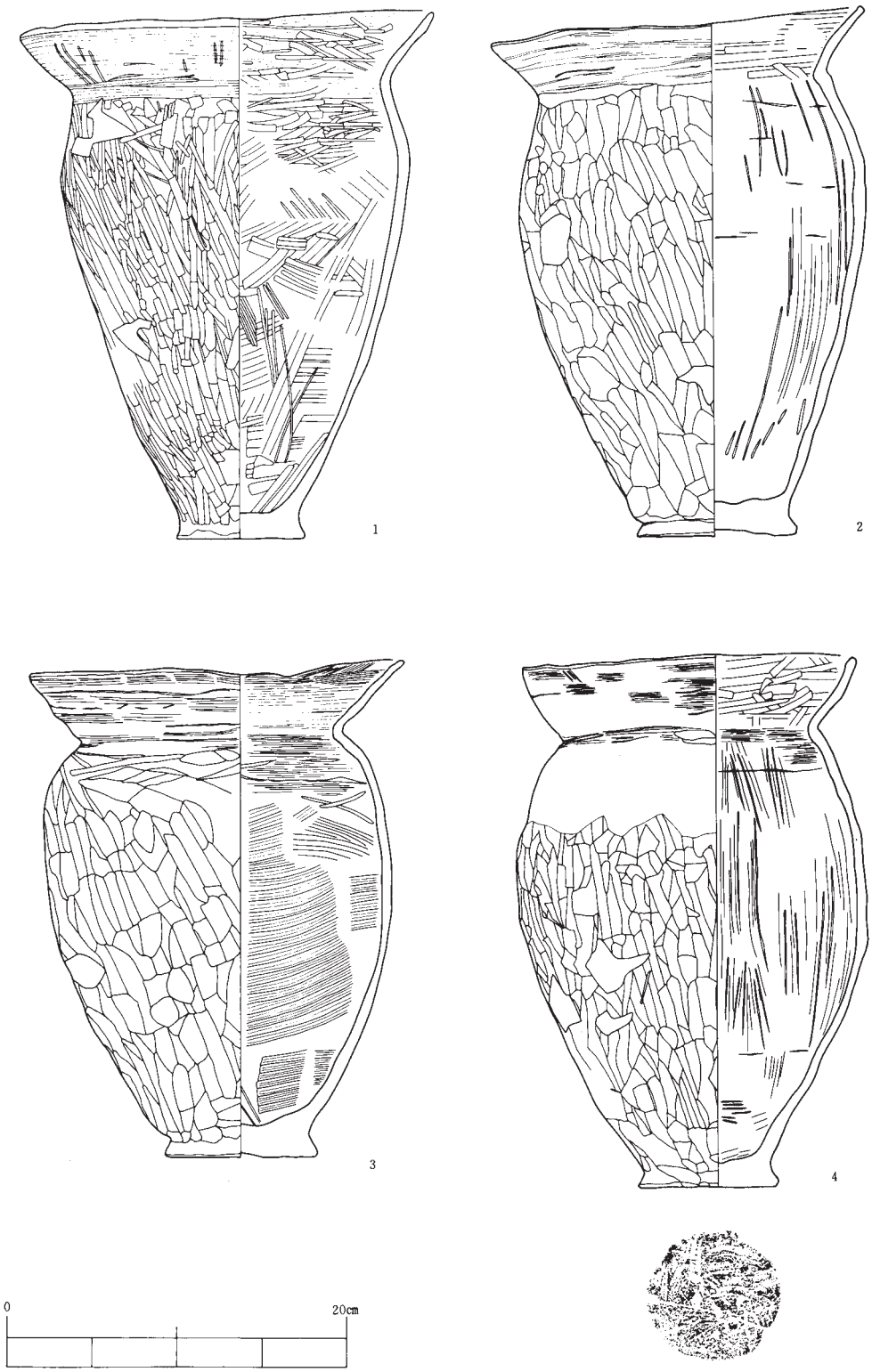


図16　第１号竪穴住居跡出土土師器

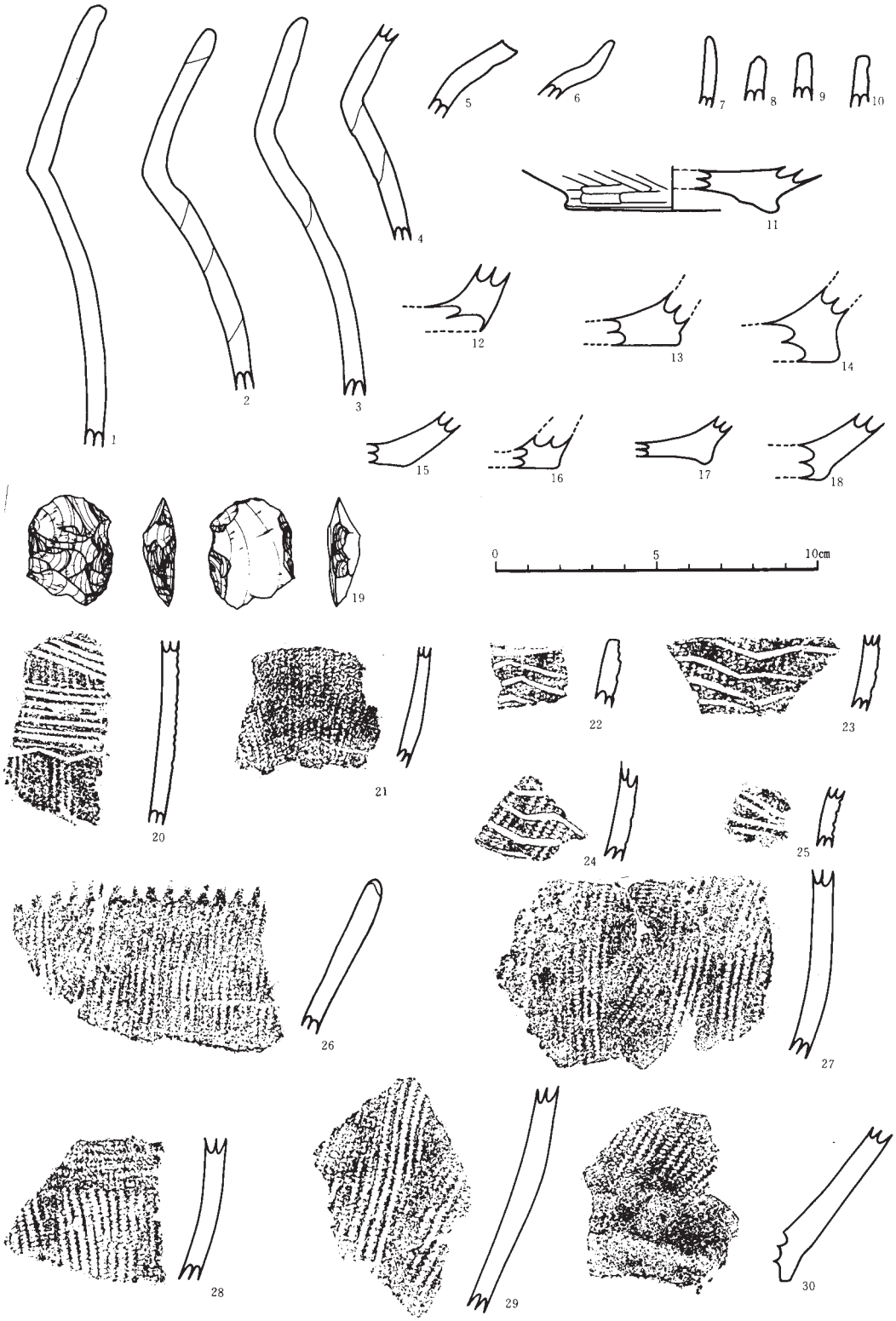

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
5
10cm
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

図17 出 土 遺 物(1)

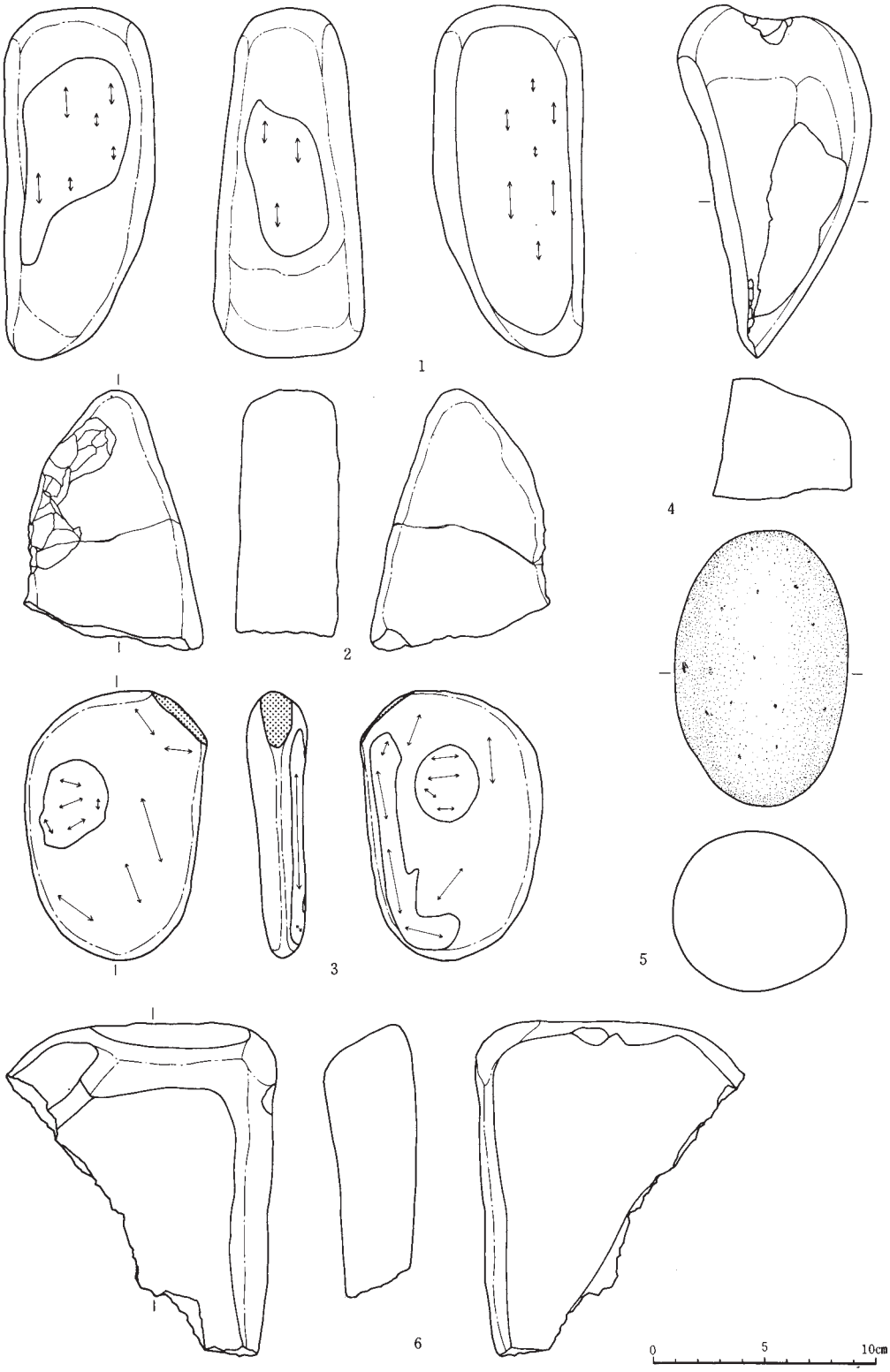


図18 出 土 遺 物(2)

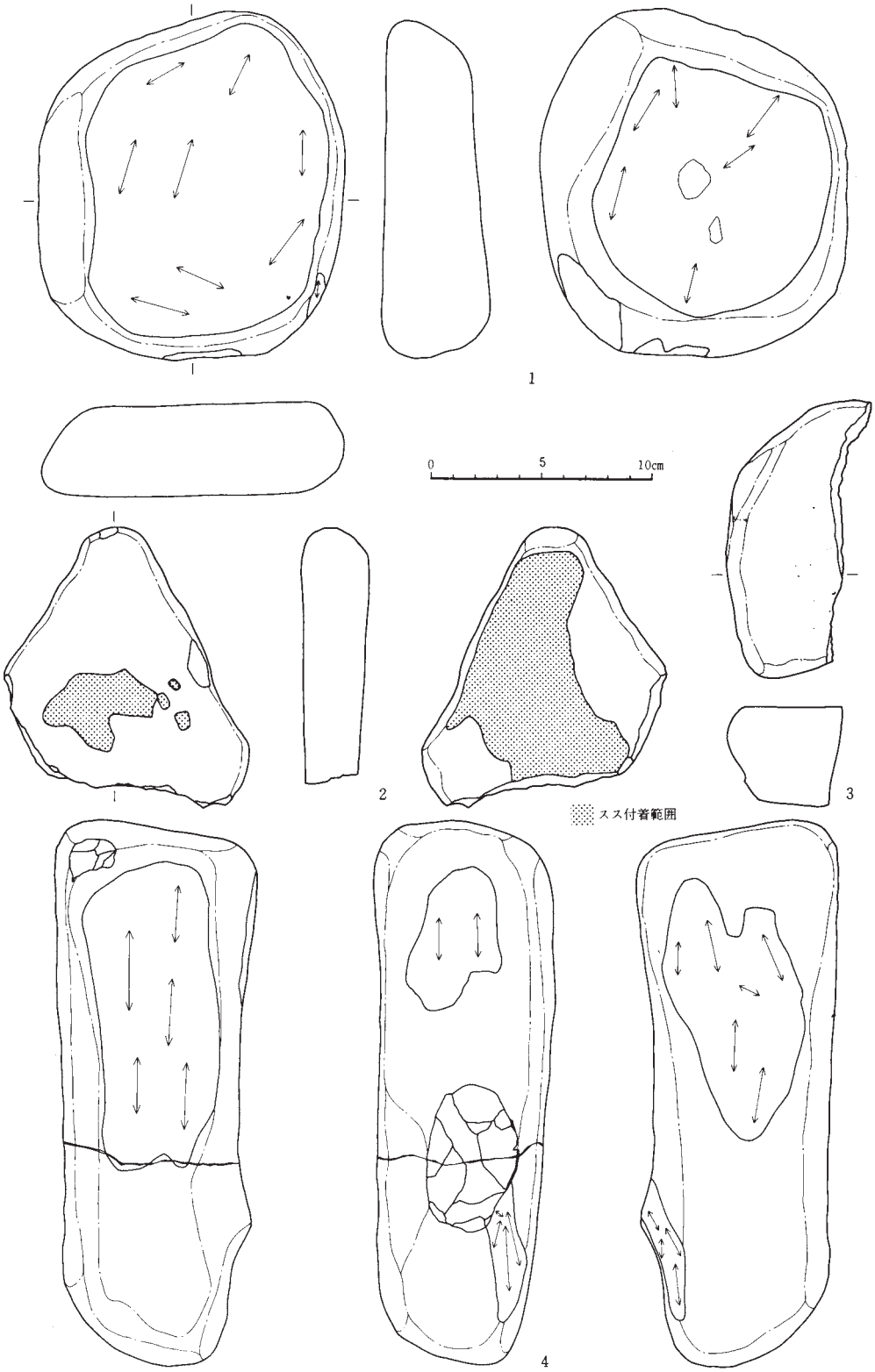
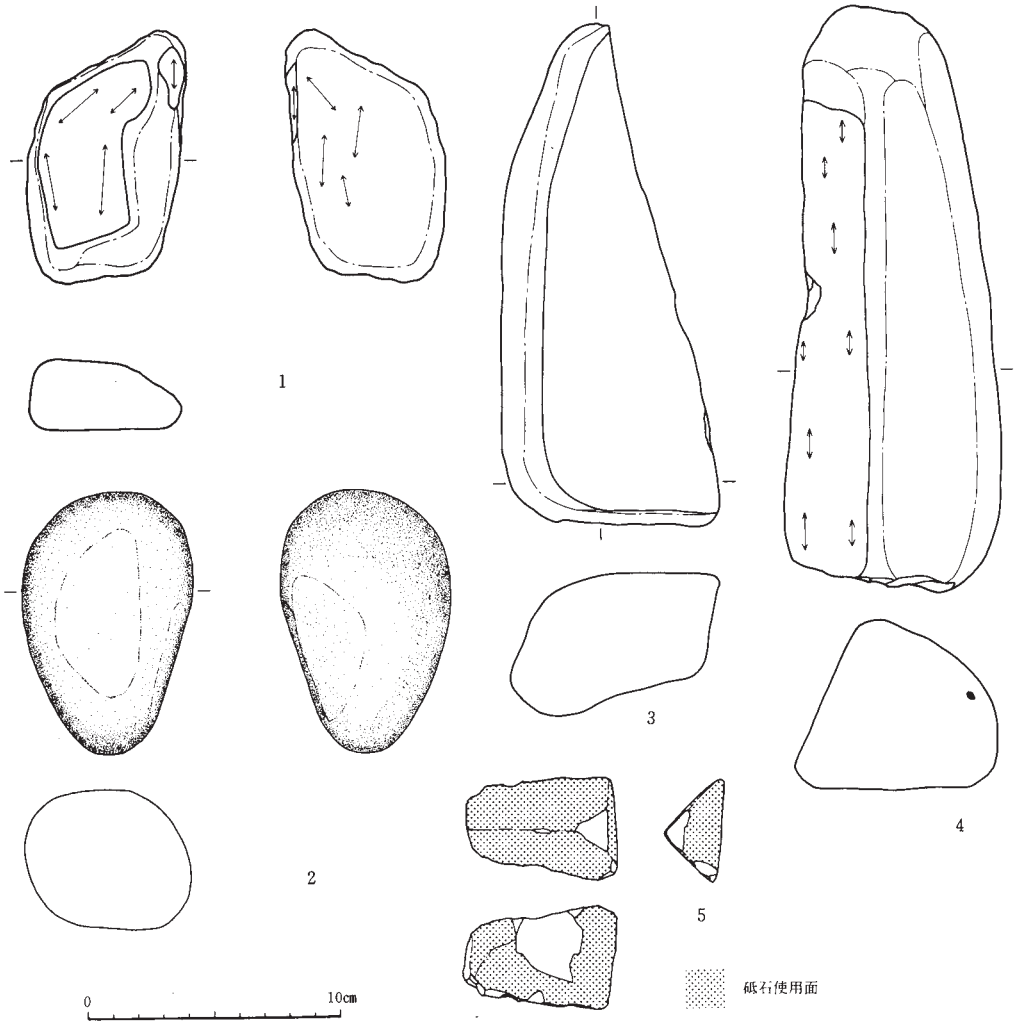


図19 出 土 遺 物(3)



番号	出土地点	器種	石質	計測値				備考	図版番号
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1	1号住	(砥石)	安山岩	(11.6)	7.9	4.5	645	欠損	図18－2
2	〃	(〃)	〃	15.7	6.8	6.6	1,220		18－1
3	〃	磨石	〃	12.4	7.8	7.2	950		18－5
4	〃	(砥石・台石)	〃	12.6	(6.6)	4.4	450	欠損	19－3
5	〃	磨石	〃	(12.5)	(11.2)	3.1	560	欠損、スス付着	19－2
6	〃	(台石)	〃	24.7	9.1	8.4	2,990		19－4
7	〃	(石皿)	砂岩	16.0	(8.9)	5.6	880	欠損	18－4
8	〃	磨石	安山岩	10.1	6.4	3.2	260		20－1
9	Ad－3	(砥石・台石)	〃	15.7	13.8	4.9	1,650		19－1
10	3号住	(砥石)	〃	(23.3)	8.7	6.7	1,080	欠損、スス付着	20－4
11	〃	砥石	凝灰岩	5.8	4.2	2.2	50		20－5
12	Bc－5	(石皿・台石)	砂岩	20.1	(8.7)	6.0	920	欠損	20－3
13	〃	磨石	〃	12.0	7.9	2.8	440		18－3
14	〃	台石	安山岩	(15.0)	(12.0)	4.2	880	欠損	18－6
15	Bc－7	磨石	〃	10.4	6.7	5.7	560		20－2

図20 出土遺物(4)

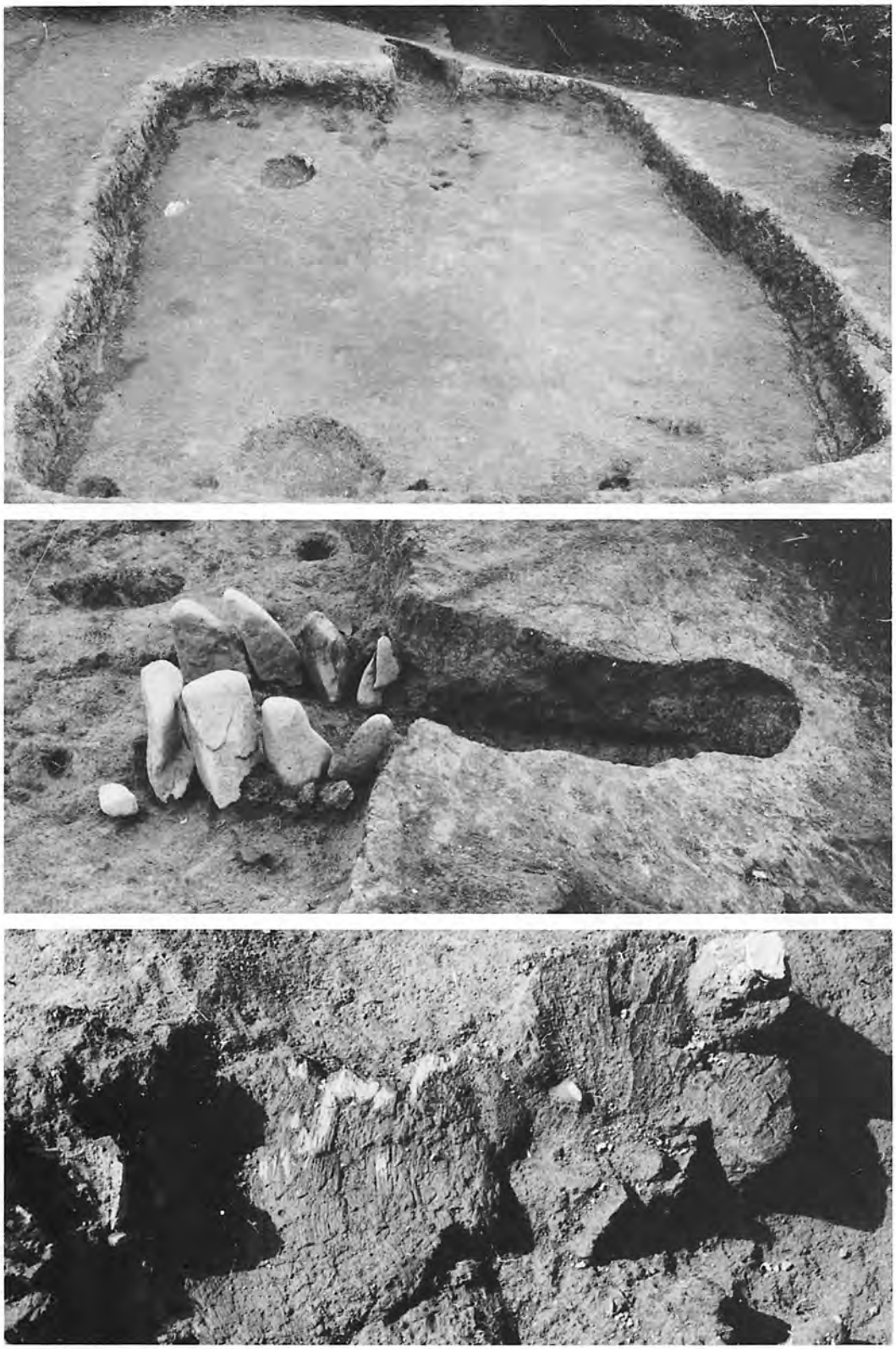
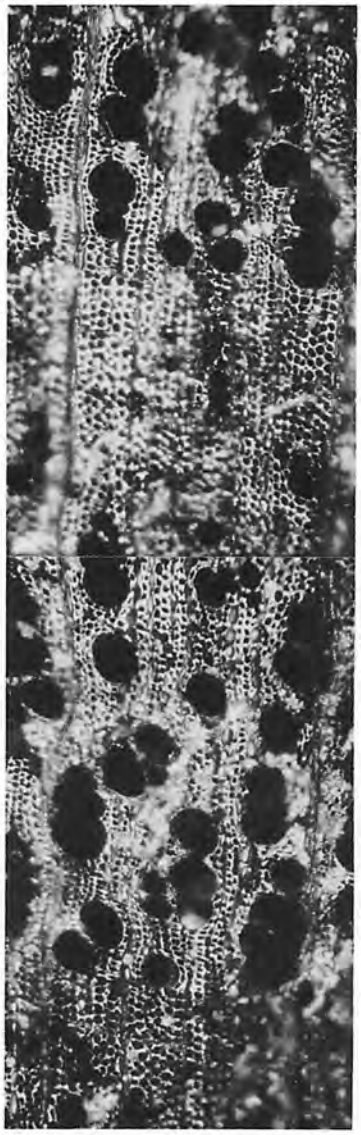


写真 3　銅屋(3)遺跡第 1 号竪穴住居跡

写真 4　銅屋(3)遺跡・出土遺物



1

2

3

4

5

6

7

1．サクラ類炭(7)木口（×50）
2．サクラ類炭　柾目（×50）
3．サクラ類炭　板目（×50）
4．アスナロ炭(7)木口（×50）
5．アスナロ炭(7)柾目（×50）
6．アスナロ炭(6)木口（×50）
7．アスナロ炭(6)柾目（×100）

写真 5　第 1 号竪穴住居跡出土炭化材顕微鏡写真

第４節　前坂下(1)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下682ほかに所在する。

本地域の主要河川である老部川から約500m離れた、標高12m～14mの低台地上に立地する。現汀線からは約200m内陸部に入った地点である。この周辺は、原子力発電所建設予定地内で最も遺跡が集中している。本台地上には、西側に直接隣接して平安時代の集落跡である前坂下(6)遺跡が、更にその西方には縄文後期の前坂下(8)遺跡が所在する。また、台地の南側には、小さな谷地形を挟んで縄文終末期から弥生時代にかけての遺跡である前坂下(3)遺跡が、北側には、やはり小さな谷地形を挟み、製鉄遺構のある前坂下(4)遺跡がそれぞれ所在する。

遺跡東端の一部は、近年行われた開田の際に削平されているが、ほかは畑地として利用されているため、保存状態は比較的良好である。

2　調査経過と調査方法

昭和52年の分布調査では、唐津焼きの陶器１点と、磨石が１点表面採集されている。

本遺跡は、前坂下(1)遺跡と隣接しているため、調査はこの遺跡と同時に行った。７月上旬に下草を刈り払い、直ちにグリッド設定に入った。大グリッドは、他遺跡のそれと同様に一辺20mを基本とし、小グリッドは一辺４mとした。グリッドの方位は磁北を基本としている。各トレンチは、この大グリッドの線上を任意に選択し、幅１mのトレンチを設けた。

その結果、縄文時代早期及び縄文時代後期に属する土器、石器を散発的に発見した。更に平安時代の竪穴住居跡も１軒検出した。また、台地平坦面では溝状ピット（Ｔピット）が広範囲に分布することも理解できた。

これらの遺構はすべて、確認面で試掘をとどめ、精査を行わず埋め戻した。

3　遺跡の層序

台地平坦面における基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層は表土層で、近年まで耕作されていた層である。層厚は20cm～30cmである。

第Ⅱa層は黒味の強い暗褐色シルト層で、一部平安期の遺物が包含されている。層厚は地点に

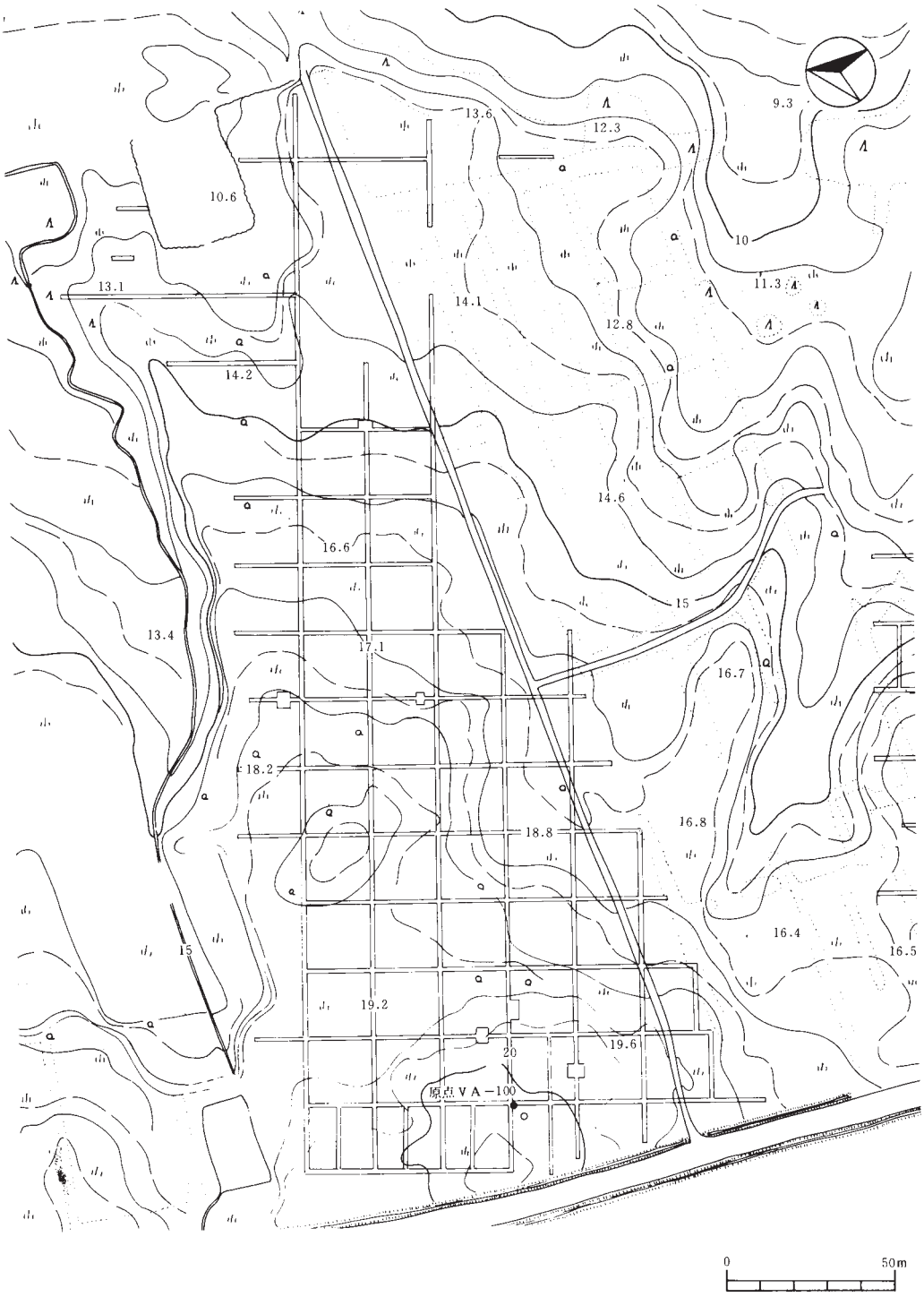


図21　前坂下(1)・(6)遺跡地形・調査区配置

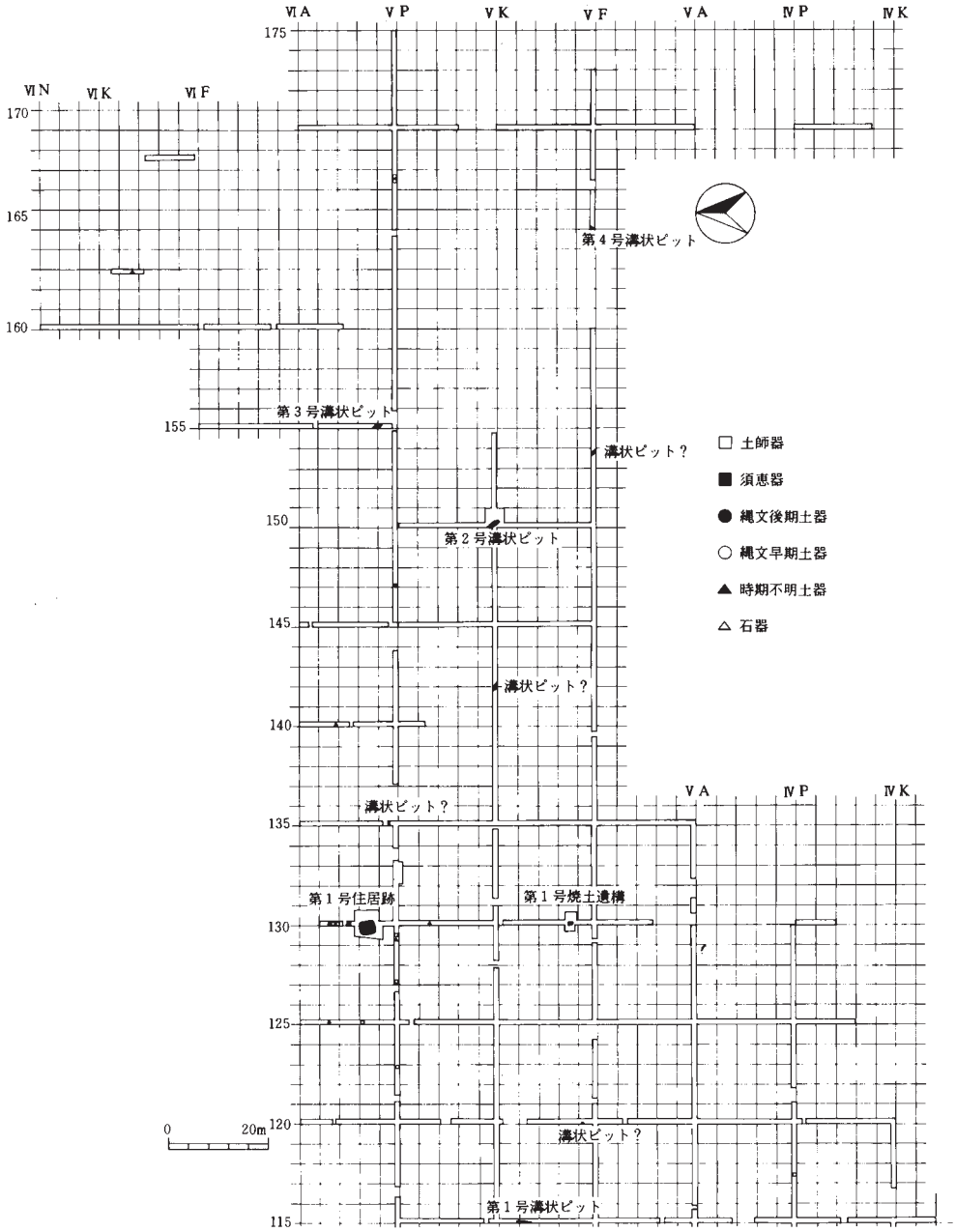
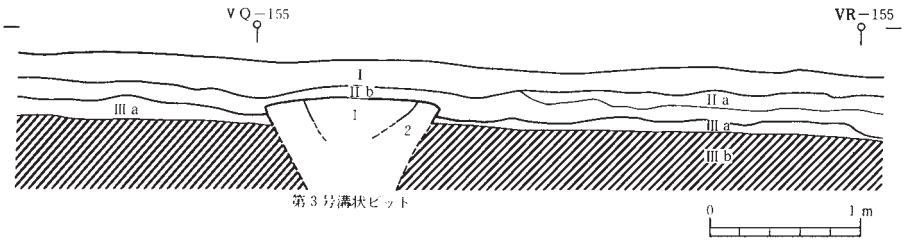


図22　前坂下(1)遺跡グリッド・遺構配置



前坂下(1)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
I	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	草木根多量	耕作土	
IIa	暗褐色 10YR3/3	シルト		自然堆積	
IIb	暗褐色 10YR3/4	シルト	ロームの混入若干		
IIIa	褐色 10YR4/6	ローム	腐植土混入	地山	
IIIb	黄褐色 10YR5/6	ローム			
1	褐色 10YR4/6	ローム		溝状ピット堆積土	地山のロームを埋めたもの
2	暗褐色 10YR3/4	シルト			

図23　前坂下(1)遺跡基本層序

よって異なるがおよそ5㎝～20㎝である。しかし、耕作によって滅失した地点も多い。

第IIb層は暗褐色シルト層で、縄文時代早期（ムシリⅠ式）、同後期の遺物を包含する。この層は遺跡全体に見られ、層厚も15㎝～30㎝と比較的厚い。

第IIIa層は比較的汚れたローム層で第IIIb層への漸移層である。

第IIIb層は黄褐色のローム層である。

4　検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

(i)　竪穴住居跡

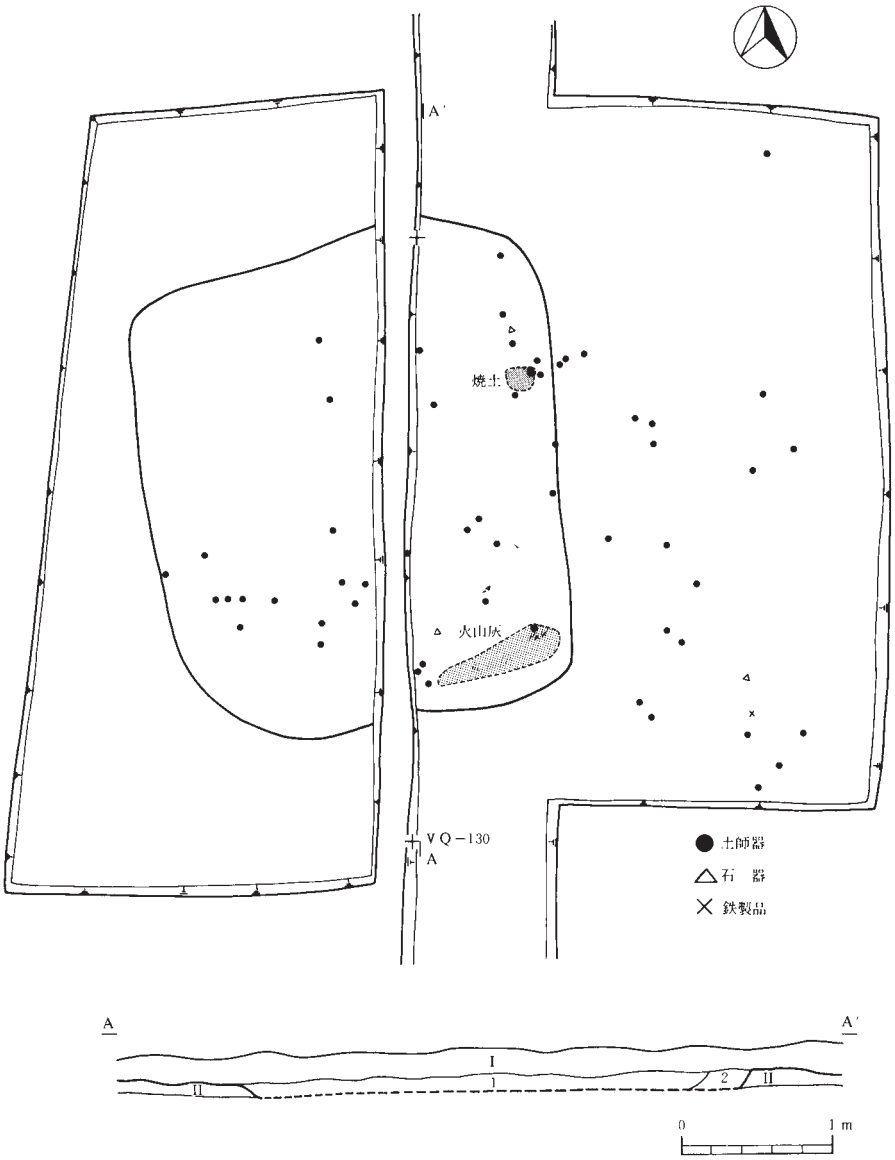
台地の北端で検出した。確認面での落ち込みプランは、東壁辺3.2m、西壁辺3.0m、南壁辺2.4m、北壁辺2.8mの南北にやや長めの隅丸方形である。

また、堆積土中には、銅屋(3)遺跡第1号住居跡や前坂下(6)遺跡で認められたものと類似の火山灰が確認できた。

堆積土中からは土師器片が少量出土した。

本住居跡は確認だけにとどめ、精査を行っていないため、かまどの位置や住居構造上の詳細は不明である。検土杖による探査結果では、確認面から床面までの深さが約30㎝である。

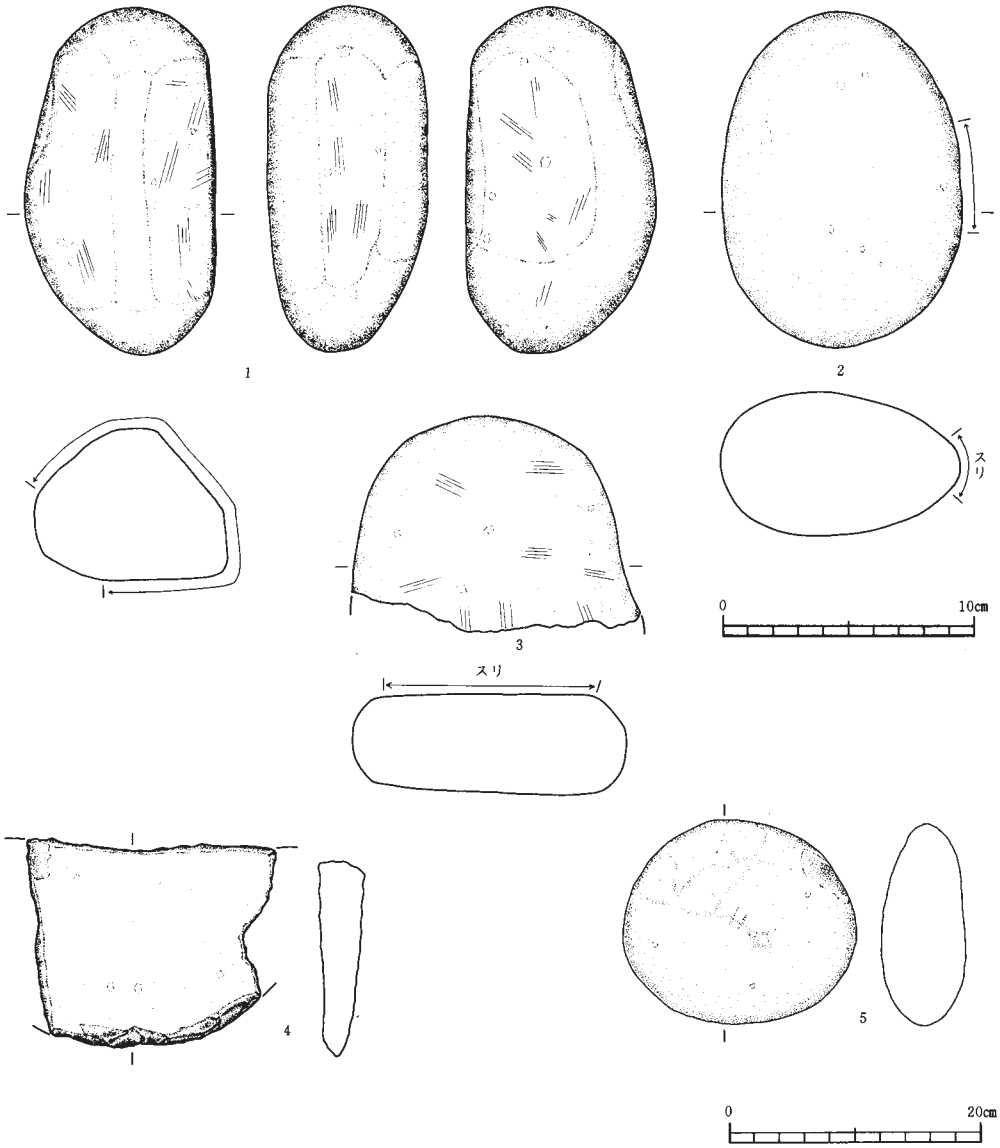
(ii)　溝状ピット



前坂下(1)遺跡第1号住居跡堆積土一覧

層　位	土　　色	土　性	混　入　物	層の形成	備　考
I	黒褐色　10YR3/2	シルト	草木根多量	耕作土	
II	暗褐色　10YR3/4	シルト	草木根多少	自然堆積	縄文早期～後期遺物包含
1	黒　色　10YR2/2	シルト	焼土（0.1～0.2cm）散在	第1号住居跡堆積土	
2	黒褐色　10YR3/3	シルト	草木根多少		

図24　前坂下(1)遺跡第1号住居跡



磨　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	VS−125 II層	(86)×(117)×(39)	(544)	安山岩	欠　損	S 1
2	VS−130 II層	138×76×60	934	〃		S 4
3	VN−130 II層	133×96×57	1,034	〃		S 13

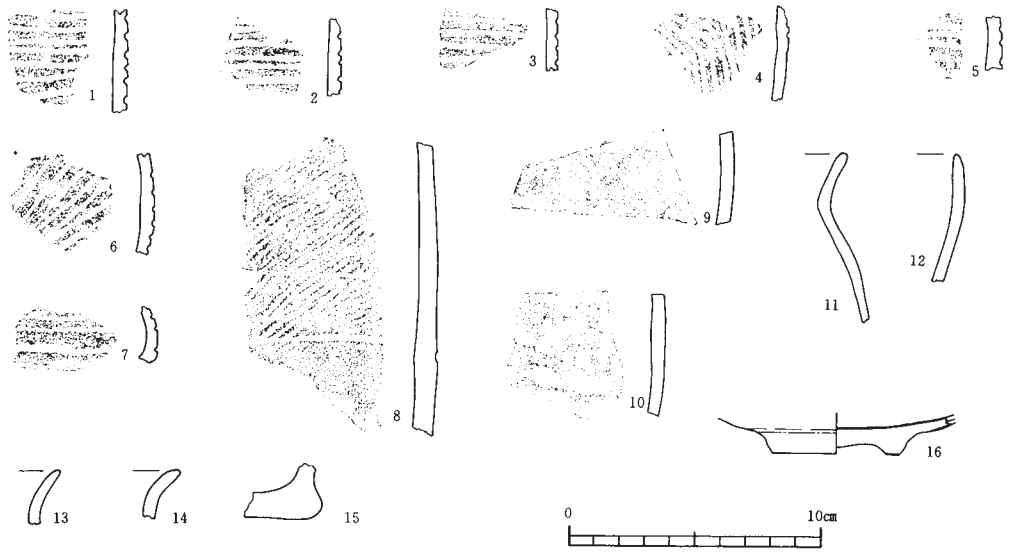
半円状扁平打製石器観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
4	VP−129 II層	(99)×78×18	(231)	安山岩		S 3

線刻石器(?)観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
5	VR−140 II層	185×160×66	7,550	安山岩	浅い線刻?	S 6

図26　前坂下(1)遺跡出土石器



土　器　観　察　一　覧

図版	層位	部位	外面文様施文法（地文）	内面調整	時期	備考	登録番号
1	ＩＨ覆土	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ53
2	〃	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ28
3	〃	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ53
4	〃	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ10
5	〃	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ12
6	ＶＳ－110Ⅱｂ層	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ９
7	ＶＰ－167Ⅱｂ層	胴部	沈線文		ムシリＩ	粗砂粒混入	Ｐ10
8	ＶＯ－130Ⅱｂ層	胴部	沈線文　（ＬＲ縄文）	横位	後期	細砂粒混入	Ｐ１
9	ＶＰ－125 表採	胴部	ナデ	ロクロ	須恵器	（長頸壺）	表採
10	ＶＲ－130Ⅱａ層	胴部	ナデ	ロクロ	須恵器	（長頸壺）	Ｐ５
11	ＩＨ覆土	口縁部	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ	土師器	（甕）	Ｐ51
12	〃	口縁部	ロクロ	ロクロ	土師器	（坏）	Ｐ23
13	〃	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	土師器	（甕）	Ｐ30
14	〃	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	土師器	（甕）	Ｐ42
15	ＶＰ－127Ⅱａ層	底部	ナデ	ナデ	土師器	（甕）	Ｐ３

分布調査表採陶器

図版	名称	器種	釉調	胎土	備考
16	唐津	皿	灰オリーブ色５Ｙ5/3	灰黄褐色10ＹＲ6/2	内面にトチ痕有

図25　前坂下(1)遺跡出土土器・陶磁器

溝状ピット全体のプランを確認したのは、調査区ＶＪ－115とＶＫ－150のものが２基のみである。しかし、このほかに断面を確認したもの等が５基ある。このうち第３号溝状ピットは堆積土中にロームが多量に含まれている。これら７基の溝状ピットは台地平坦面全体に薄く散布し、集中する場所はないようである。

いずれも確認するだけにとどめ、精査は行っていない。

(2) 出土遺物

(i) 土器

縄文時代早期、同後期と平安時代の土師器片、須恵器片である。

図25－１～７の７片は縄文時代早期後半のムシリＩ式(江坂：1957)に比定される。いずれも器厚が薄く５㎜～７㎜で、胎土中に繊維は見られない。外面には棒状工具で条痕文風の文様を描いている。いずれも深鉢の破片である。

図25－８はＬＲの単節斜縄文地に沈線を入れ、その内部を磨り消した文様をもつ土器片である。胎土に粗砂粒が混入された深鉢の胴部片である。縄文時代後期の土器であるが、型式同定できるだけの特徴を有していない。

図25－９・10は同一個体で須恵器長頸壺の体部片である。外面にはヘラナデによる調整痕が、また、内面にはロクロ目が認められる。

図25－11～15はいずれも土師器片である。このうち11は甕形で、口縁部内外面は横位のユビナデによる調整痕が、また、胴部外面にはヘラナデによる調整痕が認められる。12は坏形で内外面にロクロ目が認められる。このほか、図化した以外にも50片ほどの土師器細片が出土しているがほとんどは甕の胴部片である。

土師器片は、いずれも東北地方北部における土師器編年の第Ⅱ型式の特徴をもつもので、須恵器長頸壺もそれに伴うものと思われる。

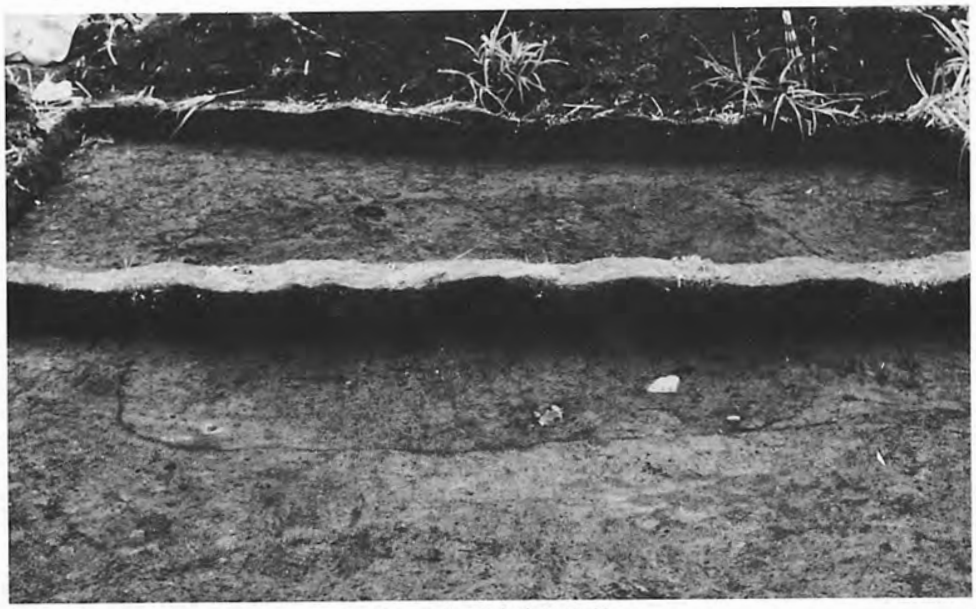
（ⅱ） 石器

縄文時代の磨石（図26－１～３）、半円状扁平打製石器（図26－４）が出土した。このほか、図26－５の礫には、浅い刻線が認められるが、人為的なものか自然作用の結果なのか判断し難い。

5　小　結

本遺跡は、縄文時代早期、同後期、平安時代、近世初頭各期の複合遺跡である。遺物や遺構の分布状況から見ると、ムシリＩ式期は台地北端の比較的限定された範囲に、また、縄文時代後期は集中部分がなく、台地の使用上で異なりが認められる。ただ平安時代の住居跡の場合は、同一台地上の西側に隣接した前坂下(6)遺跡発見のものとも強い関連（同一時期？）が考えられる。このことは構築時期が不明である溝状ピットの場合も同様である。したがって、本来２遺跡と考えられていた本遺跡と前坂下(6)遺跡は同一遺跡として把握する必要があろう。

（三浦　圭介）



第１号住居跡確認状況

第１号住居跡出土土師器・須恵器

写真６　前坂下(1)遺跡第１号住居跡

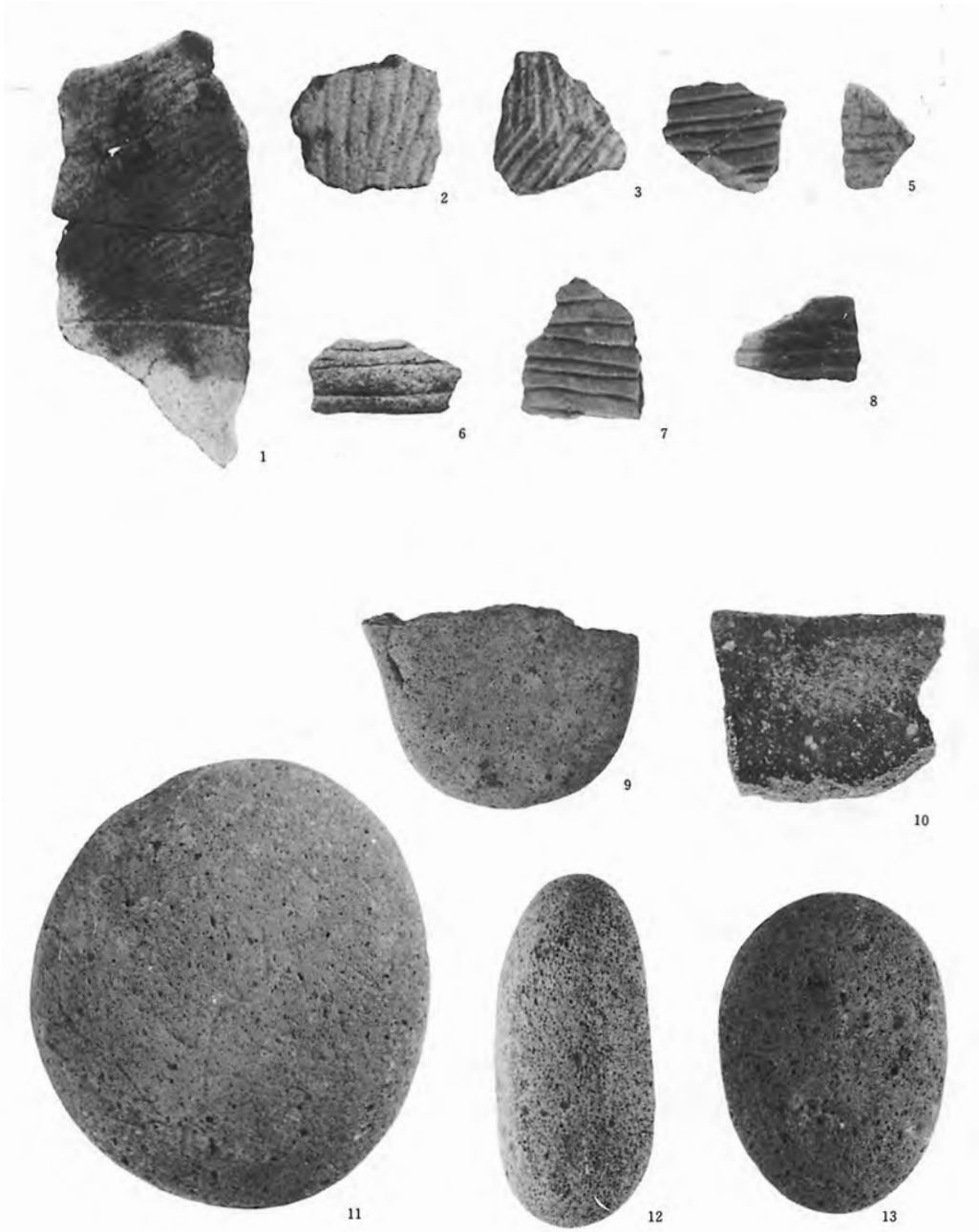


写真 7　前坂下(1)遺跡出土遺物

第５節　前坂下(2)遺跡

1　遺跡の立地

現汀線から約300m内陸部に入った、標高12m～20mの低台地上に所在する。この低台地の大部分は、近年まで畑地として利用されていた。同じ台地上には南西方向約200mの地点に製鉄遺構を伴う前坂下(4)遺跡が、また、西方約300mの地点には縄文時代後期の前坂下(8)遺跡がある。

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査（青森県教委：1978）で「焼土遺構」が確認されているため、試掘調査を実施することになった。この地区一体は、耕作を止めてから10年近くにもなるため、カヤと雑木の繁茂する荒地となっている。これらを刈り払った後、20mグリッドを設定し、必要に応じて、その地区線上に沿って１m幅のトレンチを設けた。

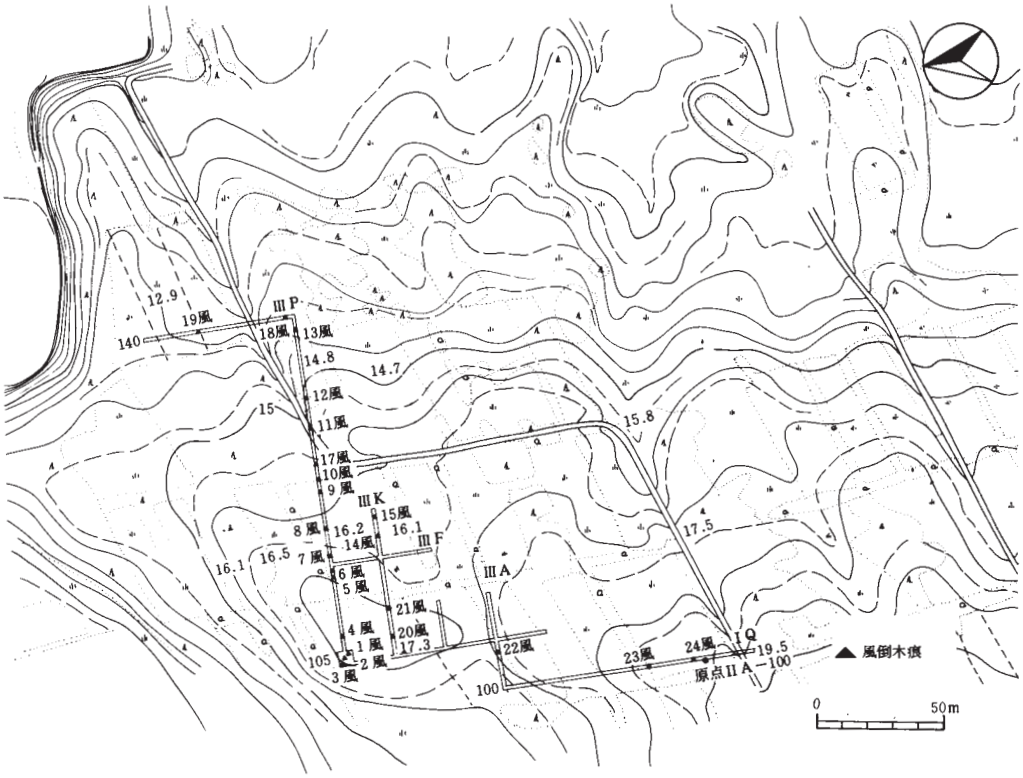


図27　前坂下(2)遺跡地形・調査区配置

この結果、多数の焼土を伴う「落ち込み」を検出したが、土器や石器等の遺物は全く出土しなかった。この落ち込みは、規模や形態上では種々あるが、いずれも焼土を有すること、降下火山灰を薄く有することで一致している。このうちの３基を精査した結果、これらはいずれも「風倒木痕」であった。

７月末には各トレンチを埋め戻して本遺跡の調査を終了した。

3　遺跡の層序

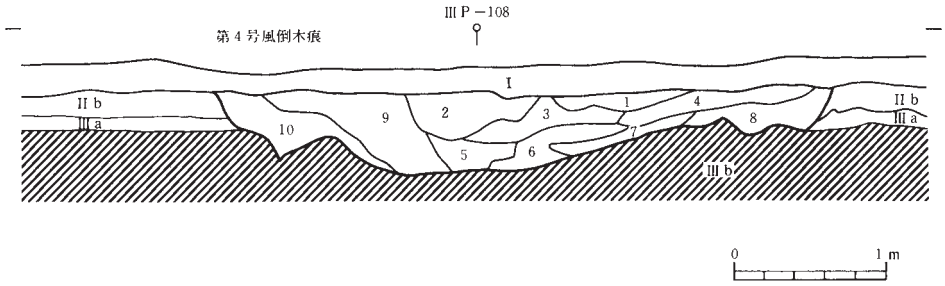
遺跡内の基本層序は、ほぼ全域にわたって均一的である。

第Ⅰ層は、近年まで耕作されていた表土層である。

第Ⅱb層は、暗褐色のシルト層で、層厚は20cm～30cmである。

第Ⅲ層は、地山を形成する黄褐色のローム層である。しかし、上部では、その上層の第Ⅱb層と混在するため汚れた状況を呈している。これを第Ⅲa層とし、その下部を第Ⅲb層として把握した。

本遺跡からは遺物が出土していないため、各層の形成時期は不明である。しかし、前坂下(1)遺跡等の周辺遺跡に見られる遺跡内基本層序とほぼ一致するため、形成時期も同一と思われる。

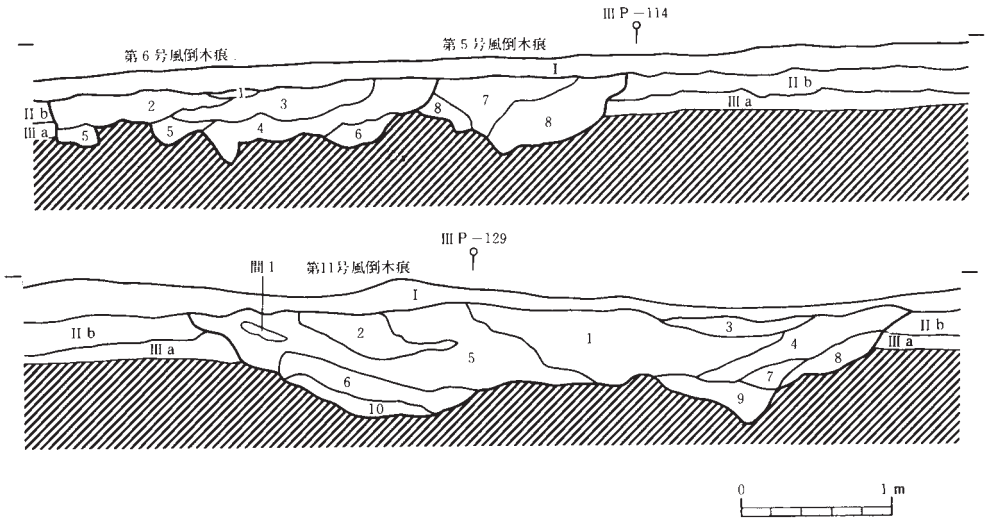


前坂下(2)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	黒褐色 7.5YR3/2	シルト	草木根多い	耕作土	
Ⅱb	褐色 7.5YR4/4	シルト		自然堆積	
Ⅲa	褐色 10YR4/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土が混入	地山	ロームへの漸移層
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム		地山	
1	黒褐色 10YR3/2	シルト		風倒木による形成層	
2	褐色 7.5YR4/3	粘土質シルト	ローム粒が少量混入	風倒木による形成層	
3	暗褐色 10YR3/4	〃	ローム粒・焼土粒・炭化物混入	風倒木による形成層	
4	黒褐色 10YR3/2	〃	焼土粒が少量混入	風倒木による形成層	
5	褐色 10YR4/4	〃		風倒木による形成層	
6	暗褐色 10YR3/3	〃	焼土粒・炭化粒少量混入	風倒木による形成層	
7	暗褐色 7.5YR3/4	シルト	焼土が多量に混入	風倒木による形成層	
8	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト		風倒木による形成層	
9	黄褐色 10YR5/6	ローム	黒褐色シルトがブロックで混入	風倒木による形成層	
10	褐色 7.5YR4/6	粘土質シルト	黄褐色ローム粒が少量混入	風倒木による形成層	

図28　前坂下(2)遺跡基本層序

ただ周辺遺跡で認められる第Ⅱa層とした黒褐色のシルト層は、耕作のためか、一部地区より存在しない。



第5、6号風倒木痕堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	暗褐色 7.5YR3/4	シルト		第6号風倒木痕	
2	暗褐色 10YR3/4	シルト	ローム粒、炭化粒混入		
3	褐色 10YR4/6	シルト質粘土	ローム粒全体に混入		
4	褐色 10YR4/4	シルト	ロームブロック混入		
5	褐色 7.5YR4/4	シルト	ローム粒混入		
6	褐色 10YR4/6	シルト質ローム	ローム粒全体に混入		
7	黄褐色 10YR5/8	ローム		第5号風倒木痕	ロームマウンド
8	褐色 10YR4/4	シルト	ローム粒多量に混入		

第11号風倒木痕堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	黒褐色 7.5YR3/4	粘土質シルト	焼土粒（0.1～3cm） 炭化粒（0.1～1cm）混入	第11号風倒木痕	
2	黄褐色 10YR5/6	ローム			
3	暗褐色 10YR3/3	シルト			
4	暗褐色 10YR3/4	シルト	焼土、炭化粒混入		
5	褐色 10YR4/6	ローム			ロームマウンド
6	黄褐色 10YR5/6	ローム			
7	黒褐色 10YR3/2	シルト	焼土混入		
8	褐色 7.5YR4/3	粘土質シルト	ローム粒混入		
9	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化粒、焼土粒、ローム粒混入		
10	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	ロームブロック混入		
間1	褐色 10YR4/6	シルト	炭化粒混入		

図29　前坂下(2)遺跡風倒木痕断面

4　検出遺構と出土遺物

各トレンチ内で確認した風倒木痕は24基にものぼる。これらの大多数は断面観察の結果、中央部に地山の黄褐色ロームのマウンドを有し、その下部に黒色あるいは黒褐色の腐植土を凹レンズ状にもつ擂鉢形の落ち込みである。風倒木痕特有の堆積状況と形状を示す（能登：1974、三浦：1980）ものと言えよう。ただ、レンズ状に入る腐植土中には灰黄褐色の降下火山灰と多量の焼土粒、木炭粒を有すること、あるいはロームマウンドの側面の一部が火熱のため赤変していること等は特筆される。出土遺物はない。

5　小結

人間が関与したと推定される遺物や遺構は全く発見できなかった。24基にものぼる焼土を有した落ち込みは、すべて風倒木痕として理解された。従来、この種の風倒木はほとんど発見されていなかったが、今回の試掘調査では貴重な資料を得た。すなわち、多数の立木が根ごと倒れ、しかも倒木の根と一緒に浮上したロームの空間に火山灰が吹き込まれ、更にこれらは火災を受け、落ち込みの壁辺や堆積土内に焼土が形成されたものである。この現象は、20遺跡のうち老部川に面した銅屋(1)遺跡、前坂下(1)遺跡、前坂下(6)遺跡、南通遺跡、見知川山遺跡、アイヌ野遺跡等の各遺跡で認められたことから理解すれば、すくなくとも老部から小田野沢の両地区にまたがる約15㎢の地域は、瞬時の営力（台風と推定される）で多数の立木が倒され、更に火災（山火事の可能性が高い）を受けたものと理解される。

この時期は、文献上で把握することはできないが、アイヌ野遺跡第 2 号住居跡（第20節）が火災を受けた直後に降下し、堆積した火山灰と同種であること、しかも、この住居の廃絶期が桜井清彦による東北地方北部の土師器編年上の第Ⅱ型式に属し（桜井：1958）、その土器組成及び形態上から 9 世紀から10世紀にかけての所産と理解されること等から、平安時代前半期の一時期と推定される。　（三浦　圭介）

〔引用・参考文献〕

青森県教委（1978）『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第43集

能登　健　（1974）「発掘調査と遺跡の考察－いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として－」『信濃』第26巻3号、信濃史学会

三浦圭介　（1980）「7 風倒木痕」『板留(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第59集

桜井清彦　（1958）「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」『舘址』東京大学出版会

遺跡全景

風倒木痕確認状況

風倒木痕断面

写真 8　前坂下(2)遺跡

第６節　前坂下(3)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下608ほかに所在する。

この地域では最も水量の豊富な老部川から約300m北方に位置する。遺跡は、西方の一切山に連続する標高12m～17mの洪積台地上に立地する。この台地の南側及び北側は湿地帯で、東側は砂丘に連続する。

本遺跡の周辺には、南西方向約300mの地点に、続縄文時代と奈良時代の遺跡である銅屋(3)遺跡が、また、北方約200mの地点には平安時代集落である前坂下(1)遺跡、前坂下(6)遺跡がある。

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査では、縄文時代土器片５点（後期１、時期不明４）と磨石１点、敲石１点が表面採集されている。

このため、調査にあたっては、遺跡の時期、性格及び範囲を把握することを目的とした。原点付近の台地中央部から粗掘りや遺構確認の作業に入ったが、遺物、遺構はほとんど発見できなかった。しかし、台地の南端に近づくにしたがって、遺物が出土しはじめた。

調査も半ばの段階に入り、竪穴住居跡と思われるわずかな落ち込みを検出した。しかし、当初トレンチ内の断面観察では住居跡であるとの確証が得られないため、周囲を拡張し、その全容を把握することにした。その結果、これは縄文時代終末期から弥生時代初頭にかけての住居跡であることが判明した。他の１軒については遺構保存のため、確認だけにとどめた。これらのほかに、溝状ピット13基と性格不明の小型な落ち込み３基を確認した。

10月29日には、埋め戻しも終り、本遺跡の全作業を終了することができた。試掘調査面積は1,002㎡である。

3　遺跡の層序

基本層序は、５層に分けることができる。第Ⅰ層は表土層で、近年まで耕作されていた層である。暗褐色のシルトで、層厚は地点によって異なるが、12㎝～30㎝である。第Ⅱ層は、縄文時代から平安時代までの遺物を包含する層である。この層は更に性状から、第Ⅱa層と第Ⅱb層に

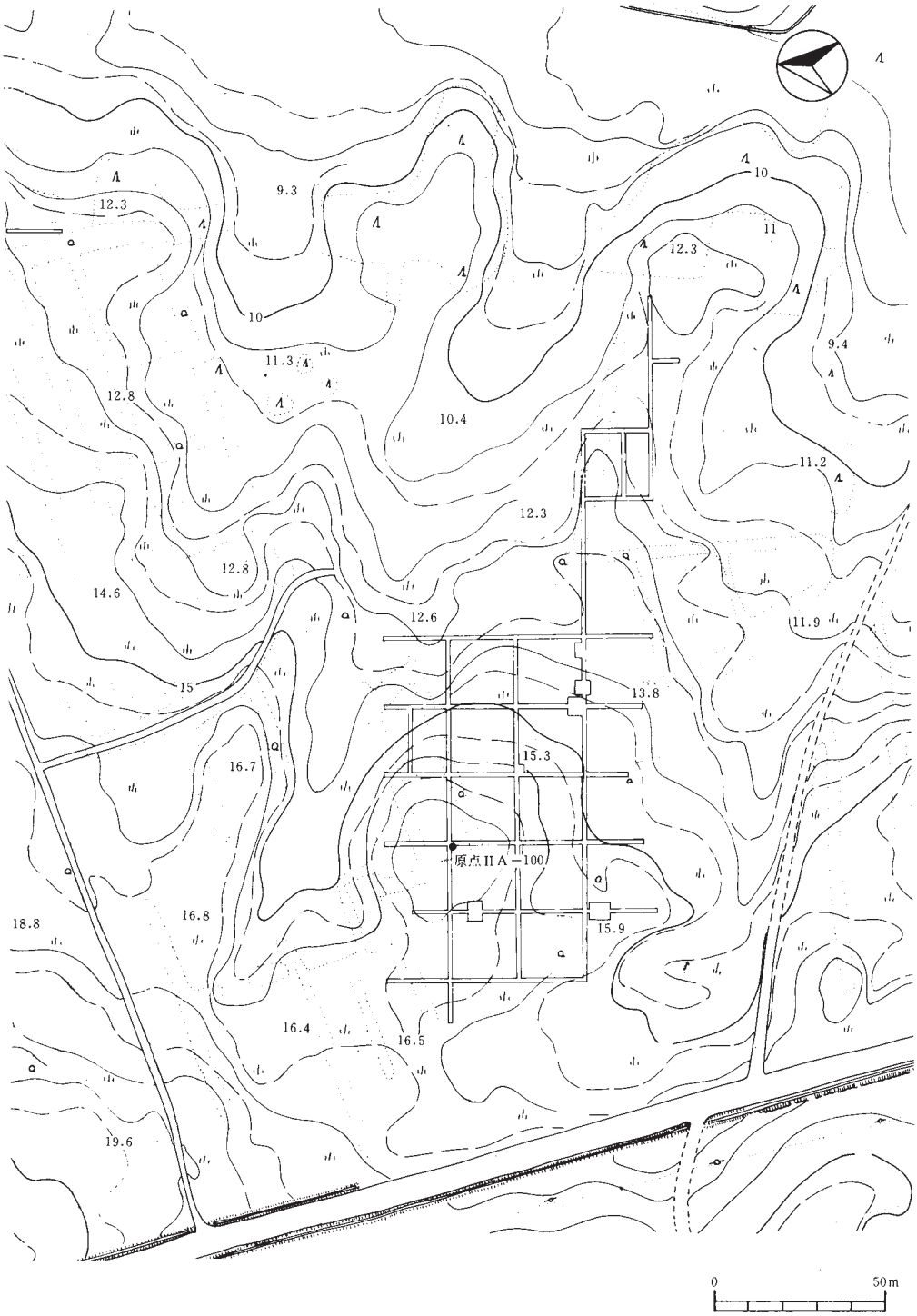


図30　前坂下(3)遺跡地形・調査区配置

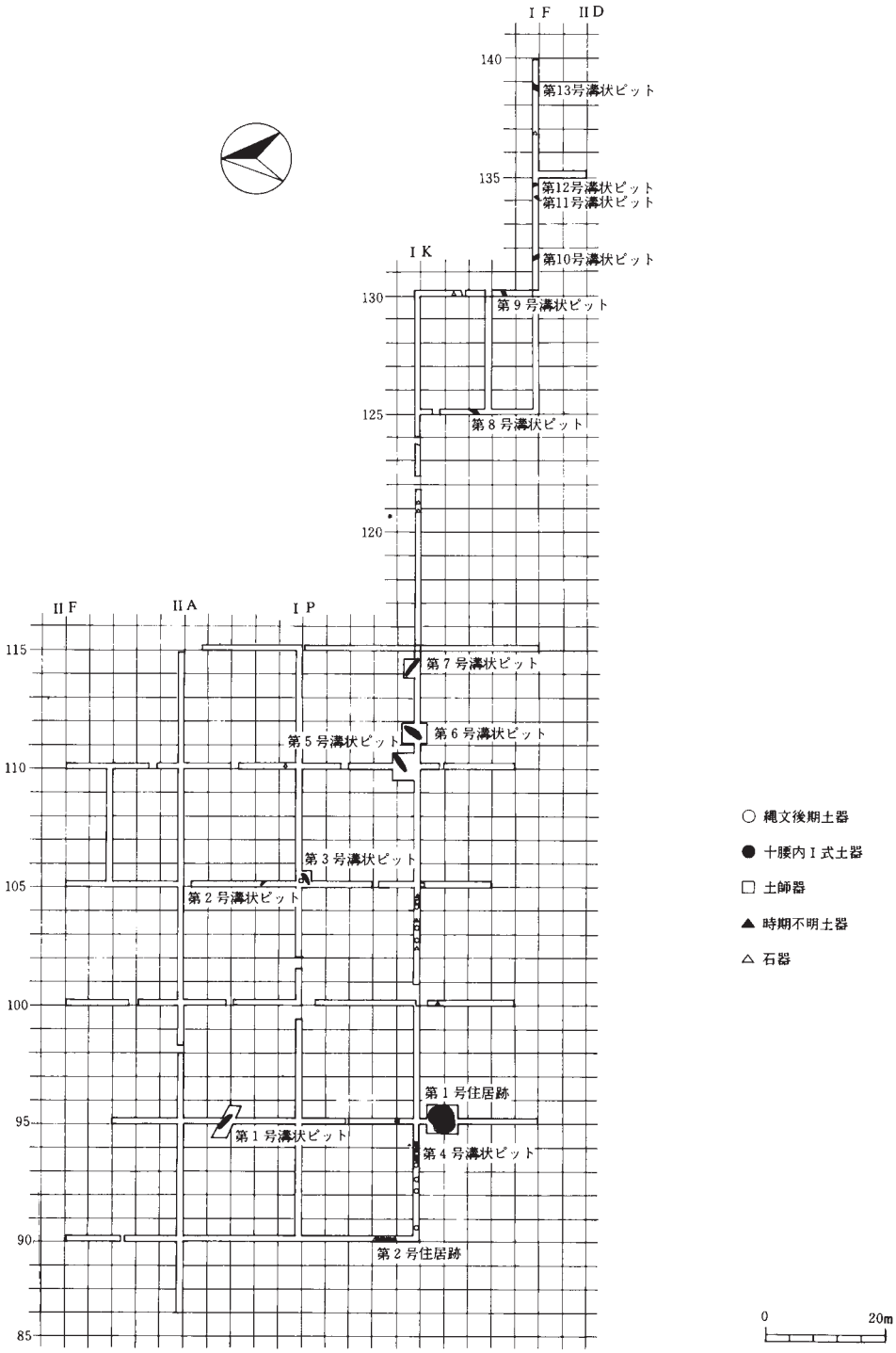
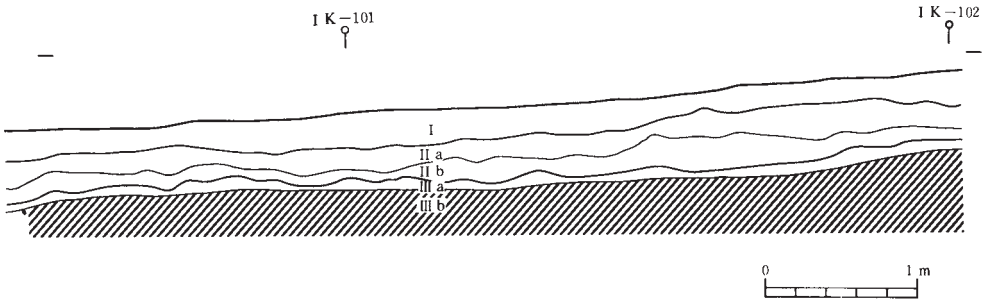


図31　前坂下(3)遺跡グリッド・遺構配置



前坂下(3)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
I	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	草木根多量	耕作土	
IIa	黒褐色 7.5YR3/2	シルト		自然堆積	弥生期、平安期遺物包含
IIb	褐色 7.5YR4/3	シルト	部に炭化粒（0.1～0.2cm）	自然堆積	縄文後期遺物包含
IIIa	褐色 10YR4/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	地山	ローム層への漸移層
IIIb	黄褐色 10YR5/6	ローム		地山	

図32　前坂下(3)遺跡基本層序

細分される。第IIa層は、遺跡のほぼ全体に堆積しているが、北西部の小丘稜（ＩＰ－100～ＩＩＰ－100グリッド）付近の一部ではこの堆積がみられない。第IIa層は、土師器破片の遺物を包含し、しかも第IIb層とは色調の点で大きな違いがみられ、層厚は10cm～20cmである。第IIa層は、黒褐色を呈するのに対し、第IIb層は、褐色で両層の間には明瞭な層理面を形成する。第IIb層は、縄文時代後期以前の遺物を包含する層である。この層は遺跡のほぼ全域に見られ、第III層の直上に10cm～30cmの層厚で堆積している。第III層は、無遺物層で、性状から第IIIa層、第IIIb層に細分される。第IIIa層はロームを主体とする層であるが、第IIb層の一部が入り込むため、汚れた様相を呈している。これは遺跡全体を覆っている。また、第IIIb層は、黄褐色ロームで遺跡内の全体に見られる。

4　検出遺構と出土遺物

（i）　第１号住居跡

〔遺構の位置と確認〕　試掘調査区ＩＪ～ＩＩ－94～95に位置し、南北トレンチの西壁セクションで、壁の立ち上がりを確認した。この付近を拡張し精査をしたところ、基本層序第IIb層中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

〔重複〕　ない

〔平面形・規模〕　基本層序第IIIa層を床面に利用しているため、壁の立ち上がりが不明瞭である。東壁、南壁付近に明確な落ち込みを確認できなかったが、北壁、西壁付近では暗褐色土の落ち込みを確認した。壁溝がほぼ一巡しているため南北軸4.7m、東西軸5.6mの全体に不整

楕円形のプランを確認した。推定面積は15.0㎡である。

〔壁・床面〕　壁は、遺構確認面が不明瞭のため、検出時にほとんど残存しておらず、北壁の一部を確認したにすぎない。北壁の高さは４㎝～８㎝である。床は、全体的に平坦な面をなし、炉の周辺から竪穴中央部付近にかけてかたくしまっているが、壁際付近はやわらかい。大部分は基本層序第IIIa層を床面に利用しているが、北東壁付近だけは第IIIb層（ローム）を床面としている。

〔壁溝〕　一部、トレンチによって削平されているが、ほぼ全周する形で検出した。幅11㎝～50㎝、深さ２㎝～30㎝で一定していない。

〔柱穴〕　本住居跡で検出したピットは合計26個である。内訳は床面上から21個と、壁溝内から５個である。この中で柱痕を確認できたものはない。配置と規模から推測して、主柱穴はP_6・P_8・P_{11}・P_{17}の４本と思われる。また、壁柱穴はP_1・P_3・P_7・P_9・P_{10}・P_{12}・P_{13}・P_{14}・P_{15}・P_{16}・P_{19}・P_{20}の12個である。これらは、各約20㎝～50㎝の間隔で、ほぼ住居跡を一周する。P_8・P_{11}の間隔は1.3mと広くなっている。

〔炉〕　住居跡中央部よりやや南側に構築されている。炉は、床面を10㎝ほどの鍋底状の掘り方をもち、周縁に河原石を配している。一部の炉石は炉跡付近に散在している。住居跡廃棄

表１　前坂下(3)遺跡第１号住居跡ピット一覧

ピット番号	掘り方の規模 形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	ピット番号	掘り方の規模 形状	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
1	円形	16×14	10		14	楕円形	22×18	9	
2	不整楕円形	40×24	16		15	円形	16×14	20	
3	楕円形	30×26	37		16	楕円形	22×18	28	
4	円形	20×18	10		17	楕円形	36×34	37	
5	不整楕円形	44×36	11		18	円形	20×18	11	
6	楕円形	38×24	32		19	円形	16×24	7	
7	楕円形	32×20	18		20	円形	15×14	12	
8	楕円形	26×18	26		21	楕円形	12×８	12	
9	円形	14×12	22		22	楕円形	24×16	7	壁溝内
10	楕円形	22×18	11		23	楕円形	10×６	7	壁溝内
11	不整楕円形	34×24	16		24	不整楕円形	22×10	5	壁溝内
12	楕円形	26×16	15		25	楕円形	20×12	6	壁溝内
13	円形	16×14	10		26	楕円形	20×15	6	壁溝内

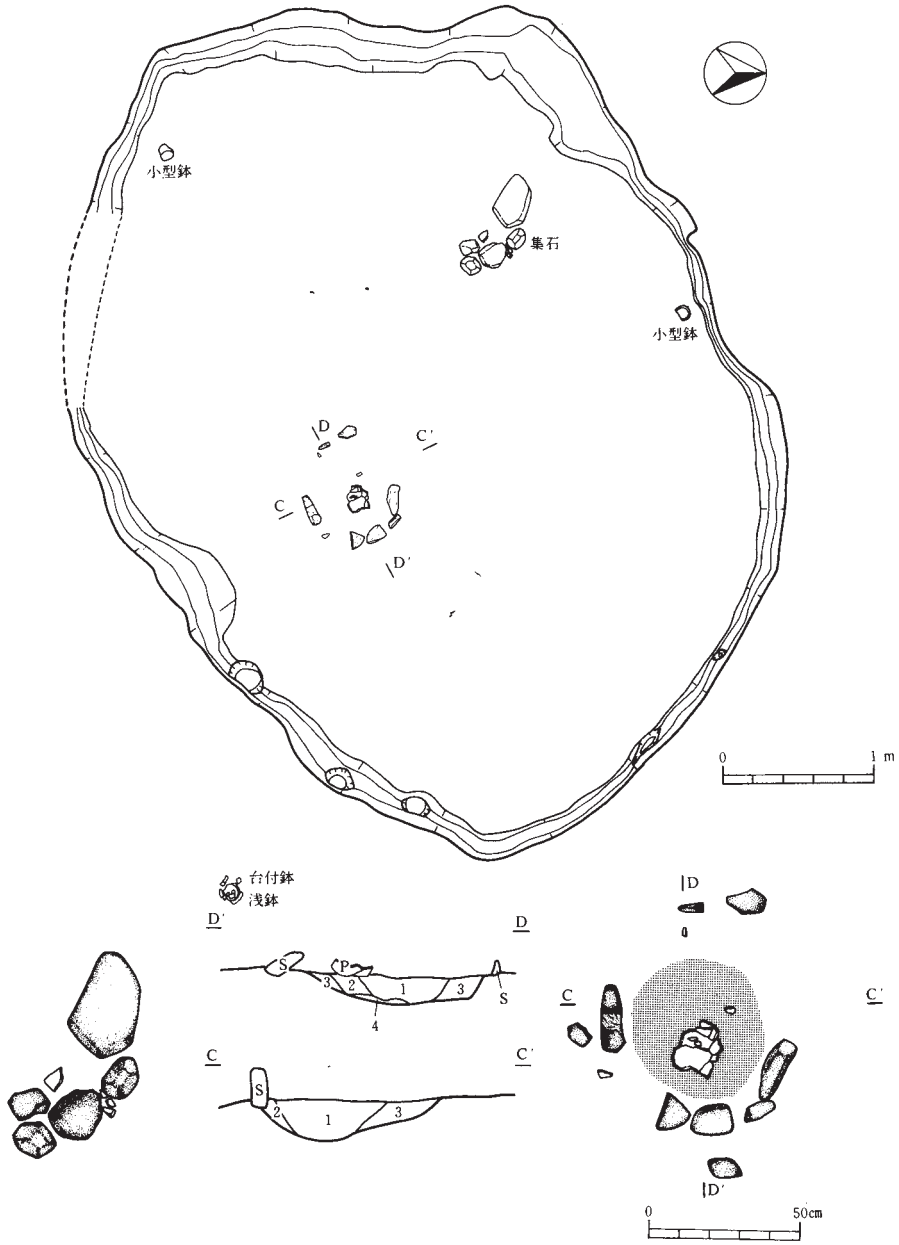
後、人為的に抜き取られたか、攪乱を受けたためかであろう。

上半部欠損した図37－３の粗製深鉢が、炉中央部の焼土上面に直立の状態で出土した。土器には埋設された形跡はなく、しかも二次加熱を受けて器面が剥落しており、煮沸容器として使用された土器と思われる。

炉石の残存状態と焼土の範囲等から推定して、長軸40㎝、短軸37㎝ほどの石囲炉である。

〔出入口〕　出入口と推定される特別な施設は検出されなかったが、柱穴配置等からすれば、竪穴南西部に位置していたと考えられる。

〔その他の付属施設〕　住居の西壁付近の床面上に磨石１点、石皿１点、15㎝前後の自然礫



第1号住居跡炉内堆積土一覧

層位	土色	土性	備考
1	褐色 7.5YR4/6	シルト	焼土・炭化粒ブロック状に少量混入
2	赤褐色 5YR5/8	シルト	焼土多量に混入・炭化粒少量に混入
3	褐色 7.5YR4/6	シルト	炭化粒・ローム粒少量に混入
4	明褐色 7.5YR5/6	シルト	ローム粒多量に混入

図33　前坂下(3)遺跡第1号住居跡

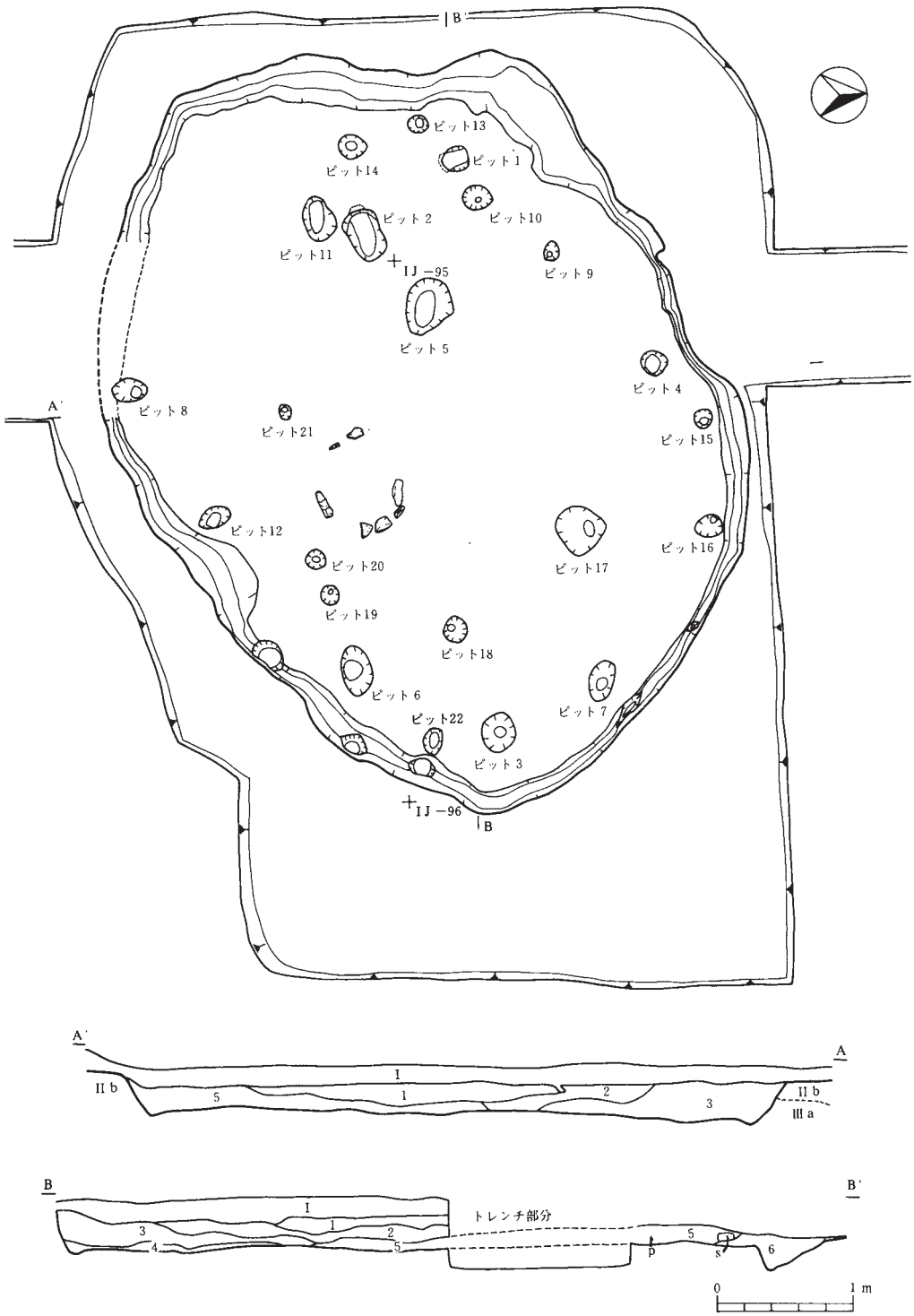


図34　前坂下(3)遺跡第1号住居跡

3 個が集中して出土している。この集石の下部には掘り込まれた痕跡は確認されなかった。性格は不明であるが、住居廃棄時には既につくられていたものであろう。集石内には、図38－ 3 の土器片が含まれている。

〔竪穴内堆積土と出土遺物〕

堆積土：竪穴内の堆積土は 6 層に細分される。床面を直接覆う層は、 3 、 4 、 5 、 6 層である。基本的には同一層であるが、地点を異にしてやや土色に違いが認められるにすぎない。

表 2　前坂下(3)遺跡第 1 号住居跡堆積土一覧

層位	土　　色	土 性	混　　入　　物	遺 物 の 出 土 状 態	層 の 形 成
1	暗褐色土　10Y R3/3	シルト	炭化粒、焼土若干混入。	土器片が多量に出土。	自然堆積
2	暗褐色土　10Y R3/4	シルト	炭化粒、焼土少量混入。	土器片が比較的多量に出土。	自然堆積
3	黒褐色土　7.5Y R3/2	シルト	ローム粒若干混入。	遺物はほとんど出土していない。	自然堆積
4	褐色土　7.5Y R4/3	シルト	炭化粒若干混入、ローム粒多量混入。	遺物はほとんど出土していない。	自然堆積
5	褐色土　10Y R4/6	シルト	炭化粒若干混入、ローム粒少量混入。	土器片多量に出土,復元可能土器多く出土。	自然堆積
6	暗褐色土　10Y R3/3	シルト	ローム粒少量混入。	遺物はほとんど出土していない。	自然堆積

出土遺物：堆積土第 1 層からは32片の土師器片が出土した。いずれも甕形であるが、細片のため詳細は不明である。第 2 層からは、土師器細片と、図40－ 2 の石鏃が、出土した。

床面、及び床面直上からは、図38－ 1 、 4 の 2 個の小型鉢（完形）と図37－ 2 の深鉢が出土した。また、 1 の台付深鉢は竪穴外に、土圧で押潰された状態で出土し、炉周辺の床面上から出土した破片と接合する。これは図38－ 2 の浅鉢も同様である。特にこの浅鉢は台付深鉢と同レベルで、しかも接して出土したことから同一時期の廃棄として把握される。

図37－ 3 は石囲炉中央部の焼土内から、また、図38－ 3 の台付鉢は住居北西壁近くの床面に構築された集石内からの出土である。

図40－ 1 の両面加工のスクレーパーが西壁際から、また図42－ 2 の石皿及び磨石が住居中央部の床面から出土した。集石に使用された礫群の中には図42－ 3 、 1 の石皿及び磨石がある。

これらを以下に、器種単位に詳述する。

〔土器〕

台付鉢

図37－ 1 の器形の特徴は、ほぼ直立する高い台部と、口径の割に器高のある体部であろう。体部は胴上半部がやや膨らむ一般的な粗製深鉢形であるが、ほぼ直立する高い台部を有する。このため全体に安定感に乏しい。最大径は胴上半から口頸部に有するが、体部下端の径と口径が 1 ： 2 で比較的胴長である。

口縁部には 6 個の突起を有する。文様は、地文を単節縦位縄文とし、体部上半には箆状工具による 3 単位の波状文、また、台部には素文地に沈線と粘土粒による工字文が施文されている。体部の波状文は逆「S」字状に横に転回する 1 条の沈線と、この逆「S」字状の曲部から次の

単位の曲部に走る 2 本の沈線、更に、それらを挟む上下各 2 本の平行沈線で構成されている。この逆「S」字状の曲部内側には 1 個づつの小粘土粒が貼りつけてある。

地文の縄文は、ＬＲの単節縄文で斜位回転による縦位施文である。口縁部から突起部にかけての部分と台部では入念に磨消・研磨されている。

口唇部外側の稜部分には、全体に左傾する刻目が施されている。台部は最下端でやや外側に開くものの全体に直立的である。台部下半には 3 条の沈線が描かれ、更に中央部内に 2 個 1 対の粘土粒が 4 単位貼り付けられている。

器内面は体部・台部とも研磨されている。口縁部内面には外面に用いられた工具と同一のもので 1 条の沈線が巡らされている。胎土は比較的精選されてはいるが、精製土器の素地土よりはやや細砂粒の混入が目立つ。

浅鉢

3 個体が出土した。

図38－ 3 は竪穴内集石付近出土のものである。

精選された細かい胎土で、焼成もよく、しかも内外面研磨された精製土器である。内面及び外面の沈線内には一部黒色漆と、朱が残っていることから見ると本来内外全面にこれらが塗布されていたものと思われる。

器形はやや外反気味に立ち上がる。

本土器は、胴中央部付近からやや外反気味に口唇部に至る点や、主体モチーフの変形工字文か体部下半で構成される点などから見ると、台付鉢の台部の可能性もあるが、従来、この期の土器には内部に沈線を有する台部がほとんど知られていないことから、一応、鉢形土器の体部とみなした。

外面文様は、器面全体におよぶ比較的太い沈線のみで構成される。体部下半には 1 段の変形工字文が配されている。また、上段に配された 5 本の横位沈線のうち、 1 本を一部で上位沈線に接することにより、変形工字文風の構成をもたせている。図38－ 2 のように三角形の頂点等に用いられた粘土粒は存在しない。内面口唇部直下には、外面文様に用いられたものと同一の工具により 1 条の沈線が施されている。

図38－ 2 は竪穴外出土のもので、略完形の台付深鉢に伴出したものである。底部及び体部約3/4が欠損している。

これも精選された胎土を用い、内外面共入念に研磨された精製土器である。黒色漆が全面に塗布されている。

器形は、やや内湾気味の体部形態をもつもので、口端部分が体部器厚のほぼ半分の厚さよりなく、しかもこの口唇が丸味をもつ。

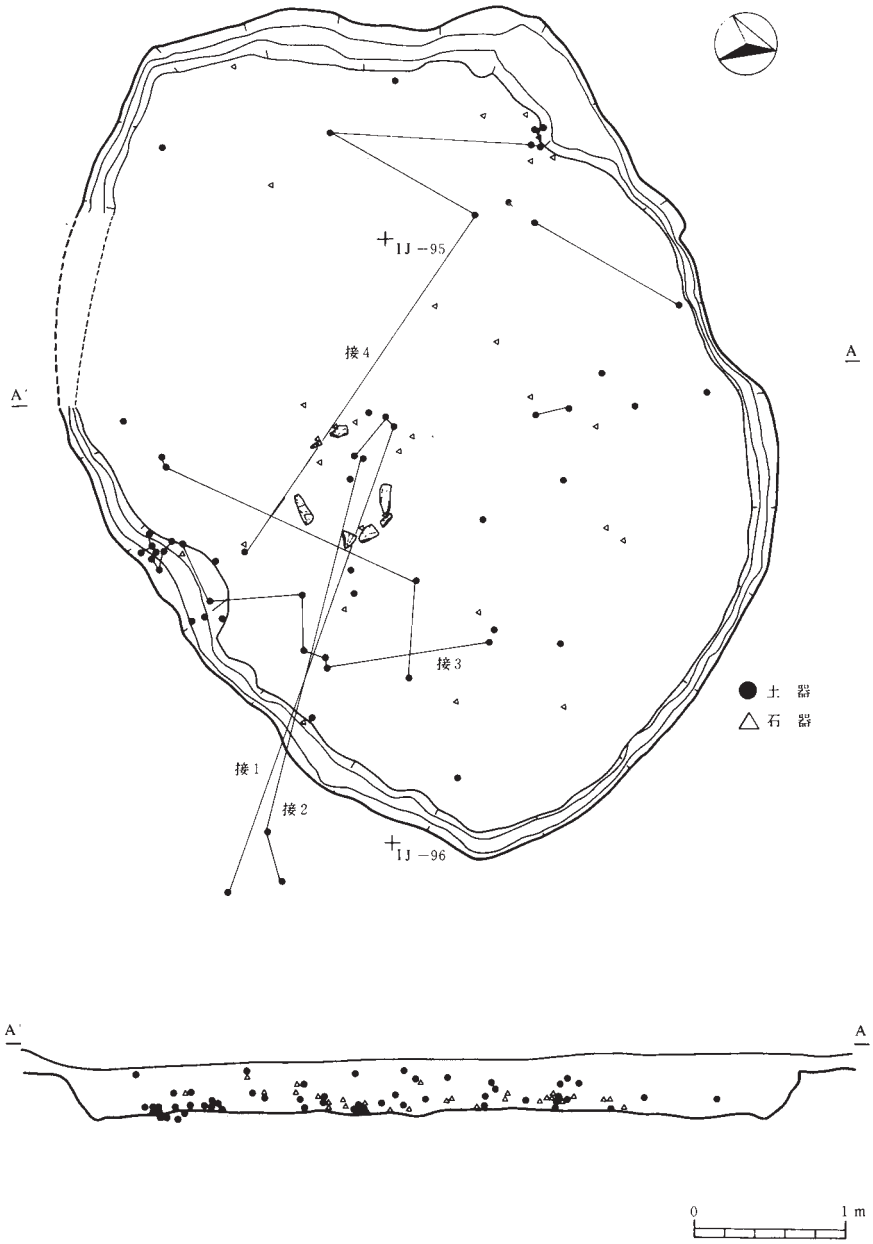


図35　前坂下(3)遺跡第1号住居跡遺物分布

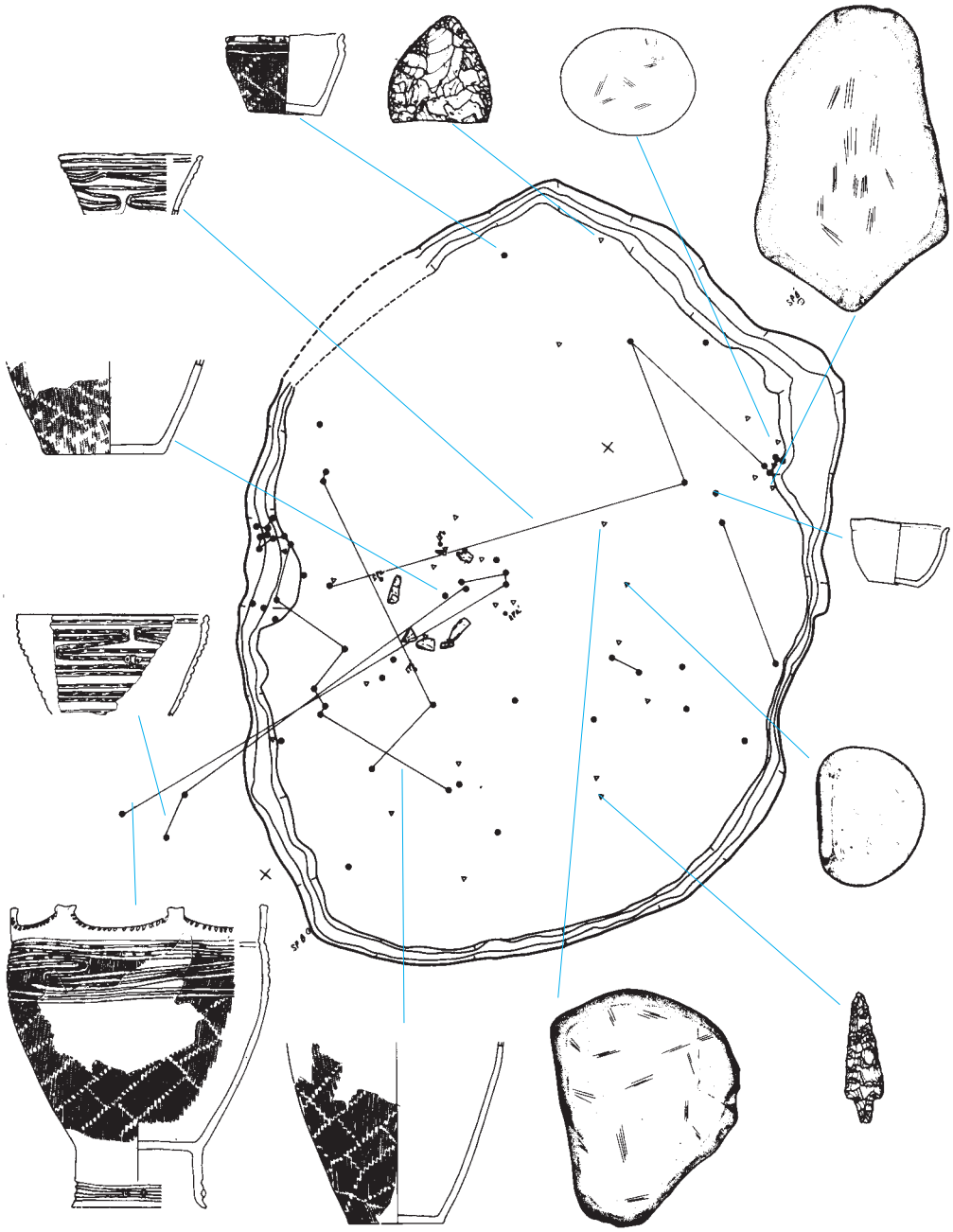
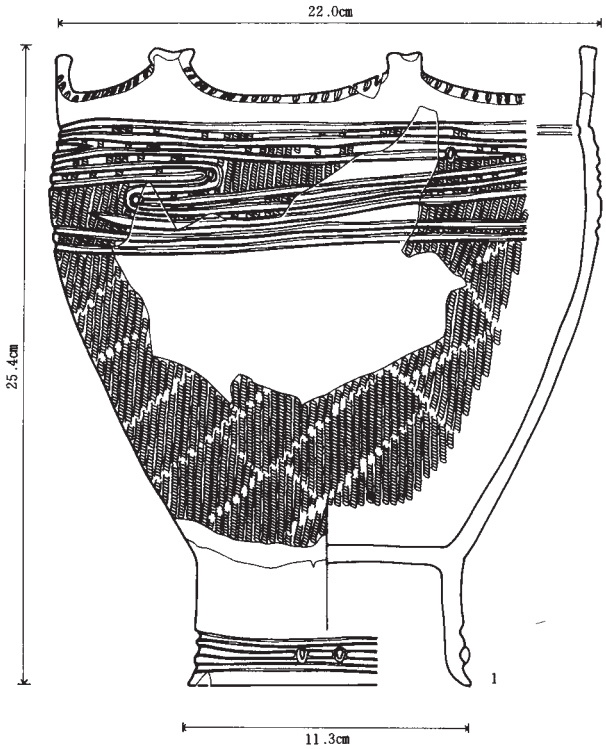
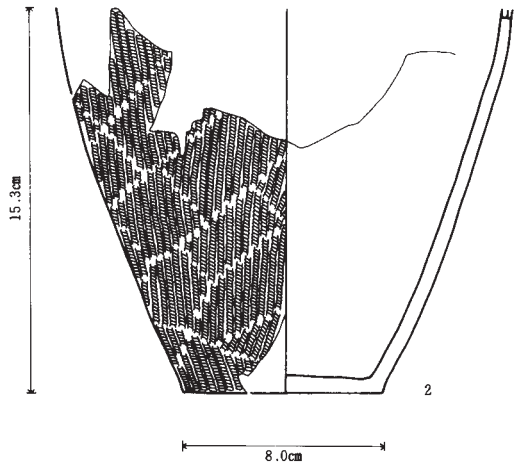


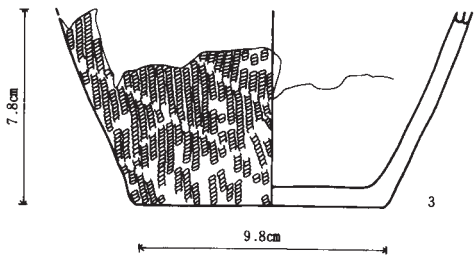
図36　前坂下(3)遺跡第１号住居跡遺物出土位置



層　　位：床面・竪穴外
時　　期：砂沢式
外面文様：沈線による波状文、地文はＬＲ縄文
　　口唇部刻目
　　台部３条の沈線
内　　面：横位調整
胎　　土：細砂が多量に混入
備　　考：接合資料No.1
登 録 No.：１Ｈ接１

層　　位：１層・５層
時　　期：砂沢式
外面文様：ＬＲ縄文
内　　面：横位調整
胎　　土：粗砂粒混入
備　　考：接合資料No.3
登 録 No.：１Ｈ接３

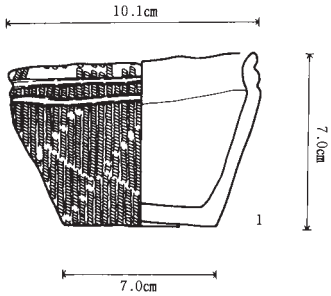




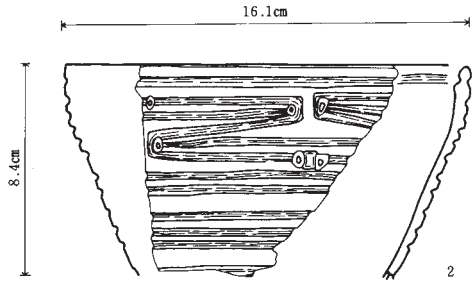
層　　位：炉焼土内
時　　期：砂沢式
外面文様：ＲＬ縄文
内　　面：横位調整
胎　　土：粗砂粒多量に混入
備　　考：炉内土器
登 録 No.：Ｐ91

0　10cm

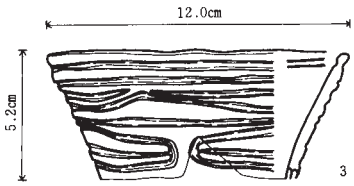
図37　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(1)



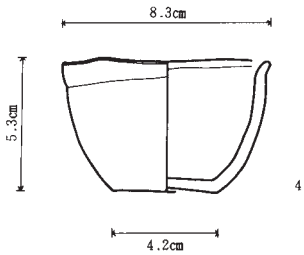
層　　位：床面
時　　期：砂沢式
外面文様：地文はＬＲ縄文
　　口縁部に２条の沈線
内　　面：横位調整
胎　　土：粗砂少量混入
備　　考：完形土器
登 録 No.：Ｐ28



層　　位：竪穴外
時　　期：砂沢式
外面文様：沈線による三角工字文、横位沈線
　　ミガキ
内　　面：口唇直下に１条の沈線、ミガキ
胎　　土：精良な粘土を使用
備　　考：図37－１と共伴、接合資料No.２
登 録 No.：１Ｈ接２

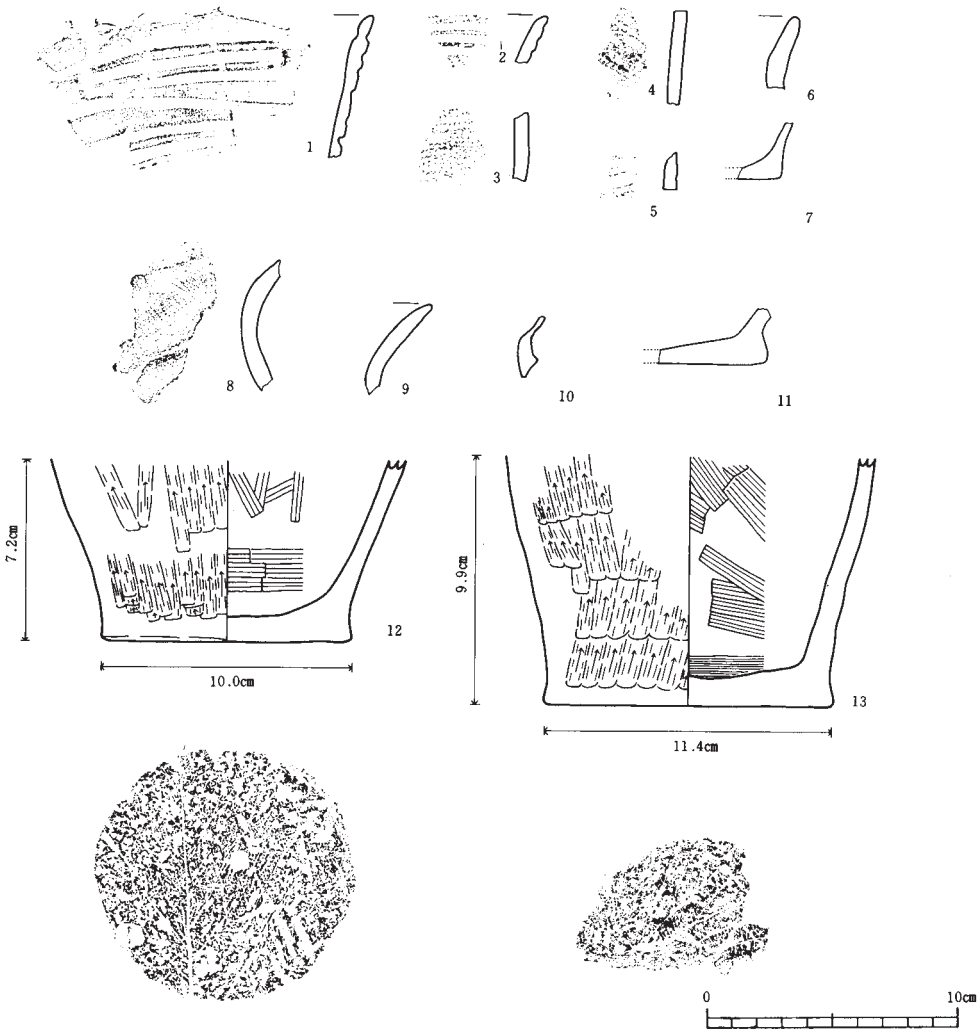


層　　位：１層・床面
時　　期：砂沢式
外面文様：沈線による三角工字文
　　黒漆塗布
内　　面：ミガキ後黒漆塗布、口唇直下に１条の沈線
胎　　土：細砂が微量混入
備　　考：接合資料No.４
登 録 No.：１Ｈ接４



層　　位：床面
時　　期：砂沢式
外面文様：無文
内　　面：ミガキ
胎　　土：細砂多量に混入
備　　考：完形土器
登 録 No.：Ｐ27

図38　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(2)



第１号住居跡出土土器観察一覧

図版	層位	部位	外面文様施文法（地文）	内面調整	時期	備考	登録番号
1	１H1.5層	口縁部	変形工字文、粘土瘤	横位	砂沢式	細砂粒混入	接A
2	１H２a層	口縁部	沈線文	横位	砂沢式	細砂粒混入	P40
3	１H床直	胴部	（ＬＲ縄文）	横位	砂沢式	細砂粒混入	P57
4	１H床直	胴部	（ＬＲ縄文）	横位	砂沢式	細砂粒混入	P58
5	１H１層	口縁部	沈線文	横位	砂沢式	細砂粒混入	P７
6	１H１層	口縁部	無文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	表採
7	１H６層	底部	無文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P39

第１号住居跡出土土師器観察一覧

図版	層位	品種	部位	外面	内面	備考	登録番号
8	１H１、２層	甕	口頸部	ユビナデ、刷毛目	ユビナデ		P２、12
9	１H１層	甕	口縁部	ユビナデ	ユビナデ		表採
10	１H１層	甕	口縁部	ユビナデ	ユビナデ		—
11	１H５層	甕	底部	ユビナデ	ユビナデ		P68
12	１H１層	甕	底部	ヘラナデ	ヘラナデ	底部に木葉痕	P60、61
13	１H１層	甕	底部	ヘラナデ	ヘラナデ、ユビナデ	底部に木葉痕	P51

図39　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土土器(3)

外面文様は、器面全体に及ぶ比較的太い棒状工具による沈線と粘土粒で構成されている。文様構成は、口縁部直下に三角工字文が横位に１段配され、しかも三角形の各々の頂点に粘土粒を貼りつけたものをモチーフの主構成とし、その上位（口唇直下）に１条、下位に６条の横位平行沈線を配したものとなっている。

内面の口唇部直下には深い沈線が１条巡っている。

鉢

図39－１は住居床面出土のもので、大型鉢の口縁部破片である。

胎土は、比較的精選されているものの、図38－２のような精製土器と比較するとやや粗さが見られる。内外面とも研磨されている。

外面文様は比較的太い沈線と、粘土粒で構成される。沈線による変形工字文が口縁部直下に施され、その頂点上に２個の粘土粒が貼り付けられている。

小型鉢

図38－１は、床面出土の完形土器である。底径対口径の差が少なく、器形胴部上半でやや内湾する器形をもつ。胎土中には細砂粒の混入が見られる。

外面文様は、地文として器面全体に撚りのやや粗いＬＲ単節縄文が施文され、口縁部に横位２条の沈線が施されている。内面にはこの沈線は認められない。また、内面及び底外面の調整は、精製土器等に見られる研磨技法は用いられず、箆状工具による横位のナデである。

図38－４も床面出土の完形土器である。体部中央でやや内湾し、口唇部がややふくらみ、口端が丸味をもつ点に、他の土器との違いがある。また、胎土内には細砂粒の混入は全くない。器外面は一部磨き調整が認められるものの、大部分は箆ナデである。また、内面及び底部外面は比較的粗い箆ナデ調整である。内外面ともに文様は施されていない。

深鉢

図37－３は、石囲炉の焼土内出土土器である。胴部下半のみで全体の器形は不明であるが、底径及び器厚からすると大型の深鉢であろう。器面の大部分は二次加熱のため、剥落している。

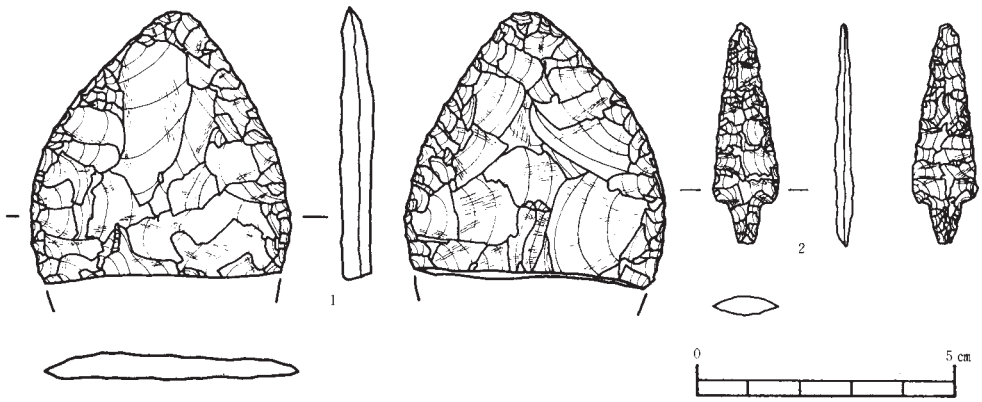
胎土内にはかなりの量の粗砂粒が混入している。

外面文様は単節縄文のみである。縄文原体はＲＬで、斜位回転による。

図37－２は、竪穴内堆積土の第５層中の破片数点と、床面出土の破片と接合する土器である。底径が小さい割に胴部で大きくふくらむ深鉢である。図37－３に比較して器厚は薄く、５㎜ほどである。胎土内には粗砂粒の混入が多い。

外面文様は単節縦位縄文のみである。縄文原体はＬＲで、これも斜位方向の回転による。器内面及び底部外面は、箆状工具によるナデによって調整されている。

〔石器〕



両面加工スクレーパー観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	1H床面	(51)×49×6	18.3	珪質頁岩	靴　型	S10

石　鏃　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(尖頭部×基部×幅)mm	厚さ(mm)	尖頭部開き角	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
2	1H2層	28×14×13	3.5	23°	1.5	黒　曜　石		S1

図40　前坂下(3)遺跡第1号住居跡出土石器(1)

本住居跡からは石皿3点、磨石4点、石鏃1点、両面加工のスクレーパー（靴型石箆）1点が出土した。これらのうち、床面や集石施設内等の、明らかに住居廃絶期の段階で使用されていたものは石皿2点、磨石2点、両面加工のスクレーパーである。他のものは竪穴内堆積土中のものである。しかし、この堆積土内には砂沢式期と見られる土器片と土師器片より包含していないことから、これらの石器も、砂沢式期のものである可能性が高い。

石皿

図42－2は、炉の北西方向の壁際で検出した集石内のものである。扁平な河原石を加工することなく、そのまま石皿として使用している。両面に使用痕（擦痕）が認められる。

図42－3は、床面中央部からやや北寄りの位置で出土した。厚さや大きさの点で2と類似する。これも素材をほとんど加工することなく、両面の扁平部をそのまま使用している。

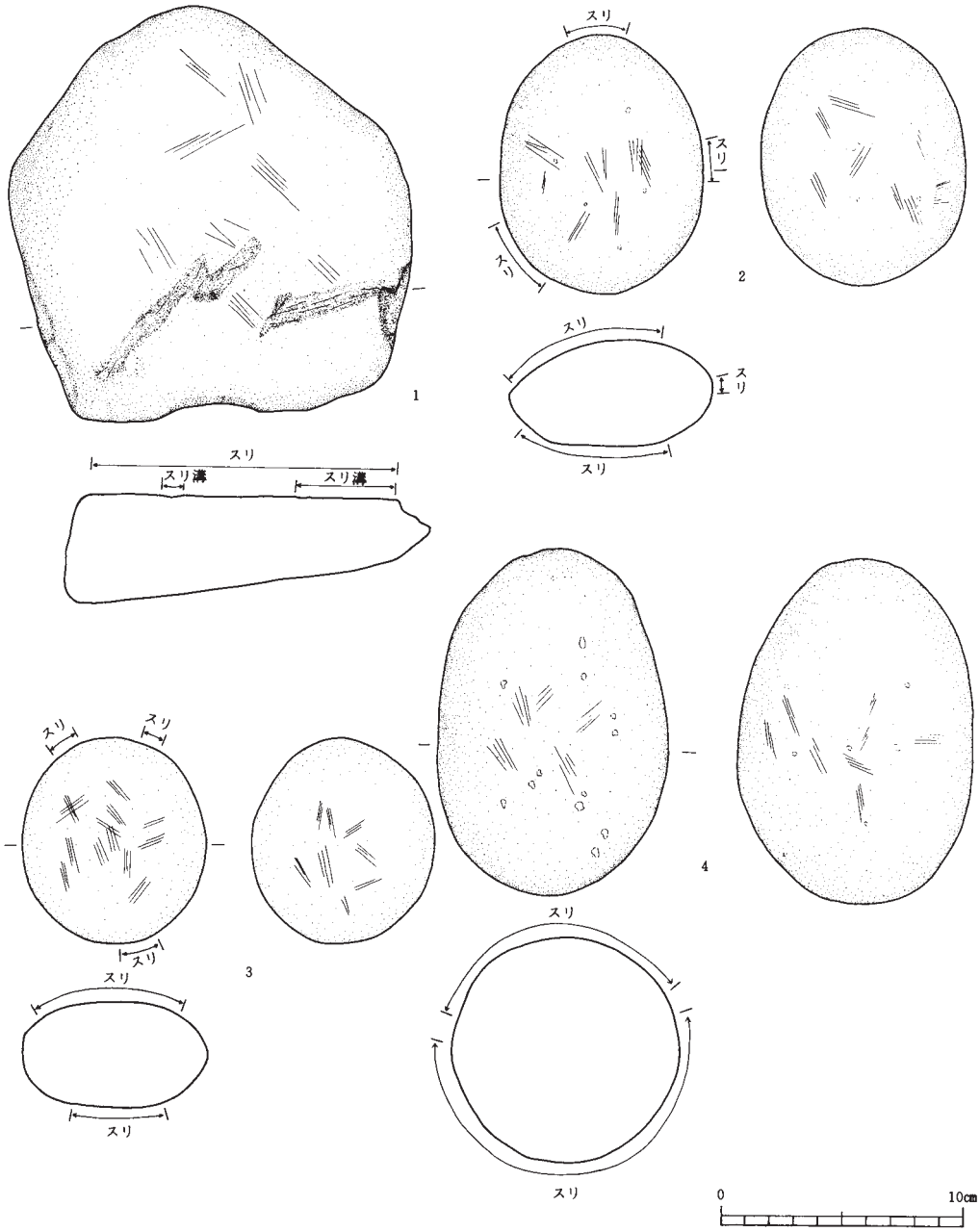
図41－1は、竪穴堆積土内から出土したものである。前二者よりも小型で薄い。片面のほぼ全体に使用痕が見られ、しかもやや彫の深い溝状擦痕が2条認められる。

磨石

図41－4は、集石施設内の1点である。鶏卵状のやや大型のもので、全面に擦られた痕跡が認められる。また、両先端部では叩痕が見られる。

図42－1は床面上のもので、一側面に平坦面をもつ。

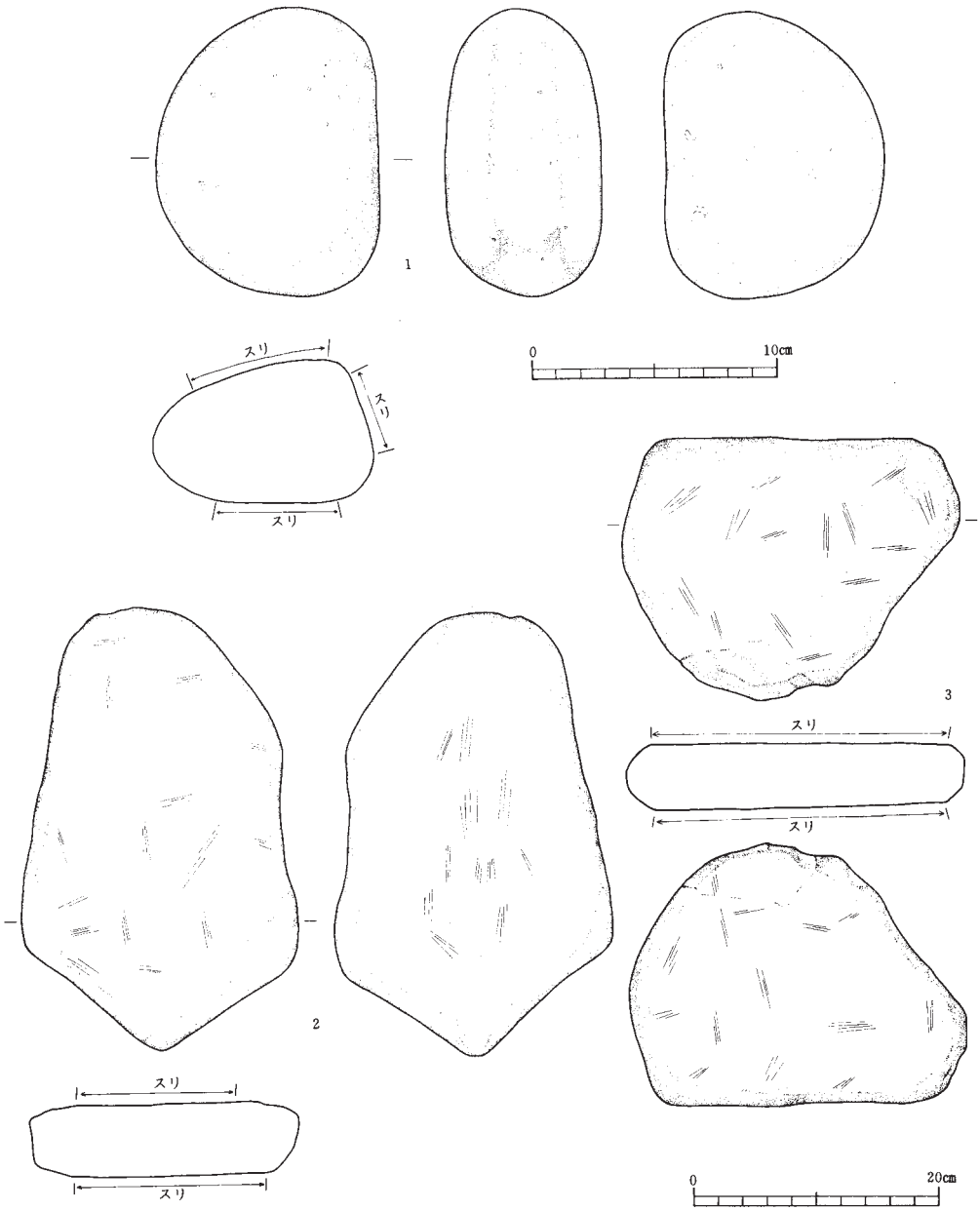
図41－2、3の2点はいずれもやや扁平で、しかも全面に擦痕を有する点で共通している。



磨　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	1H覆土	167×164×50	1,810	安山岩		S31
2	1H 〃	106×84×43	594	安山岩		S32
3	1H 〃	84×76×43	407	安山岩		S33
4	1H床直	142×94×93	1,720	安山岩	全面磨痕	S 7

図41　前坂下(3)遺跡第1号住居跡出土石器(2)



磨　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	1 H床面	113×91×58	1.066	安 山 岩	側縁が特に磨滅	S 12

石　皿　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
2	1 H床面	309×224×59	3,090	安　山　岩	両面磨痕	S 9
3	1 H床面	270×213×53	5,930	安　山　岩	両面磨痕	S 13.14

図42　前坂下(3)遺跡第1号住居跡出土石器(3)

両面加工のスクレーパー

図40－１の１点だけの出土である。竪穴西壁際の床面上から出土したもので、従来、靴型石箆（千代肇：1965）と称されているものと類似のものである。

両面をかなり薄く平坦に加工した後、縁辺部を入念に、押圧剥離で調整したものである。断面形状では、中央の平坦部が周縁より薄くなっている。先端はやや尖っている。

石鏃

堆積土第３層からの出土で、黒曜石製の有柄石鏃である。身の長い均整のとれた形態で、両面から入念な押圧剥離による調整が加えられている。尖端部約１㎝にわたって、調整の際の剥離稜線や、両側縁部が磨滅している点から見ると、ドリルとしての機能を果たしたものでもあろう。

次に、本住居跡出土遺物の組成や製作技法上から、住居跡の使用時期の位置づけを考察したい。

まず、組成上では深鉢（２点）、台付深鉢（１点）、浅鉢（２点）、小型鉢（２点）である。これらは出土状況及び接合関係上から、ほぼ同時期と把握される。皿や、晩期からの弥生時代まで続く壺形土器は欠いているものの、一応基本的なセットとみなすことが可能であろう。

これらの各器種の特徴は、まず台付深鉢土器では直立する台部とふくらみの少ない体部をもっている点である。この種の器形は、大洞Ａ'式の標式遺跡である大洞貝塚（山内：1939）や、剣吉（江坂：1967）遺跡等には全く見られないものである。また、砂沢式土器を出土する砂沢遺跡（芹沢：1960、新谷：1975）例にも認められない。破片資料ではあるが、大間貝塚（橘：1974）、江豚沢遺跡（橘：1977）あるいは二枚橋式に属する瀬野遺跡出土の一部（須藤：1973）に類似する。

浅鉢は２点共、大洞A'式、砂沢式、二枚橋式等に属する遺跡出土のものと基本的に違いはない。

小型鉢のうち、図38－１の縄文施文の土器は、浅鉢に分類したものよりも口径の割に器高がやや高く、しかも胴部上半でふくらみをもつ。この形態は砂沢式期に属する八戸掘田遺跡出土のものに酷似する[注1]（八戸市教委：1981）。これ以外に、東北北部の遺跡で現在まで報告されている例はない。図38－４の無文土器も形態的に特徴のある土器である。椀形を呈するもので、他遺跡でもこれに類するものは知られていない。

次に、施文された文様の特徴である。まず、地文としての縄文は、台付深鉢、深鉢、小型鉢のいずれも単節縄文である。しかも斜位回転による縦位縄文であることで一致する。また、原体の撚りにやや緻密さを欠く。しかし、原体は、図37－３の深鉢形土器１点のみがＲＬで、台

付鉢、小型鉢や、他の甕はＬＲである。一般的には、東北地方北半部の大洞Ａ'式や砂沢式に用いられる原体は、ＬＲが圧倒的多数を占め、逆に二枚橋式期以後、田舎館式期までに用いられるのは、ＲＬが普遍的（須藤：1969）とされている。また、砂沢遺跡の場合はＲＬもわずかに散見する(新谷：1975)。本住居跡出土のものは、総点数が少なく、数値上では多少無謀の感もあるが、３：１の割合上から見ると、むしろ二枚橋遺跡や瀬野遺跡例とは異なり、砂沢遺跡の割合に近い。

また、文様構成の点では、いくつかの特徴が指摘される。まず、台付深鉢に用いられた波状文の構成は、須藤隆が分析した二枚橋遺跡で見られるものと基本的に同一である。ただ、二枚橋遺跡や瀬野遺跡、八幡堂遺跡のものは、波状を構成する主要波線が斜位であるのに対し、本遺跡のものは水平で、むしろ逆「Ｓ」字状である点で異なる。また、逆「Ｓ」字状の曲部頂点に見られる２個の粘土粒は、二枚橋や瀬野の両遺跡ではほとんど認められない。

波状文は、大洞Ａ'式期においては形成されておらず、三角工字文の発展として砂沢式期で形成されたものと理解（須藤：1969、新谷：1975）されている。事実、大洞Ａ式やＡ'式の遺跡では存在せず、砂沢遺跡や江豚沢遺跡、亀ヶ岡遺跡（青森県教委：1973）等の砂沢式併行とされるものにのみ散見するにすぎない。また、波状文の水平構成や３単位の長い周期で構成されるものは、二枚橋式期で発達する本来の波状文の遡源的なものと理解される。

図39－１の深鉢や、図38－２の浅鉢で用いられた三角工字文は、大洞Ａ'式以後二枚橋式まで大きな変化もなく連続する。ただ、須藤隆の指摘するとおり（須藤：1969)、二枚橋期以後のものは２～３条を１単位として構成されるのに対し、大洞Ａ'式や砂沢式では１～２条を単位とする。本遺跡のものはいずれも１条である点で、後者に類する。

図38－３の浅鉢で用いられた変形工字文は、砂沢遺跡のものよりやや簡略化が見られる。この上位に用いられた周期の長い１本の波状文も、構成上では三角工字文の変形であろう。

次に、台付鉢や浅鉢の内面に用いられた１条の沈線の問題である。大洞C_1式以後一般的に用いられるこの種の内面沈線は、砂沢式期までは１条であるが、五所式や二枚橋式期以後では複数のものが主体を占める。第１号住居跡出土の内面沈線をもつ４個体は、いずれも１条である点で、むしろ前者に類する。

この他の文様上の特徴としては、台付深鉢形土器の口唇部の外面稜線上に用いられた刻目文がある。この種のものは、五所式や二枚橋式期以後の鉢形土器、壺形土器の大多数に認められるものであるが、大洞Ａ'式や大洞Ａ式には存在しない。二枚橋期以前では、砂沢遺跡、亀ヶ岡遺跡、江豚沢遺跡等の砂沢式土器に把握されている数点の鉢形土器に認められるにすぎない。

次に、使用された粘土と成形の問題である。まず胎土であるが、図39－１、図38－２、３の鉢形土器、浅鉢形土器、小型鉢形土器は粗砂粒の混入はほとんどなく、全体に精選された粘土

が使用されている。それに比して、他の図37－１～３、図38－１は粗砂粒の混入がやや認められる。これらは甕形土器や小型浅鉢形土器で、縄文の施文された土器である。また、図38－２、３の浅鉢形土器に見られる精選された胎土と、入念な箆ミガキの後に塗布された朱や漆は、五所式（村越：1965)、二枚橋式期以後にはあまり認められず、むしろ晩期的な手法であろう。二枚橋遺跡では、精製土器、粗製土器の概念規定が必ずしもあてはまらない（須藤：1969）とされているが、本住居跡出土土器では明瞭な区別が可能である。

このように、器形と文様の特徴が最も良く表現されている台付深鉢形土器から見ると、五所式や二枚橋式の範ちゅうからややはずれるものであろう。むしろ、これらの型式を生み出す遡源としての波状文であり、刻目文であろう。また、この土器を含めた第１号住居跡出土の土器は、成整形技法や素地土選別に見られる精製土器、粗製土器の分化段階でもあることや、縄文原体の特徴などでも大洞Ａ'式や砂沢式から、五所式や二枚橋式への過渡的段階として把握される。

次に、石器の問題である。本住居跡からは剥片石器では石鏃と両面加工のスクレーパー（靴型石器）がそれぞれ１点ずつと、礫石器として石皿が２点、磨石が３点、さらに石皿様石器が１点出土している。このうち住居廃絶期のものは、床面出土の両面加工のスクレーパーと、石皿、磨石である。石皿や磨石の類では、縄文晩期から二枚橋式期にかけて見られるものとほとんど差異はない。しかし、両面加工のスクレーパー（靴型石箆）は縄文晩期を通じて、これまで知られていなかった器種である。従来、北海道統縄文期の代表的石器として（千代：1965）とらえられてきたもので、東北地方北半部においても、大洞C_2式～大洞Ａ式（一部大洞Ａ'式に近いものも含まれる）の代表的遺跡で、遺物が多量に出土した九年橋遺跡や、細越遺跡（青森県教委：1979）等においても、まだ出現していないものである。東北地方北半部で、現在まで報告されている例では、時代的にやや下降する二枚橋遺跡で４点、宇鉄Ⅱ遺跡（青森県郷土館：1979）で６点が知られているにすぎない。

これまで東北地方において、縄文晩期終末期から弥生時代にかけての土器編年は大筋、大洞Ａ式→大洞Ａ'（砂沢式）→二枚橋式（五所式）として把握されてきた。このうち大洞Ａ'式と砂沢式との二型式の関係は、地域差（芹沢：1960）として把えられてきたが、近年宮城県山王遺跡の調査成果（須藤：1973）や津軽地方の砂沢遺跡と牧野Ⅱ遺跡の比較（岡田他：1981）から、時代差として認知されつつある。すなわち、大洞Ａ'式から砂沢式への変遷である。この中に本住居跡の土器群を位置づけるとすれば、大洞Ａ'式と二枚橋式の中間、すなわち砂沢式であろう。しかし、砂沢遺跡出土の土器を標式的な砂沢式とするならば、図38－２、３は、砂沢式そのものとみなされるが、図37－１の台付深鉢形土器は、その範ちゅうからややはずれ、二枚橋式に近づいていることが理解される。このことや両面加工のスクレーパーが判出する点でも、二枚

橋式形成の直接的な遡源としてとらえられよう。

(ii) 第２号住居跡

遺跡調査区ＩＬ－90に設定した幅１mのトレンチ内で確認した住居跡である。精査を行わず、住居跡の有無だけを確認するにとどめた。台地南西端の平担面に位置する。本住居の東方約10mの位置には砂沢式期の第１号住居跡がある。

第Ⅱa層の黒褐色土層からの掘り込みであるが、竪穴内堆積土がこの層に類似し、しかも床面が地山のローム層直上に築かれているため、どの程度の深さの竪穴であるか不明である。

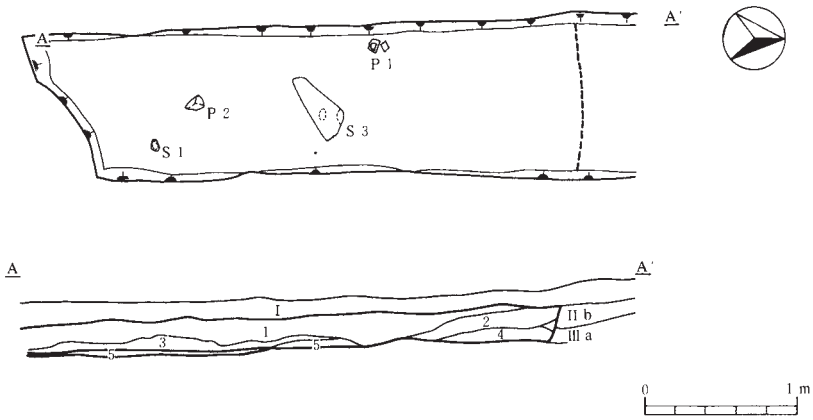
床面は二枚検出できた。第二期（新）の床面は、黒褐色土の踏み固めである。第一期（古）のものは、地山のローム層上面を直接利用したものである。

竪穴の規模、形態、あるいは炉、柱穴等についての細部施設については不明である。出土遺物等から、第１号住居跡と同時期か、あるいはそれよりやや前の段階で構築されたものと思われる。

床面上から緑色凝灰岩製の砥石、安山岩製の磨石が１点、また、堆積土中からは深鉢の破片が数点（同一個体）出土したにすぎない。

〔土器〕

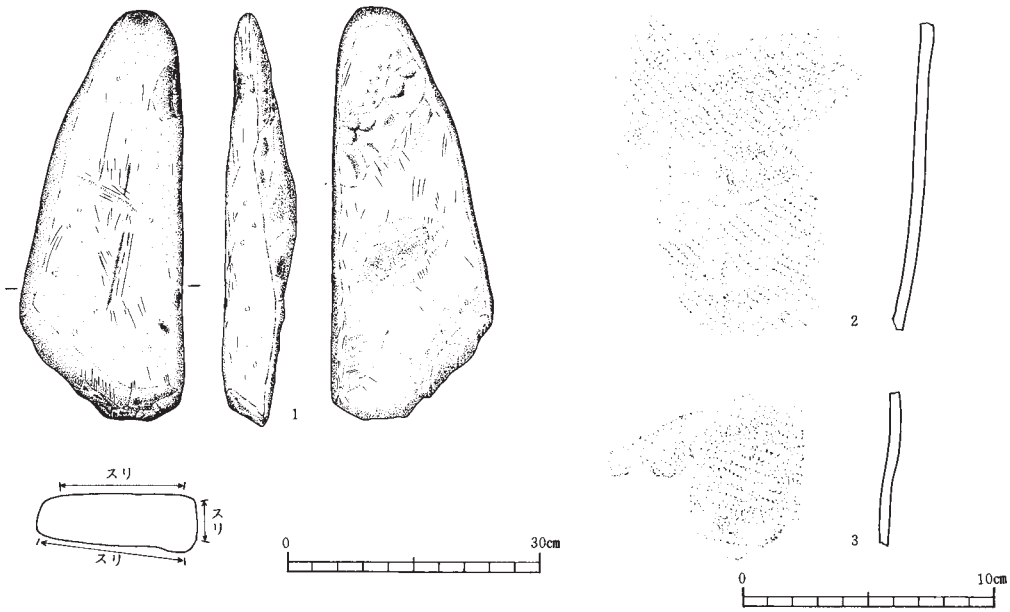
図44－２、３は大型の深鉢形土器の破片で、いずれも胴部片である。胎土内には多量の粗砂粒が混入されている。大型土器の割には極めて器厚の薄い土器である。



前坂下(3)遺跡第２号住居跡堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	黒褐色 10YR2/3	シルト		第II期堆積土	
2	暗褐色 10YR3/3	シルト			
3	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト			
4	暗褐色 10YR3/3	シルト			
5	暗褐色 10YR3/4	シルト質粘土	ロームブロック混入	第II期床面	貼り床

図43　前坂下(3)遺跡第２号住居跡



石　皿　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	2Ｈ床面	483×193×69	6,080	泥　岩		Ｓ３

第２号住居跡出土土器観察一覧

図 版	層　位	部　位	外 面 施 文 法 (地文)	内面調整	時　期	備　　考	登録番号
2	2Ｈ１層	胴　部	(ＲＬ縄文)	横　位	晩期？	細砂粒混入	Ｐ１
3	2Ｈ１層	胴　部	(ＲＬ縄文)	横　位	晩期？	細砂粒混入	Ｐ２

図44　前坂下(3)遺跡第２号住居跡出土遺物

外面文様は、ＬＲの単節縄文のみである。横位回転によるため、条はすべて右下がりの斜縄文である。

〔石器〕

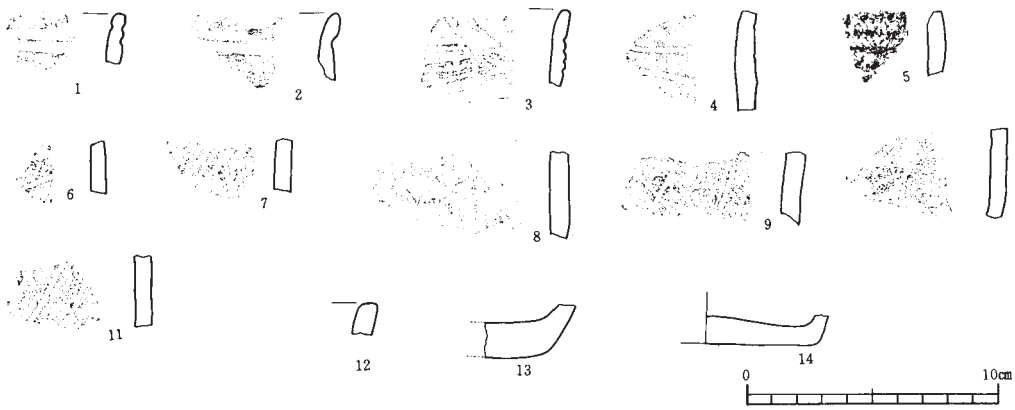
図44－１は、床面上から出土した石皿である。扁平な自然石をそのまま使用したもので、両面に細い擦痕とやや太い沈線様の擦痕が見られる。砥石の可能性もある。

(iii)　溝状ピット

15基を確認した。台地上のほぼ全域に分布する。このうち図31の第１号～第４号溝状ピットの４基については調査区を拡張し、その平面形状を把握したが、ほかは、１m幅のトレンチ内での確認である。これらはいずれも精査を行っていない。したがって、員数は減る可能性もある。

(iv)　遺構外出土遺物

〔土器〕



土　器　観　察　一　覧

図版	層位	部位	外面文様施文法（地文）	内面調整	時期	備考	登録番号
1	ＩＩ－95Ｉ層	口縁部	沈線文（内面にも１条の沈線）	横位	不明	細砂粒混入	一括
2	ＩＫ－93ＩＩｂ層	口縁部	沈線文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ33
3	ＩＧ－95Ｉ層	口縁部	沈線文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	一括
4	ＩＩ－95Ｉ層	胴部	沈線文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	一括
5	ＩＩ－95Ｉ層	胴部	（ＲＬ縄文）	不明	不明	細砂粒混入	一括
6	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ20
7	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ25
8	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ26
9	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ24
10	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ11
11	ＩＫ－93ＩＩb_1層	胴部	単軸絡条体回転文	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	Ｐ33、34、35
12	ＩＧ－95Ｉ層	口縁部	（不明）	横位	十腰内Ｉ	細砂粒混入	一括
13	ＩＫ－95ＩＩａ層	底部	無文	横位	後期	細砂粒混入	Ｐ２
14	ＩＫ－93ＩＩb_1層	底部	ナデ	ナデ	土師器		Ｐ19

（6～11：同一個体？）

図45　前坂下(3)遺跡遺構外出土土器

遺構外から出土した土器は総数25片ある。これらの大部分は第１号住居跡と第２号住居跡のほぼ中間のトレンチ内の出土である。文様等の判明できるものは図45－１～11である。施文された文様や、胎土、器形等から判断すると、いずれも縄文時代後期前葉の十腰内Ｉ式に比定されるものである。

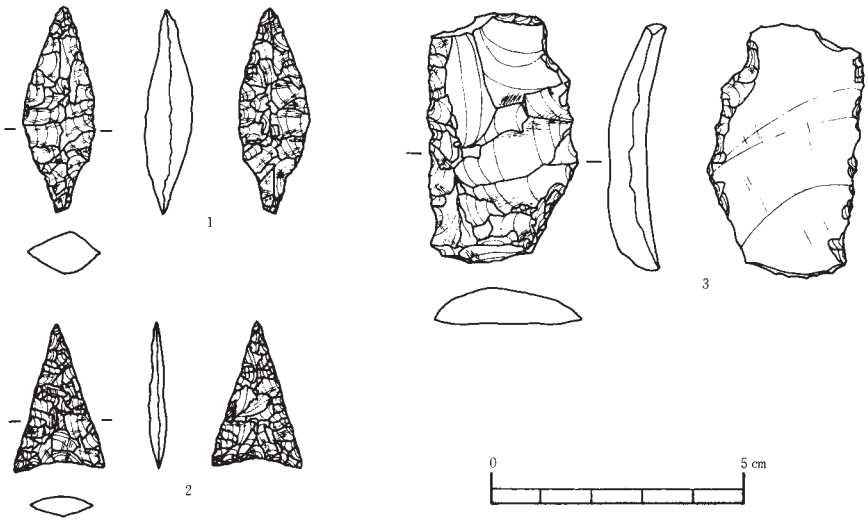
図45－７～10は、同一個体の深鉢形土器である。口縁部に１条の太い沈線を有し、体部全面は、回転方向を変えた単軸絡条体回転文による網目状撚糸文で構成される。粗砂粒の混入が多い。

図45－３は、小型の浅鉢形土器の口縁部片である。細い沈線により、連続した長横の円文が数段施されている。

図45－１、２、４は、沈線で施文されているが詳細は不明である。

5　小結

縄文時代後期初頭に位置づけられる十腰内Ｉ式土器や、奈良時代、平安時代のものと思われ



石　鏃　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(尖頭部×基部×幅)mm	厚さ(mm)	尖頭部開き角	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
1	ⅠI－130 Ⅱa層	27×13.5×15	8.5	34°	3.6	珪質頁岩		S29
2	ⅠP－110 Ⅱ層	18×9×18	3.9	35°	1.1	珪質頁岩		S4

不定形石器観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
3	ⅡF－104 Ⅱa層	49×29×7.5	14.8	珪質頁岩		S7

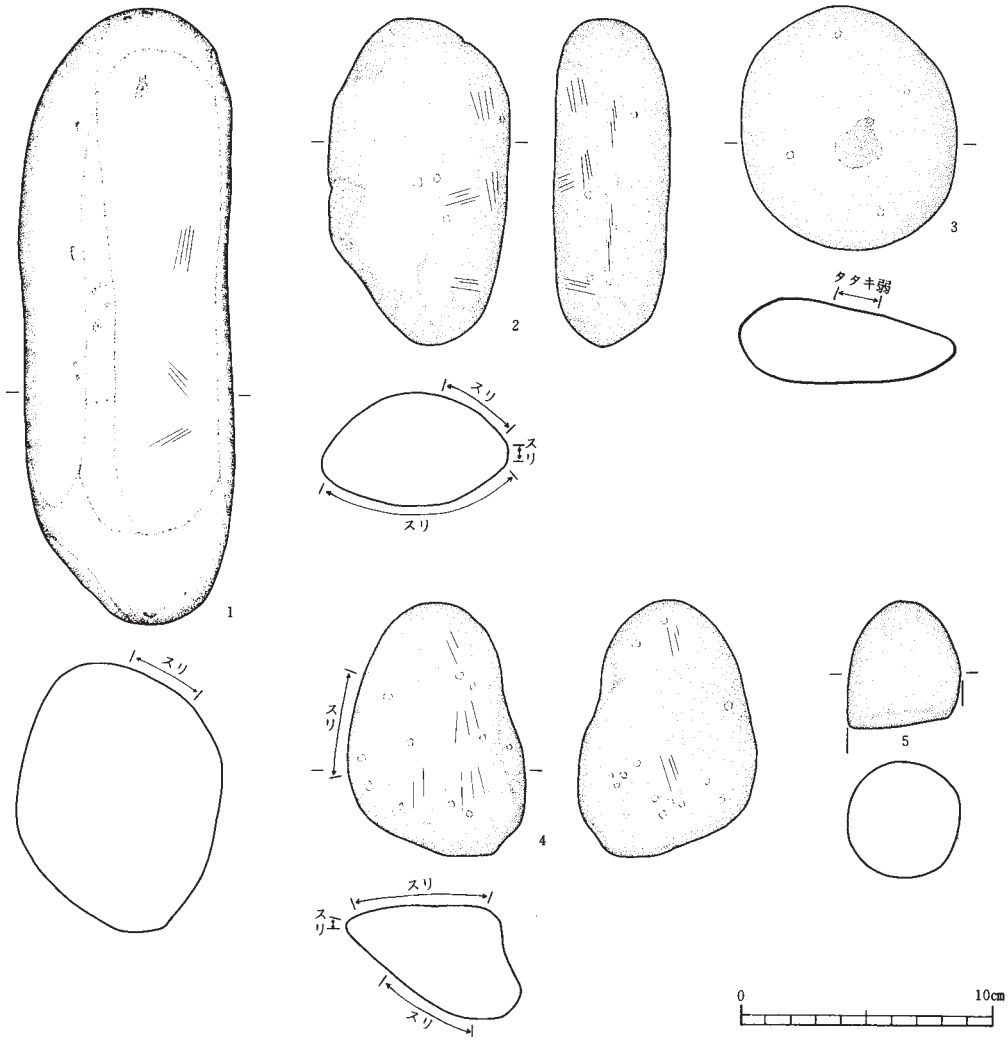
図46　前坂下(3)遺跡遺構外出土石器(1)

る土師器片も出土していることから、これらの時期の集落跡も遺跡内に存在する可能性は多分にある。更に、Trap Pitと称される溝状ピットも、トレンチ内で確認されただけで15基にのぼる。他の遺跡の例ではこの遺構の構築時期は縄文時代後半から、平安時代までの長時間にわたることが知られている。このため、確認作業だけで終った本遺跡のものが、どの時代に造られたものか不明である。

今回の試掘調査で検出した遺構や、出土遺物の分布のあり方を見ると、いずれの時期でも大規模な集落を構成するものではない。最も量的に多い砂沢式期においても数軒であろう。また、台地の使われ方を見ると、西南端の比較的小範囲に十腰内Ⅰ式期、砂沢式期、奈良・平安時代の居住域がほぼ重複し、更に、台地のほぼ全域にわたって溝状ピットが配されている。

したがって遺跡としては、本台地全域が対象となろう。

本遺跡で縄文晩期終末期から弥生時代初期にかけての住居跡を２軒検出したことは、大きな成果である。しかも、砂沢式期のものとしては、初めての検出例である住居跡の全容を知ることができただけではなく、当時使用された土器、石器が１つのセットとして把握された。これらの成果は、亀ヶ岡文化から続縄文文化あるいは、弥生文化への過渡的段階の文化解明に大き



磨　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
1	IK-120 IIa層	245×83×105	3,490	安 山 岩		S21
2	Il-95 IIb層	130×72×45	553	安 山 岩		S33
4	IK-93 IIb層	100×70×45	389	安 山 岩		S13

敲　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
3	IL−90 I層	97×86×36	405	安 山 岩		S34

石製品（?）観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ) mm	重量(g)	石　　質	備　　考	登録番号
5	IF−136 IIa層	(51)×(45)×(46)	(65)	泥　　岩	欠　　損	S32

図47　前坂下(3)遺跡遺構外出土石器(2)

な手掛りとなることは疑いない。　（三浦圭介、内村三千夫）

（注1）この小型鉢形土器の内面には、籾圧痕が確認されている（八戸市教委：1981）。土器型式は、砂沢式と理解されている。

〔引用・参考文献〕

山内静男　1930　「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』１－３

1939　『日本遠古之文化』

江坂輝弥　1967　『青森県剣吉荒町遺跡調査略報』

芹沢長介　1960　『石器時代の日本』築地書館

千代　肇　1965　「弥生式文化の北方伝播とそれをめぐる課題」『考古学研究』９－１

村越　潔　1965　「東北北部の縄文式に後続する土器」『弘前大学教育学部紀要』14

後藤　隆　1969　「青森県大畑町二枚橋遺跡の土器・石器について」『考古学雑誌』56－２

1973　「土器組成論」『考古学研究』19－４

1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生式土器の成立」『考古学研究』23

青森県教育委員会　1973　『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集

1978　『細越遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第49集

橘　善光　1974　『大間貝塚の調査』むつ市教育委員会

1975　「東北北部・弥生式土器文化」『考古学ジャーナル』106－107

1977　『むつ市江豚沢遺跡』むつ市教育委員会

新谷雄蔵　1975　「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」『北奥古代文化』７

三宅徹也　1975　「西津軽郡深浦町吾妻野Ⅱ遺跡の出土土器について」『調査研究年報』１　青森県立郷土館

工藤竹久　1978　「東北北部における弥生時代の諸問題」『北奥古代文化』10

青森県立郷土館　1979　『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第６集

八戸市教育委員会　1981『是川中居・掘田遺跡発掘調査報告書』八戸市教育委員会

岡田康博他　1981「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について」『弘前大学考古学研究』第１号

写真 9　前坂下(3)遺跡第 1 号住居跡

写真10　前坂下(3)遺跡第１号住居跡

住居跡内集石出土状況

遺物出土状況

写真11　前坂下(3)遺跡第１号住居跡

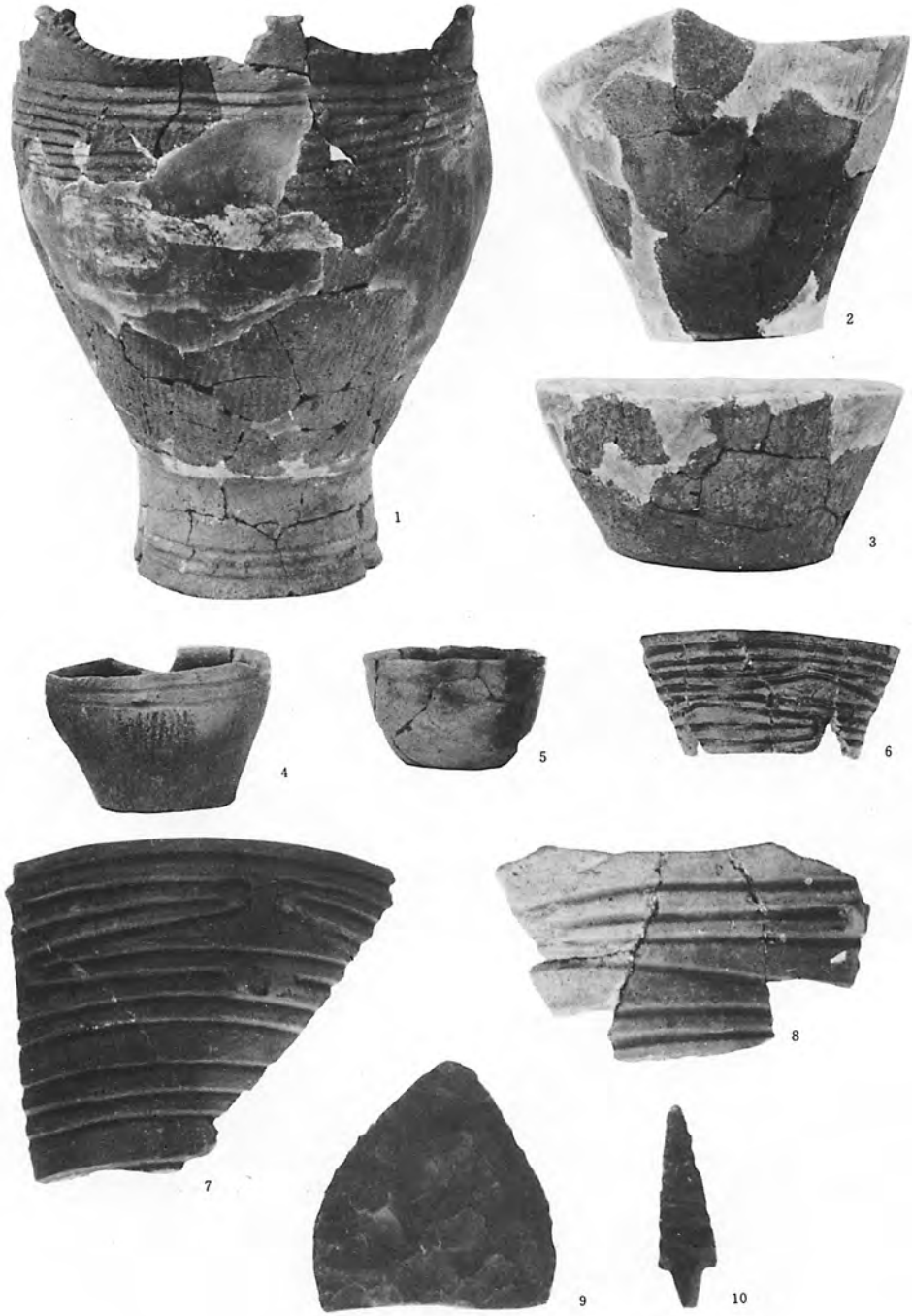


写真12　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土遺物

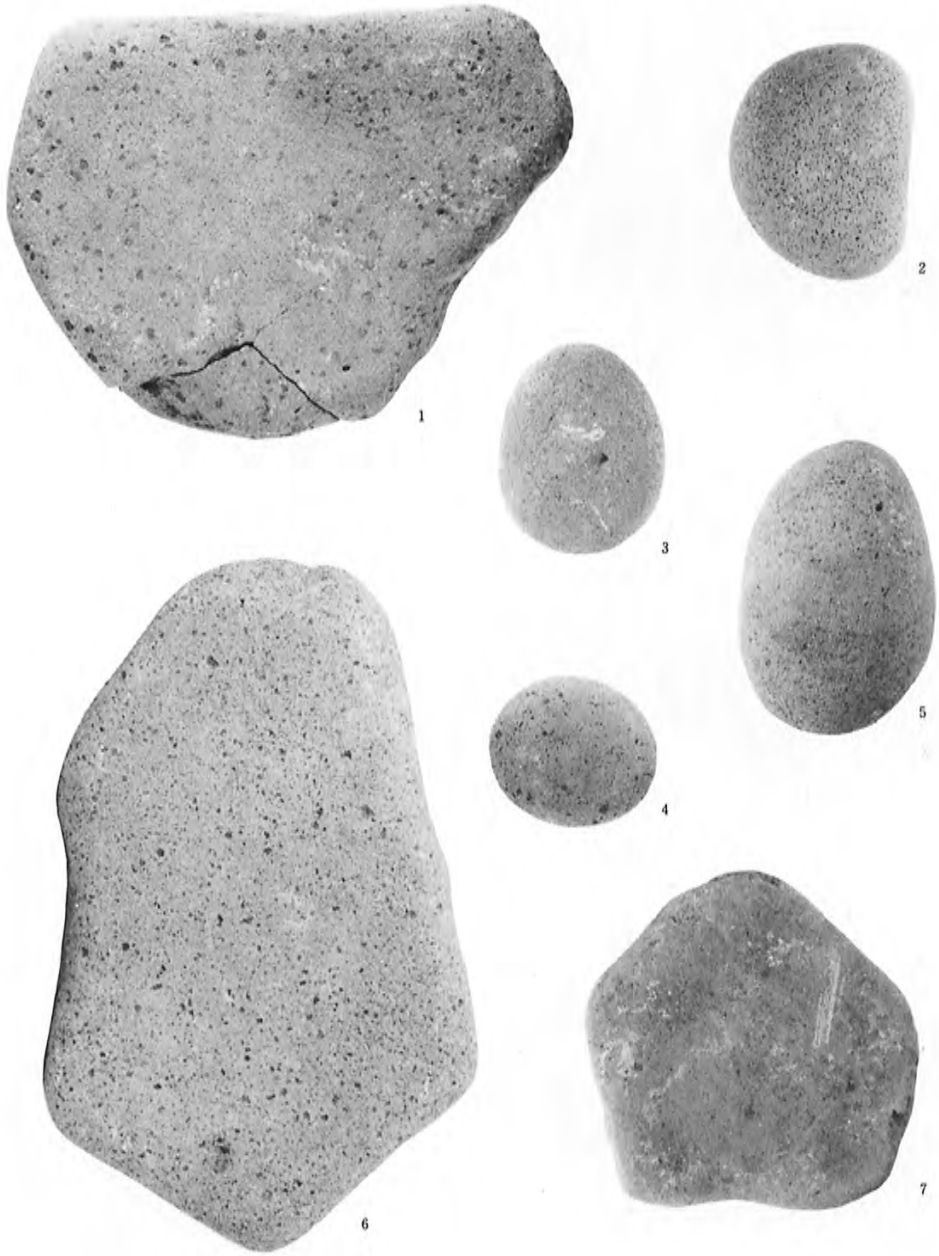


写真13　前坂下(3)遺跡第１号住居跡出土石器

写真14　前坂下(3)遺跡第２号住居跡出土遺物

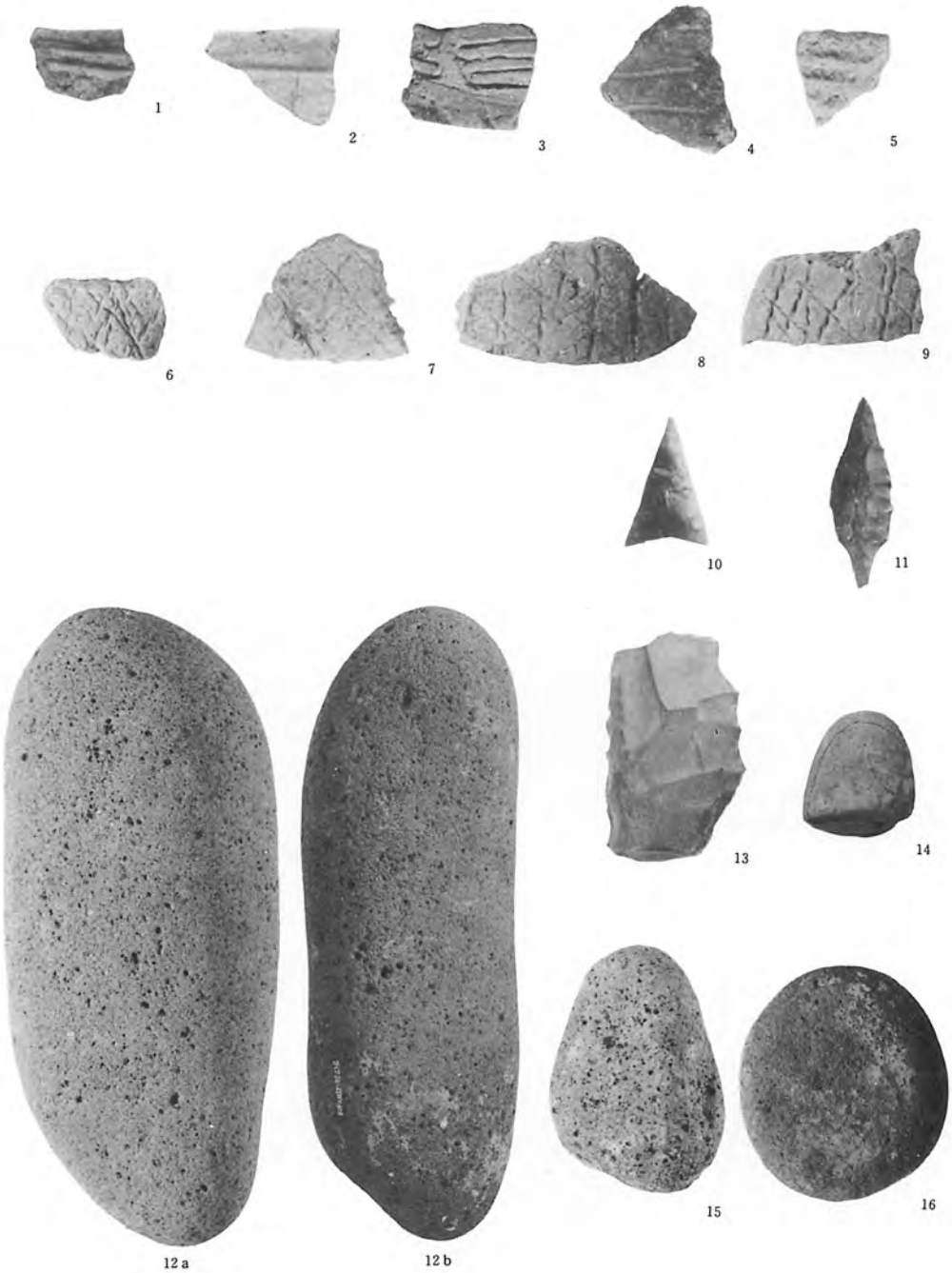


写真15　前坂下(3)遺跡遺構外出土遺物

第７節　前坂下(4)遺跡

1　遺跡の立地

現汀線から約400m内陸部に入った、標高15m～22mの低台地上に立地している。この低台地上の東側に隣接した地帯は湿地帯であり、また、台地南端の一部は水田を造るため、約500㎡削平されている。同台地上の北東約200mの地点には前坂下(2)遺跡が、南方約100mには平安期の集落後である前坂下(1)遺跡、同(6)遺跡がある。

昭和46年のむつ小川原開発に係る分布調査で、本遺跡から土師器片が採集されている。

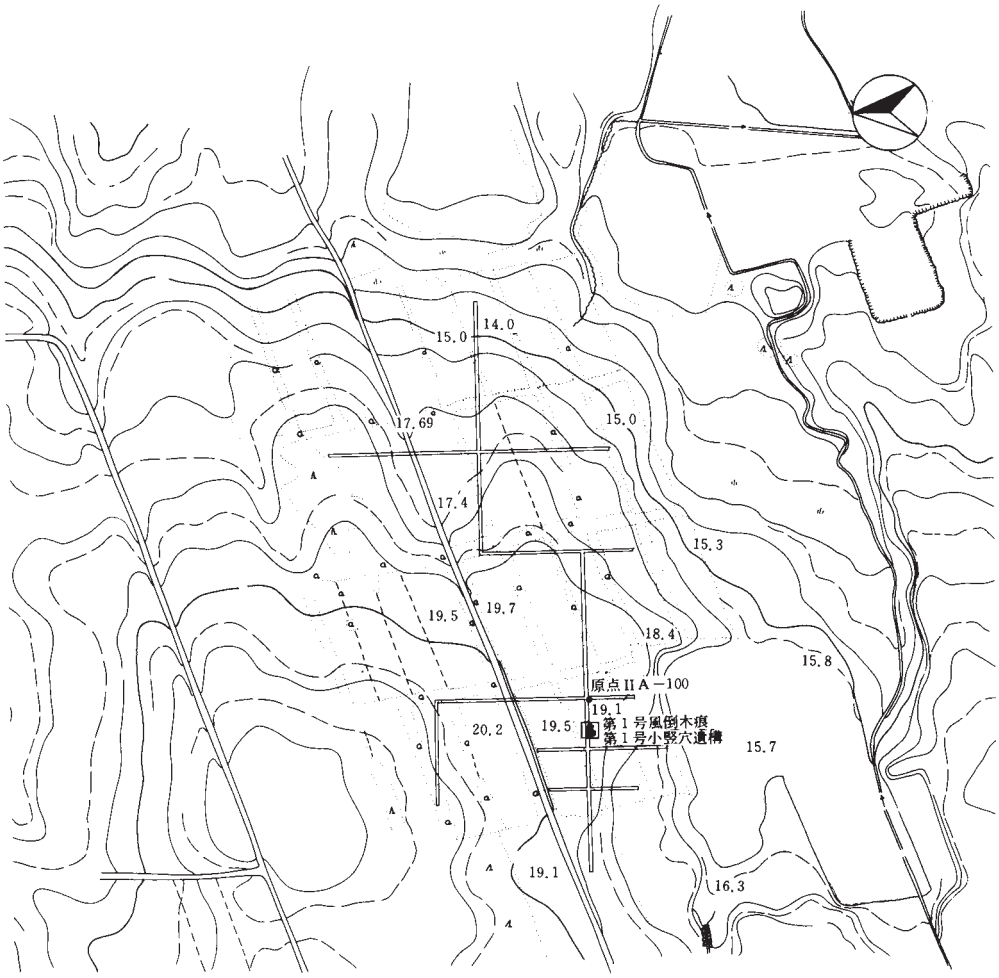
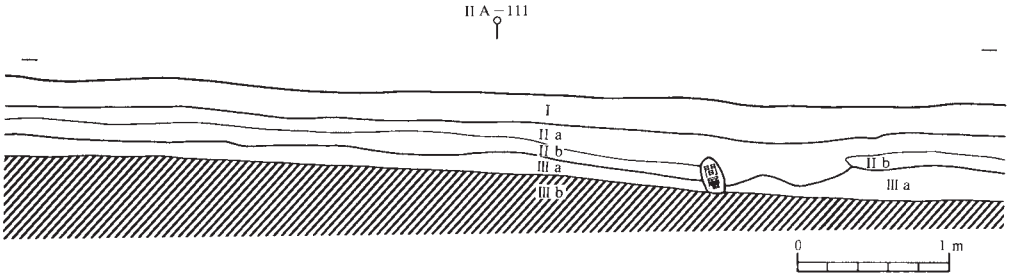


図48　前坂下(4)遺跡地形・調査区配置



前坂下(4)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
I	暗褐色 10YR3/4	シルト	草木根が多い	耕作土	
II a	褐色 10YR4/4	シルト		自然堆積	
II b	褐色 10YR4/6	シルト			
III a	黄褐色 10YR5/6	ローム	黄褐色ロームに腐植土が混入	地山	ローム層への漸移層
III b	明褐色 7.5YR5/6	ローム			

図49　前坂下(4)遺跡基本層序

2　調査経過と調査方法

5月当初に下草刈りを行うと同時に、遺跡推定範囲内に20mグリッドを設定した。更にこのグリッドを基本とし、グリッドラインに沿って任意に1m幅のトレンチを設けた。台地西側のトレンチからは風倒木と重複して、覆土に焼土を多量に伴う楕円形の竪穴遺構を発見した。更に、その西方約10mの地点では、鉄滓を伴う焼土遺構（製鉄遺構）を検出した。しかし、これらの遺構内のみならず、その周辺からも土器は全く出土しなかった。このため、トレンチを台地東端まで延長したが、土器、石器は全く出土しなかった。

遺跡の性格を把握するため、上記の楕円形竪穴遺構を精査した後、全トレンチを埋め戻し、本遺跡に関係する全作業を終了した。

3　遺跡の層序

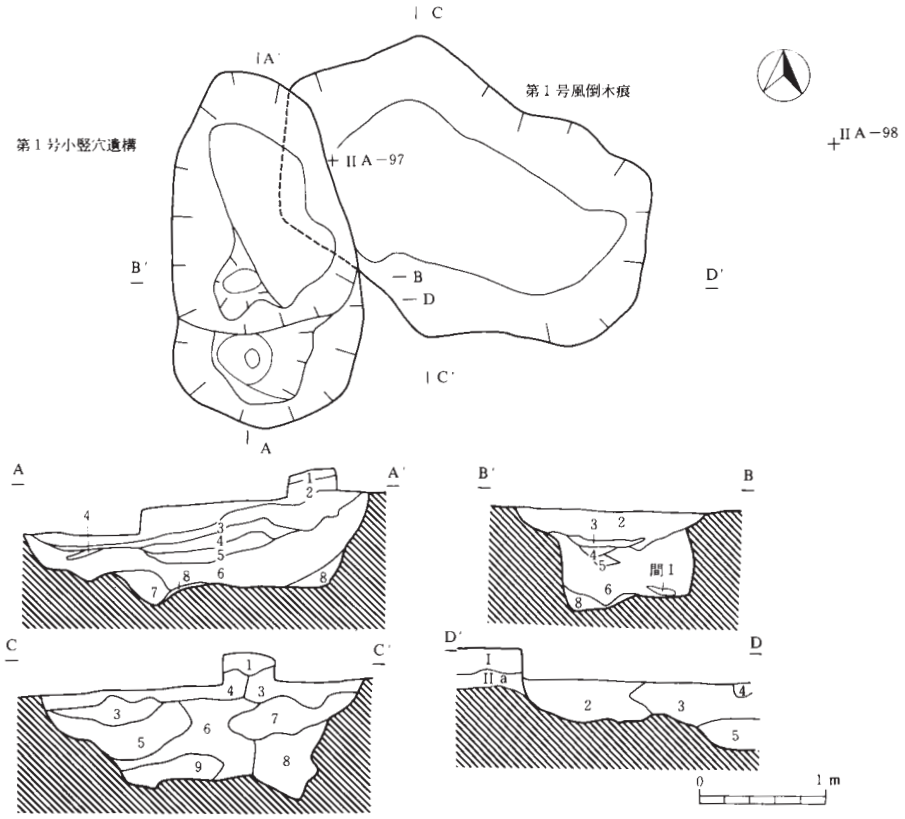
遺跡内の堆積層は、以下の4層に分けられる。

第Ⅰ層は表土層で、近年まで畑地として耕作されていた層である。

第Ⅱ層は暗褐色のシルト層で、周辺の遺跡では縄文時代から平安時代までの遺物を包含する。

第Ⅲ層は黄褐色ローム層である。第Ⅱ層との漸移層を第Ⅲa層、その下層を第Ⅲb層とした。

第Ⅱ層は隣接する前坂下(6)遺跡では、第Ⅱa層、第Ⅱb層と細分できたが、本遺跡では第Ⅱa層を欠いている。



第1号小竪穴遺構堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	暗褐色 7.5YR3/3	シルト		人為堆積	
2	暗褐色 10YR3/4	シルト	焼土(0.5～1cm)炭化粒散在		
3	明赤褐色 5YR5/8	シルト	炭化粒微量、焼土多量		
4	黒褐色 7.5YR3/2	シルト	部分的に炭化粒(0.2～0.4cm)		
5	明赤褐色 5YR5/8	シルト	焼土多量		
6	暗褐色 10YR3/4	シルト			
7	暗褐色 10YR3/3	シルト	草木根混入		
8	褐色 10YR5/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	壁の崩壊土	
間1	褐色 10YR5/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	攪乱による	

第1号風倒木痕堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	暗褐色 7.5YR3/3	シルト		風倒木の形成層	
2	暗褐色 10YR3/4	シルト	ローム粒散在、炭化物あり		
3	褐色 10YR4/4	シルト	一部に炭化粒(0.4～0.8cm)、草木根混入		
4	明黄褐色 10YR7/6	ローム	草木根混入、暗褐色シルト混入		ロームマウンド
5	褐色 10YR4/6	ローム	草木根混入、暗褐色シルト混入		
6	明褐色 7.5YR5/6	ローム	草木根混入		
7	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	ローム粒混入、草木根混入		
8	暗褐色 10YR3/4	シルト	ローム粒多量に混入、草木根混入		
9	暗褐色 7.5YR3/4	シルト	L・B(2～3cm) 混入、草木根混入		

図50　前坂下(4)遺跡小竪穴遺構・風倒木痕

4　検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、小竪穴遺構１基、鉄滓を伴う焼土遺構１基である。その他風倒木痕がある。出土遺物は全くない。以下にこれらの概略を記する。

（1）小竪穴遺構

基本層序第Ⅱ層で確認した遺構である。風倒木痕が形成された後に構築されている。平面形は長径1.9m、短径0.7mのやや不整な楕円形である。壁、底面とも凹凸が激しく、しかも人為的に踏み固めた痕跡はほとんど認められない。堆積土は、最上層の２層及び最下層の６層がほぼ同質で、黄褐色のロームを多量に含む。３層及び５層が焼土層である。この間層となっている４層中には、多量の木炭粒を含む。

遺物を全く含まないうえに、類似遺構もないため構築時期及び性格等は不明である。

（2）焼土遺構

小竪穴遺構の西方、約10m離れた地点の第Ⅱ層上面で確認した。焼土は径約１mの不整円形の広がりを有する。焼土の厚さは３m～８mで、中央部がレンガ状にかたく焼け、しまっている。特殊な掘り込みはもたない。焼土内に鉄滓が散布していることから、製鉄関係の施設と推定される。ほかに遺物が出土していないことから、この遺構の構築時期は不明である。

5　小　結

本遺跡と前坂下(2)遺跡は、約15万㎡にも及ぶ同一台地上に立地している。しかし、発見された人為的な構築物は、今回発見された製鉄に係る施設と、性格不明の小竪穴遺構が１基ずつである。遺物が全く出土していない点と、住居跡等の建物跡が検出されないことからみると、居住域として使用された台地とは推定し難い。むしろ東側に隣接した一帯は、砂鉄を多量に含んだ砂浜とし著名であることから、この砂鉄を利用した製鉄遺跡として把握される。しかし、その規模は小さなものと推定される。

（三浦　圭介）

遺跡全景

小竪穴・風倒木全景

小竪穴断面

写真16　前坂下(4)遺跡

第８節　前坂下(5)遺跡

1　遺跡の立地

老部川河口左岸の河岸段丘上に立地している。標高は９m～16mである。この台地の北側には、地表面では明確ではないが、小さな埋没谷が存在する。この埋没谷を挟んだ対岸は、縄文時代終末期から弥生時代にかけての集落跡である前坂下(3)遺跡、国道338号線を挟んだ西側は、続縄文期と奈良時代の集落跡である銅屋(3)遺跡が所在する。

本台地の老部川河口に面した約5000㎡は、老部地区の共同墓地及び火葬場建設の際に造成され、地山のローム層が露出している。また、遺跡内南側約1000㎡の平坦面も重機によって黒色の腐植土が剥ぎ取られている。

2　調査経過と調査方法

共同墓地以外の平坦面は、一部が畑地で、ほかは老部地区の簡易グランドとして利用されていた地点である。使用されなくなってから10年近くになるため、雑草が繁茂する地帯となっている。このため、７月下旬から１週間ほどを要して、遺跡内全域の刈り払い作業を行った。８月上旬には一辺20mを基本とする大グリッドの設定作業を行い、その線上に１m幅のトレンチを設けた。

台地北側斜面のトレンチでは、多量の巨礫が相ついで出土し、縄文期の配石遺構が想定された。しかし、これは埋没谷の中心部の礫群と連続し、しかも台地平坦面には存在しないことが判明した。すなわち、これらの礫群は小さな埋没谷に見られる自然現象と理解した。

また、台地東側の一部で、地山のローム層が露出している部分については、全面ジョレンがけを行い、遺構の確認に努めた。この結果、溝状ピットを４基発見した。

国道沿いの調査区ⅢＰ－95付近では擦文土器の破片が数点出土したが、遺構は確認できなかった。

８月上旬には各トレンチセクションと、遺物、遺構の配置を図化し、全作業を終えた。

3　遺跡の層序

台地平坦面と埋没谷近くとではやや様相を異にする。台地平坦面では、他遺跡の平坦面と同

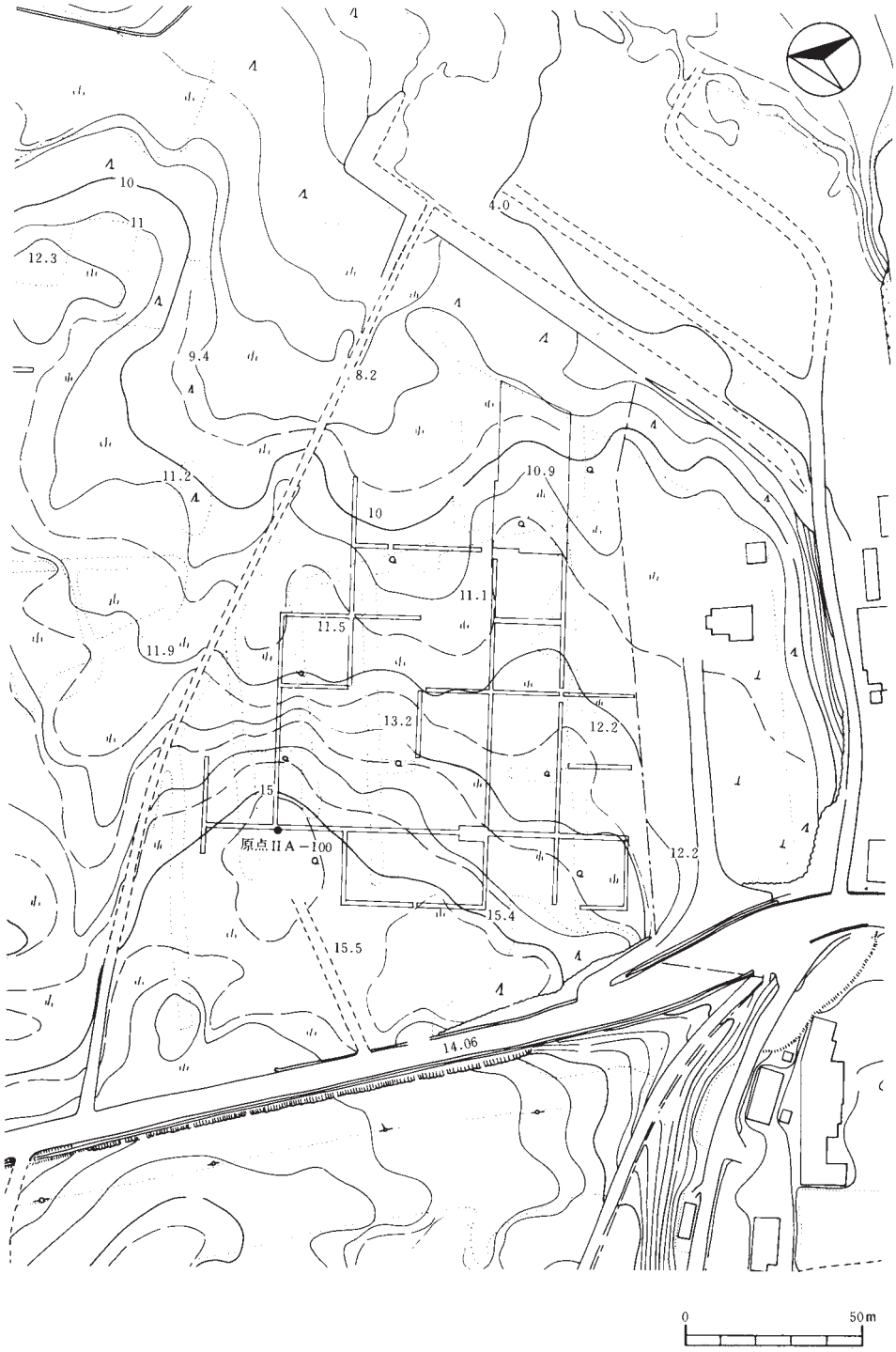


図51　前坂下(5)遺跡地形・調査区配置

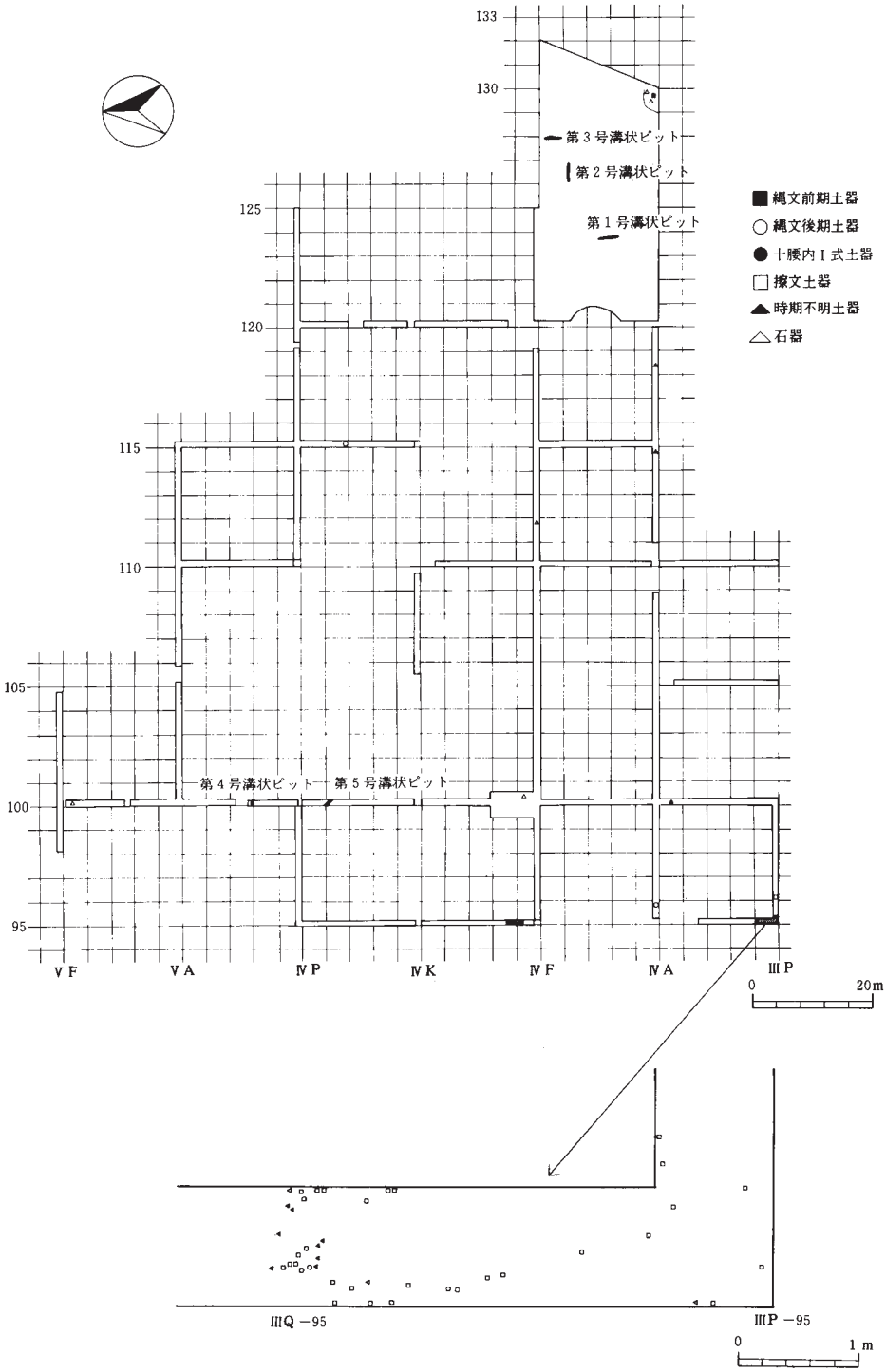


図52　前坂下(5)遺跡グリッド・遺構配置

様に以下の層順となる。

第Ⅰ層は、表土層で近年まで耕作されたり、簡易グランドとして整地された層である。

第Ⅱa層は、黒褐色シルトの腐植土で、層厚は10cm～20cmである。この層中に擦文土器片が包含される。

第Ⅱb層は、暗褐色シルトで遺跡全面を覆う。この層中に縄文時代前期及び後期の遺物が包含されている。

第Ⅲa層は、その下層の汚れのない黄褐色ローム層への漸移層である。主体は黄褐色のロームである。

埋没谷周辺では、この第Ⅲa層及び第Ⅲb層中に大小の礫を多量に含む。

4　検出遺構と出土遺物

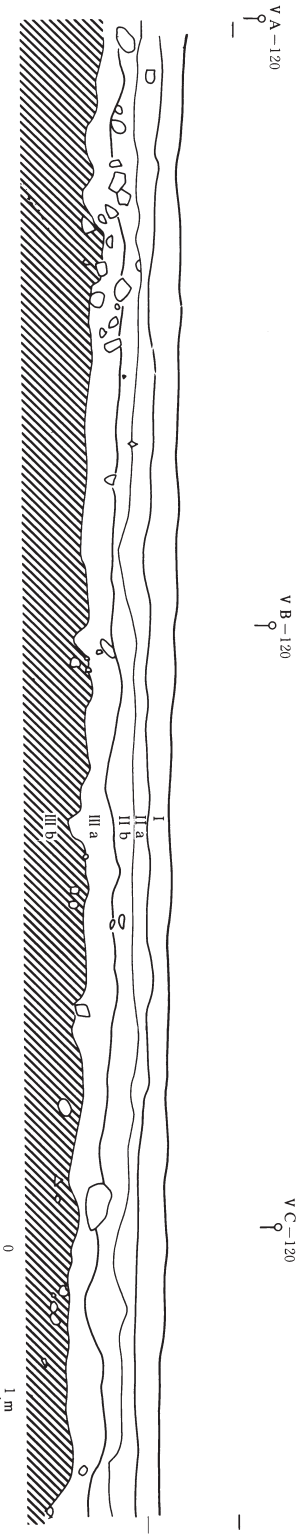
(1) 検出遺構

溝状ピット４基で、いずれも台地東側で検出した。第１号、第３号、第４号の３基は、南北に長軸をもち、しかも短径が50cm～60cmと比較的広い。第２号溝状ピットは、それに比較して長軸方向が東西を示し、開口部短径が約20cmと極端に狭い。

これらはすべてプラン確認にとどめ、精査を行わずに埋め戻した。

(2) 出土遺物

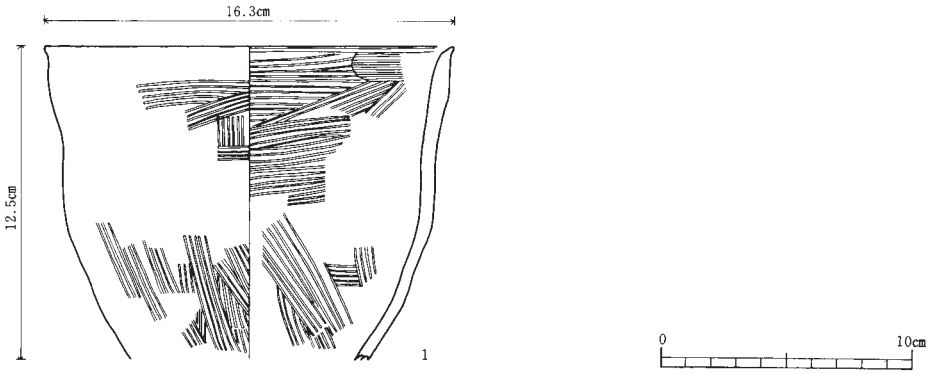
縄文時代前期、同後期の土器片、石器と擦文土器である。



前坂下(5)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	黒褐色 10YR2/2	シルト		耕作土	
Ⅱa	黒褐色 10YR2/1	シルト		自然堆積	
Ⅱb	暗褐色 10YR3/3	シルト			縄文早・後期遺物包含
Ⅲa	褐色 10YR4/6	ローム	大小の礫多量に混入		
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム		地山	

図53　前坂下(5)遺跡基本層序



土　器　観　察　一　覧

図版	層位	部位	外面施文法	内面調整	時期	備考	登録番号
1	ⅢＰ－95Ⅳ層	口縁部	刷毛目	刷毛目	平安	擦文土器	Ｐ３

図54　前坂下(5)遺跡出土土器

(i)　土器

図55－４は、台地東側の第Ⅱb層出土のもので、０段多条の縄文原体を横位回転して施文している。撚りの方向を変えた２種類の原体を、同一段上で用いているため、接点部分では条が菱形を構成する。また、胎土内に繊維が多量に混入する。これらの特徴を有するものは、縄文時代前期初頭のものである。

図55－３は、縄文時代後期初頭に位置づけられる。６は無文地に太い２本の横位沈線をもつ。５の外面はＲＬの単節斜縄文のみである。いずれも胎土には、粗砂粒の混入が認められる。

図55－１は、口唇部内面が肥大する特徴をもつ深鉢形土器である。外面には横位回転による細いＬＲ単節斜縄文が施文されている。縄文時代後期終末期の土器である。

図55－７・８、

図54は擦文式土器である。器形はやや小形の深鉢形で、これらは同一個体の可能性が強い。内外面ともに刷毛目の調整痕が認められる。

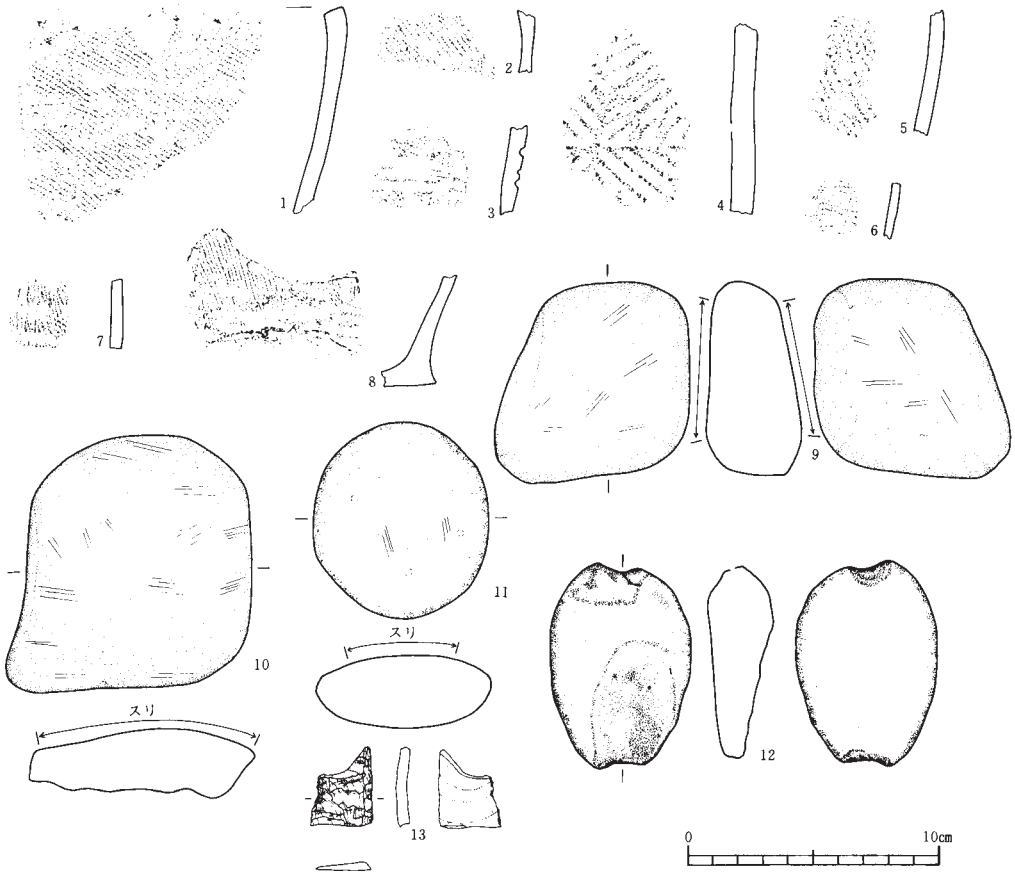
(ii)　石器

石器は、磨石３点、石錘１点、スクレーパー１点である。

5　小　結

遺跡は、老部川河口に面した段丘上に立地する。約5000㎡が、共同墓地等の建設の際に削平されており、残りも黒土の土取りなどによって遺存状態が悪い。

本遺跡で検出した遺構は、構築時期不明の溝状ピットが４基のみである。しかし、遺物は縄



土器観察一覧

図版	層位	部位	外面文様施文法(地文)	内面調整	時期	備考	登録番号
1	Ⅳ－115 Ⅴ層	口縁部	(RL縄文)	横位	後期	細砂粒混入	P49
2	Ⅳ－115 Ⅴ層	胴部	(RL縄文)	横位	後期	細砂粒混入	P49
3	ⅣR－95Ⅳ層	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P41
4	ⅣA－129Ⅴ層	胴部	(羽状縄文、O段多条)	不明	前期前葉	繊維混入	P48
5	ⅣA－118Ⅰ層	胴部	(RL縄文)	横位	不明		P41
6	ⅢT－100Ⅳ層	胴部	(LR縄文)	横位	不明		P43
7	ⅢP－95Ⅳ層	口縁部	刷毛目	刷毛目	平安	擦文土器	P19
8	ⅢP－95Ⅳ層	底部	刷毛目	刷毛目	平安	擦文土器	P30

磨石観察一覧

図版	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石質	備考	登録番号
9	ⅣF－111 Ⅱb層	76×76×37	366	安山岩	両面磨痕	S10
10	ⅣF－100 Ⅱa層	100×92×24	364	安山岩	片面磨痕	S8
11	ⅤE－100 Ⅱa層	78×70×29	240	安山岩	片面磨痕	S14

石錘観察一覧

図版	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石質	備考	登録番号
12	ⅣA－129 Ⅱb層	82×56×25	100	安山岩		S11

不定形石器観察一覧

図版	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石質	備考	登録番号
13	ⅣA－129 Ⅱa層	30×25×4	3.8	珪質頁岩		S13

図55　前坂下(5)遺跡出土土器・石器

文時代前期初頭、同後期初頭、同末葉、擦文式土器等の時代を異にする数型式のものが出土したことから、これらの時期の遺構も存在することが想定される。

（三浦　圭介）

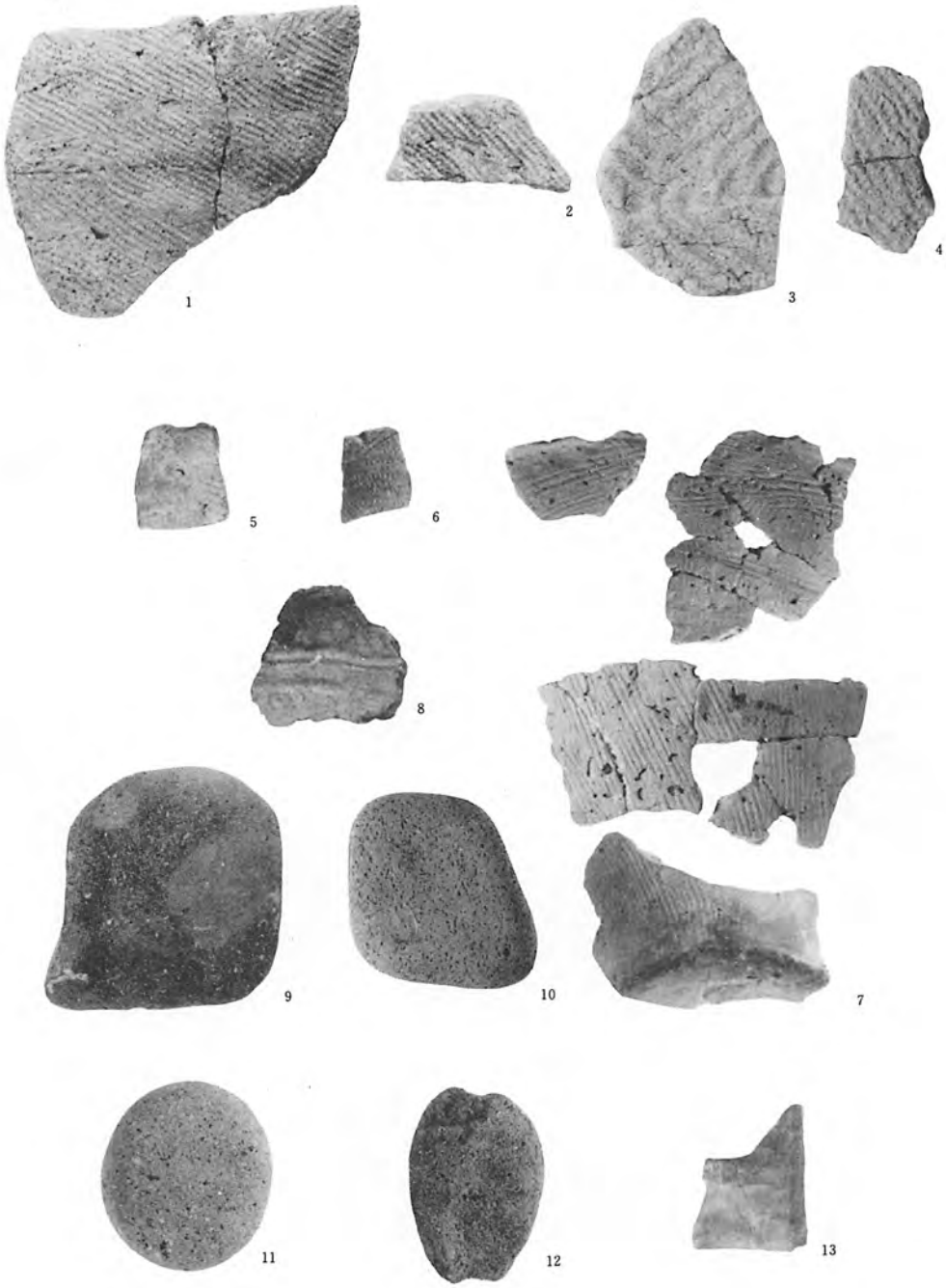


写真17　前坂下(5)遺跡出土遺物

第９節　前坂下(6)遺跡

1　遺跡の立地

本地域の主要河川である老部川左岸の、標高16m～19mの低台地上に立地する。現汀線からは約300m内陸部に入った地点である。本台地上には東側に隣接して前坂下(1)遺跡が、また、西側には、一般国道338号線を境にして、前坂下(8)遺跡が所在する。遺跡は、国道沿いの約100㎡が近年削平され欠失しているものの、ほかは保存の状態が良好である。

2　調査経過と調査方法

分布調査時において、２片の土器片が表面採集されたにすぎない遺跡である。この遺跡は、同一台地上で前坂下(1)遺跡と隣接しているため、これと併行して調査を行った。調査の方法も全く同一である。すなわち、４mグリッドを基本とする20mの大グリッドを設定し、後にこの大グリッドの線上に１m幅のトレンチを設け、遺構、遺物の確認と包蔵状態を確認した。調査は７月上旬に下草刈りから始め、７月下旬には全作業を終了した。

3　遺跡の層序

上述したように、国道沿いは掘削機械により包含層が全く破壊されているが、ほかは安定した層序を示す。台地平坦面の大部分は以下の層序である。

第Ⅰ層は表土層で、近年まで耕作されていた層である。

第Ⅱa層は黒褐色シルト層で、層厚は５㎝～20㎝である。平安時代の遺物はこの層中に包含されるが、この層の形成時期は縄文時代晩期以後であろう。

第Ⅱb層は褐色シルト層で、層厚は10㎝～30㎝と比較的厚い。この層の下部には縄文時代早期末葉のムシリⅠ式期の遺物が包含されている。

第Ⅲa層は、その下層の第Ⅲb層としたローム層への漸移層である。

遺跡北西端の平坦部では、第Ⅱa層の黒色腐植土が発達しているためか、第Ⅱa2層とした土層を確認できた。層厚も１㎝～10㎝で薄く、しかも分布範囲が狭い。

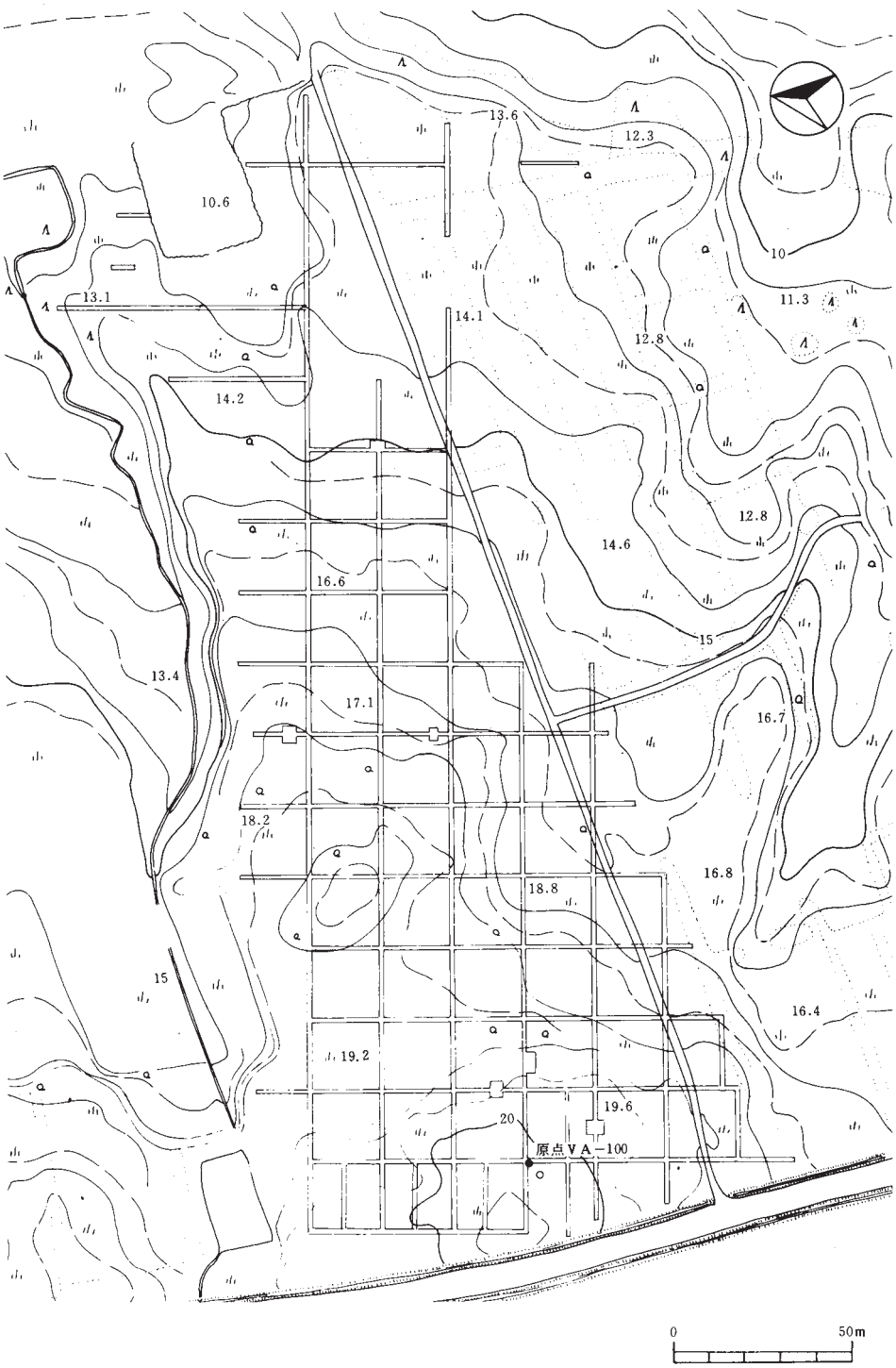


図56　前坂下(1)・(6)遺跡地形・調査区配置

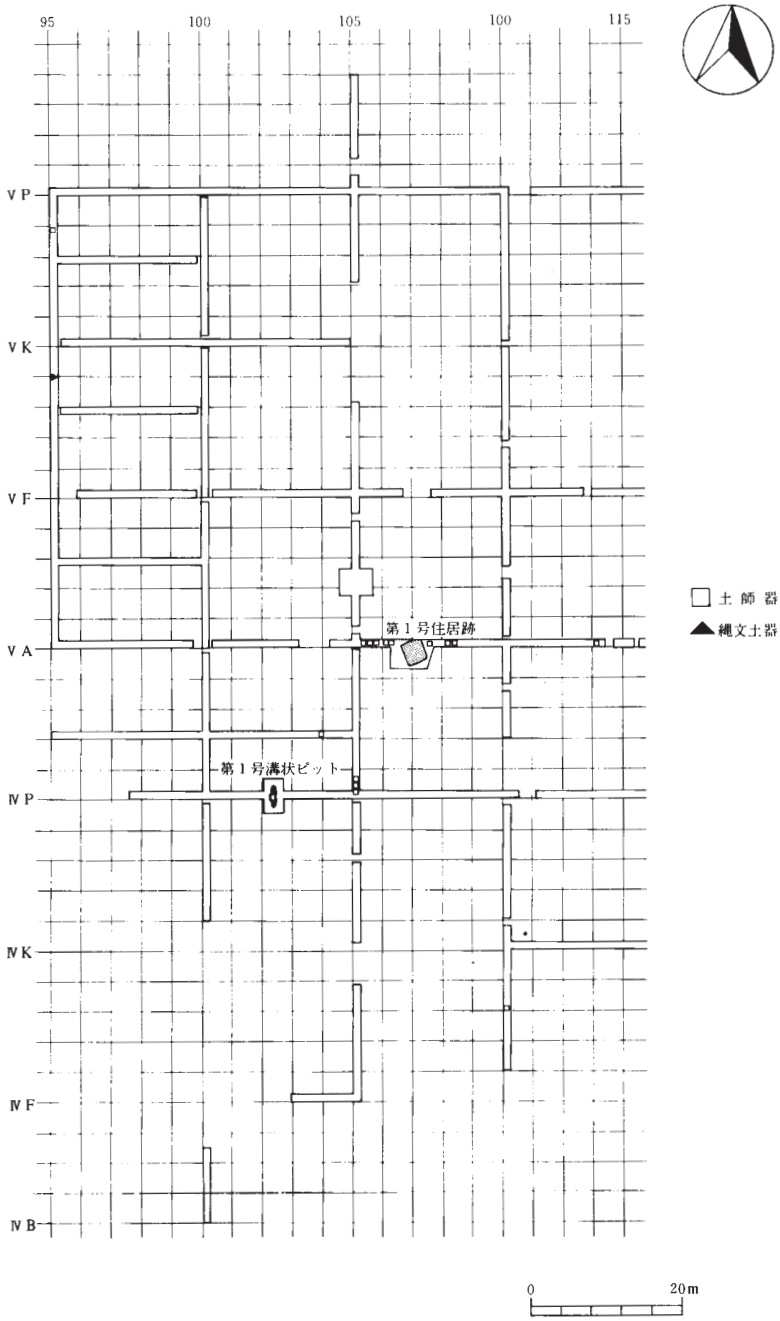
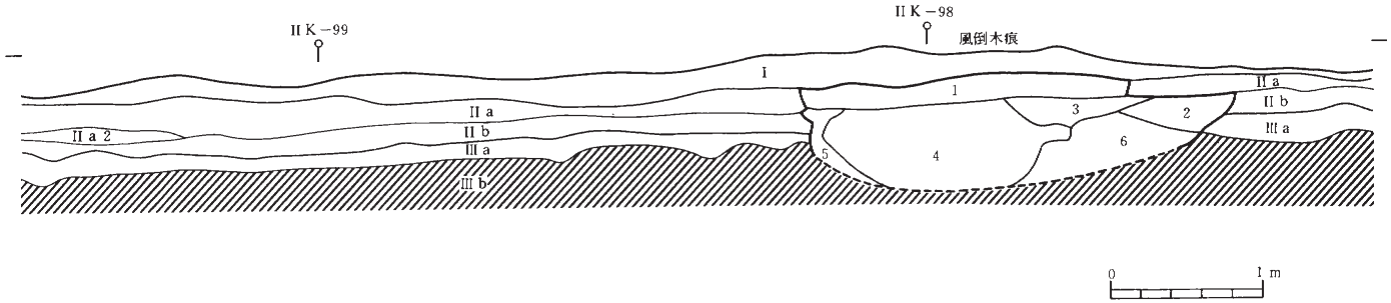


図57　前坂下(6)遺跡グリッド・遺構配置



前坂下(6)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
I	暗褐色 7.5YR3/3	シルト		耕作土	
II a	黒褐色 7.5YR3/2	シルト		自然堆積	
II a 2	黒褐色 7.5YR3/2	シルト			
II b	褐色 7.5YR4/3	シルト	一部に炭化粒(0.2～0.3cm)		
III a	褐色 10YR4/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	地山	
III b	黄褐色 10YR5/6	ローム			
1	黒褐色 10YR3/3	シルト	草木根多少	風倒木痕堆積層	
2	暗褐色 10YR3/3	シルト			
3	褐色 10YR4/6	粘土質シルト			
4	黄褐色 10YR5/8	ローム			ロームマウンド
5	暗褐色 10YR3/3	シルト質粘土			
6	褐色 10YR4/4	シルト質粘土			

図58　前坂下(6)遺跡基本層序

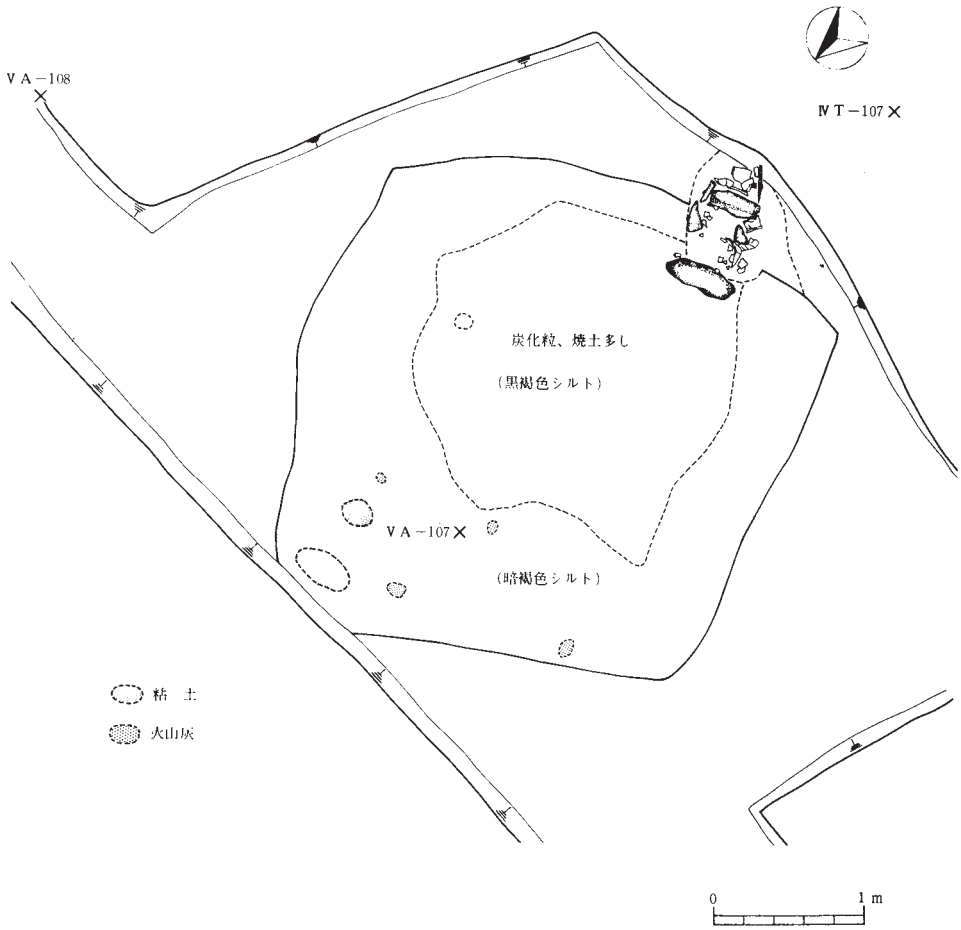


図59　前坂下(6)遺跡第１号住居跡

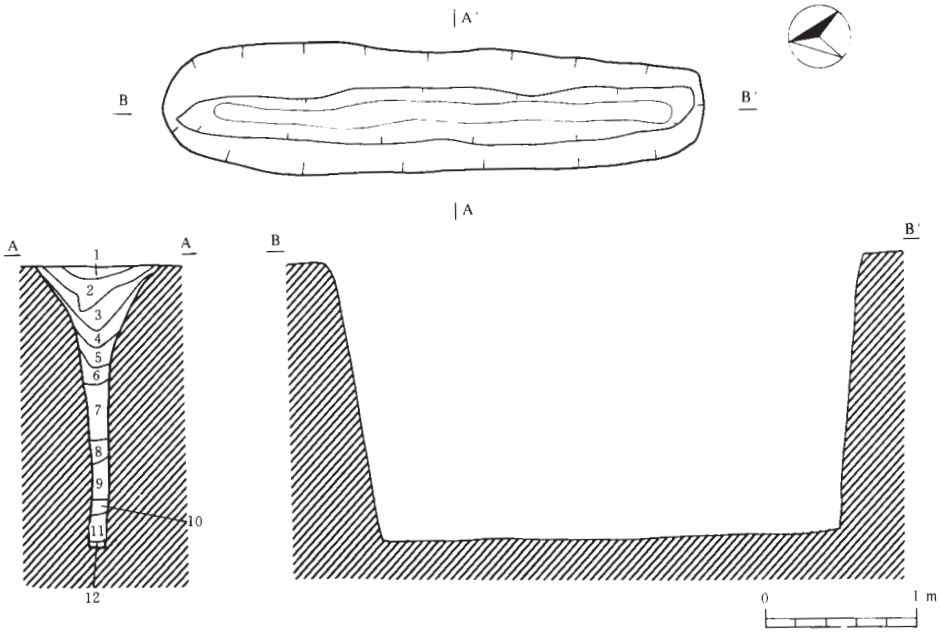
4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

平安時代の竪穴住居跡１軒と時期不詳の溝状ピット１基である。この溝状ピットの精査は行ったが、竪穴住居跡については、平面プランの確認だけにとどめ、埋め戻した。

(i)　竪穴住居跡

調査区ⅤＡ－108の第Ⅱb層上面で確認した。平面形は一辺約３mのやや不整な方形である。主軸方位はＳ－20°－Ｗである。堆積土の平面観察では、中央部とその外周の２層に細分される。中央部は黒褐色シルト層で炭化粒が比較的多く認められる。また、外周は暗褐色シルト層であ



第１号溝状ピット堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	黒褐色 7.5YR3/2	シルト	草木根多い	自然堆積	
2	黒褐色 10YR3/2	シルト			
3	暗褐色 10YR3/4	シルト			
4	褐色 10YR5/4	ローム		人為堆積	粘性が強い
5	にぶい黄褐色 10YR5/3	ローム			
6	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト			
7	褐色 10YR5/6	ローム			
8	暗褐色 10YR3/3	シルト質粘土			
9	黄褐色 10YR5/6	ローム			
10	暗褐色 10YR3/3	シルト質粘土			
11	褐色 10YR5/6	ローム			
12	暗褐色 10YR3/4	ローム		壁の崩壊土	

図60　前坂下(6)遺跡第１号溝状ピット

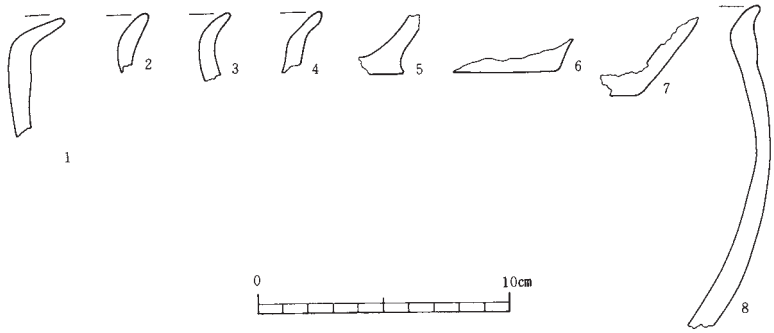
る。この層中には灰白色の降下火山灰が多量に認められることから、層中に擂鉢状に堆積していることが想定される。

かまどは、南西コーナー寄りに設置されている。本体の構造は不明であるが、煙道部は板状節理の岩石を利用して構築されている。石を両側壁に並べ、更に暗渠のごとく天井部も蓋石で覆っている。

本住居跡は確認面で試掘をとどめ、埋め戻した。

(ii) 溝状ピット

調査区IVP－103の第IIb層で確認した遺構である。開口部プランは長楕円形で、長径が3.6m、短径が0.8mである。底部幅は0.1mと極端に狭い。また、確認面から底面までの深さは0.18m



土 師 器 観 察 一 覧

図 版	層 位	器 種	部 位	外 面	内 面	備 考	登録番号
1	1 H覆土	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		1 H P34
2	1 H覆土	甕	口縁部	ユビナデ	ユビナデ		1 H P16
3	1 H覆土	甕	口縁部	ユビナデ	ユビナデ		1 H P86
4	II b 層	甕	口縁部	ユビナデ	ユビナデ		Ⅳ P－105 P59
5	II b 層	小型甕	底 部	ナデ	ナデ		Ⅴ A－105 P31
6	II b 層	甕	底 部			粗砂多量に付着	Ⅴ A－105 P54
7	1 H覆土	小型甕	底 部	ヘラケズリ	ユビナデ		1 H P42、44
8	1 H覆土	小型甕	体 部	ヘラケズリ	ユビナデ	約1/4個体	1 H P22

図61　前坂下(6)遺跡出土土器

である。

遺構内の堆積土は12層に細分され、そのうち、４～６、７、９、11層の黄褐色ロームと他の黒色系腐植土とは互層をなす。

遺構内からは、特記すべき遺物は出土していない。

(2) 出土遺物

縄文時代後期（型式不明）の土器片と平安時代の土師器片である。縄文時代後期のものは、トレンチ内から数片散発的に出土しただけであるが、土師器は竪穴住居跡の確認面及びその周辺に集中する。

土師器は、甕の口縁部片及び底部片である。口縁部はいずれも外反の度合が少ない特徴をもつ。調整は口縁部内外面がユビナデ、胴部外面が縦位のヘラナデである。いずれも粗砂粒の混入が多い。これらの特徴をもつのは、東北北部の土師器編年の第Ⅱ型式に比定されよう。

5　小　結

遺跡は、近年まで畑地として利用されてきた標高16m～19mの台地上に立地し、保存の状態も一部を除き良好である。

確認できた遺構は平安時代の竪穴住居跡１軒、溝状ピット１基である。遺物は散発的に出土しているにすぎない。しかし、これらはいずれも、隣接する前坂下(1)遺跡の延長として把握す

べき遺構と考えられる。すなわち同一遺跡内の同一時期の可能性が極めて高い。

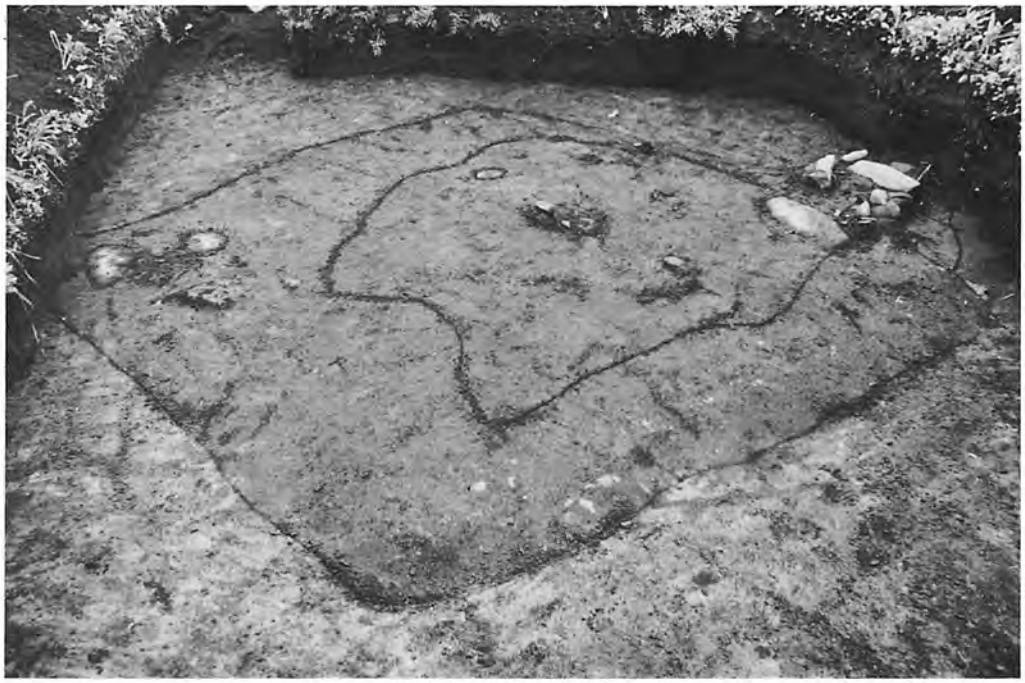
（三浦　圭介）

遺跡全景

溝状ピット

第１号住居跡かまど確認状況

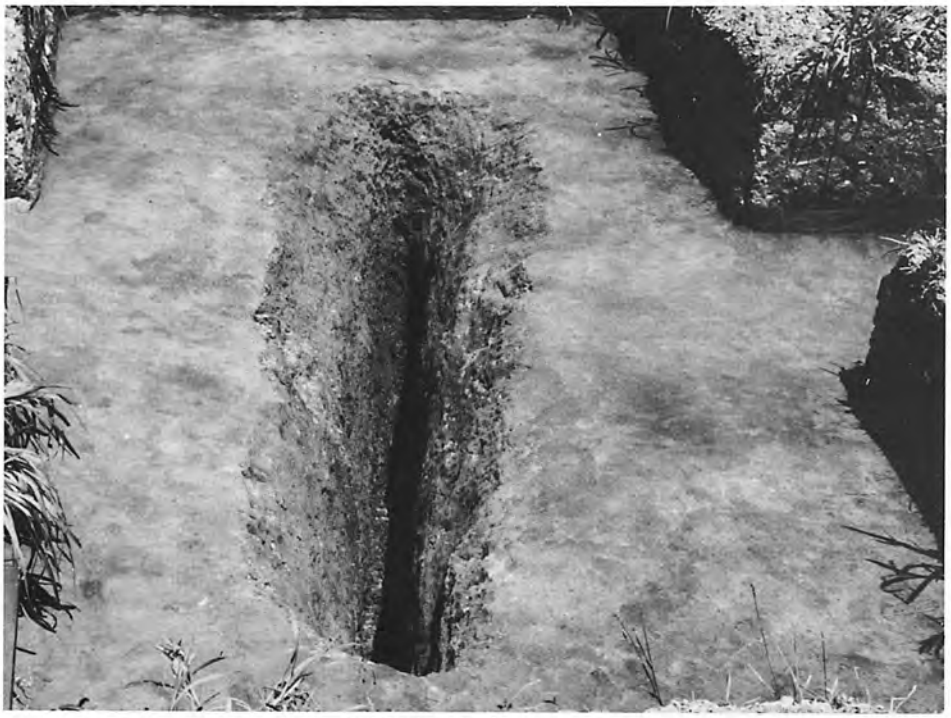
写真18　前坂下(6)遺跡



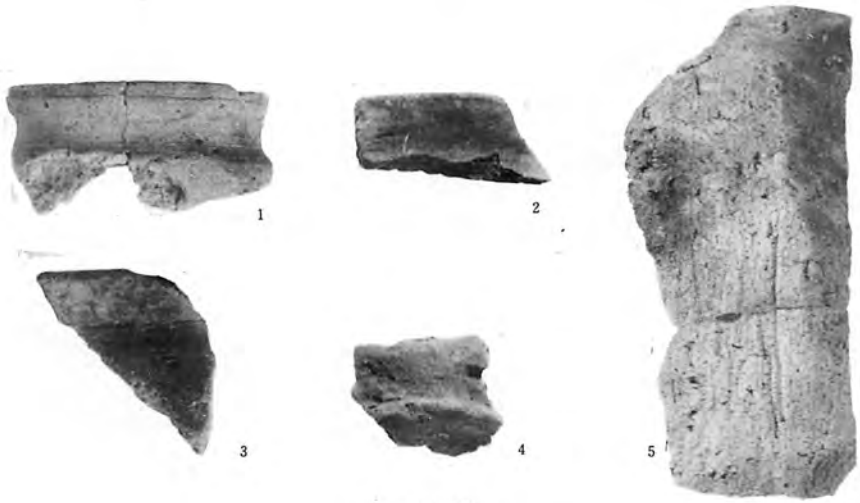
第１号住居跡確認状況

第１号住居跡遺物出土状況

写真19　前坂下(6)遺跡第１号住居跡



溝状ピット全景



出土土師器

写真20　前坂下(6)遺跡

第10節　前坂下(7)遺跡

1　遺跡の立地

現汀線から約150m内陸部に入った、湿地帯上に浮かぶ 2 個の小独立丘上に立地している。周囲の湿地帯の標高は 8 m～10m、独立丘は11m～13mである。この 2 個の独立丘の総面積は約5000㎡である。南側の独立丘の約500㎡は、近年土取りにより黒色土が削平され、地山のローム層が露出している。西方20mの離れた台地上には前坂下(4)遺跡、同(2)遺跡が所在する。

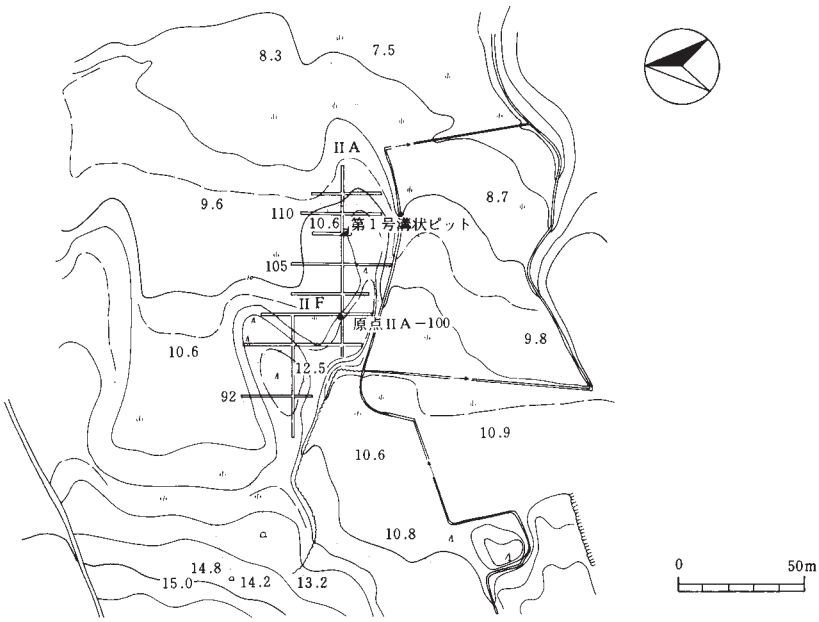
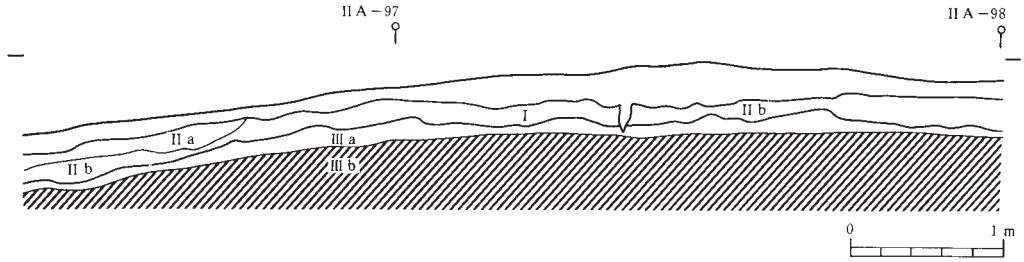


図62　前坂下(7)遺跡地形・調査区配置

2　調査経過と調査方法

昭和52年の分布調査では、頁岩製のフレークが 1 点表面採集（青森県教委：1978）され、遺跡として登録されている。今回の試掘調査では、遺跡の年代を知る資料としての土器や、遺構の検出に重点をおいた。 6 月下旬に下草を刈り払い、遺跡全域に 4 mグリッドを設定した。その後このグリッドの線上に沿って、 1 m幅のトレンチを設けた。 2 個の独立丘はいずれも東西に長い馬背状で、平坦面が少ないため、両台地を南北に切断するように数多くのトレンチを設けて、遺物や遺構の発見に努めた。



前坂下(7)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	暗褐色 10YR3/4	シルト	草木根多量	耕作土	
Ⅱa	黒褐色 10YR2/3	シルト	草木根少量	自然堆積	
Ⅱb	暗褐色 10YR3/3	シルト		自然堆積	
Ⅲa	褐色 10YR4/4	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	地山	ローム層への漸移層
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム		地山	

図63　前坂下(7)遺跡基本層序

その結果、溝状ピット（Ｔピット）１基を検出した。しかし、土器、石器等の遺物は全く出土しなかった。７月下旬には本遺跡に係る現場の全作業を終了した。

3　遺跡の層序

２個の独立丘はいずれも同様な堆積状況を示す。

第Ⅰa層は遺跡全体を覆う表土層で、20cm～30cmの層厚をもつ。南側独立丘の北側斜面の一部には、削平時の堆積物である第Ⅰb層が存在する。この層中には多量の黄褐色ロームブロックが混在する。

第Ⅱb層は暗褐色シルト層である。

第Ⅱa層は、その下層の第Ⅱb層と土性上では類似するが、色調の上でやや黒味の強さが目立つ。この層は、台地平坦面では削平されたために存在しない。

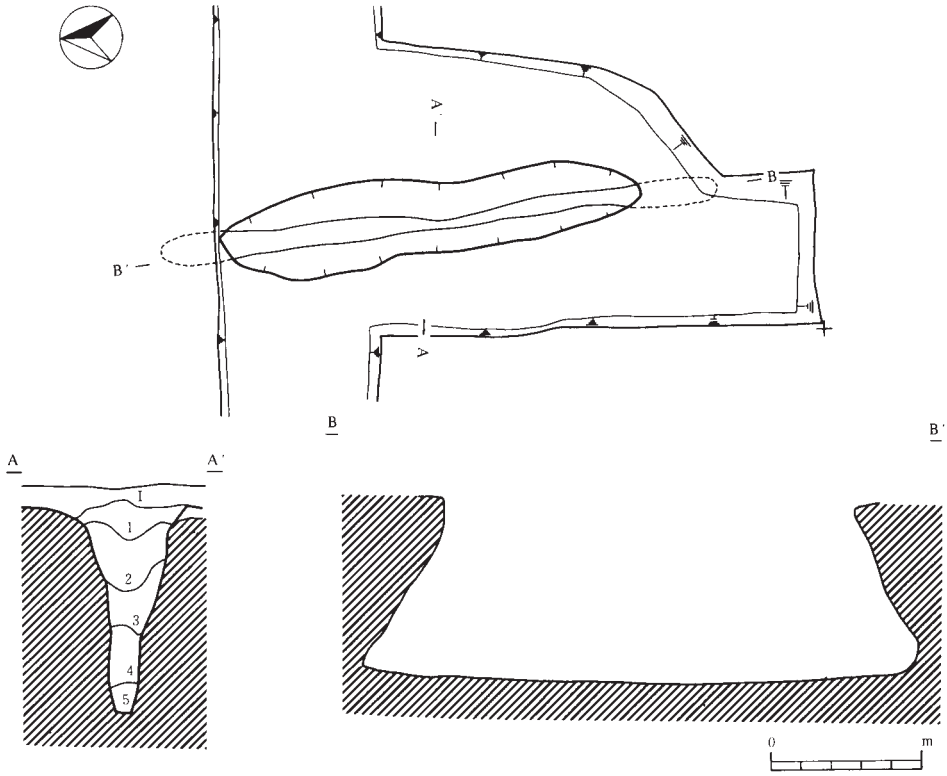
第Ⅲ層は地山のローム層である。第Ⅱb層との漸移部分は汚れが強いため、下部のプライマリーなローム層とは分離し、これを第Ⅲa層とした。

4　検出遺構と出土遺物

溝状ピット（Ｔピット）１基だけの検出である。土器、石器等の遺物は出土していない。

〔溝状ピット〕

検出した地点は、南側独立丘の中央部平坦面である。確認面は表土層を剥いだ直下、すなわ



第１号溝状ピット堆積土一覧

層　位	土　　色	土　　性	混　入　物	層の形成	備　　考
1	黒褐色　10YR2/3	シルト	草木根混入	人為堆積	
2	暗褐色　10YR3/4	ローム			
3	黄褐色　10YR5/6	ローム			
4	褐　色　10YR4/6	ローム	炭化粒（0.2～0.3cm）混入		
5	褐　色　10YR3/4	粘　土	炭化粒多量混入		

図64　前坂下(7)遺跡溝状ピット

ち第Ⅱb層上面である。しかし、第Ⅱa層の黒色土が欠落しているので、本来の掘り込み面はこの第Ⅱa層中の可能性が高い。

平面形は開口部及び底部がいずれも長楕円形である。開口部長径は2.8m、短径が0.5mで、底部長径は3.7m、短径は0.12m～0.15mである。確認面からの探さは1.4mである。

本遺構の堆積土は５層に細分される。２～４層中には比較的多くのロームブロックが含まれているが、第５層中にはそれが認められない。この層中からは、前者にない木炭粒が多量に検出された。

長軸の方位はＥ－7°－Ｎ（Ｗ－7°－Ｓ）である。

5　小　結

遺跡面積の割には多くのトレンチを入れたが、２個の独立丘で発見した遺構は、溝状ピット１基のみである。溝状ピットは、これまで関東から北海道にかけて相当数検出されている。構築の時期も、縄文時代早期（霧ヶ丘遺跡調査団：1973）から平安時代（青森県教委：1982）までとされているので、本遺構の年代も不明である。また、この遺構の性格は、これまで２、３提唱されているが「落し穴」説が最も有力である。（福田：1981）

「落し穴」と仮定すれば、その機能をより有効に果すためには１基のみとは考えられない。これまでの調査事例では（市川他：1980）複数のものがセットになる可能性が極めて高い。本遺跡の場合も、トレンチ以外の未調査の区域にも存在するものと思われる。しかし、調査面積から推定すれば数基程度のものであろう。

（三浦　圭介）

〔引用・参考文献〕

青森県教育委員会　（1978）『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第43集

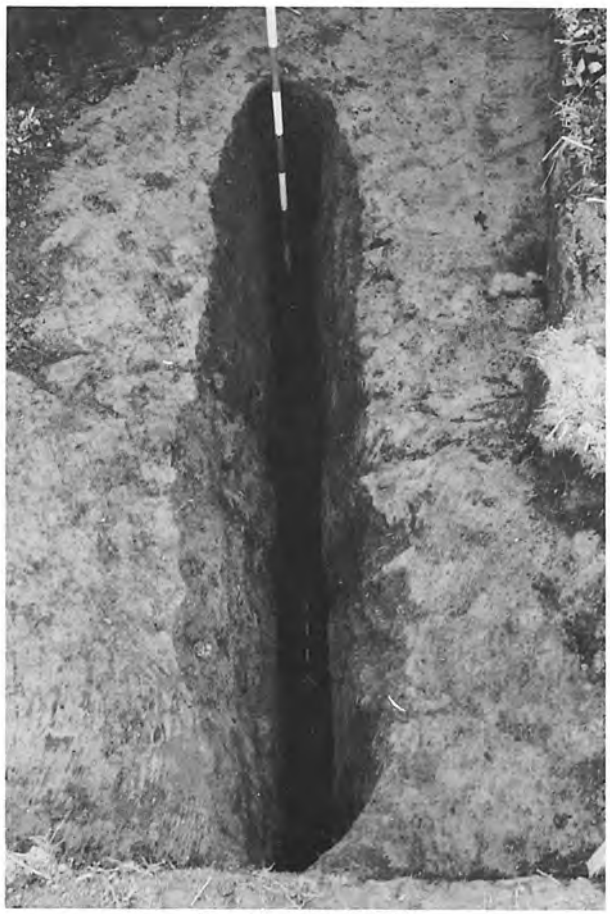
霧ヶ丘遺跡調査団　（1973）『霧ヶ丘』武蔵野美術大学考古学研究会

青森県教育委員会　（1982）『発茶沢遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第67集

福田友之　（1981）「溝状ピット研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』第１号　弘前大学考古学研究会

市川金丸他　（1980）『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財調査報告書第57集

遺跡全景



溝状ピット完掘状況

写真21　前坂下(7)遺跡

第11節　前坂下(8)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字坂下397ほかに所在する。

老部川から国道を北へ0.5㎞の地点に西へ折れる国道付替工事用道路があり、遺跡はその国道の西側、工事用道路の南側一帯である。ほかの諸遺跡と同様、現汀線と平行にのびる海岸段丘に立地する。その標高は約20m～26mで、東（海側）に向かって緩やかに傾斜する。

遺跡の一部は過去に土取りされており、昭和52年度の分布調査の際に採集された遺物（縄文後期土器片約80片）は、すべてこの土取り部分から得られたものである。

2　調査経過と調査方法

６月２日から茅刈りとグリッド組みを行い、５日から試掘を行った。グリッドは、方位に従って１辺４mを基本とする20mの大グリッドを組み、各グリッドの基線の南側と西側について、幅１mのトレンチを設け調査を進めた。

試掘面積が980㎡に及んだにもかかわらず、遺物・遺構の検出は非常に少なく、Ｄａ－Ｏグリッドから後期土器片１片、Ｆａ－12グリッドから後期土器片（およそ１個体分）及びＦａ－13から石鏃１点、Ｅａ－10グリッドおよびその周辺から土師器の微細破片数片を得たにすぎない。また、遺構としては、Ｄｂ－34グリッドで溝状ピットと推察される落ち込みを、Ｅｅ－５で焼土遺構を１基検出したに留まった。この間、表採できた資料数に比べ、出土遺物数が極端に少ないことから、遺跡の中心部が極く限られた狭い範囲である可能性も考慮し、土取りされた部分（大グリッドＣ－５・Ｃ－10）を更に密に試掘したのであるが、遺物・遺構とも全く検出されなかった。

3　遺跡の層序

層序およびその性情は、銅屋(2)・(3)とほとんど変らない。

第Ⅰ層　黒褐色土　耕作土で、全体的に細砂を含む。ほかに少量のローム粒子・炭化物を含む。平均10㎝の層厚を有する。

第Ⅱ層　褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物等を微量に含む。耕作の影響を受けており、ある

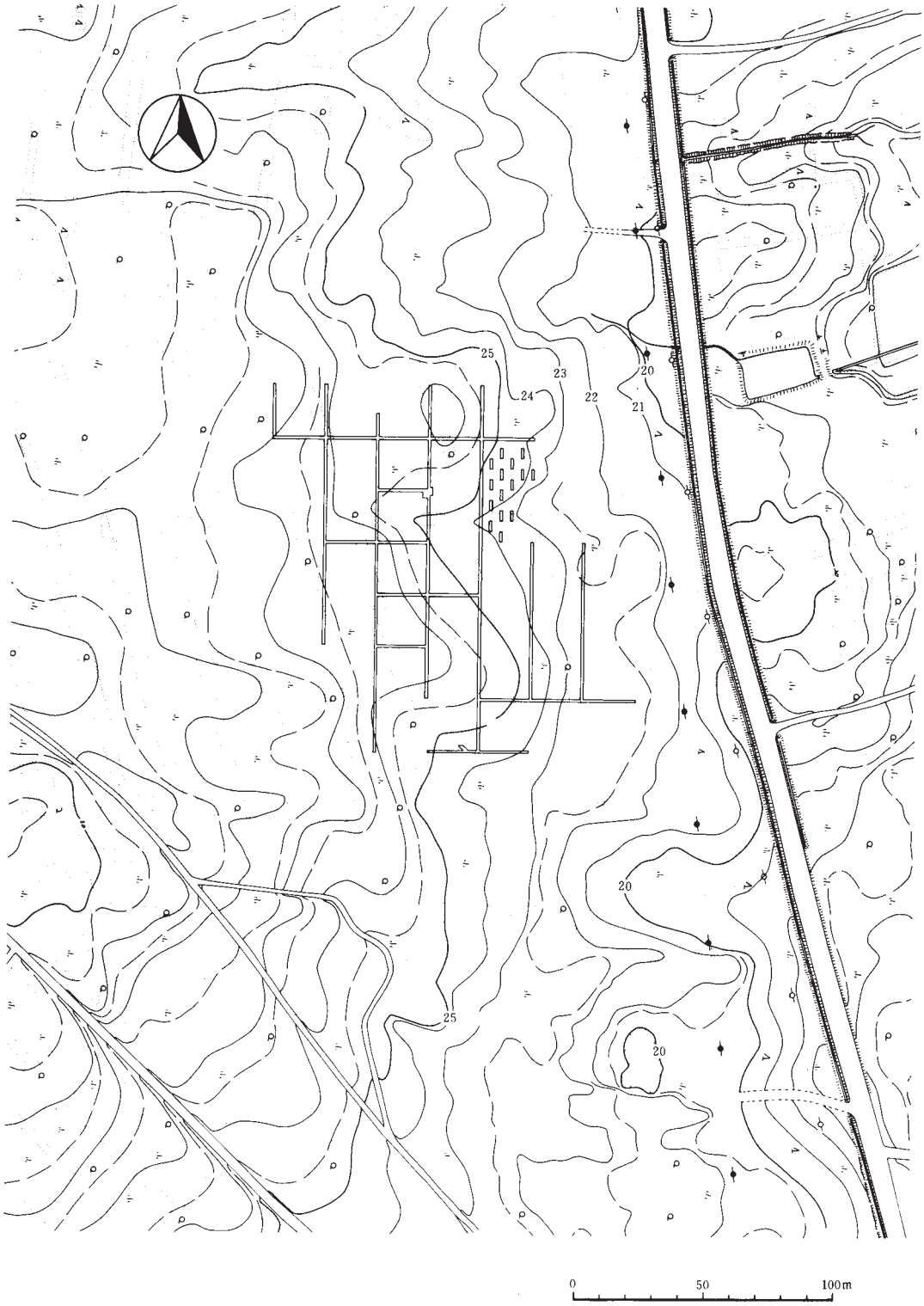


図65　前坂下(8)遺跡地形

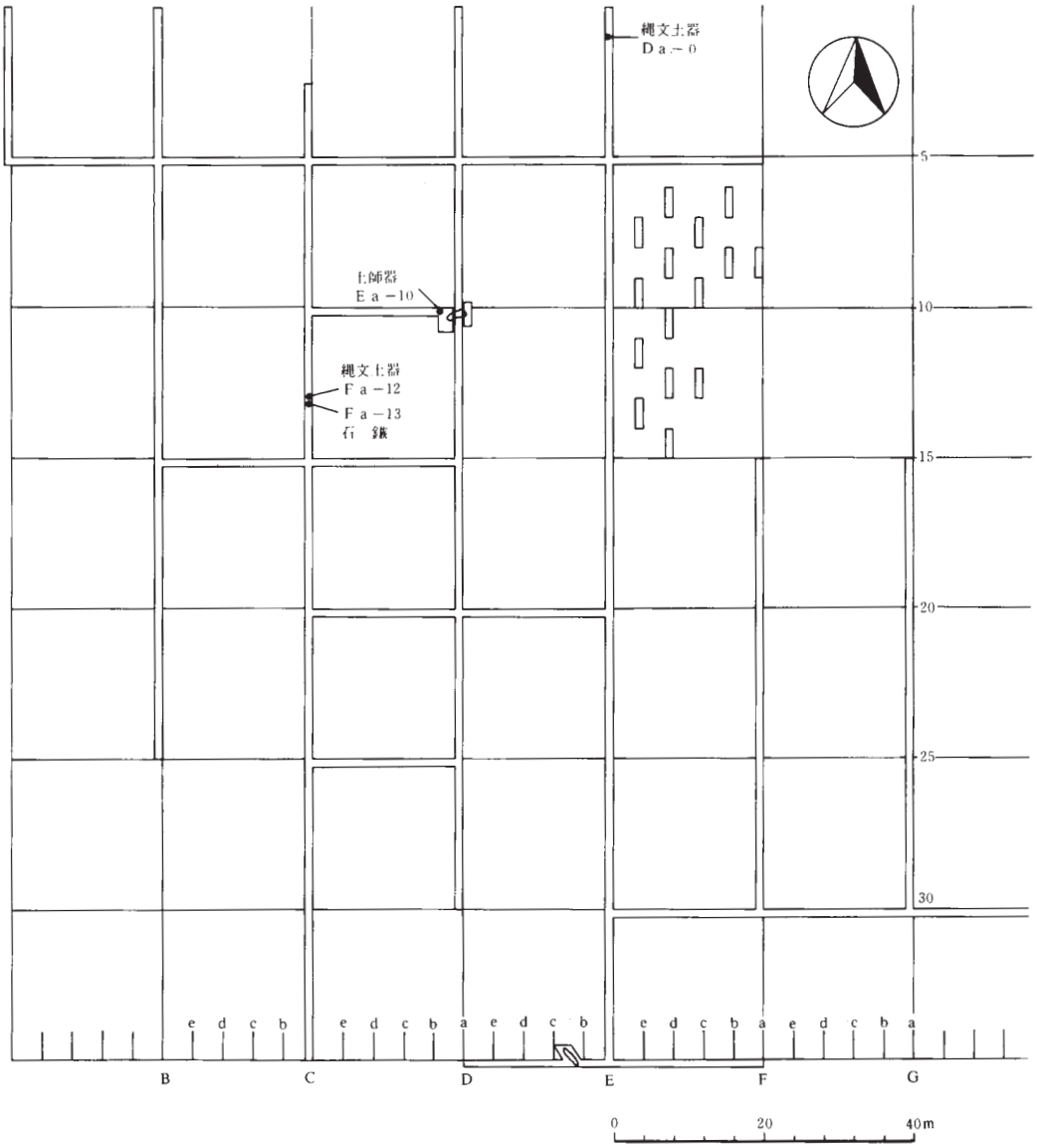


図66　前坂下(8)遺跡グリッド・遺構配置

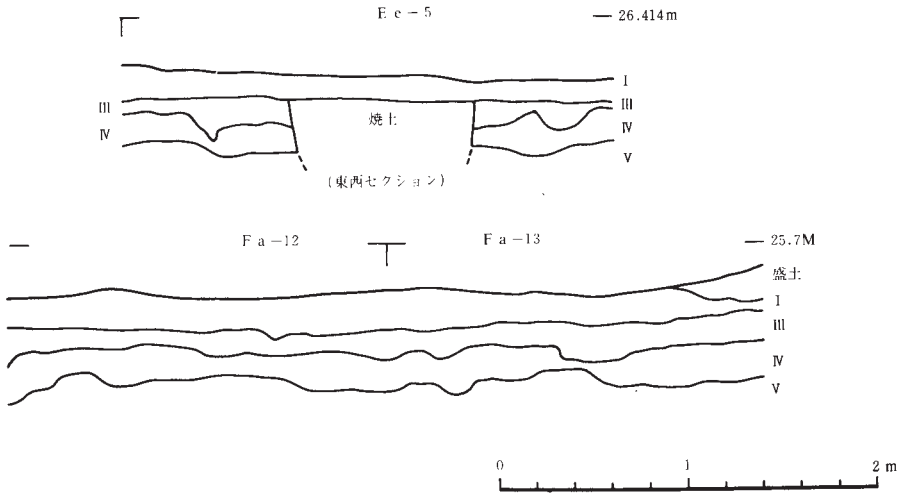


図67　前坂下(8)遺跡基本層序

程度安定した層として把握し得るのは西側の部分で、その層厚は５㎝～20㎝、平均10㎝である。ほかに処々にレンズ状に堆積した部分や、全く欠く部分もある。

第Ⅲ層　暗褐色土　全体にローム粒を含むとともに、一部ロームブロックも認められる。また、炭化物をも若干含む。遺跡全体に存在し、その平均層厚は10㎝である。縄文後期等の遺物を包含していた。

第Ⅳ層　暗黄褐色土　ローム漸移層である。層厚は平均15㎝である。部分的ではあるが、拳大の礫を多量に含む。このような状況は銅屋の(2)・(3)等他ではみられない状況である。

第Ⅴ層　黄褐色土　ローム層である。若干の微砂を含む。第Ⅵ層にみられた礫が本層においても認められるが、礫がどの程度まで含まれるかについては確認していない。

4　検出遺構と出土遺物

(1) 検出遺構

980㎡を調査したが、検出した遺構はＥｅ－５において焼土遺構１基、Ｄｂ－34において3.7m×0.7mの溝状ピットと推察される落ち込み１基、Ｅａ－10においては2.1m×l.1mの不整形の落ち込み１基で、いずれも平面プランの確認にとどめ精査は行わなかった。焼土遺構の確認は１基であるが、工事用道路の両側や第Ⅰ層等の欠如した部分を見ると、その一部に焼土がみられ、かなりの広範囲に分布しているものと思われる。なお、焼土遺構・溝状ピットとも第Ⅰ層直下において確認された。

（2）遺物（第68図）

縄文後期十腰内Ⅰ式土器50片、同十腰内Ⅳ（？）式土器１片、平安時代の土師器片20片、及び石鏃１点である。

十腰内Ⅰ式土器は、すべてＦａ－12から出土したもので同一個体であり、推定口径23.4㎝の６波状をなすと思われる深鉢形土器である（2）。櫛歯状工具を用いて平行に３段施文し、各段を同工具を用いたカギ状の文様で連結し、更に沈線によってこれらの文様を縁取りしている。この後器面をなでて再調整している。内面の調整は良好であるが、器表面の荒れが著しい。胎土に砂粒を多量に含む。焼成は良好。

後期十腰内Ⅳ（？）式土器（1）は、鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。太く浅い沈線とＬＲの縄文による磨消縄文を有する。内面に炭化物の付着が著しい。Ｄａ－Ｏ出土。分布調査時に採集された資料中に、類似する時期のものが多く見受けられる。

平安時代の土師器は、Ｅａ－10から甕の口縁部と底部破片を含む微細破片が20片出土した。破片数は少ないが、３～４個体認められる。

石鏃(3)は、尖頭部と茎部を欠損するが残存長3.4㎝、最大幅1.4㎝の大型鏃である。厚さは１㎝でかなり部厚く、断面がほぼ菱形をなす。（2）の十腰内Ⅰ式土器に近接して出土した。

5　小　結

分布調査時に、縄文後期土器片約80片が採集されていたこともあり、今回の試掘調査では有望視された遺跡の一つであった。しかしながら、多量の土器が表採されたという地点では一片の資料も得られず、そのほかの地点においても非常に散発的な出土でしかなかった。したがって遺跡自体極く狭い範囲であり、これが土取りによって消滅したと推定するか、遺跡の外縁、あるいはほかの諸遺跡同様一過性的性格の強いキャンプサイト等と推察せざるを得ないであろう。しかしながら、現在のところ、これらの時期のベースキャンプと考えられる遺跡の所在自体不明なのである。

（三宅　徹也）

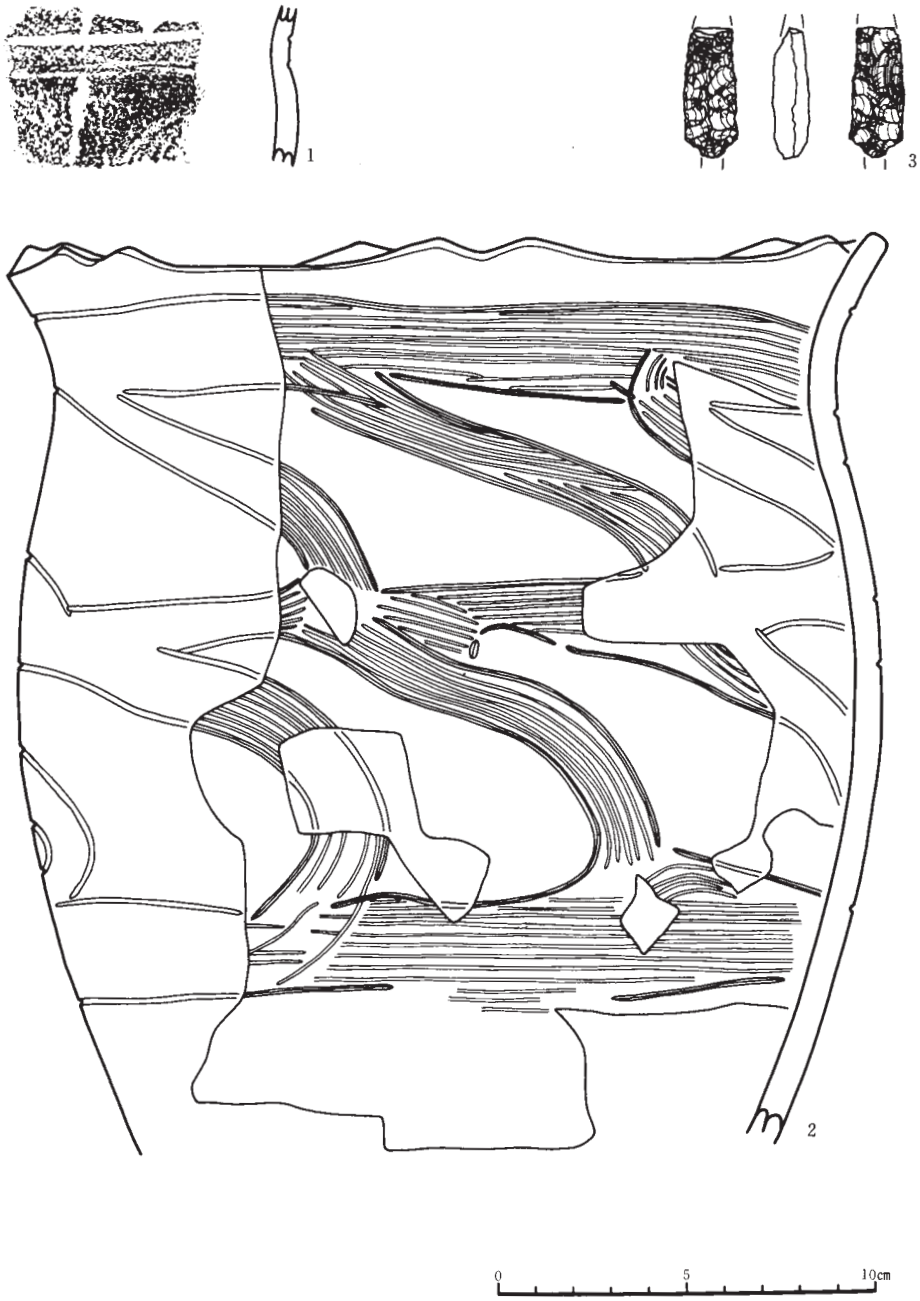


図68　前坂下(8)遺跡出土遺物

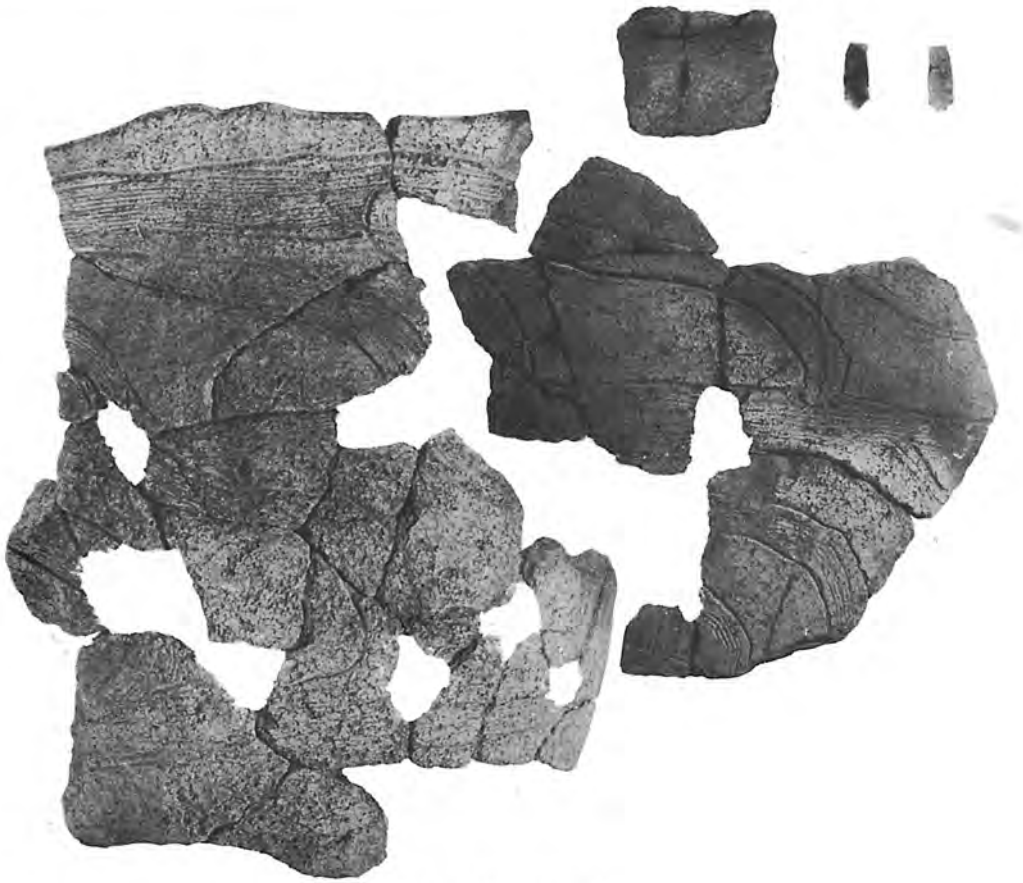


写真22　前坂下(8)遺跡

第12節　前坂下(9)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下459ほかに所在している。

老部共同墓地向いの農道を西方へ約800m進むと、国道沿いにある、東北電力株式会社の水質調査小屋脇の工事用道路と交差し、その北側に立地している。遺跡は、東北に延びており、標高約30mのほぼ平坦地である。遺跡の北側は、急斜面を呈しており、その下は湿地帯となっており、いたる所に巨石が露呈している。西側には、吹越山地が連なっている。南側には、銅屋(1)・(2)遺跡が所在している。

2　調査経過と調査方法

調査区は、カヤ・雑木などが繁茂しており、それらの刈り払い作業から始めた。グリッド設定にあたっては、遺跡の南側に原点を置き、その原点を通る東西南北方向の軸線を基準とし、その基準に沿って、20m×20mの大グリッドを設定した。そして、大グリッドラインに沿って、幅１mのトレンチを東西南北に設け、トレンチの長さは、台地によって不等長である。また、遺構・遺物の検出の際には、適宜に拡張することにした。グリッドの呼称は銅屋(2)遺跡に準じた。

調査も後半になると、遺跡のいたる所で焼土遺構が確認され、合計20基を検出できた。大半は表面観察にとどめたが、Ｄｃ－15区焼土遺構については、精査を行った。また、Ｆａ－15区においては、火山灰が多量に堆積している所も確認され、精査を行った。

試掘調査面積は180㎡である。

3　遺跡の層序

本遺跡は、東側にゆるく傾斜しているものの、ほぼ平坦である。層序は、基本的に第Ⅰ層から第Ⅴ層に分層されたが、いたる所で焼土遺構と思われる落ち込みがみられた。

第Ⅰ層は黒褐色土で、砂粒大の浮石粒を微量に含み、若干のカーボン・焼土粒を含む。この層は、耕作土であり、第Ⅱ層との分層面は、直線的である。各台地とも、層厚16.1㎝で一定である。第Ⅱ層は暗褐色土で、砂粒大の浮石粒を多く含む。この層は、銅屋(2)遺跡の基本層序の

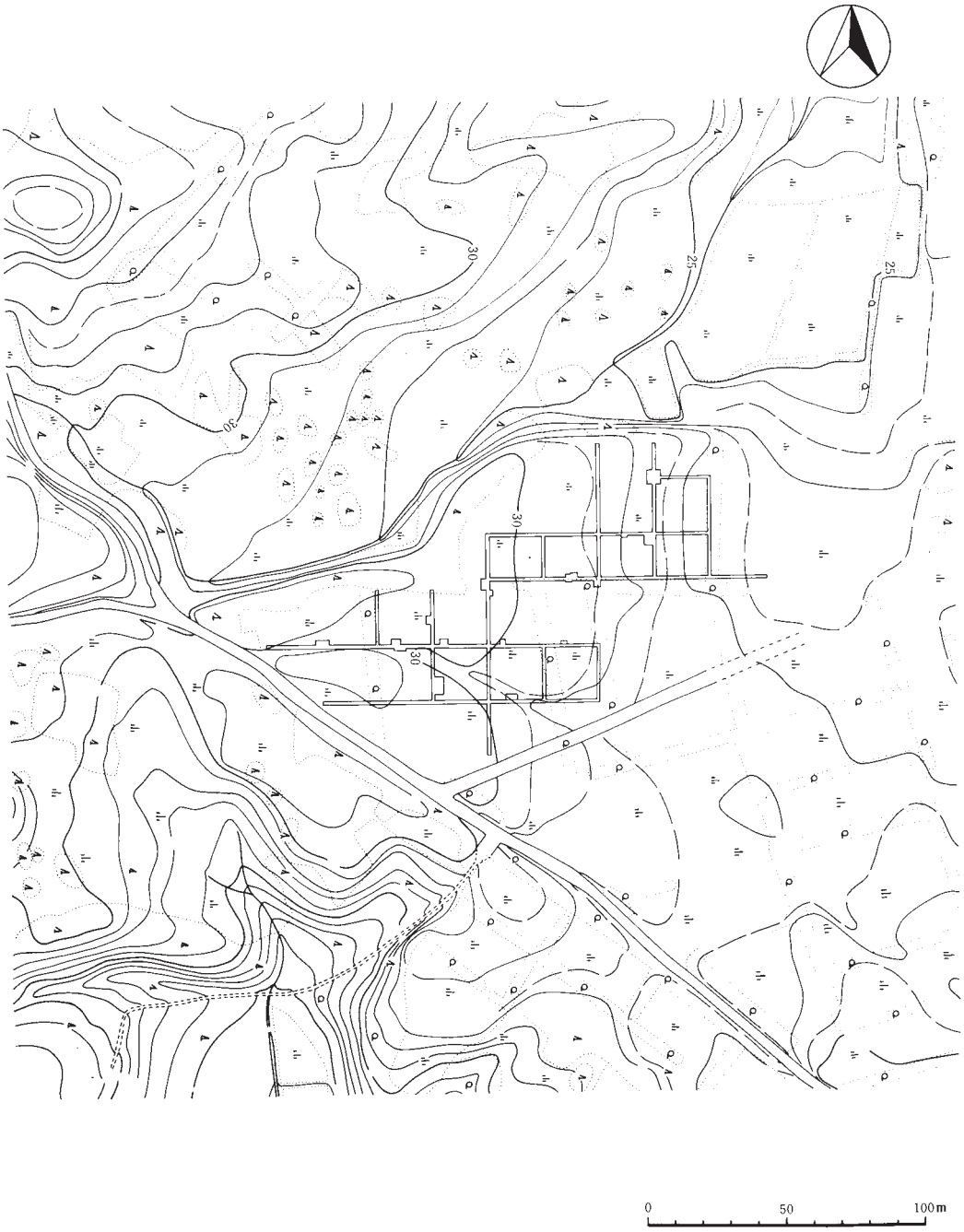


図69　前坂下(9)遺跡地形

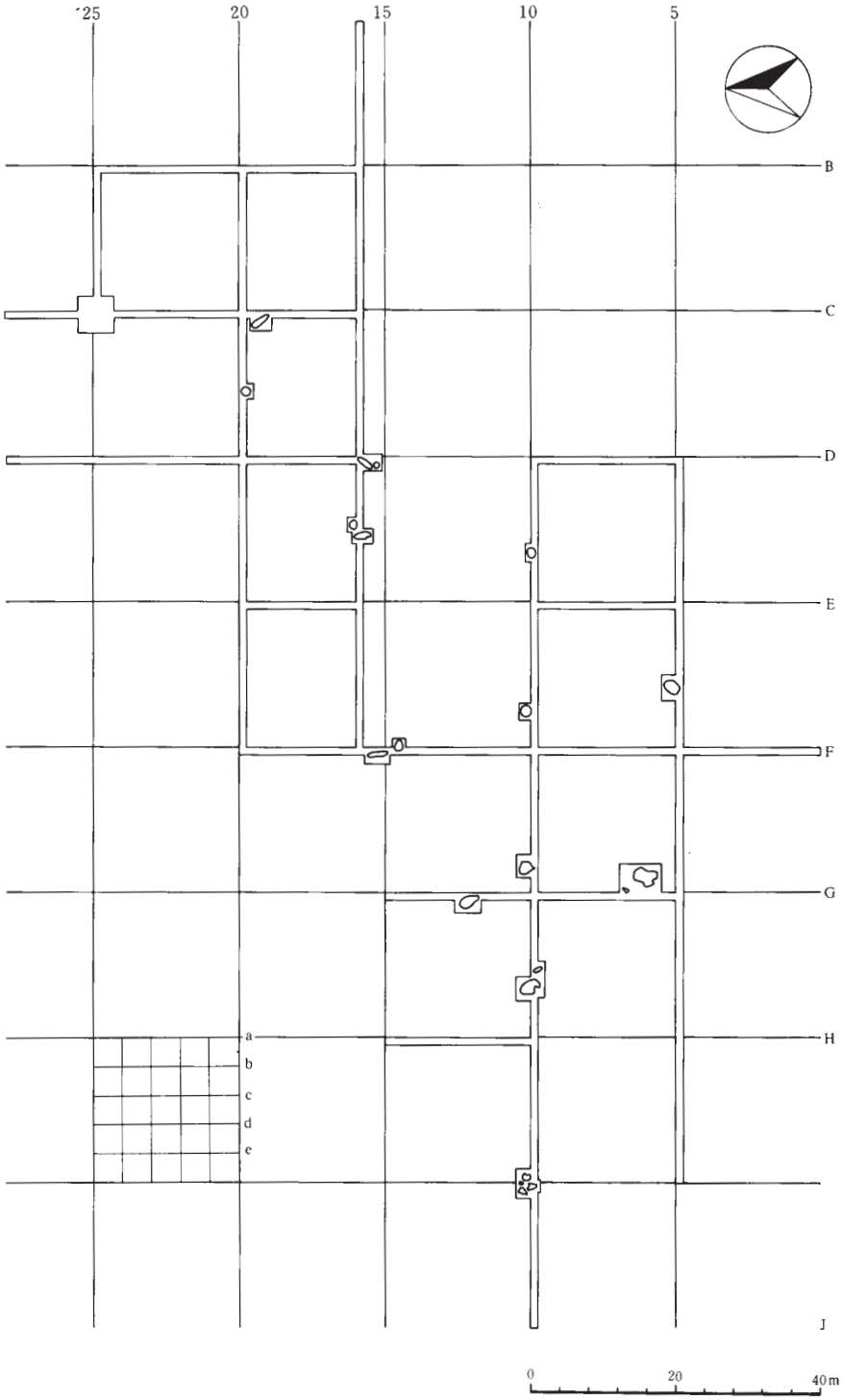


図70　前坂下(9)遺跡グリッド・遺構配置

第Ⅱ層と全く同一のものであり、遺跡全体に堆積しているものではなく、部分的に、とぎれとぎれに堆積しているもので、層厚も8.8㎝と薄い。第Ⅲ層は暗褐色土で、砂粒大の浮石粒を若干含み、１～２㎜大の小礫を含む。しまりはない。この層は、層厚が13.4㎝で、第Ⅳ層との分層面は不明瞭である。第Ⅳ層は晴黄褐色土で、第Ⅲ層と第Ⅴ層の混合土であり、ロームを多量に含む層である。第Ⅴ層は黄褐色土で、ローム層である。一般に地山と呼称されている層である。第Ⅳ層との分層面は、凹凸に富んでいる。調査は、第Ⅴ層上面まで掘り下げることを基本とした。以上、層序について記述したが、比較的変化のない層序であり、各層とも、層厚は一定して堆積している。また、焼土遺構と思われる落ち込みの層序は、第71図に記載した。

4　検出遺構と出土遺物

20基の焼土遺構と火山灰の集積地１箇所を検出した。このうち、焼土遺構は一基だけ精査した。出土遺物は、全くみられない。

（ｉ）　焼土遺構

Ｄｃ－15区で検出し、平面プランは、基本層序の第Ⅲ層で確認できた。黄褐色ローム（第Ⅴ層）まで掘り込んで構築されている。焼土と炭化物は互層を形成している。平面形は、不整長方形を呈し、底面は、粘性に富んでいるため、明確に把握できなかった。覆土は第１層から第７層に分層され、全般に湿性に富んでいる。第１層は、異褐色土に焼土と炭化物が混入しているが、ほぼ単独の層としてとらえられる。第２～７層は、大きく一層として見ることができるが、焼土と炭化物の混合の度合によって分層された。焼土は、一般にボソボソしており、もろい。炭化物も生焼けの状態で非常にもろく、砕けた状態であり、現形を保っているものは、径２㎝・長さ６㎝大の丸木１点のみである。

焼土及び炭化物は、遺構全体に散在していたが、密度は一様ではなく、まったくない部分もあった。時期・用途等は不明である。

(ii)　火山灰の集積地

Ｆａ－15区で検出した。自然地形の凹地に堆積したものである。基本層序の第Ⅲ層上面で確認した。平面形は、不整楕円形を呈している。底面は、基本層序の第Ⅳ層で、比較的しまりがあり、確認しやすいものである。断面形は、皿状を呈している。セクションは、３層に分層できたが第１・２層は、火山灰が薄く、暗褐色土との混合土である。第３層は、火山灰だけの層であるが、幾重にも褐色土が薄く堆積している状態である。また、火山灰の堆積の中でも、層序が20㎝もある部分がみられた。

この火山灰の集積地は、自然地形の凹部に堆積したものであるが、火山灰が一度に堆積した

ものではなく、風・雨の影響で、この凹地に自然堆積したものである。

5　小　結

20m×20mの大グリッドを設定し、各基線に沿って幅１mのトレンチを設けて調査した結果、焼土遺構20基と火山灰の集積地１箇所が確認できた。焼土遺構については、分布調査時にも確認されており、また、今回試掘調査を行った銅屋(2)遺跡、前坂下(10)遺跡におけるそれと全く同一で、遺跡内のみならず、広く分布するものと思われる。この掘り込み面焼土炭化物等の状態から見ると、比較的新しい時期のものであることが考えられる。火山灰については、日時に限りがあり、資料分析をするに至らなかった。

また、330㎡の試掘面積にもかかわらず、遺跡の中心部と想定できる部分は、ついにとらえることができず、本遺跡内には、生活の中心部となる場所は、存在しないものと思われる。本遺跡は、彼等の広大な生活圏の一部であって、狩漁、採集活動における一つの場として考えられるものであろう。

（豊島　広美）

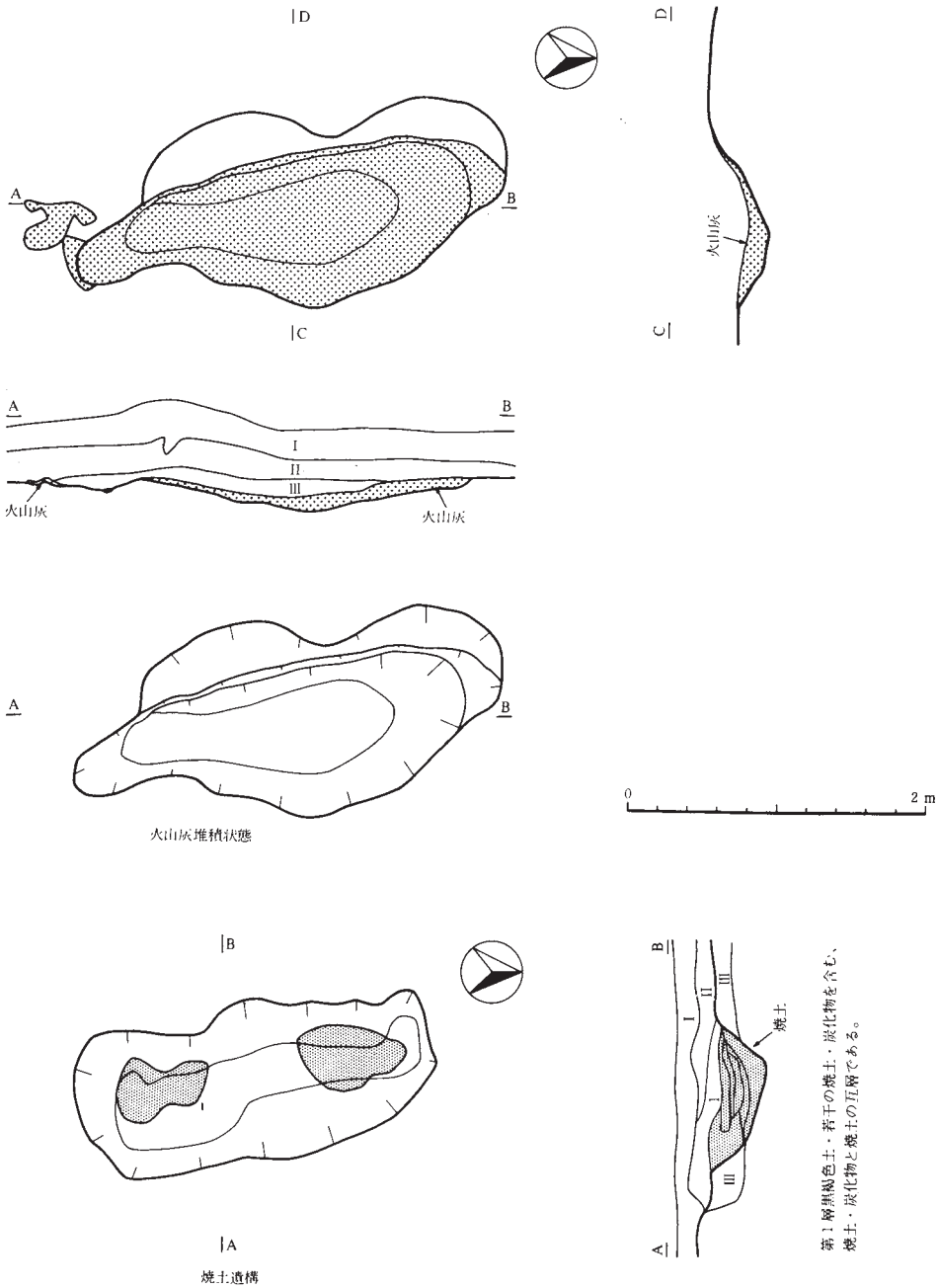


図71　火山灰堆積状況・焼土遺構

写真23　前坂下(9)遺跡（火山灰堆積状態・焼土遺構）

第13節　前坂下(10)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下79ほかに所在する。

老部川橋から国道を北へ約１km進み、農道を拡幅した工事用道路を西へ約500m入ったところに存在する。遺跡はほかの遺跡同様、現汀線と平行にのびる海岸段丘上に立地するが、背後には吹越山地が迫り、また、南側は小川によって区切られている。標高は最高36mで東（海）に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の一部（西側）は、開田のため掘削されている。

2　調査経過と調査方法

遺跡の範囲は、分布調査時においては工事用道路と東流する小川の間、東西約150m、南北約120mと推定された。台地南端は立地条件として良好と思えたものの、松林が広がっており調査は不可能であった。このため、推定範囲内で極く限られた範囲を対象とせざるを得なかったが、地形や茅刈前の表採地点からするならば、工事用道路の北側にも広がる可能性が考えられたため、道路の両側にグリッドを設定することとした。

茅刈を７月７日、グリッド設定を８日に行った。設定方法は銅屋(3)に準じ、方位に従って一辺４mグリッドを基本とするが、本遺跡では任意の点を設けてこれを基準として、一辺20mの大グリッドのみを設定し、その基線の南側と西側に幅１mのトレンチを設け調査を行った。

試掘調査は14日から開始し、道路の南側を600㎡調査した。しかし焼土遺構を９基検出した以外には出土遺物は全くないため、調査対象を道路の北側に変更した。この結果Ｂｂ－５においてⅠ層から土器片２点の出土をみたので、周辺を任意に拡張したところ、Ⅰ層からⅢ層上面にかけて計41点の土器片が出土した。更に、分布調査時および今回資料が表採されていた地点（Ｅｃ－11ほか）を任意に約23㎡調査したが、土器微細破片７点出土したに留まった。

3　遺跡の層序（第74図）

層位およびその性情は、腐植土が未発達のこともあり、銅屋（２・３）等とは若干異なる。

第Ⅰ層a　黒色土　耕作土であり全面に認められる。炭化物粒を含み、やわらかい。その平均層厚は15㎝であるが、南側の地区では薄く、10㎝前後である。

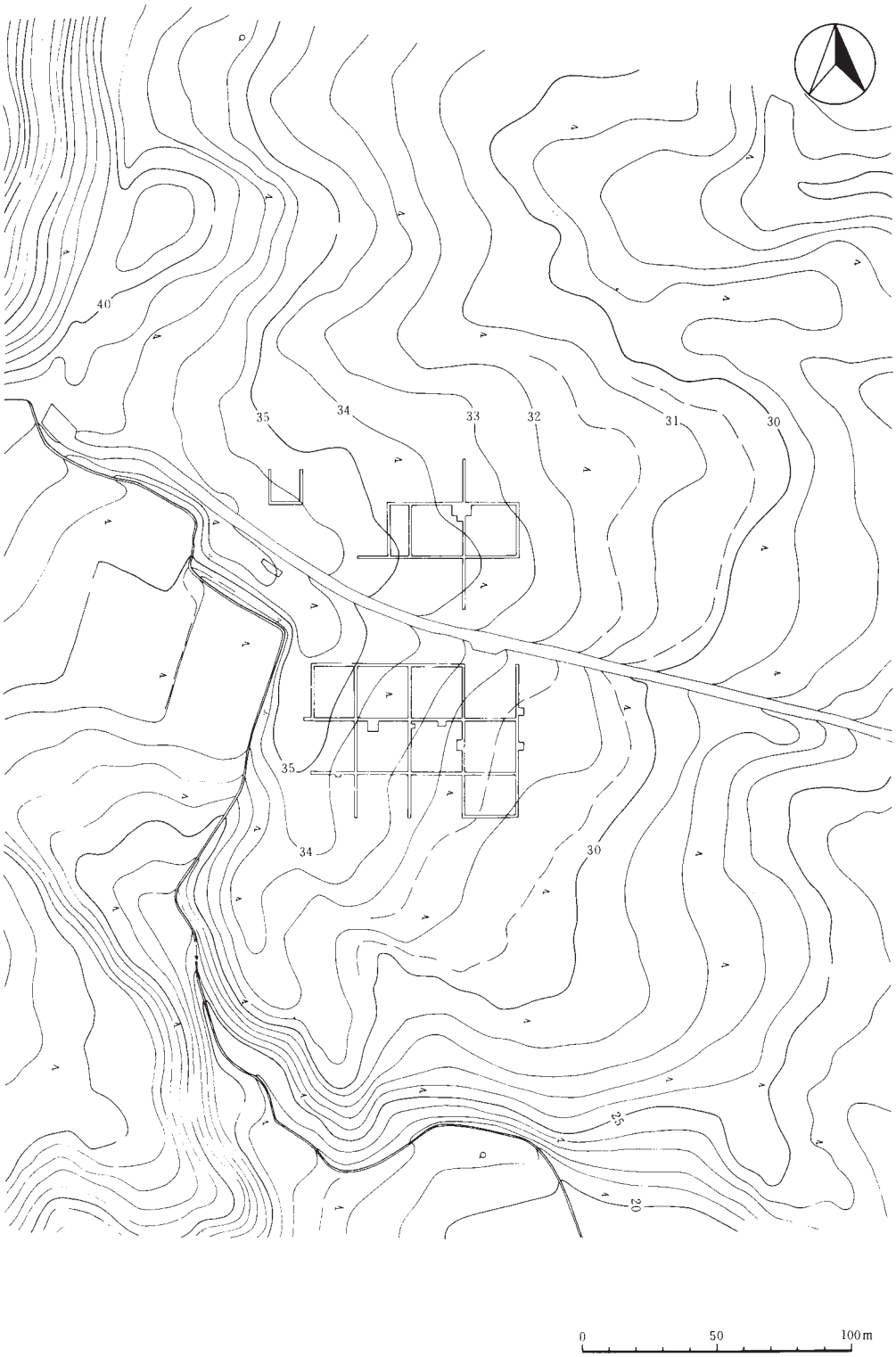


図72　前坂下(10)遺跡地形

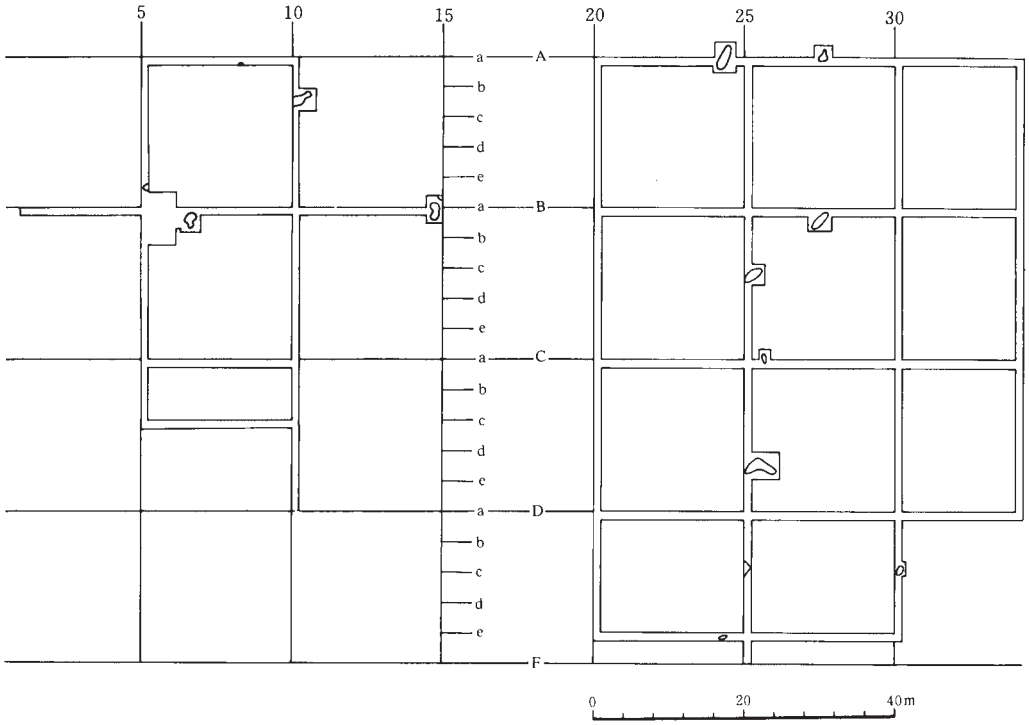


図73　前坂下(10)遺跡グリッド・遺構配置

第Ⅰ層b　漆黒色土　工事用道路の南側の地区にのみ存在するもので、ロームの小ブロックを多く含むとともに、水分に富む。その平均層厚は８㎝である。

第Ⅱ層　暗褐色土　銅屋（２・３）の第Ⅲ層に相当するもので、多量のローム粒を含み、一部にロームの小ブロックを含む。場所によりローム粒子の混合量を異にしているため、その色調も若干異なる。平均層厚は12㎝。本層および第Ⅲ層上面にかけて縄文後期土器片が見られた。

第Ⅲ層　黄褐色土　ローム漸移層である。

第Ⅳ層　黄褐色土　ローム層である。

4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構（第73図）

焼土遺構のみである。本遺跡ではその精査は行わず、すべて平面プランの確認に留めた。合計15基検出したが、その規模は１ｍ×0.6ｍ～４ｍ×２ｍと様々である。前坂下(9)において述べているように、その掘り込みは第Ⅰ層直下からなされており、また、生焼けの炭化物が混じ

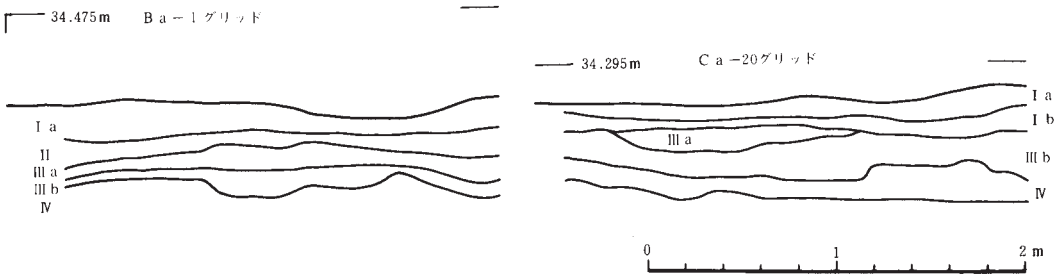


図74　前坂下(10)遺跡基本層序

る等、時期的にかなり新しいものといえよう。

（2）出土遺物（第76図）

すべての縄文時代の後期十腰内Ⅰ式土器片であり、使用の痕跡をとどめていない自然礫２点以外の石器・剥片は出土していない。破片総数は58点で、Ｂｂ－５グリッド及びその周辺から45点、Ｅｃ－11グリッドからの出土資料７点、更に、後者周辺からの表採資料６点である。

Ｂｂ－５グリッド出土資料のうち深鉢形土器の胴部無文破片１点を除き、すべて同一個体である(1)。復原はできないが、口径20.4㎝の深鉢形で６ケの小波状口縁をなすと考えられる。口唇部は肥厚するが、一部に肥厚しない部分も認められる。口頸部文様帯は５㎝と狭く、上下沈線文間に長方形文様を配している。胴部は網目状撚糸文であるが、施文後器面を再調整している。胴部下半は無文である。

Ｅｃ－11グリッドの発掘・表採資料数は少ないが、４個体認められた。

２・３は、胴部に沈線による網目状文を施文とした深鉢形土器。４・５は、ＲＬの縄文のみを施文したものであるが、胎土・焼成等が異なる別個体の土器である。ほかに口縁部に２本の平行沈線文を有する微細破片がある。

5　小結

１辺20mの大グリッドを設定し、各基線に沿った幅１mのトレンチで広範囲に調査を実施し、遺跡の中心部を把握しようと努めた。この結果933㎡を調査したのであるが、縄文後期十腰内Ⅰ式の深鉢形土器数個体分の土器片が、かなり離れた２地点で出土したに留まり、石器の剥片すら出土していない。したがって石器は分布調査時に採集された剥片石器が１点だけである。このような状況から、調査対象地域内に遺跡の中心部が存在するとは考えられず、非常に一過性的な性格の強いキャンプサイトと考えざるを得ない。しかし、松林のため、調査できなかった本台地南端部に、遺跡の中心部（ベースキャンプ）が存在しないとも断言出来ないのであり、

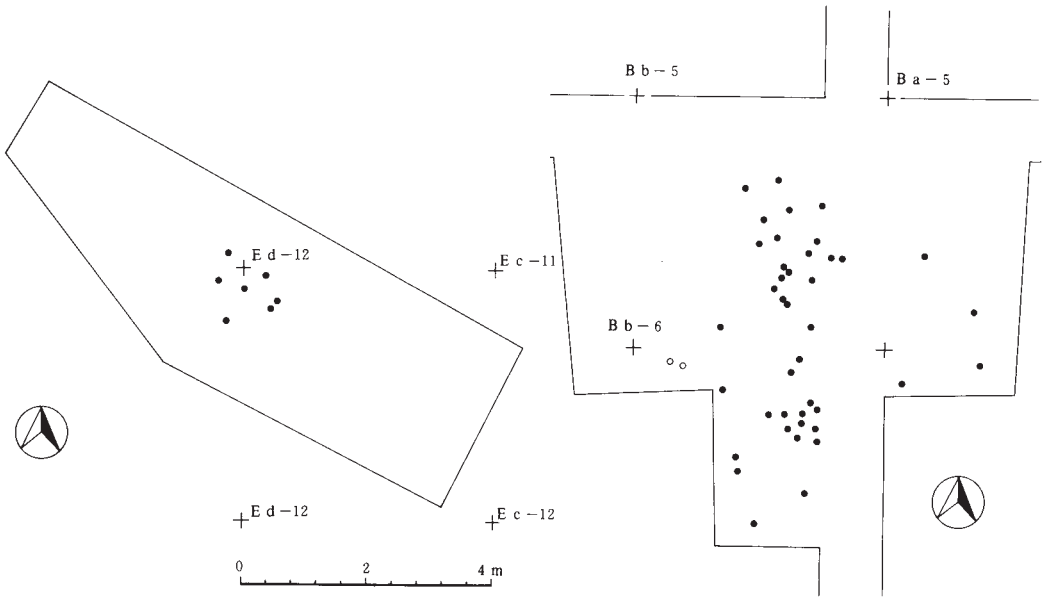


図75　前坂下(10)遺跡遺物分布

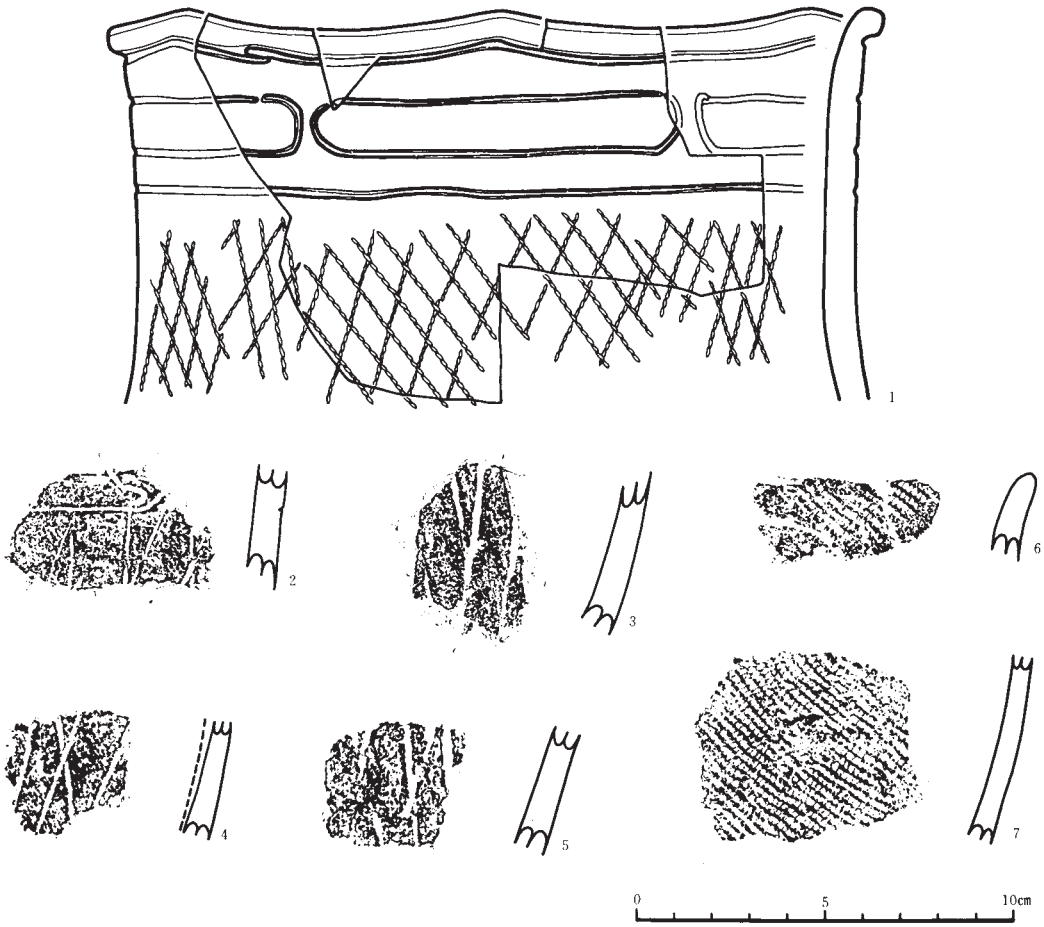


図76　前坂下(10)遺跡出土遺物

仮に存在した場合には、我々が調査した範囲はその遺跡の外縁をなす部分とみなさざるを得ないのである。したがって、今回の試掘調査の結果では不確実な要素が多い。

焼土遺構は、すべて平面プランの確認に留めたが、そのあり方は銅屋(2)、前坂下(9)等と何ら変わるところがない。また、その分布も密度の差こそあれ、地域が限定されているわけではなく、かなり広範囲に分布していると思われる。試掘調査の対象地域である老部から小田野沢に至る地域は、腐植土の発達が悪いこともあるが、焼土遺構の掘り込み面が第Ⅰ層直下であることと、生焼けの炭化材を含むことからすれば、かなり新しい時期（近世～近代）の所産といえよう。この地域の開拓と関係するものではなかろうか。

（三宅　徹也）

写真24　前坂下(10)遺跡

第14節　前坂下(11)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下216ほかに所在する。

老部地区共同基地の北方約1.8㎞の地点で、国道を西へ約50m入った洪積台地上に立地している。現汀線からは西へ約 1 ㎞離れている。遺跡西端の標高は約35mで、東側に緩く傾斜しており、南側を幅約1mほどの小河川が流れている。台地は樹齢20～30年ほどの松の疎林となっており、その間隙にはカヤが密生している。この付近は近年土取りが行われ、削平されている。

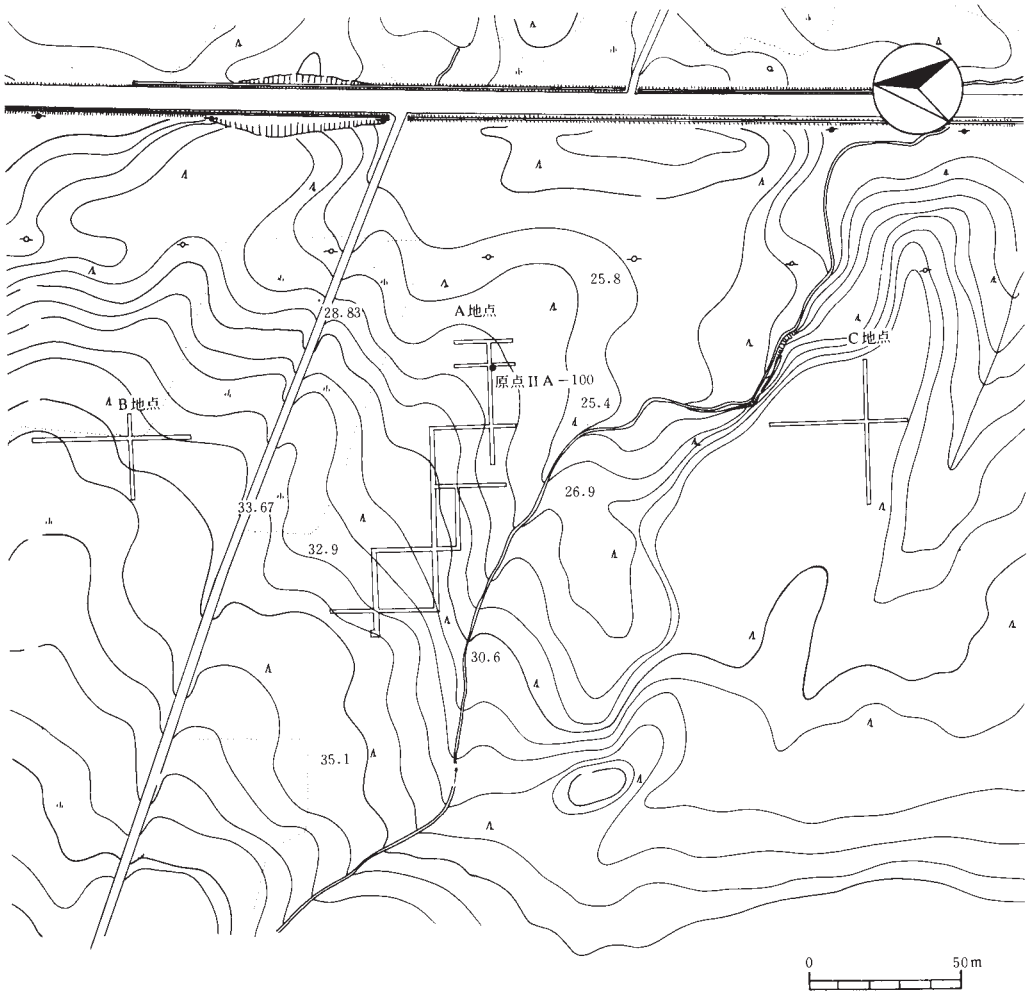


図77　前坂下(11)遺跡地形・調査区配置

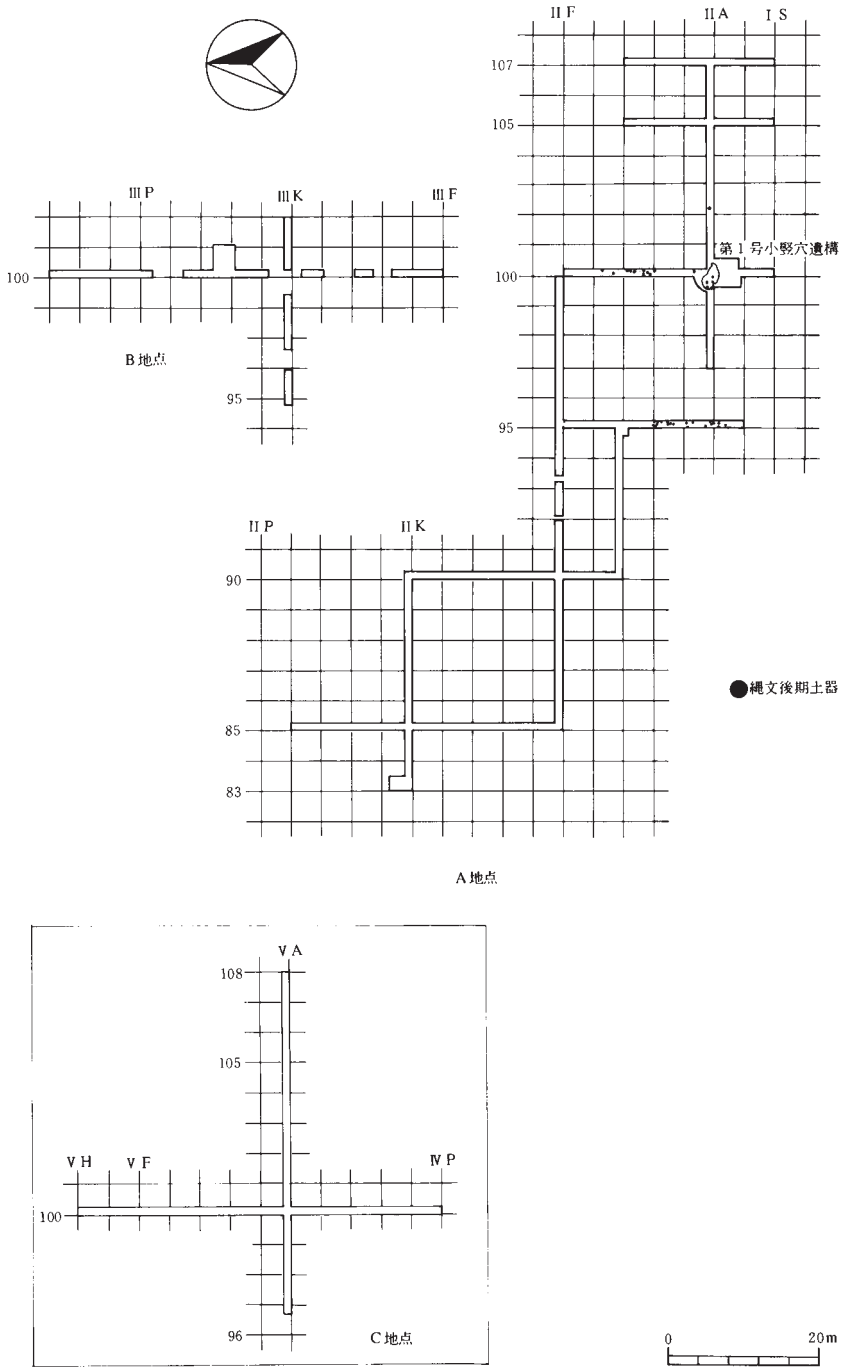


図78　前坂下(11)遺跡グリッド・遺構配置

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査では、フレイク10点が表面採集されている。このため今回の試掘調査では、遺跡の時期・性格及び範囲を把握することを目的とした。

遺跡の主体部と思われる台地をＡ地点、Ａ地点から農道を挟んで北側の小台地をＢ地点、更にＡ地点の南側を流れる小河川の対岸の台地をＣ地点とし、各々調査を行うことにした。８月上旬にカヤを刈り払い、８月下旬にグリッドを設定した。20m単位のメッシュを組み、グリッドラインに沿って１m幅のトレンチを設け、Ａ地点から粗掘りを開始した。開始早々、縄文時代後期前葉と思われる土器の破片が多数出土した。更に小竪穴遺構や配石遺構と思われる集石群を検出したが、この集石群は精査の結果、ローム層直上に包含される自然堆積物であることが判明した。次いでＢ・Ｃ地点の調査を行ったが、Ｂ地点は広範囲にわたって地山のローム層まで削平されていることが判明したため調査を中止した。両地点共に遺構及び遺物は全くなかった。

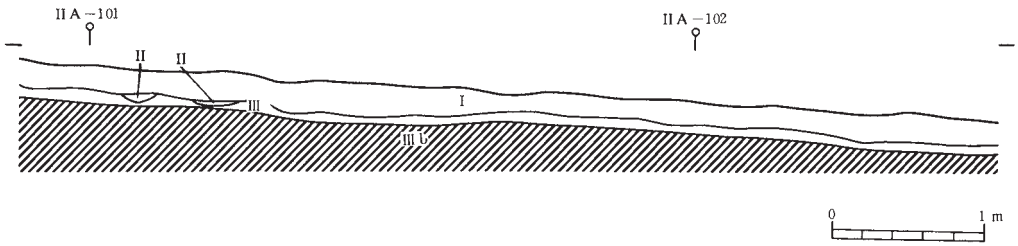
Ａ地点で検出した小竪穴遺構の精査に多くの日数を費し、全作業が終了したのは10月中旬である。試掘面積は462m²である。

3　遺跡の層序

本遺跡のＡ～Ｃの各地点のうち、遺物が出土したのはＡ地点のみである。このＡ地点の層序は、場所により異なった様相を示すが、おおむね次のように区分できる。

第Ⅰ層は表土で、耕作されている層である。

第Ⅱ層は褐色のシルト層で、縄文時代後期前葉の遺物を包含する。Ａ地点のほぼ全域に堆積



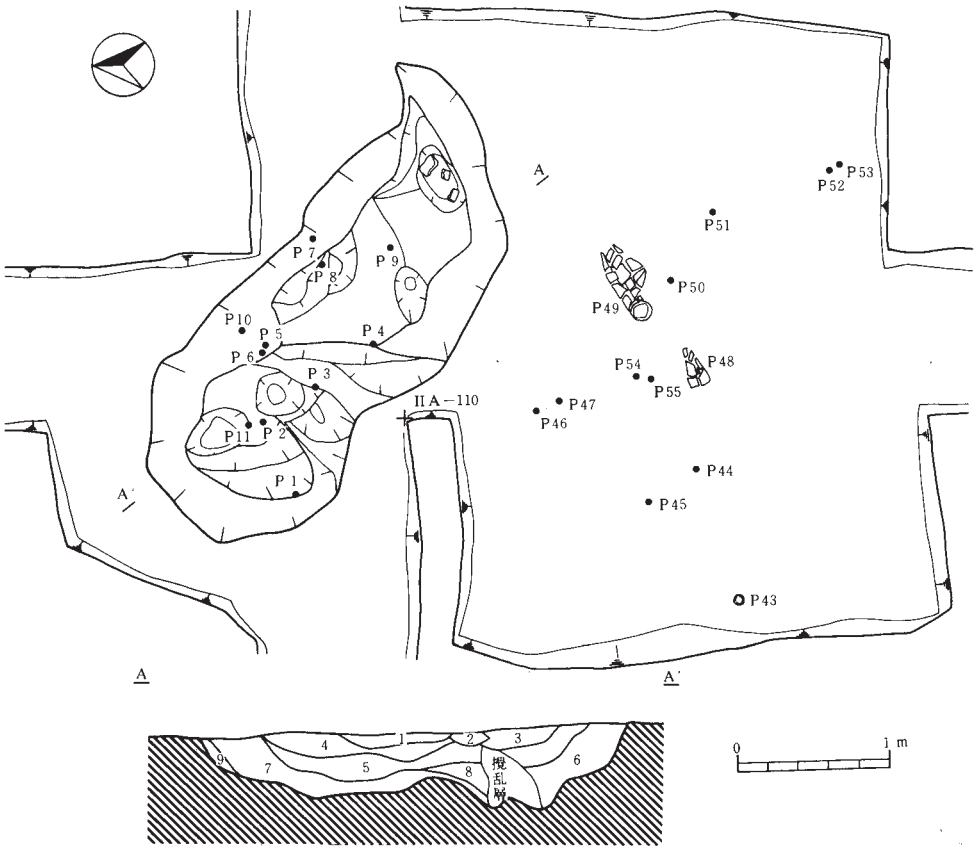
前坂下(11)遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	黒褐色 10YR3/2	シルト	草木根混入	耕作土	
Ⅱ	暗褐色 7.5YR3/3	シルト		自然堆積	一部削平されている
Ⅲa	褐色 10YR4/6	ローム	ロームに腐植土混入	地山	
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム		地山	

図79　前坂下(11)遺跡基本層序

しているが、東・南側の一部では削平されている。

第Ⅲ層はローム層で、その性状から第Ⅲa層と第Ⅲb層とに細分される。第Ⅲa層は褐色を呈し、褐色シルト層と第Ⅲb層のローム層との漸移層である。



第１号小竪穴遺構堆積土一覧

層　位	土　　色	土　　性	混　入　物	層の形成	備　　考
1	褐　色 7.5YR4/3	シルト			
2	暗褐色 7.5YR3/3	シルト			縄文後期土器破片含む
3	暗褐色 10YR3/3	シルト	ローム粒混入		
4	暗赤褐色 5YR3/4	シルト	焼土粒多量、炭化物微量		
5	極暗赤褐色 5YR2/3	シルト	焼土粒、炭化粒		縄文後期土器破片含む
6	褐　色 10YR4/6	粘土質シルト			
7	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト			
8	暗赤褐色 5YR3/3	シルト	炭化粒多量		
9	黄褐色 10YR5/6	シルト質粘土			

図80　前坂下(11)遺跡第１号小竪穴遺構

4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

表３のとおりである。このうちＡ地点で確認された集石群は、当初、配石遺構とも考えられたが、調査の結果、ローム層上部に包含される自然堆積による礫群の一部であることが判明した。また、遺跡全体で計28基もの性格不明の落ちこみを確認したが、平面確認に留めたため、その性格を明確にすることができない。

表３　前坂下(1)遺跡遺構等一覧

	Ａ　地　点	Ｂ　地　点	Ｃ　地　点	計
小竪穴遺構	１基	0	0	1
集石群	4	0	0	4
風倒木痕	1	1	4	6
風倒木痕？	1	0	1	2
性格不明の落ちこみ	23	3	2	28

小竪穴遺構（図80）

調査区ＩＴ～ⅡＡ－99　100の、第Ⅲa層上面で不整楕円形プランの黒色の落ちこみを確認した。確認面からの深さは最深部で55㎝である。壙口径の計測値は長径320㎝、短径128㎝で、壙底径は長径259㎝、短径81㎝である。遺構の底面はしまりがなく、起伏が多い。壁はゆるやかに外傾している。遺構内の堆積土は９層に分けられ、断面からみて自然堆積と思われる。覆土から縄文時代後期の十腰内Ｉ式に比定される土器片が11点出土した。

本遺構は、確認面が明確な割には壁、床面がはっきりせず、すぐ南側に位置する環状形の落ち込みと共に、風倒木痕である可能性が強い。

（2）出土遺物

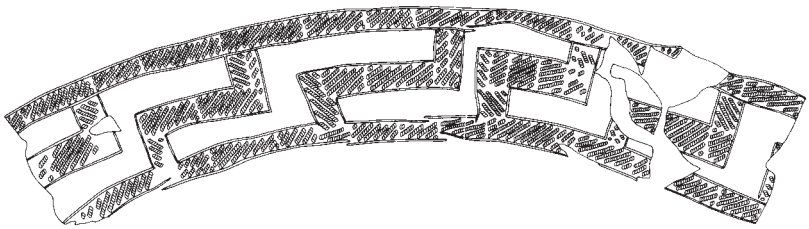
〔土器〕

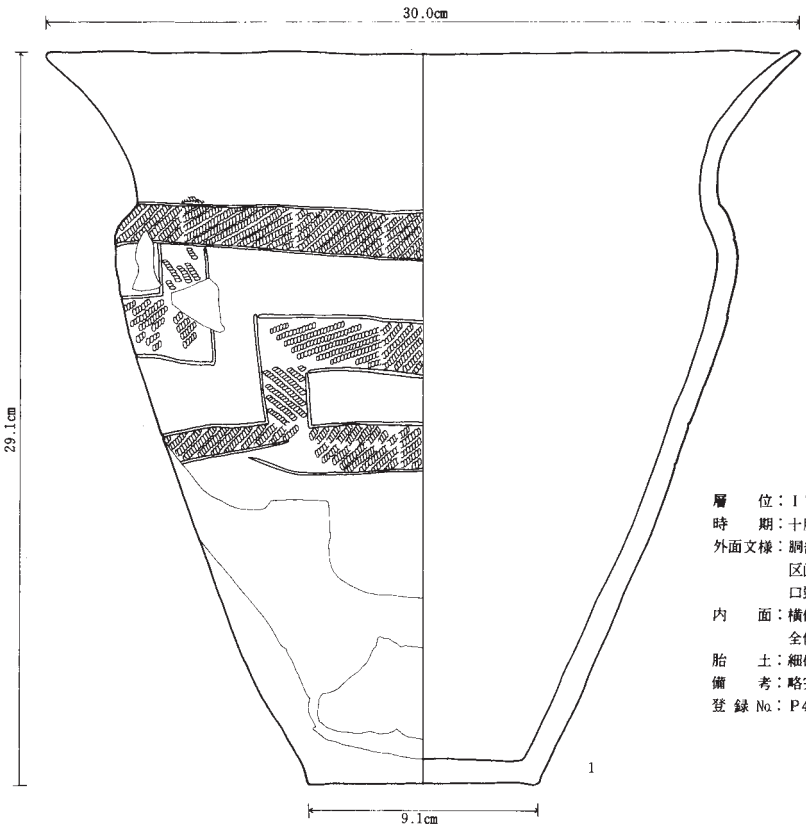
縄文時代後期の十腰内Ｉ式に比定される土器片が出土した。土器以外の出土はない。出土した土器片は、器形上から深鉢形・台付鉢形・壺形に分類される。

〔深鉢形〕

図81は略完形品である。器形は平縁で、口縁は「く」字形に大きく外反し、胴部上部でゆるくふくらむ。

文様帯は口頸部の下から胴部上半に及ぶ。口頸部及び胴部下半から底部にかけては無文である。文様は、沈線によって区画されたカギ状を構成する磨消縄文で、５単位施文されている。区画文内の縄文は、単節（ＬＲ）を横方向に回転させたものであるが、一部縦方向に回転施文している。外面は横位または縦位に、内面は横位に丁寧に調整されている。胎土に細砂粒を含有し、焼成は





層　　位：ＩＴ－100 II層
時　　期：十腰内Ｉ式
外面文様：胴部上半部に、沈線による
区画文、区画文内にＬＲ縄文、
口頸部及び胴部下半部は無文
内　　面：横位調整
全体に黒斑あり
胎　　土：細砂粒及び粗砂粒混入
備　　考：略完形土器
登 録 No.：Ｐ49

図81　前坂下(11)遺跡出土土器(1)

やや不良で、内面に黒斑がみられる。

図82－１は略完形品である。平底で底部から口縁部へ向かって外反する。口縁部が欠損しているため、その部分の形状は不明である。無文で、外面の一部に炭化物が付着している。

図82－２は、胴部下半部から底部にかけてのもので、小型の深鉢形を呈するものと思われる。平底で、底部から胴部に向かって外反する。無文で、風化のため調整痕は不明である。胎土に多量の細砂粒を含有し、焼成は不良である。

図82－４は口縁部破片である。平縁で若干外反する。無文で、内外面とも丁寧に調整されている。

図82－５は口縁部破片である。平縁で若干外反する。無文である。

図82－６は口縁部破片である。平縁で、口縁部は直立する。単節縄文（ＬＲ）を横位に回転施文した後、口縁部に平行な２条の沈線を巡らし、更にその下部に沈線を用いて曲線を描いている。平行沈線の下部は縄文を磨消している。

図82－８～10は口縁部及び胴部の破片である。ゆるい波状口縁で若干外反する。突起部には刻目を有する。口縁部に平行な３条の沈線を巡らし、その下には沈線により曲線が描かれている。内外面とも丁寧に調整され、胎土に細砂粒を少量含有する。

図82－11は胴部破片である。無文である。風化のため調整痕は不明である。

〔壺形〕

図82－12は口頸部の破片である。頸部が内湾し、胴部が張る壺形を呈する。波状口縁で、口唇部に刻目を有する。下部に1条の沈線が施されている。胎土に細砂粒及び粗砂粒を含有する。

〔台付鉢形〕

図82－３は台部付近の破片で、台部下部及び胴部が欠損している。台部に２条の沈線が施されている。

〔器形不明〕

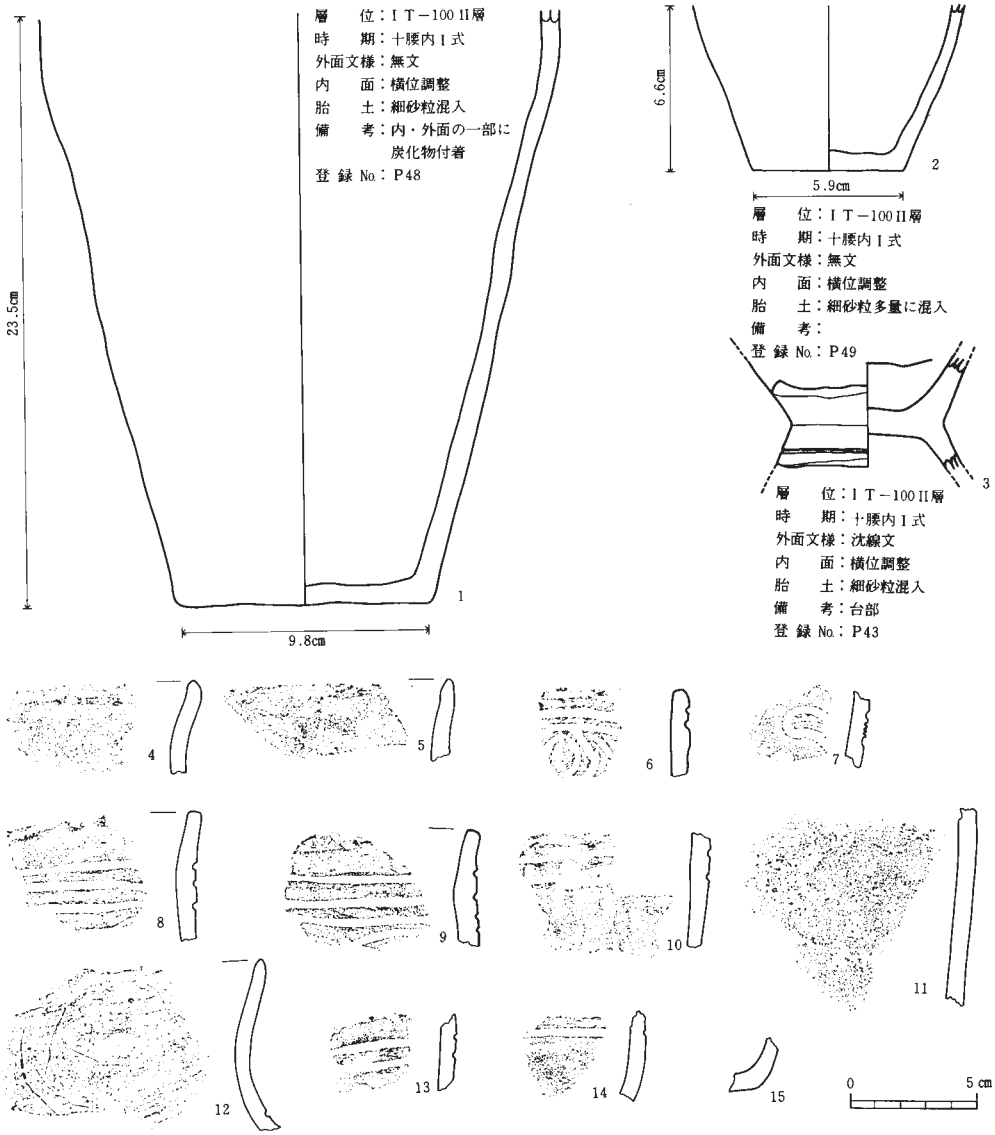
図82－７は胴部破片で、文様は沈線により曲線を描いている。

図82－13は胴部破片で、器面に２条の沈線が施されている。内外面とも丁寧に調整されている。

図82－14は胴部破片で、器面上部に１条の沈線が施されている。

図82－15は底部破片で平底である。器形は鉢形であるが、深鉢形、浅鉢形のいずれか不明である。

これらの外、60点ほどの小片や細片が出土した。ほとんど胴部の細片であるが、深鉢形を呈するものが大部分を占める。細片のうち、器厚が３㎜ほどで内外面とも丁寧に調整された土器片が１点出土したが、これは浅鉢形を呈するものと思われる。また、口縁部の破片は４点で、



土　器　観　察　一　覧

図版	層位	部位	外面文様施文法（地文）	内面調整	時期	備考	登録番号
4	第1小竪2層	口縁部	無文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P11
5	〃	口縁部	無文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P7、10
6	〃	口縁部	沈線文　（ＬＲ縄文）	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P 8
7	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P 2
8	ⅡＢ－95Ⅱ層	口縁部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	同一個体 細砂粒混入	P 7
9	ⅡＣ－95Ⅱ層	口縁部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		P20
10	ⅡＢ－95Ⅱ層	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		P1、2、3
11	ⅡＥ－100Ⅱ層	胴部	無文	不明	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P22
12	ＩＴ－100Ⅱ層	口頸部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒、粗砂粒混入	P52
13	ⅡＢ－100Ⅱ層	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P37
14	ⅡＥ－95Ⅱ層	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P40
15	ⅡＤ－100Ⅱ層	底部	無文	横位	十腰内Ⅰ	細砂粒混入	P27

図82　前坂下(11)遺跡出土土器(2)

うち平縁が３点、波状口縁が１点である。文様は無文のものが大部分であり、沈線を施すものが９点、そのうち２点は磨消縄文に沈線を組合せたものである。

以上のように、口縁部の形状は平縁がほとんどで、波状口縁を呈するものは２点のみである。また、口縁部が若干外反するものがほとんどで、口縁部が折返し風に肥厚するものはない。文様は箆状工具により、平行線あるいは曲線を描く沈線が主体である。沈線と磨消縄文を組合せたものも少数ながら出土した。器面調整は、内外面を指や箆等によって丁寧になでたものである。また、胎土には多量の細砂粒を含有している。

このような特徴を有する本遺跡出土の土器は、すべて縄文時代後期の十腰内Ⅰ式土器（今井磯崎：1968、磯崎：1964）に比定されるものである。この中で、図81の深鉢形土器は、口頸部に広い無文帯を有し、口縁部が大きく外反し、施文文様はカギ状文である。十腰内Ⅰ式に比定される遺跡の中で、カギ状文の出土例は少ない。十腰内遺跡（今井・磯崎：1968）や近野遺跡（青森県教委：1975・1977）等で類例がみられるに過ぎない。器形や施文技法、施文文様などの特徴から、この土器は十腰内Ⅰ式の中でも比較的新しい段階のものと思われる。

5　小結

Ｂ・Ｃ地点では、検出遺構も出土遺物もなかったが、Ａ地点では縄文時代後期の十腰内Ⅰ式に比定される土器が比較的多く出土した。調査区ＩＴ～ⅡＦ－95～100の20m×20mほどの範囲で特に密集して出土し、その個体数も10個体は下らない。住居跡の検出にまでは至らなかったものの、土器の個体数や地形から判断して、Ａ地点は、当時生活が営まれていた可能性が強く、縄文時代後期前葉の集落遺跡としてとらえることができよう。

なお、本遺跡の推定面積はＡ地点を中心とする約7,600㎡である。

（大豆頼　秀男）

〔引用・参考文献〕

磯崎正彦（1964）　「後期の土器」『日本原始美術Ⅰ』講談社

今井富士雄、磯崎正彦（1968）「十腰内遺跡」『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会

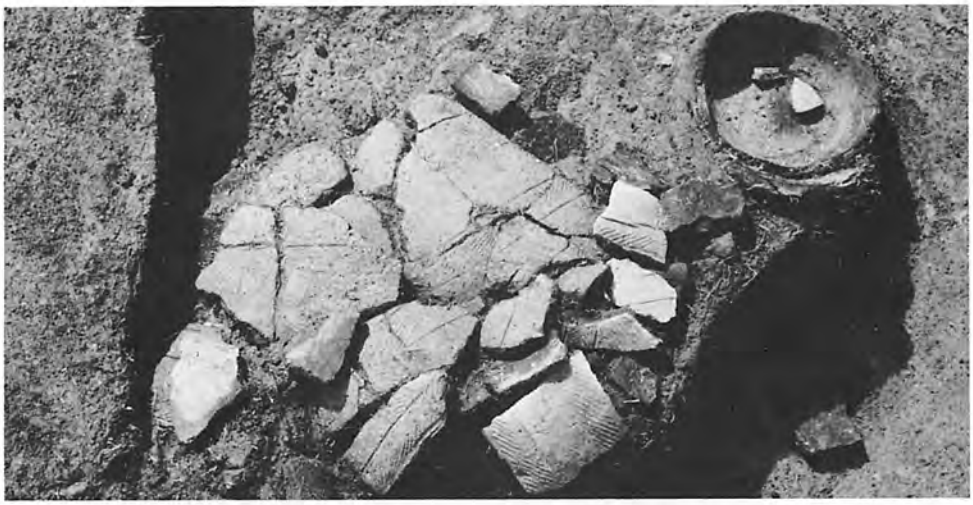
岩手県大槌町教委（1974）　『崎山弁天遺跡』

青森県教育委員会（1975）　『近野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集

〃　（1977）　『近野遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集

葛西　励（1979）　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号　北奥古代文化研究会

小竪穴遺構全景

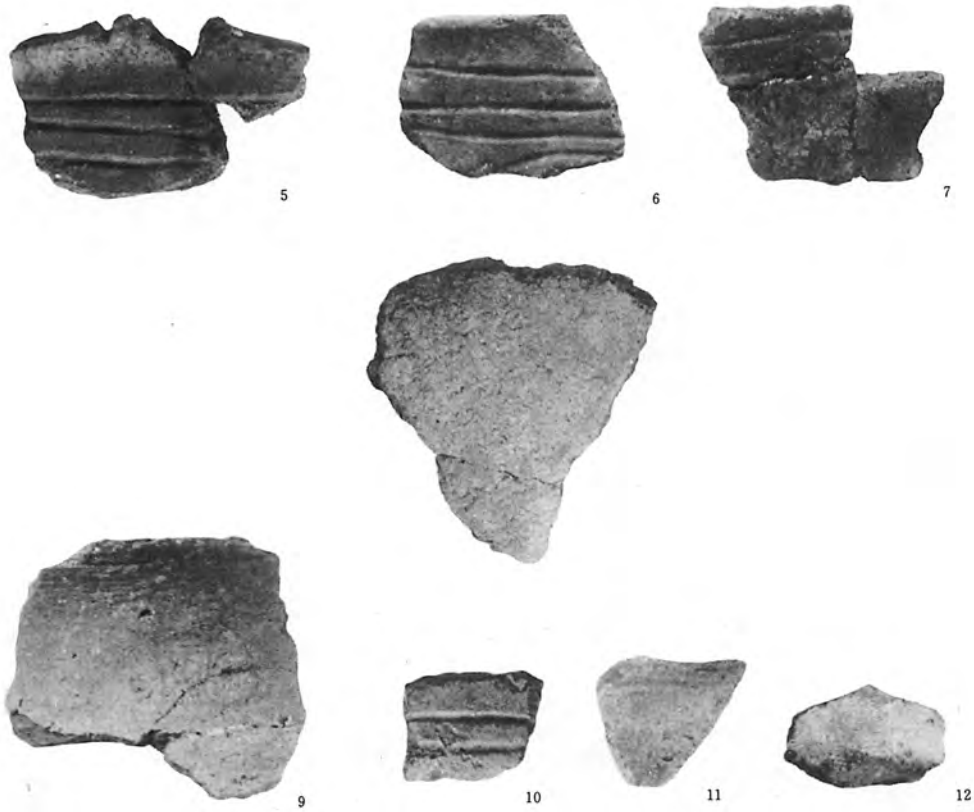


遺物出土状況

写真25　前坂下(11)遺跡

写真26　前坂下(11)遺跡出土土器(1)

小竪穴内出土土器



遺構外出土土器

写真27　前坂下(11)遺跡出土土器(2)

第15節　前坂下(12)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下1250ほかに所在する。

小田野沢地区と老部地区とのほぼ中間の地点に位置し、小老部川南岸の標高約25m～36mの河岸段丘上に立地する。遺跡の中央部を国道338号線が南北に横断している。遺跡は、西側に連なる一切山（標高259.3m）から太平洋に向かって傾斜する台地上にあり、北側は小老部川に対して急崖をなし、東側は湿地帯、南側は遺跡とほぼ同じレベルで連なっている。

遺跡の現状は、国道を挟んだ東半部は松林で、その間隙にはカヤが密生し、西半部では雑木がまばらな荒地となっている。なお、西半部の一部では近年土取りが行われ、削平されている。

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査では、遺跡の東半部から表土下約30㎝に焼土が確認されている。また、西半部には東西に走る空堀と思われる落ちこみ部分があり、館跡の可能性があると指摘された。このため調査にあたっては東半部をＡ地点、西半部をＢ地点と区分し、Ａ地点においては遺跡の時期・性格及び範囲を把握すること、Ｂ地点においては館跡が存在するとすれば、その構造の一部を把握することを主な目的とした。

８月下旬に松の下枝、小雑木及びカヤの刈り払いを行い、８月22日には前坂下(4)遺跡にあったプレハブ（調査仮事務所）をこの地に移動した。刈り払いが終了したあと、Ａ地点に20m単位のグリッドを組み、グリッドラインに沿って１m幅のトレンチを設け、粗掘りを開始した。開始直後、調査区ⅡＬ－100付近で縄文時代後期前葉と思われる土器片と、時期・性格不明の礫群を検出した。Ａ地点ではその後、密に繁茂する松林のため20m単位のグリッドが組めなくなり、南北を基準にした任意の位置に、Ａ～Ｊまでの各々独立するトレンチを設けた。また、Ｂ地点においても８月下旬に踏査を実施し、その後グリッドを設定し、粗掘りを行った。

作業期間の前半は、盆過ぎからの天候不順のため降雨が多く、作業は度々中断又は中止を余儀なくされた。遺構確認のためにトレンチ内を再三削り直さなければならない状態であり、また、礫群の性格を把握するためにもかなりの期日を費した。礫群は当初、環状列石の可能性もあると考えられたが、拡張・精査の結果、人為的なものではなく、埋没谷に自然堆積したものであることが判明した。

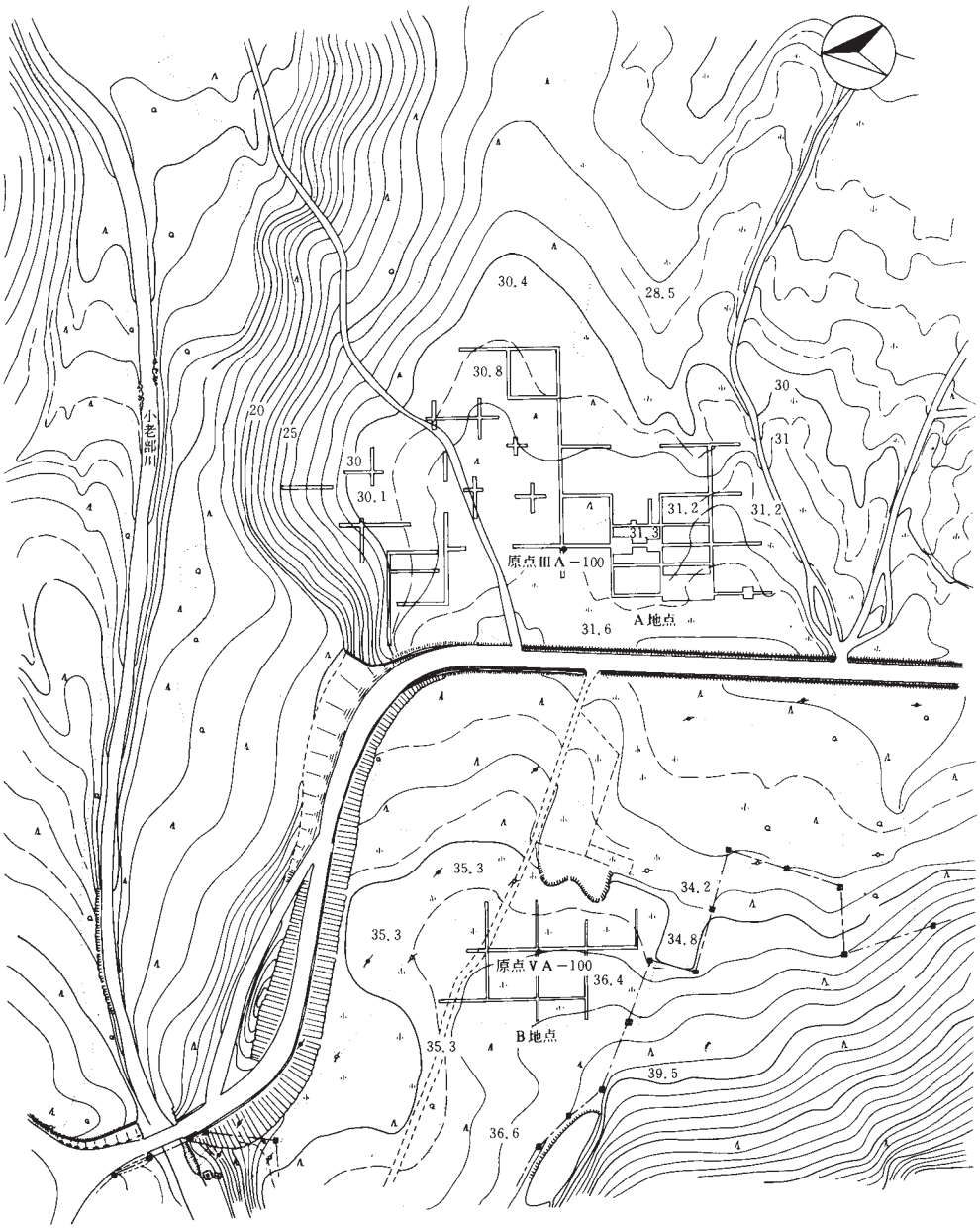


図83　前坂下(12)遺跡地形・調査区配置

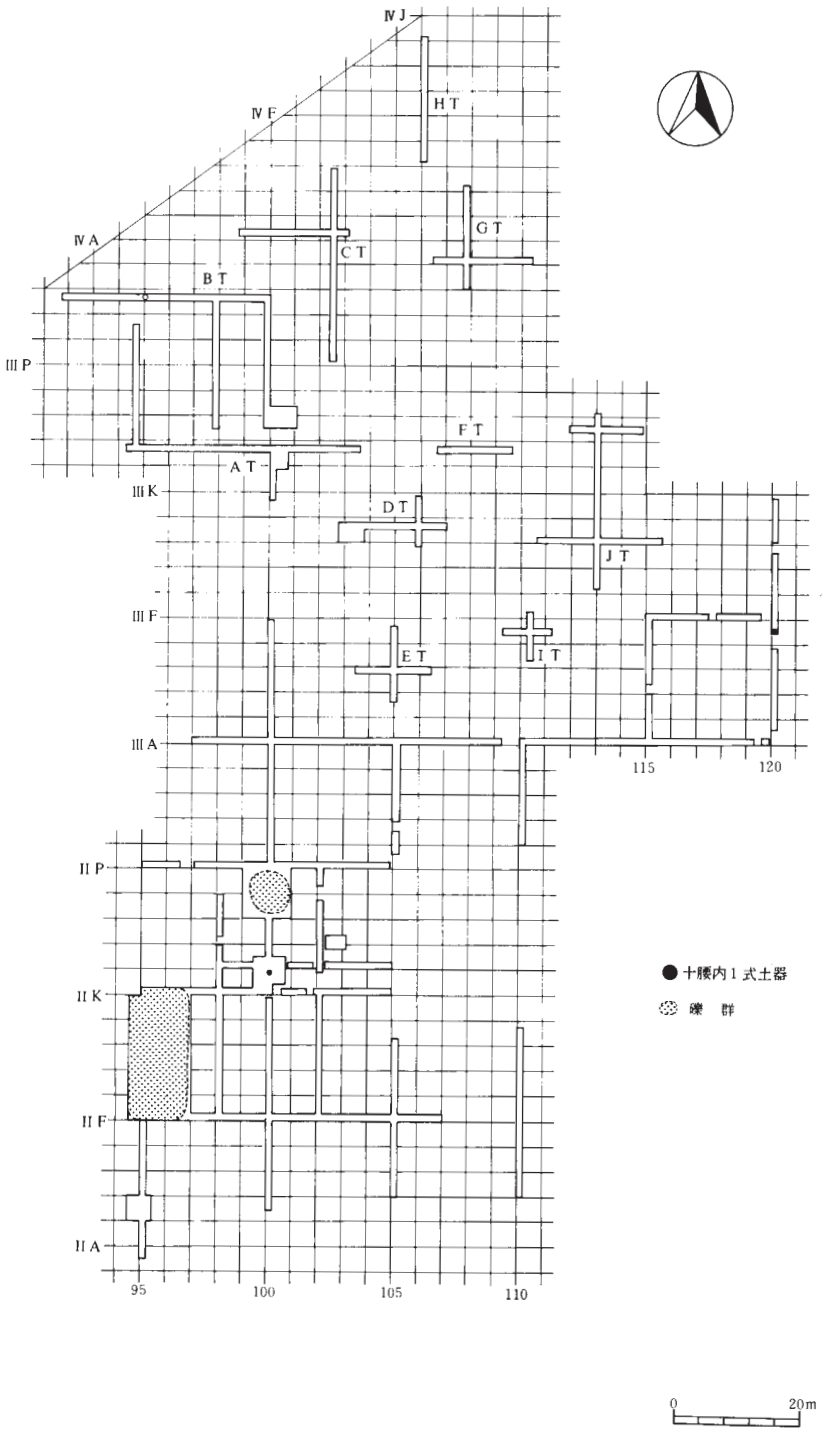


図84　前坂下(12)遺跡Ａ地点グリッド・遺構配置

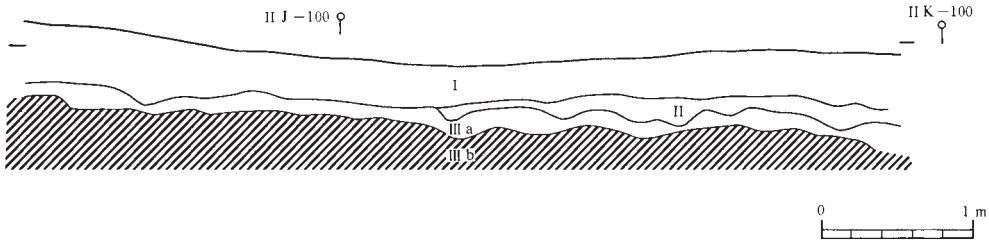
９月下旬には埋め戻しも終り、全作業が終了した。試掘面積は1,557㎡ぜであった。

3　遺跡の層序

国道を挟んで東側のＡ地点と、西側のＢ地点とでは相違がみられる。まずＡ地点での層序はおおむね次のように区別できる。

第Ⅰ層は表土で、現在耕作されている層である。層厚は起伏の高まりにつれ薄くなる傾向がみられる。

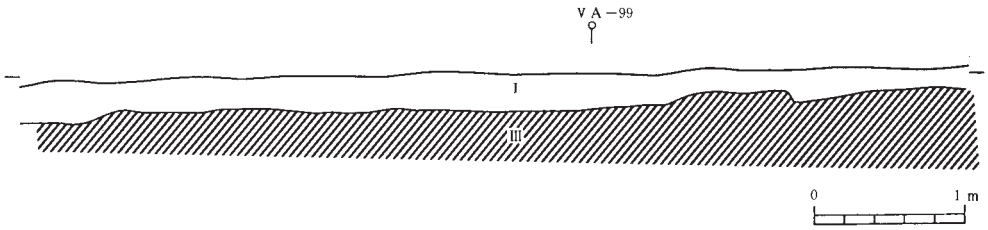
第Ⅱ層は褐色のシルト層で、縄文時代後期前葉に比定される土器片を少量包含する。この層はほぼ遺跡全体に堆積しているが、起状の高位面では部分的にその堆積がみられない。また、ほかの遺跡でみられる黒褐色のシルト層は、傾斜地下の低位面に認められるに過ぎない。



前坂下(12)遺跡Ａ地点基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	暗褐色 10YR3/3	シルト	草木根多量混入LB(2~3%)混入	耕作土	
Ⅱ	褐色 7.5YR4/4	シルト	草木根多少	自然堆積	
Ⅲa	褐色 7.5YR5/6	ローム	黄褐色ローム中に腐植土混入	地山	ローム層への漸移層
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム			

図85　前坂下(12)遺跡Ａ地点基本層序



前坂下(12)遺跡Ｂ地点基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	褐色 10YR4/4	シルト	草木根、ロームブロック	耕作土	Ⅱ層は削平されている
Ⅲ	黄褐色 7.5YR5/6	ローム		地山	

図86　前坂下(12)遺跡Ｂ地点基本層序

第Ⅲ層はローム層で、その性状から第Ⅲa層と第Ⅲb層とに細分される。第Ⅲa層は褐色シルト層からローム層への漸移層で、褐色土とロームとが混り合い、汚れた様相を呈している。第Ⅲb層は汚れのないローム層で、大規模な礫群の殆どはこの層の上部からのものである。

次にＢ地点における層序は、おおむね次の２層に区別できる。

第Ⅰ層は表土で、現在耕作されている層である。近年行われた削平により、ロームブロックがかなりの割合で全体に混入している。

第Ⅲ層はローム層で、Ａ地点の第Ⅲb層に対応する層である。Ａ地点にみられる第Ⅱ層と同一層の堆積はみられない。

4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

Ａ地点で、第Ⅱ層から第Ⅲb層上部にかけて検出した礫群は、本来ローム層上部に包含される自然礫と判明した。攪乱を受けたため、一部の礫は第Ⅱ層中にも包含されたものと思われる。

また、遺跡全域にわたちて、風倒木痕31基と性格不明の落ちこみ12基を検出した。この落ち込みも風倒木痕の可能性が高い。風倒木痕は、マウンドの周囲に褐色土の広がりを有するものと、暗褐色土の中に炭化物や焼土、火山灰をブロック状に含むものとがあり、後者の方が多くみられた。この炭化物等の混入がみられる風倒木痕は、前坂下(2)遺跡で検出された風倒木痕との関連性が高いと思われる。

以上の礫群や風倒木痕など、自然の営力によって形成されたもののほかは、遺構の検出はない。

一万、Ｂ地点においては、遺構は勿論、Ａ地点でみられた礫群や風倒木痕もない。

（2）出土遺物

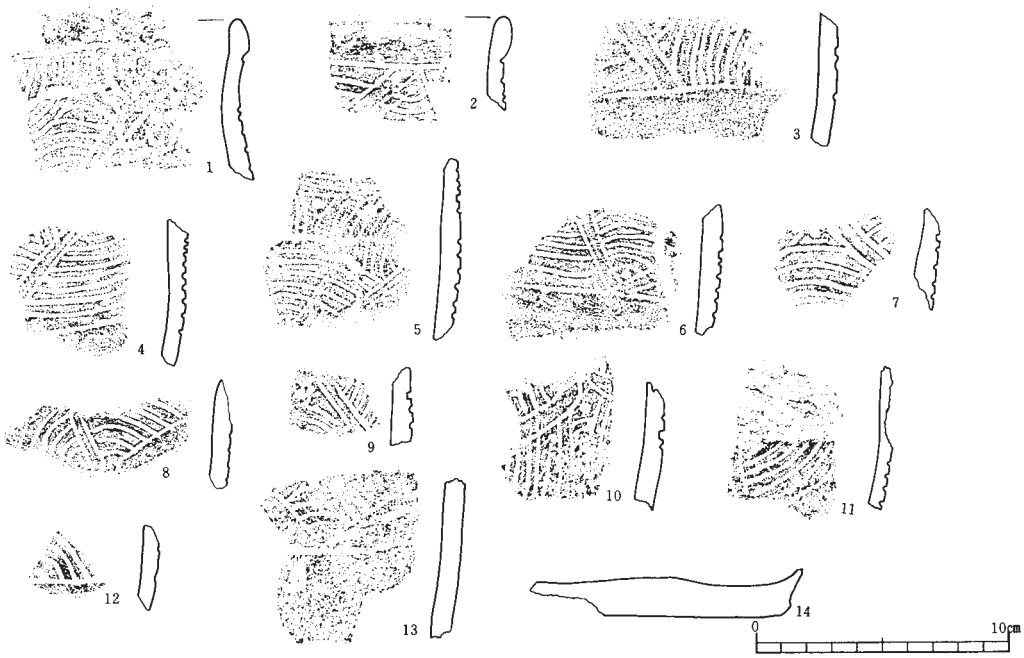
Ａ地点からは縄文時代後期前葉の土器片が出土したが、Ｂ地点からは、遺物は全く出土しない。

〔土器〕（図87－１～14）

調査区ⅡＬ－100付近から縄文時代後期前葉と思われる土器片が数点出土したため、その周辺を５ｍ×５ｍにわたって拡張したところ、70点ほどの土器片が集中的に出土した。いずれも同一個体の破片で、縄文時代後期の十腰内Ⅰ式に比定されるものである。１～２は口縁部破片、３～13は胴部破片、14は底部破片である。

器形は深鉢形を呈する。口縁部は平縁で、折返し口縁風に肥厚し、やや外反する。頸部から胴部下半にかけて幅の広い文様帯がみられ、文様帯の上下は平行沈線により区画されている。文様は沈線による直線や曲線を多用して施文されている。また、文様の分岐点には円形刺突文がみられる。器体下部から底部にかけては無文である。内外面とも丁寧に調整され、胎土に粗砂及び多量の細砂を含有し、焼成はやや不良である。

以上の土器片の他、Bトレンチからは底部の小破片が1点、調査区ⅢE－120からは胴部の小破片が4点出土した。いずれも縄文時代後期の十腰内Ⅰ式に比定されるもので、これらの小破片は同一個体である可能性がある。



土器観察一覧

図版	層位	部位	外面文様施文法	内面調整	時期	備考	登録番号
1	ⅡL－100Ⅱ層	口縁部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ	同一個体 細砂粒、 粗砂粒混入	P2
2	〃	口縁部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
3	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
4	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		〃
5	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
6	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
7	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
8	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		〃
9	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
10	〃	胴部	沈線文＋円形刺突文	横位	十腰内Ⅰ		〃
11	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		〃
12	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		〃
13	〃	胴部	沈線文	横位	十腰内Ⅰ		〃
14	〃	底部	無文	横位	十腰内Ⅰ		〃

図87　前坂下(12)遺跡出土土器

本遺跡においては縄文時代後期の十腰内Ⅰ式の土器片が出土したが、個体数は２～３個体にすぎない。石器その他の出土遺物はない。

5　小結

Ａ地点は、昭和52年度の分布調査で地表下約30㎝に焼土が確認されており、火に関係する遺構の存在が考えられるとされていたが、試掘調査の結果、遺構の検出はみられなかった。Ａ地点全域にわたって31基の風倒木痕と12基の風倒木痕と思われる落ち込みがみられた。そのうちかなりの割合で、火山灰・炭化物と共に焼土がブロック状に入りこんだ状態が確認できた。この焼土は台風などにより樹木がなぎ倒され、更に火災を受けてできたものと思われる。このように分布調査で確認された焼土は遺構ではなく、自然の営力により形成されたものと判明した。

また、Ａ地点において、縄文時代後期前葉の十腰内Ⅰ式に比定される土器片が出土したが、個体数は２～３個体に過ぎず、住居跡等の遺構がなかった。このことから、本遺跡のＡ地点は、日常生活を営むための居住の場というよりも、ハンティング・キャンプ地としての性格を有するものと思われる。

一方Ｂ地点においては、分布調査の段階で館跡と思われるとされ、更に東西に走る空堀の存在があげられていた。しかし調査の結果、堀ではないかといわれていた地点は、埋没谷であることが判明した。更に館の諸施設や遺物も一切みられない。

（大瀬　秀男）

遺跡全景

縄文後期土器出土状況

礫群出土状況

写真28　前坂下(12)遺跡

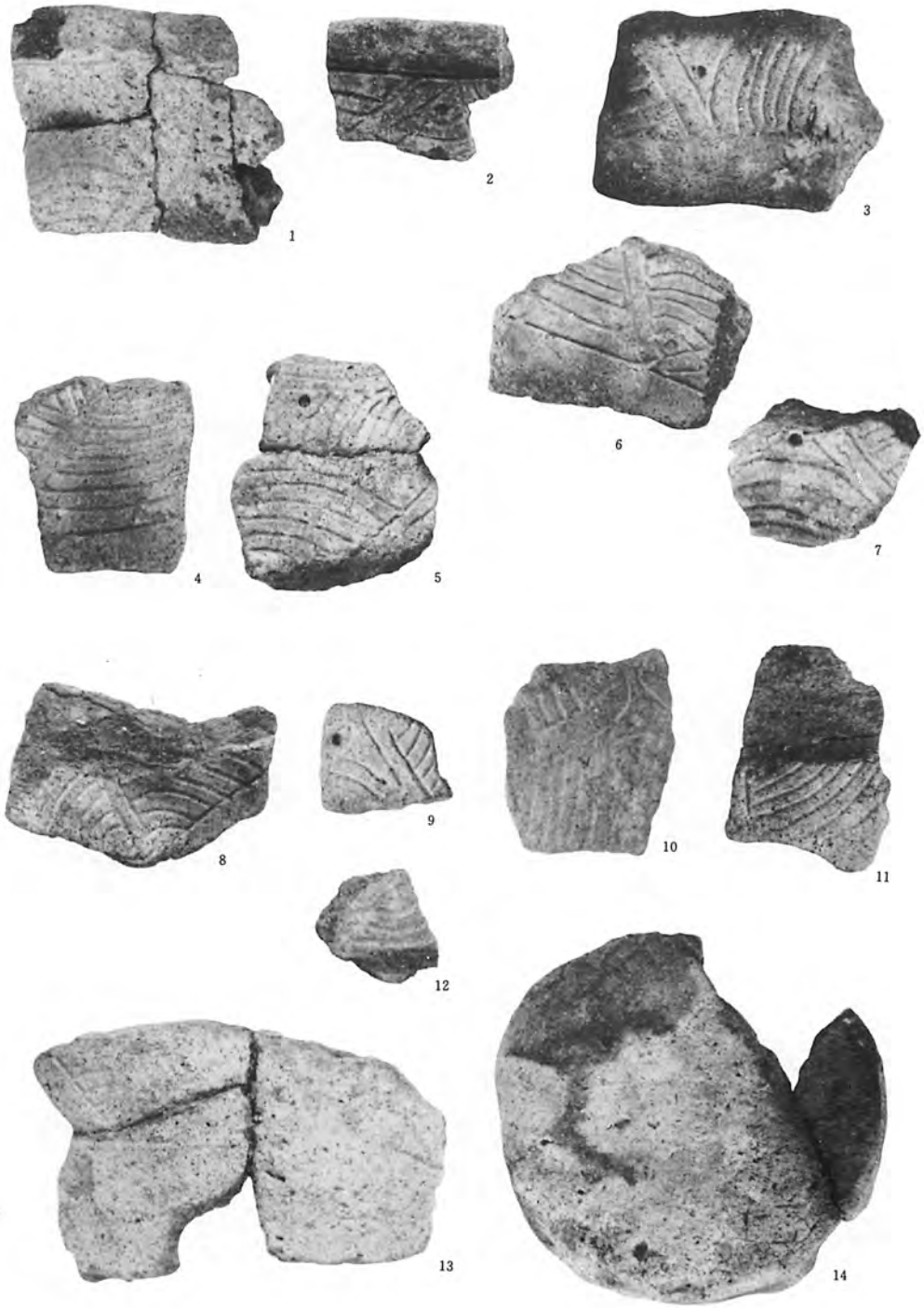


写真29　前坂下(12)遺跡出土土器

第16節　前坂下(13)遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字白糠字前坂下1,120ほかに所在する。

国道から農道を東へ約800mの地点にあり、太平洋の現汀線から約200m離れた、小老部川の南岸の小規模な河岸段丘上に立地する。この段丘は 2 段に区分でき、高位面は標高約6.5m、低位面は標高約 4 mである。段丘の北側は小老部川に面する段丘崖となっており、東側は小老部川に注ぐ小沢により区切られている。小老部川は河口に近く、遺跡のすぐ下流で川幅も広くなり、北に向かって大きく蛇行している。段丘の西、南側は湿地帯で、その一部は近年まで水田として利用されていた。

遺跡が立地する台地上は、高位面では樹齢数十年になる植林された松林となっており、その周囲にはカヤが密生している。また、低位面も松林となっており、その間隙には笹が密生している。なお、遺跡の西方約600mには前坂下(12)遺跡が、小老部川を挟んで北方約350mの地点には南通遺跡がある。

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査では、縄文時代前期前葉と思われる底部土器片 4 点が表面採集されている。このため調査にあたっては、遺跡の時期、性格及び範囲を把握することを目的とした。

8 月下旬にカヤや松の下枝等の刈り払いを行い、 9 月上旬にはグリッドを設定した。20m単位のグリッドを組み、グリッドラインに沿って 1 m幅のトレンチを設け、粗掘りを開始した。作業は木の根のため思うように任せず、特に段丘の低位面では密生する笹のため発掘用具の刃こぼれが相次いだ。調査の結果、段丘の高位面を中心に、縄文時代前期前葉の土器片が30点余り出土した。

本遺跡は昭和56年度に本調査が予定されており、遺構の破壊を避けるため深掘りや拡張等は行わず、 6 日間で粗掘り作業を終えた。10月初旬に遺物を取り上げ、下旬には埋め戻しを行い全作業を終了した。試掘面積は419㎡であった。

3　遺跡の層序

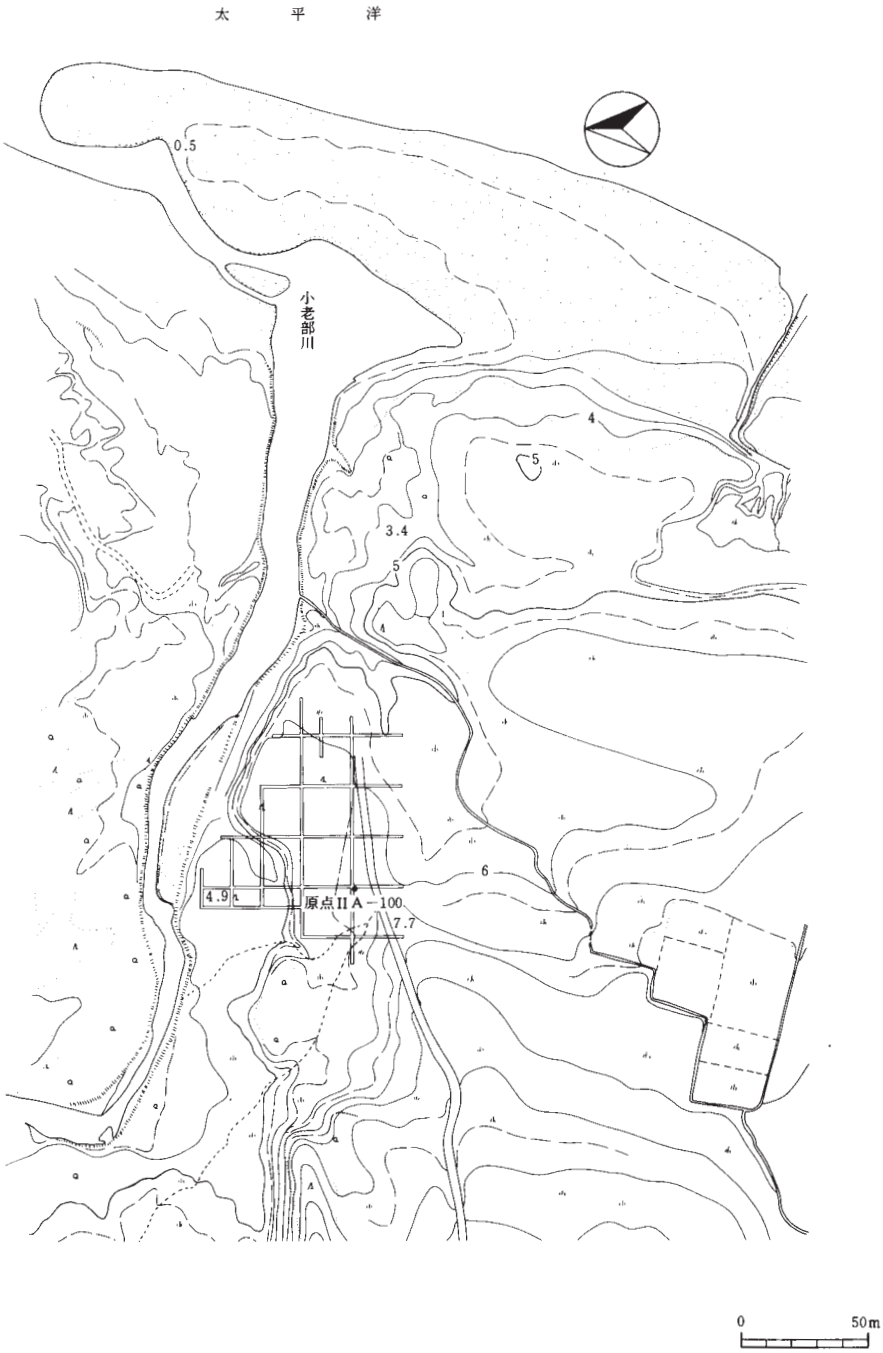
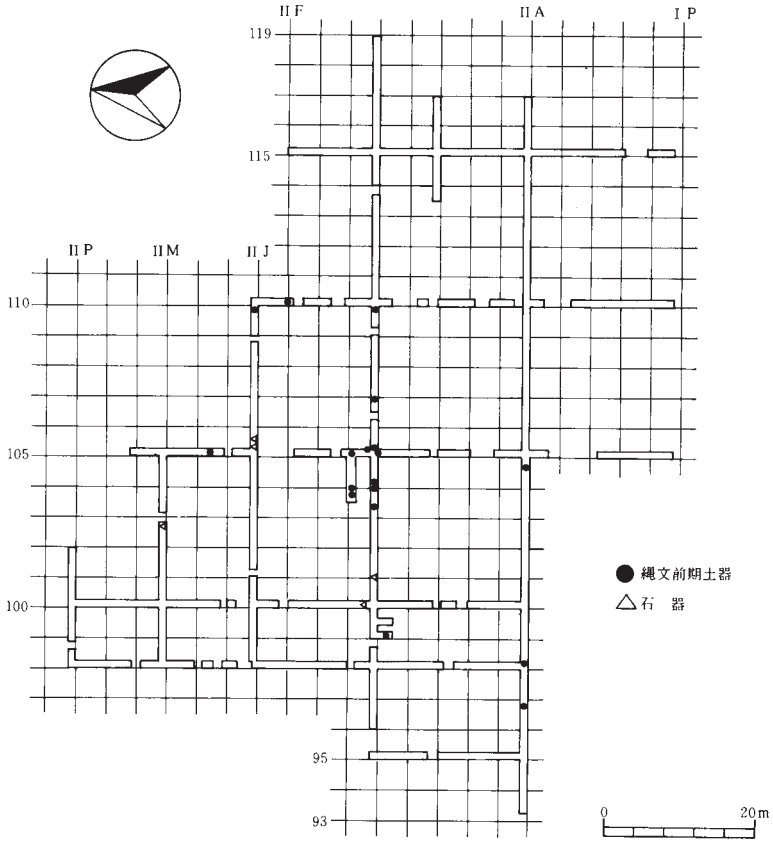
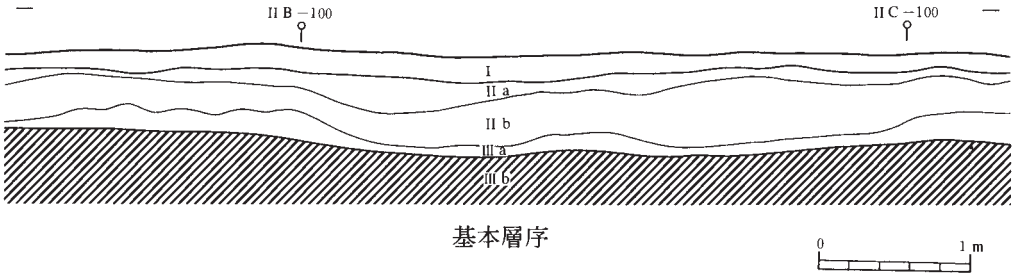


図88　前坂下(13)遺跡地形・調査区配置



グリッド・遺構配置



基本層序

前坂下(13)遺跡基本層序一覧

層　位	土　　色	土　性	混　入　物	層の形成	備　　考
I	黒褐色　10YR3/2	シルト	草木根	耕作土	
II a	暗褐色　10YR3/3	シルト	細砂少量混入	自然堆積	
II b	褐　色　10YR4/4	シルト	細砂少量混入	自然堆積	縄文前期の遺物包含
III a	褐　色　10YR4/6	ローム	ロームに腐植土混入	地山	
III b	黄褐色　10YR5/8	ローム		地山	

図89　前坂下(13)遺跡グリッド・遺構配置・基本層序

現汀線に近いことから砂粒の混入がみられ、現汀線に近づくほど、また、上位の層ほど、その傾向が顕著である。また、段丘の高位面と低位面とでは、堆積状態に相違が認められる。段丘の高位面の層序は、おおむね次のように区分できる。

第Ⅰ層は表土で、攪乱されている層である。

第Ⅱ層はシルト層で、性状により暗褐色を呈する第Ⅱa層と、褐色を呈する第Ⅱb層とに細分される。第Ⅱb層中に、縄文時代前期前葉に比定される遺物を包含している。また、現汀線に近い地点では、Ⅱa層とⅡb層との間に暗赤褐色土層が認められる。

第Ⅲ層はローム層である。性状により第Ⅲa層と第Ⅲb層とに細分される。第Ⅲa層は褐色シルト層とローム層との漸移層で、その下部層である第Ⅲb層は汚れのないローム層である。

次に、段丘の低位面の層序はおおむね次のように区分できる。

第Ⅰ層は表土で、この層の下部より染付の破片が１点出土した。

第Ⅱ層は褐色シルト層である。この下郡層は、粘土層若しくは礫層ではないかと思われる。

4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

昭和56年度に本調査を控えているため、深掘りや拡張を避けた。更に地下に縦横に走る木の根のため、思うように粗掘り作業ができなかった。このようなことから遺構確認は十分ではなく、住居跡等の検出にまで至らなかった。しかし、高位面と低位面から性格不明の黒褐色土の落ちこみを１基ずつ、同じく焼土遺構１基ずつ、更に遺構ではないが、高位面から風倒木痕を２基検出した。

(i) 焼土遺構

２基を検出した。１基はⅡＪ－105区に位置し、第Ⅱ層の上面で確認。３ｍ×１ｍの範囲の部分が火熱を受けて赤色を呈している。ほかの１基は、ⅡＥ－99区に位置し、２ｍ×１ｍの範囲で第Ⅱb層に多量の焼土の混入がみられた。

（2）出土遺物

段丘の高位面を中心として、縄文時代前期前葉と思われる土器片が出土した。散発的な出土状態であるが、高位面の縁辺部に集中する傾向がみられる。更にこの土器に伴うと思われる石器が６点出土した。出土層位は第Ⅱb層である。また、段丘の低位面からは染付の破片が１点出

土した。出土層位は第Ⅰ層である。

(i) 縄文時代の遺物

〔土器〕

本遺跡から出土した縄文時代前期前葉に位置すると思われる土器片は、器形、文様、胎土、焼成、色調などの特徴から3類に分類できる。

《第1類》（図90－1～4）

胴部破片のみ10点の出土であるが、これらはいずれも同一個体の破片であると思われる。器面文様は単節の縄文（ＲＬ）を、一方では横位に、他方では縦位にと異方向に回転施文したものと思われる。内面には指の押え痕が残り、凹凸が明瞭にみられる。胎土に繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

《第2類》（図90－5～9）胴部破片5点の出土である。

5の器面文様は縄端回転文であり、単節の縄文（ＲＬ）による帯状縄文を呈する。内面は素文である。胎土に繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

6の器面文様は単節斜縄文（ＬＲ）で、内面は平滑に調整されている。縄文原体は、ほかの4点よりも細いものを使用している。繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

7の器面文様は、右撚りの0段多条の縄文原体の回転施文による帯状縄文である。各々の帯の上端は、縄端回転により施文されている。内面は平滑に調整されている。繊維をわずかに含有し、焼成はやや不良である。

8の器面文様は単節の縄文（ＬＲ）の縄端を回転させたループ文を呈し、内面は平滑に調整されている。繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

9の器面文様はＲＬの単節の斜縄文で、内面は素文である。胎土に繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

《第3類》（図90－10～19）

本遺跡においては、本類に分類されるものが最も多く出土している。口縁部破片3点、胴部破片5点、底部破片2点の計10点の出土である。いずれも小破片のみで復原できなかったが、器形は円筒形深鉢形を呈すると思われる。

口縁部

10の器形は平縁で口縁部は直立する。口頸部に2条の撚糸圧痕を帯状に巡らすが、口縁部直下表面が剥落しているため、撚糸圧痕がもう1条あるかどうか判然としない。口頸部以下の器面には撚糸圧痕したものと同じ原体（ＲＬ）を横位回転させ施文している。内面は素文で、胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや不良である。

11の器形は平縁で口縁部は直立する。口唇部に撚糸圧痕がみられるが、どのような原体か不

明である。口頸部に綾絡文を施文している。口頸部以下は欠損しているため、どのような文様を施文しているか不明である。内面は素文で、胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや良好である。

12は平縁で、口縁部は直立する。口頸部の文様は、剥落のため明確ではないが、綾絡文であろうと思われる。内面は素文である。胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや不良で炭化物が付着している。

胴部

13の器面文様は単節の縄文（ＬＲ）を横位回転させたものである。内面は素文で胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや良好である。

14の器表面の摩滅が激しく、どのような縄文原体で施文しているか不明である。しかし、胎土や焼成が本類の土器片に極めて類似しており、第３類とした。

15の器面文様は複節の縄文（ＲＬＲ）を横位回転させ施文したものである。内面は剥落のため調整痕は不明である。胎土に繊維を多量に含有し、さらに細礫を少量含む。焼成はやや不良である。

16の器面文様は単節の縄文（ＬＲ）を回転施文したもので、内面は素文である。胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや不良である。

17の器面文様は単節の縄文（ＬＲ）を回転施文したもので、内面は素文である。胎土に多量の繊維を含有し、焼成はやや不良で炭化物が付着している。

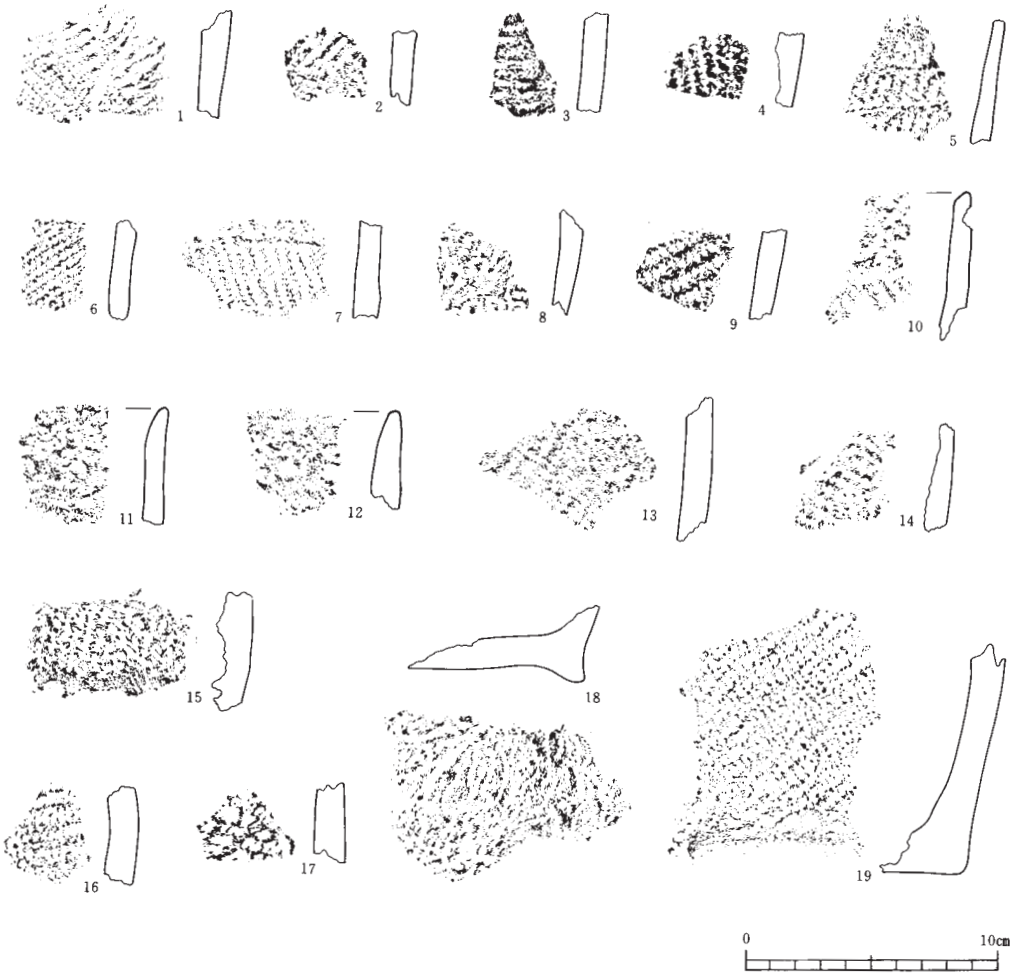
底部

18の器形は、底と器体下部との接点がやや外側に張り出し、上げ底風の平底である。底面の文様は綾絡文で、底部付近にも同様の文様がみられる。胎土に多量の繊維を含有し、また、細礫が比較的多く混入している。焼成はやや不良である。

19の器形は、器体下部と底との接点の張り出しがみられず、平底である。器体の文様は単節の縄文（ＬＲ）を横位に回転させたものである。底面にも同様の文様が施文されている。内面は素文で、胎土に繊維を多量に含有し、焼成はやや不良である。

第３類の土器片においては、器面文様に隆帯を持つものや、内面に条痕若しくは縄文を有するものの出土はない。

以上のように、本遺跡から出土した土器片を第１類～第３類にまで分類したが、施文文様、施文技法から見て、第１類は早稲田５類の一部の土器に、第２類は表館式の一部の土器に比定できるのではないかと思われる。また、第３類は円筒下層ａあるいは同ｂ式に比定できると思われる。ただ、第３類とした底部破片のうち、器形及び底部文様などから、18は深郷田式若しくは円筒下層a式の古い段階のものと考えられ、19はそれに後続する円筒下層ａ若しくは同ｂ



土　器　観　察　一　覧

図版	層位	部位	外面文様施文法（地文）	内面調整	時期	備考	登録番号
1	ⅡF－110Ⅱb層	胴部	（RL縄文）	横位	早稲田5	同一個体 繊維混入	P5
2	ⅡF－110Ⅱb層	胴部	（RL縄文）	横位	早稲田5		P5
3	ⅡF－110Ⅱb層	胴部	（RL縄文）	横位	早稲田5		P5
4	ⅡF－110Ⅱb層	胴部	（RL縄文）	横位	早稲田5		P5
5	ⅡA－98 Ⅱb層	胴部	（RLの縄端回転文）	横位	表館	繊維混入	P1
6	ⅡF－109Ⅱb層	胴部	（LR縄文）	横位	表館	繊維混入	P4
7	ⅡJ－109Ⅱb層	胴部	（O段多条の右撚りの縄文）	横位	表館	繊維混入	P20
8	ⅡI－110Ⅱb層	胴部	（LRの縄端回転文）	横位	表館	繊維混入	P5
9	ⅡF－103Ⅱb層	胴部	（RL縄文）	横位	表館	繊維混入	P15
10	ⅡF－103Ⅱb層	口縁部	RL燃圧　（RL縄文）	横位	円筒下層	繊維混入	P12
11	ⅡF－103Ⅱb層	口縁部	Rの結節による綾絡文、口脣部に燃圧	横位	円筒下層	繊維混入	P14
12	ⅡF－105Ⅱb層	口縁部	綾絡文	横位	円筒下層	繊維混入	P8
13	ⅡF－103Ⅱb層	胴部	（LR縄文）	横位	円筒下層	繊維混入	P13
14	ⅡI－106Ⅱb層	胴部	（原体不明）	不明	円筒下層	繊維混入	P6
15	ⅡE－99 Ⅱb層	胴部	（RLR縄文）	不明	円筒下層	繊維混入	P18
16	ⅡF－105Ⅱb層	胴部	（LR縄文）	横位	円筒下層	繊維混入	P7
17	ⅡF－103Ⅱb層	胴部	（LR縄文）	横位	円筒下層	繊維混入	P17
18	ⅡF－103Ⅱb層	底部	（Rの結節による綾絡文）	不明	前期前葉	繊維混入	P11
19	ⅡF－105Ⅱb層	底部	（LR縄文）	横位	円筒下層	繊維混入	P10

図90　前坂下(13)遺跡出土土器

式に該当するものと思われる。

なお、上記の第 1 類～第 3 類に分類した土器片以外にも、 9 点の土器の小破片が出土した。表面の剥落、摩滅等が激しく分類できなかったが、第 1 類～第 3 類のいずれかに含まれるものと思われる。

〔石器〕

凹石、磨石等、計 6 点の出土である。

《凹石》（図91－ 2 、 4 ）

2 は表面に凹部のほか、擦痕を有する。凹部は 2 箇所で 4 に比較して、極めて浅い。凹部には敲打痕が観察される。敲く、擦る作業が連続的に行われたもので受動的な作業に用いられたと思われる。

4 は凹部の数が表面に 2 箇所、裏面に 1 箇所あり、凹部には敲打痕が観察される。

《磨石》（図91－ 1 、 3 ）

1 は表面に擦痕を有し、敲打痕はみられない。擦痕はスリ面の縁辺部に多くみられ、側面の一部にも擦痕が観察される。

3 は一つの面に擦痕及びスリによると思われる溝を有する。溝の長軸方向に擦痕がみられる。また、縁辺部の一部に敲打痕がみられる。

以上の外、剥片 1 点と、性格不明な礫が 1 点出土した。

図91－ 5 は河原石である。表面に幅 2 ㎜、深さ0.5㎜程度の溝による模様が観察されるが、鋭利な刃器により線刻されたものではない。これが人為的に描かれたものか、風化作用の結果生じたものか不明である。

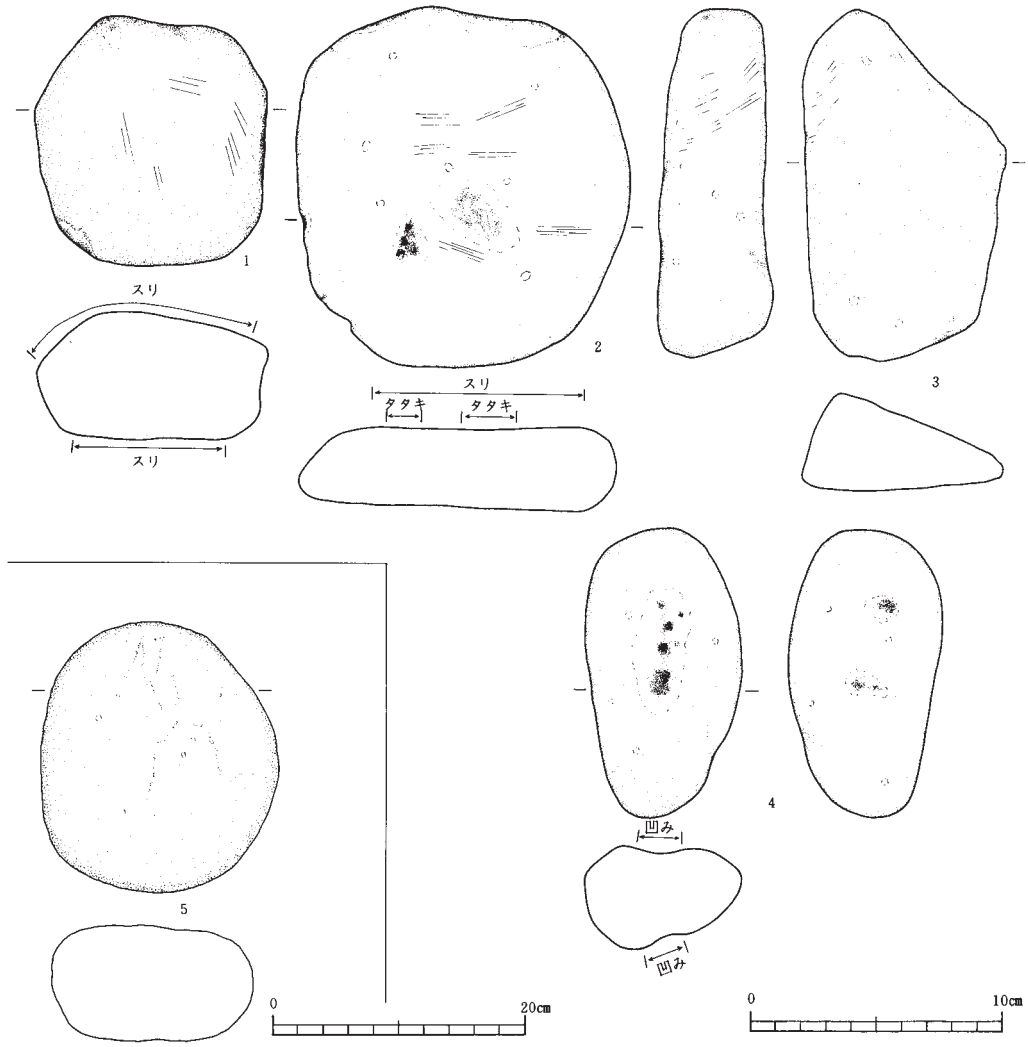
(ii) 歴史時代の遺物（図92）

縄文時代前期前葉と思われる遺物のほか、段丘の下位面の調査区ⅡＫ－105の第Ⅰ層下部から、染付（碗）の破片が 1 点出土した。

素地は灰白色、呉須は藍色で、内面には圏線が、外面には草花文が絵付されている。草花文の類別はできなかったが、透明釉は素地、文様を良く反映している。時期は近世末から近代にかけてのものと思われる。

5　小結

段丘の高位面を中心に縄文時代前期前葉の遺物が出土した。土器片を第 1 類から第 3 頼までに分類したが、土器型式からみると、第 1 類、第 2 類は各々早稲田 5 類、表館式の一部に比定され、第 3 類は深郷田式のものが若干含まれる可能性があるものの、ほぼ円筒下層ａあるいは同



磨　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
1	ⅡM−102 Ⅰ 層	99×92×51	761	安 山 岩		S 20
3	ⅡJ・105 Ⅱb層	138×80×38	533	安 山 岩		S 22

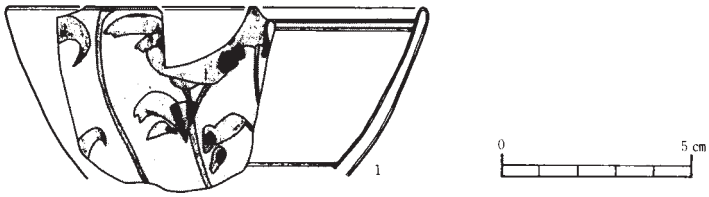
凹　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
2	ⅡJ−105 Ⅱb層	144×133×38	1,028	安 山 岩	石 皿 兼 用	S 21
4	ⅡF−101 Ⅱb層	115×62×40	319	安 山 岩		S 10

線刻石器（？）観察一覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
5	ⅡF−100 Ⅱb層	215×188×92	6,370	安 山 岩	浅 い 沈 線	S 14

図91　前坂下(13)遺跡出土石器



陶　磁　器　観　察　一　覧

図版	出土区	層位	名称	器種	文様	胎土	備考	登録番号
1	ⅡK－105	Ⅰ	染付	碗	草花文（内面に圏線）	灰白色(7.5Y8/1)		P19

図92　前坂下(13)遺跡出土陶磁器

b式に比定される。また、同一層から磨石など6点の石器が出土した。

今回の調査では遺構確認が十分できず、住居跡の検出にまで至らなかったものの、遺物の多くが高位面の周縁部を中心に出土していることから、この部分を中心に当時生活が営まれていた可能性が考えられる。このように、段丘の高位面は縄文時代前期前葉の集落遺跡として把握できると思われる。

また、段丘の低位面では、性格不明の落ちこみ1基と、焼土遺構を1基検出した。更にわずか1点ではあるが、近世末から近代にかけての染付の破片が出土した。

このように、本遺跡は縄文時代前期前葉及び近世～近代にかけての複合遺跡であるが、縄文時代前期前葉の集落遺跡として把握できる段丘の高位面は、縄文時代の海進現象を考えた場合、そこに一つの問題点が存在する。すなわち、縄文時代早期から前期にかけて、気温の上昇と共に海進現象がおき、本県においても海進最盛期には標高10m周辺位まで海水が浸入したと考えられているが（村越：1964)、本遺跡の高位面の標高は約6.5mに過ぎない。この問題点及び遺跡の全容は、昭和56年度に予定されている本調査により明確になるであろうと思われる。

なお、本遺跡の推定面積は約9,000m²である。　　（大瀬　秀男）

〔引用・参考文献〕

二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫・渡辺兼庸（1960）　「早稲田貝塚」『上北考古会報告』Ⅰ　上北考古会

佐藤達夫・渡辺兼庸（1960）　「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古会誌』Ⅰ　上北考古会

名久井文明（1979）　「北日本縄文時代早期編年に関する一試考（Ⅱ)」『考古学雑誌』第65巻第1号　日本考古学会

中里町教育委員会（1965）　「深郷田遺跡」『中里町誌』

村越　潔（1968）　「浮橋貝塚」『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会

青森県教育委員会（1974）　『小栗山地区遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第11集

江坂輝弥（1970）　『石神遺跡』ニューサイエンス社

村越　潔（1974）　『円筒土器文化』雄山閣

青森県教育委貞会（1980）　『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集

青森県教育委員会（1980）　『大平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集

村越　潔（1964）　「東北北部の新石器時代における海岸線の浸退に関する試論」『弘前大学教育学部紀要』第13号別冊

江坂輝弥（1965）　「海進海退による海岸線の変化」『日本の考古学Ⅱ、縄文時代』河出書房

写真30　前坂下(13)遺跡全景

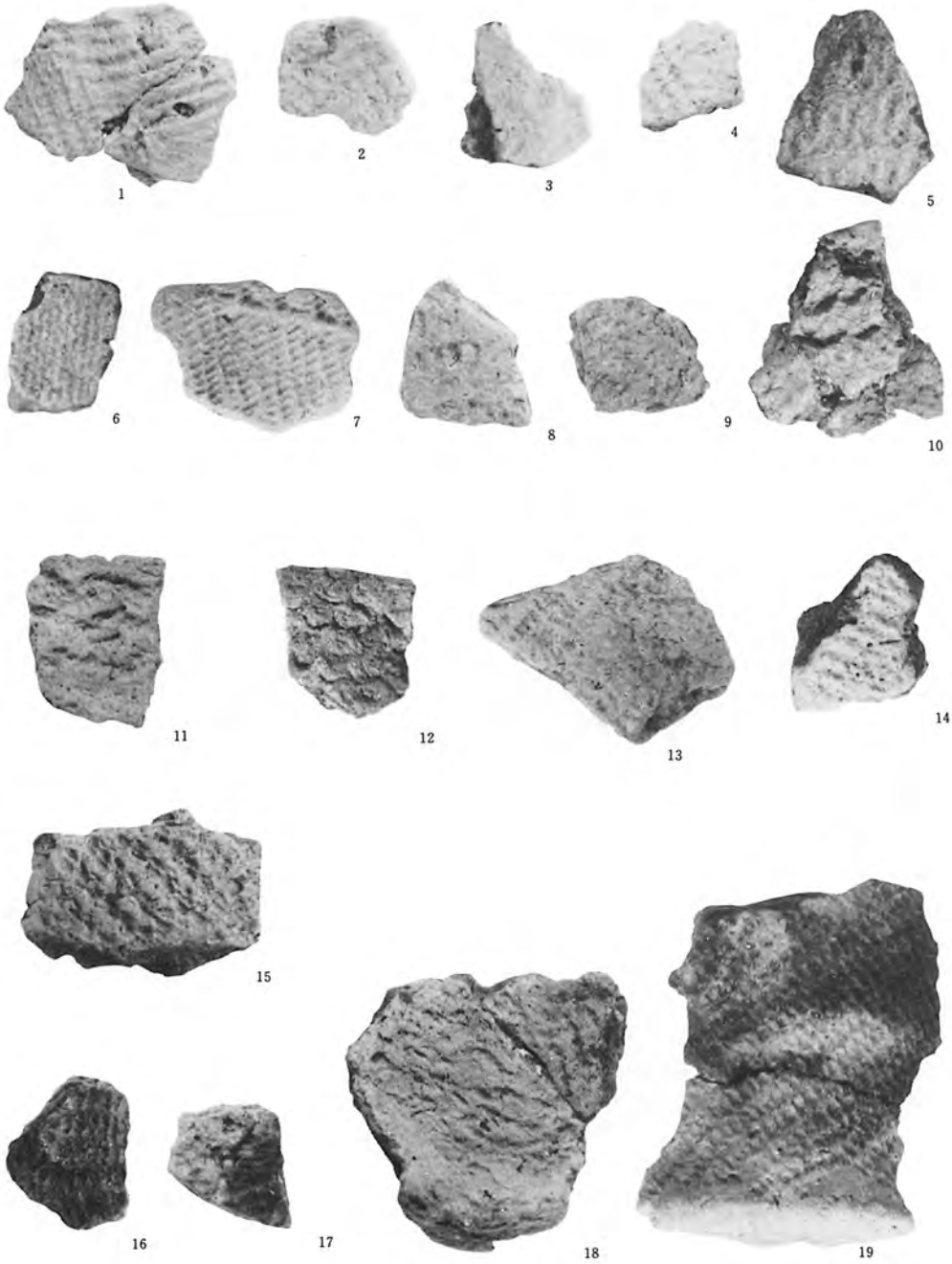


写真31　前坂下(13)遺跡出土土器

写真32　前坂下(13)遺跡出土石器

第17節　南通遺跡

1　遺跡の自然的環境

下北郡東通村大字小田野沢字南通137ほかに所在する。

太平洋の現汀線より約500m内陸部に入った地点で、標高12m～17mの東西の長い小台地上に立地している。面積約6,000㎡のこの台地は、南側が急斜面、北側が湿地帯となっている。台地上には松の木及び蔦類が密集している。台地西部はローム層が露出しており、近年削平されたものと思われる。台地南方約200mの地点に小老部川が流れ、太平洋に注いでいる。

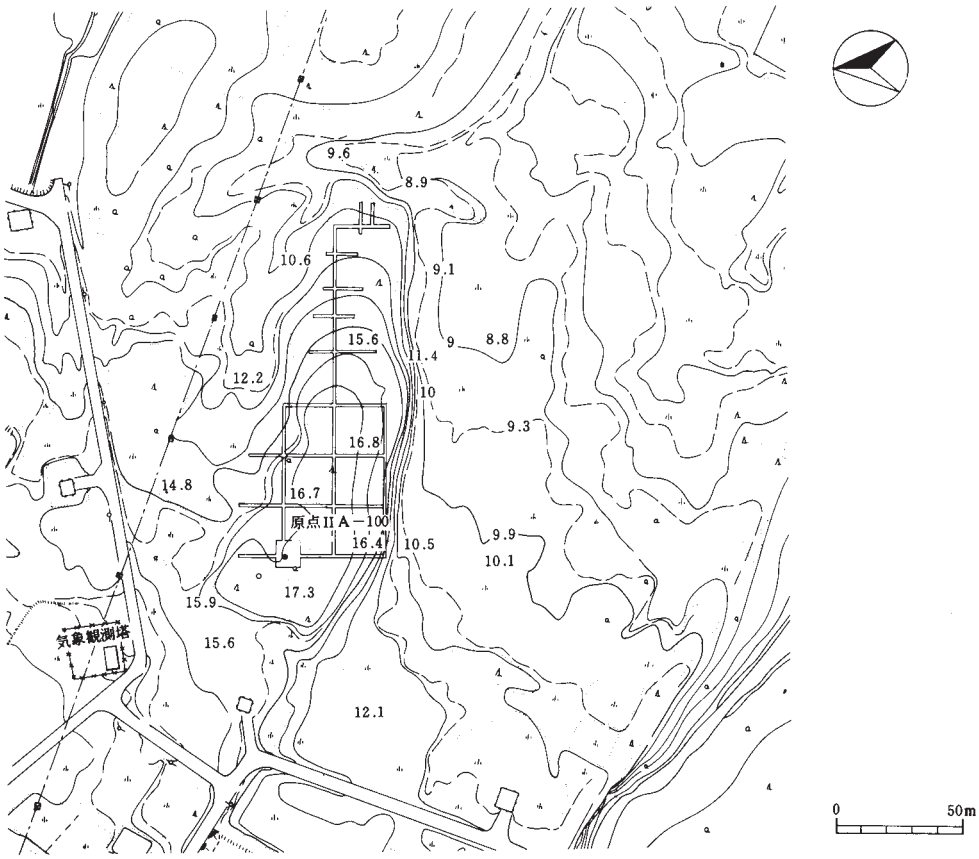


図93　南通遺跡地形・調査区配置

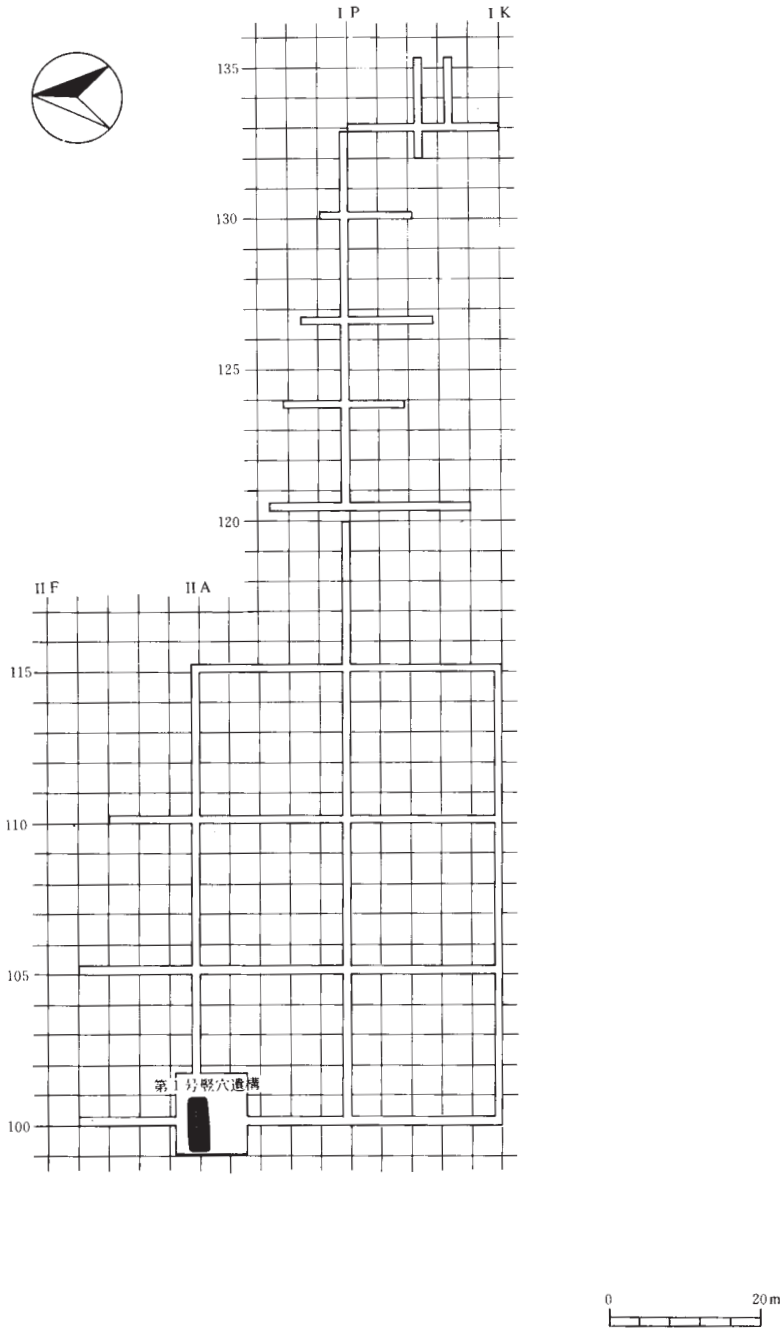


図94　南通遺跡グリッド・遺構配置

2　調査経過と調査方法

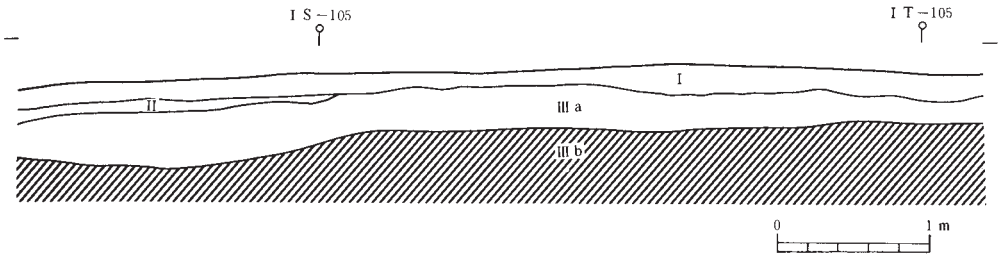
昭和52年度分布調査で発見された遺跡であることから、今回の調査では、遺物及び遺構の確認に主体を置いた。調査にあたり、松の木の伐採は避け、松の下枝及び雑木等を刈り払うこととした。台地西部の任意の地点に原点を定め、グリッドラインは東西南北の方位に合致させた。１グリッド20mを基本とし、台地全体にグリッドを組んだ。トレンチはこのグリッドラインに合わせ、１m幅とした。しかし、実際には松の木が密集しているため20m単位のグリッド設定は困難であった。やむなく、台地中央部より東方は松の間隙をぬって任意の地点にトレンチを設定することとし、必要に応じて拡張した。９月下旬には、台地西側トレンチに落ち込みを確認した。このため周辺を約10m×11mを拡張し、遺構検出した。10月中旬には、基本層序のセクション取りを終え、10月22日に埋め戻し作業を終了した。

3　遺跡の層序

第Ⅰ層は表土である。部分的に攪乱を受けているが、近年まで耕作された痕跡はない。したがって、本来自然堆積の層と思われる。

第Ⅱ層は部分的に堆積しており、比較的薄い層である。

第Ⅲ層はローム層であるが、土性及び色調等で２層に区分した。第Ⅲa層は第Ⅰ層とローム層が混り合う漸移層である。台地西方で確認された長方形のプランは本層直上で確認されている。第Ⅲb層は汚れの少ない黄褐色のローム層である。



南通遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	黒褐色 7.5YR3/2	シルト	草木根多い	（腐植土）	
Ⅱ	褐色 7.5YR4/3	シルト		自然堆積	
Ⅲa	褐色 10YR4/6	ローム	腐植土混入	地山	
Ⅲb	黄褐色 10YR5/6	ローム			

図95　南通遺跡基本層序

4　検出遺構と出土遺物

遺構は、風倒木痕５基、2.4m×７mの長方形の落ち込み１基である。これらの遺構は、確認面での状況を観察するに留め、埋め戻した。出土遺物はない。

(i) 竪穴遺構

台地西側の調査区ⅡＡ－99、100で表土直下から長方形プランの落ち込みを確認した。南北壁辺７m、東西壁辺2.4mである。ボーリング探査の結果、床面までの深さは約１mと思われ、炭化材がびっしり詰まった状態である。炭化材は板状で、比較的生焼けの木材も出土した。しかし、遺物はみられなかったため、構築時期認定は不可能である。

隣接してＩＰ－100、101区から風倒木痕を2基検出した。ロームマウンドには火山灰と思われるものが含まれており、付近一帯には長方形プラン内に出土する炭化材と思われるものが散在している。

5　小結

台地西側で検出した長方形プランの落ち込みは、伴出遺物がないため性格、構築時期等は不明である。しかし、確認面が表土直下であることから、比較的新しい時期のものと思われる。また、炭化木材が同一方向に並んでいることから、意図的に組まれた木材が炭化したものと思われる。比較的生焼け状の炭化材もあることから火災に遭った可能性も考えられる。今後の調査によってこの遺構の性格や構築時期等が解明されるものと思う。

（高坂　一夫）

遺跡全景

竪穴遺構

写真33　南　通　遺　跡

第18節　見知川山遺跡

1　調査経過と調査方法

下北郡東通村小田野沢字見知川山36に所在し、別名「赤人森（あかひともり）」と称されている。老部地区の人達の話によると、「昔、難破船の異人を埋めた墓」という伝説がある。

昭和52年度の分布調査では、４基の「塚」が所在すると報告（青森県教委：1978）されている。今回の試掘調査では、北側から第１号積石塚、第２号積石塚、第３号積石塚と呼称し、第１号積石塚を精査の対象とした。精査に入る前に、３基とも25㎝コンタラインの地形測量図を作成することにした。

９月初旬から刈り払いと雑木の伐採に入った。全景写真撮影後、精査の対象となった第１号積石塚の測量にとりかかり、これに３日を要した。トレンチは十字形に設定し、東西南北方位に合致させた。積石塚という特殊性を考慮に入れ、２m幅のトレンチを設けた。９月中旬から、一部粗掘り作業に入ったが、地表面に露出している礫群のため、作業が思うように進まなかった。10月初旬、北側斜面直下に黒い落ち込みを確認し、「環濠」と想定されたので、トレンチを拡張して精査した結果、風倒木痕と判明した。既に頂上部のトレンチは、深さ２mを越えており、非常に危険な状態になっているため、作業員にはヘルメット着用を義務づけた。調査の結果、第１号積石塚と称した孤立丘は、自然作用により形成された可能性が極めて濃厚となった。このため、後日、地質担当者に依頼し、周辺と、孤立丘の中心部の試錐調査を実施することにした。10月30日には埋め戻し作業が完了し、見知川山遺跡における調査を終了した。

（高坂　一夫）

2　見知川山遺跡の積石塚について

青森県下北郡東通村老部の北方にある小老部川は、西の山地から東の太平洋に向かって流れている。小老部川が山地から海岸段丘の開ける付近の北方約500mには、３個の孤立丘が存在することで知られている。この孤立丘を東方から順に見知川山遺跡第１号、第２号、第３号積石塚として命名した。第１号積石塚については、北北西～南南東方向と東北東～西南西方向との２本のトレンチによる開削調査を実施した。第３号積石塚には鳥居が設置されており、ほかの２個の積石塚とともに古来からの積石塚と考えられてきたものである。

その積石塚の成因について、孤立丘の基盤の地質と周辺の環境・地形等から検討するため現

図96　見知川山遺跡地形・グリッド配置

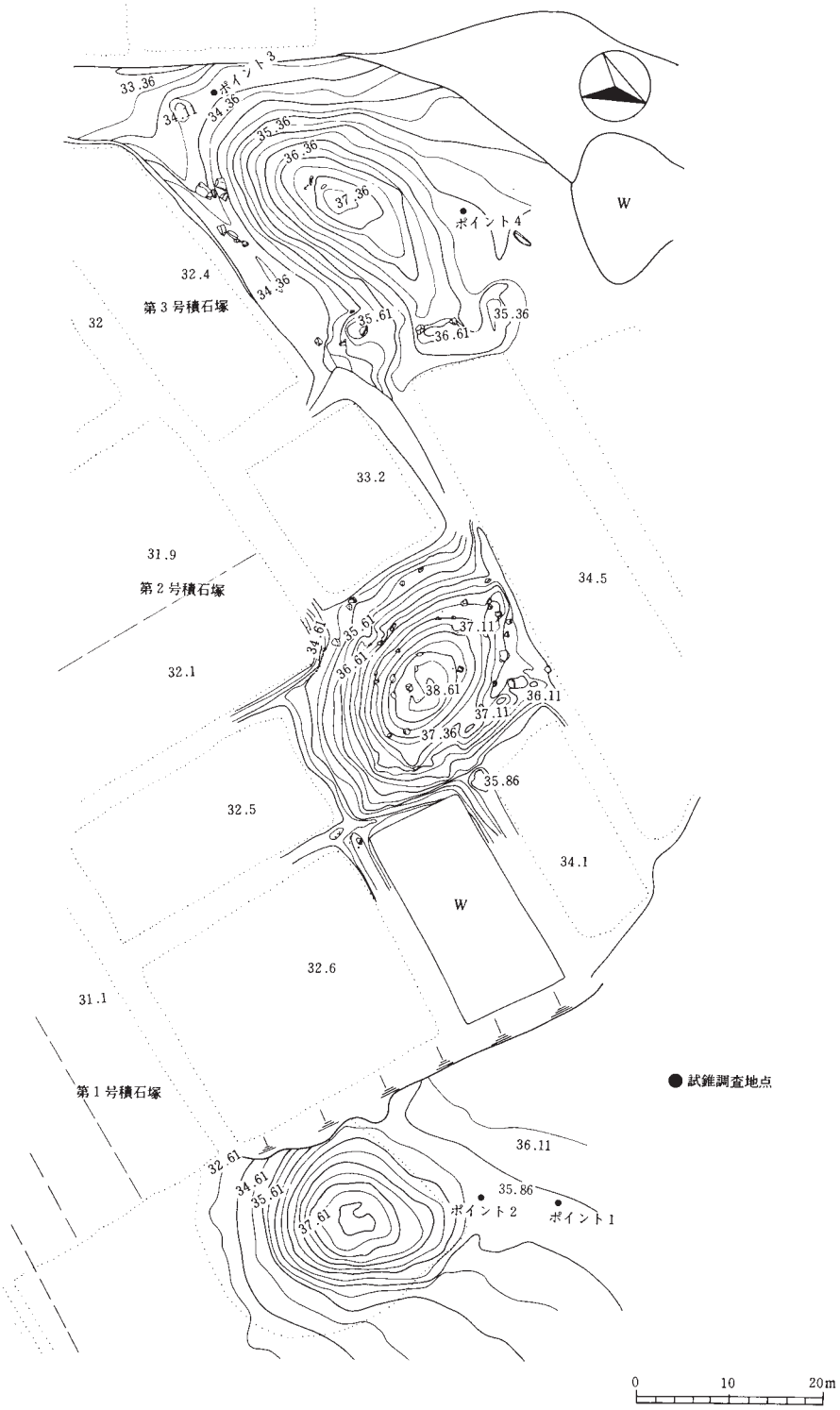


図97　見知川山遺跡積石塚（孤立丘）配置

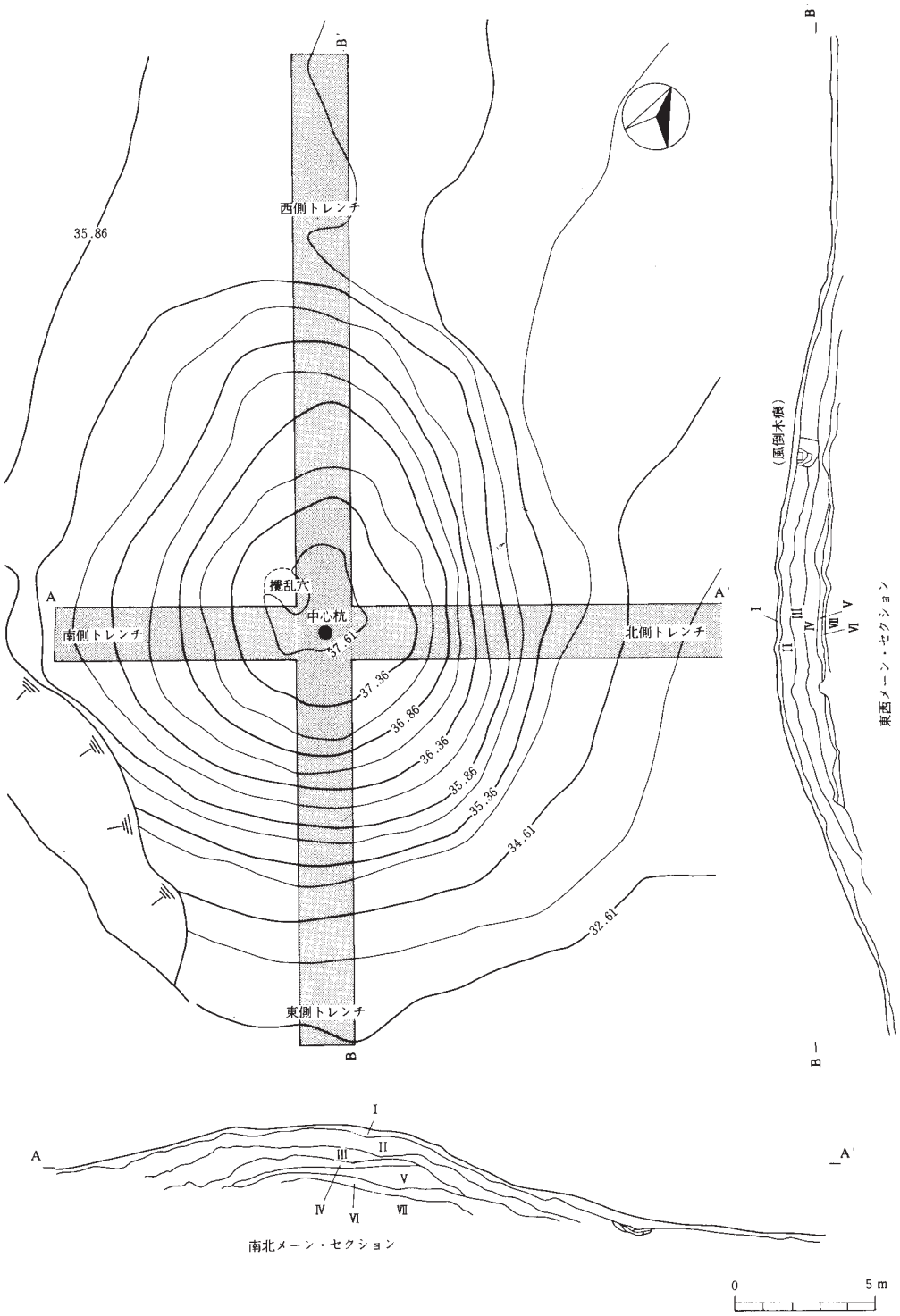


図98 見知川山遺跡第1号積石塚

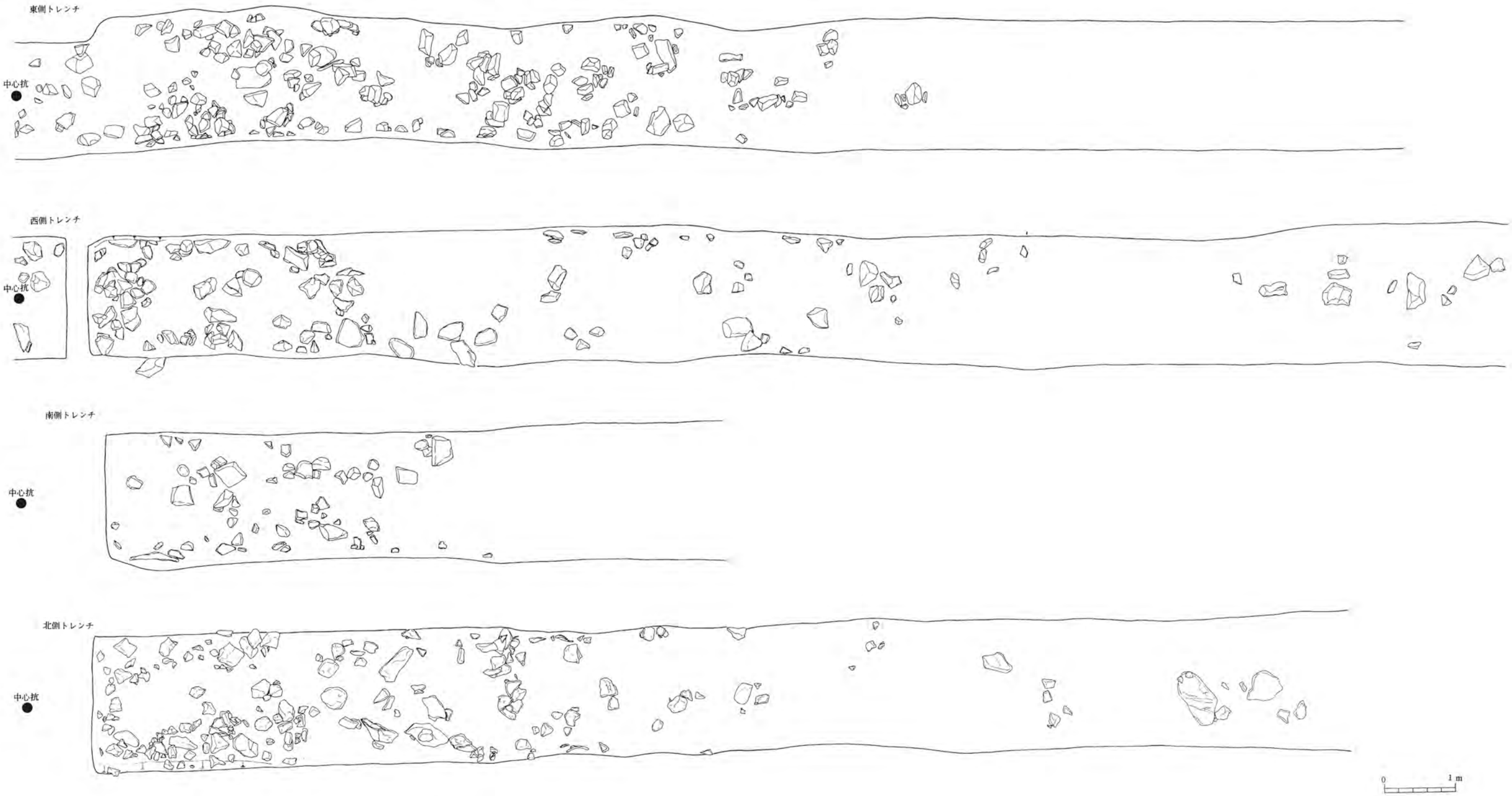


図99　見知川山遺跡トレンチ内礫群出土状況

地調査と試錐作業を実施した。

見知川山遺跡は、下北半島の、陸奥湾側と太平洋側との分水嶺である朝比奈平の東麓に発達する海岸段丘上にあって、標高約37.5mである。この付近の海岸段丘は、現汀線にほぼ平行して約500mの幅をもって南北方向に帯状に分布している。段丘面は全体的にやや傾斜しているが、開析度が小さく、起伏量も少なく比較的平坦である。この積石塚は、標高がおよそ35mの海岸段丘上に約２m～３mの比高をもった孤立丘として存在し、その周囲が開墾のために地形面がおよそ１mほど剥離されているので、孤立丘としての存在がきわだって目につく。第１号積石塚はほぼ南半分が剥離され、第２号積石塚はその全周が、第３号積石塚は北方を除いてほぼ全周が剥離されていて、それぞれその剥離面からおよそ15m強の比高をもっそいる（図－97、見知川山遺跡積石塚配置）。

次に、第１号積石塚の地質断面図（図－98）による層序、及び第１号、第３号積石塚の試錐調査による層序は、下記のとおりである。

第１号積石塚の地質断面図による層序

Ⅰ層　黒褐色土層　土壌化した土層で、いわゆる表土である。安山岩の風化した細礫を豊富に含有する。

Ⅱ層　暗赤褐色礫混り粘土質土層　安山岩の中礫を豊富に含有する。基質は褐色火山灰質の粘土で、安山岩礫の風化により凝灰質の部分もみられる。粒子間の結合力が小さく、層全体のしまりがない。

Ⅲ層　暗赤褐色礫混り粘土質土層　Ⅱ層と同質である。Ⅱ層の安山岩礫の径が大きいのに対し、径のやや小さい中礫が多く、基質がⅡ層よりも粘土質である。

Ⅳ層　暗褐色砂層　積石塚の凸部にのみ湾曲した形で分布し、下位のⅤ層～Ⅶ層も同様である。安山岩の細礫を豊富に含有し、基質が火山灰質の砂である。

Ⅴ層　暗褐色砂質粘土層　Ⅳ層下部に帯状に分布し、安山岩の礫は比較的少ない。

Ⅵ層　暗褐色砂層　Ⅳ層とほぼ同質で、安山岩礫は少ないが、より粗粒砂質である。

Ⅶ層　暗褐色粘土層　Ⅴ層とほぼ同質で、より粘土質・凝灰質となっている。

Ⅷ層　礫層　亜円礫～亜角礫の安山岩の大礫～巨礫が密集していて、特に巨礫には擦痕が認められる。基質は暗褐色の灰質粘土あるいは凝灰質である。

試錐調査の結果（試錐地点は図－97に示した。）

地点１（ポイント１）第１号積石塚の頂点から北西方約22m付近

深さ

０～20㎝　黒褐色土壌　上記Ⅰ層に相当する。

20～215㎝　赤褐色粘土質砂　上記Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅷ層に相当する。

粗粒砂で火山灰質粘土を含み、やや凝灰質となっている。

極粗粒砂～中礫の安山岩礫を含み、粒度の小さい礫は安山岩礫の風化によるものである。

215～540cm強　青灰色極粗粒砂　非常に凝灰質である。安山岩礫は新鮮なものが多く、多孔質で黒色である。中礫が比較的多く亜角礫である。時に安山岩の巨礫をも含む。海岸段丘の段丘砂礫層と考えられる。

地点 2（ポイント２）第１号積石塚頂点から北西方約12m付近

深さ

０～13cm　黒褐色土壌　下部がやや暗褐色火山灰質粘土になっている。

13～240cm　極粗粒砂　Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅷ層に相当する。基質は赤褐色粘土（火山灰質）で安山岩の細礫を豊富に含有する。やや凝灰質でもある。上部は粘土分が多いが、下部は安山岩の風化によりかなりスコリア質となっている。安山岩の風化物による再堆積物を思わせる。

240～390cm　青灰色粘土質極粗粒砂　上部は黄褐色粘土質である。表面が紫色がかった安山岩の中礫を豊富に含有する。海岸段丘の段丘砂礫層と考えられる。

390～450cm　青灰色細粒～粗粒砂　安山岩の中礫を豊富に含有する。

450～660cm　淡褐色凝灰質極粗粒砂　安山岩の中礫を豊富に含有する。

地点 3（ポイント３）第３号積石塚頂点から南方約18m付近

深さ

０～20cm　黒褐色火山灰質粗粒砂（表土）　Ⅰ層に相当する。

20～80cm　褐色砂質粘土（火山灰質）　安山岩の中礫を豊富に含有し、ほとんどが円礫である。Ⅱ層、Ⅲ層に相当すると考えられる。

80～170cm　褐色粘土質粗粒砂　安山岩の中礫を含有し、ほとんどが円礫～亜角礫である。Ⅷ層に相当すると考えられる。

170～480cm強　青灰色極粗粒砂　非常に凝灰質で安山岩の中礫～大礫を含有する。海岸段丘の段丘砂礫層と考えられる。

地点 4（ポイント４）第３号積石塚頂点から北北西方約12m付近

探さ

０～15cm　黒褐色土　Ⅰ層に相当する。

15～33cm　褐色火山灰混り砂質粘土　安山岩の中礫を含み、はとんど円磨されている。Ⅱ層に相当すると考えられる。

33～75cm　淡黄褐色粘土質粗粒砂　安山岩の中礫を含み、よく円磨されている。Ⅲ層に相当

すると考えられる。

75～145㎝　暗褐色粘土質（凝灰質）砂　礫混りの砂の部分と砂質粘土の部分とが混在している。円磨度の高い安山岩の中礫を含有している。Ⅷ層に相当すると考えられる。

145～420㎝　青灰色凝灰質極粗粒砂　非常に凝灰質（あるいはシルト質）で、円磨度の高い安山岩の中礫～大礫を豊富に含有している。海岸段丘の段丘砂礫層と考えられる。

見知川山遺跡積石塚の層序は、第１号積石塚地質断面図と試錐の結果からおよそ150～240㎝ほどの厚さの安山岩の中礫を含む。暗褐色粘土質（火山灰質）砂層（Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅷ層）とその下位の厚さ３ｍほどの青灰色凝灰質極粗粒砂層（海岸段丘の段丘砂礫層と考えられる）とに２分でき、これらの層の下位には基盤としての泊安山岩類の集塊岩がある。本遺跡周辺における降下火山灰層は、海岸段丘面に数枚成層しているのが確認できるが、やや砂質である等の堆積状況から褐色火山灰の堆積したのちに風化浸食によって移動し、再堆積したものと考えられる。しかし、積石塚内においては、上記火山灰はⅡ層～Ⅷ層のいずれの層にも該当しない。前述したように、第１号積石塚内の各層は基質がやや火山灰ではあるものの、安山岩礫の風化等によって全般的に凝灰質粘土質砂礫であり、細礫～中礫、ときに大礫～巨礫の安山岩を豊富に含有している。このことから、積石塚周辺における降下火山灰（再堆積の要素をもっていても）は海岸段丘堆積物と考えられる砂礫層の上位にも下位にも、また、第１号積石塚における各層のいずれの位置にも分布していない。本遺跡積石塚に分布する安山岩混りの凝灰質粘土質砂礫層（Ⅱ層、Ⅲ層）は、他とは独立した分布を示していると考えられ、層全体のしまりに欠け、安山岩礫の風化によってやや凝灰質になっていることなどの堆積状況から、降下火山灰の供給後、あるいは再堆積後の山地からの転勤等による現世の崖錐性堆積物と考えられる。また、積石塚の巨礫群（Ⅷ層）は、本遺跡と銅屋(1)遺跡に少々分布する以外は確認していない。おそらくこの巨礫群は、褐色火山灰の降下後に西側の泊安山岩類からなる山地からの泥流質の岩塊流によってもたらされ、そして積石塚としての孤立丘は、巨礫の密集部がゆえに残礫による残丘と考えられる。その残礫の基質は、岩塊流に付随した火山灰泥流分もあろうが、その後の風成堆積物によって充填されたものであろう。なお、Ⅳ層～Ⅶ層は多少の縞模様もみられるが、全体的として塊状で、Ⅷ層の礫層を包含する形で湾曲している。これは、吹き溜り的な風成堆積物で、堆積後に粘土化が進行したものであろう。

以上から、見知川山遺跡積石塚として存在する孤立丘は、西側の山地からの岩塊流によってもたらされた巨礫群の残礫による残丘と考える。ただ、第３号積石塚については、後背部に浸食谷が発達していて、運搬された巨礫による残丘が、この浸食谷によっていっそう周辺の地形

に対して際立って見えるものと考える。いずれにしても、これらの積石塚としての孤立丘は、単に後背地の山地に接近しているだけでなく、海岸段丘の地形・地層をやや乱している傾向がみられる。（塩原鉄郎・山口義伸）

第１号積石塚遠景

第１号積石塚調査風景

第３号積石塚全景

写真34　見知川山遺跡

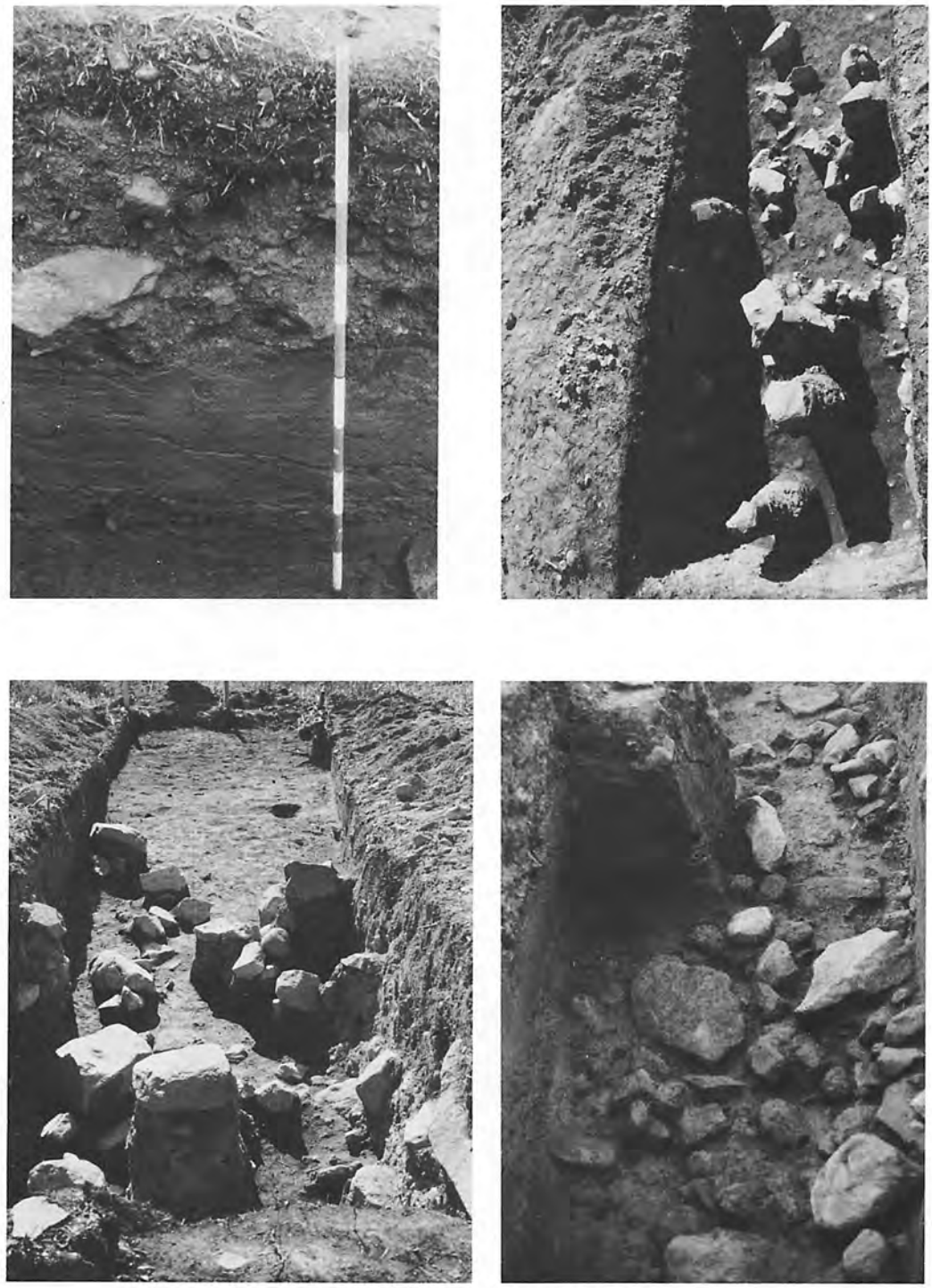


写真35　見知川山遺跡礫群出土状況

第19節　浜通遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字小田野沢字浜通78～９に所在する。

小田野沢地区の南方1.4kmで、国道から農道を東へ約600mの地点に位置し、太平洋の現汀線から約200m離れた折戸川南岸の、標高５m～７mの小台地上に立地している。この台地の南西部には標高10m、面積300㎡ほどの小丘陵が形成されている。西、南側は湿地帯となっており、北側は折戸川に対して急崖をなしている。折戸川は河口付近で幅も広くなり、大きく蛇行しているものの、遺跡付近では幅２mほどで、水量も貧弱な小河川である。

この台地では近年まで、小田野沢地区の人々により牛馬の放牧がなされていた。現在では一面にカヤが密生し、台地上の小丘陵は樹齢20～30年の松の疎林となっている。

2　調査経過と調査方法

昭和52年度の分布調査では、型式不明の縄文土器片２点とフレイク２点とが表面採集されている。このため今回の調査にあたっては、遺跡の時期、性格及び範囲を把握することを目的とした。

台地上の小丘陵をＡ地点、折戸川に沿った台地部分をＢ地点とし、10月初旬にカヤや松の下枝等の刈り払いを行うとともに、20m単位のグリッドを組み、グリッドラインに沿って１m幅のトレンチを設けた。まず、縄文時代の遺跡の主体部をなすと思われるＡ地点から粗掘りを開始した。しかし、この地点からは縄文時代後期前葉と思われる無文土器の破片が一個体分出土したに過ぎない。このため、調査は短期間で終了するものと思われたが、続いて粗掘りを行ったＢ地点から、唐津、美濃、志野などの陶磁器の破片や、明代のものと思われる染付の破片、中国からの渡来銭、鉄製鋤先などが出土した。これは、調査前には全く予想もしていなかったものである。更にＡ地点でも遺構確認の際、獣骨が葬られている土壙を１基検出し、その精査を行った。

調査の後半は、霙を伴う強風に度々悩まされたが、10月下旬に埋め戻しを行い、本遺跡の全作業を終了することができた。試掘面積は796㎡である。

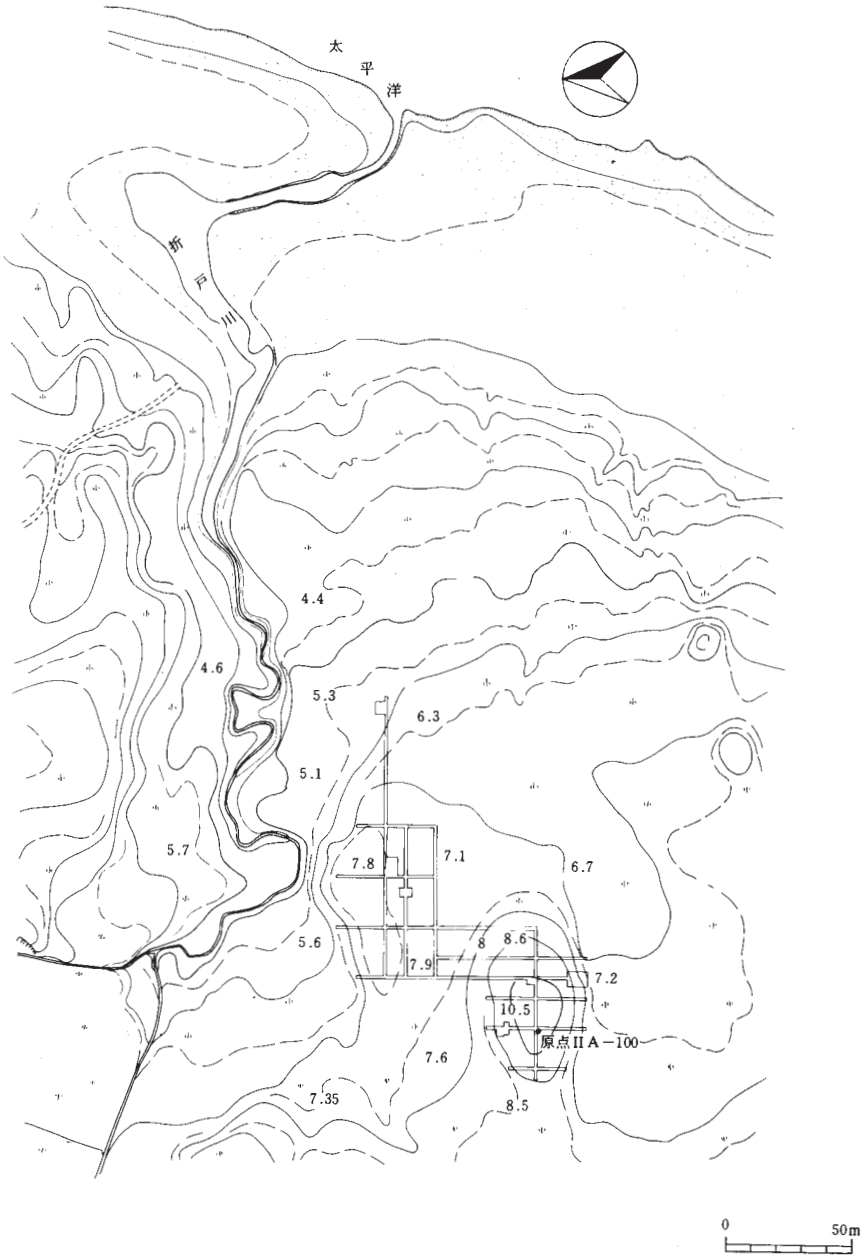


図100　浜通遺跡地形・調査区配置

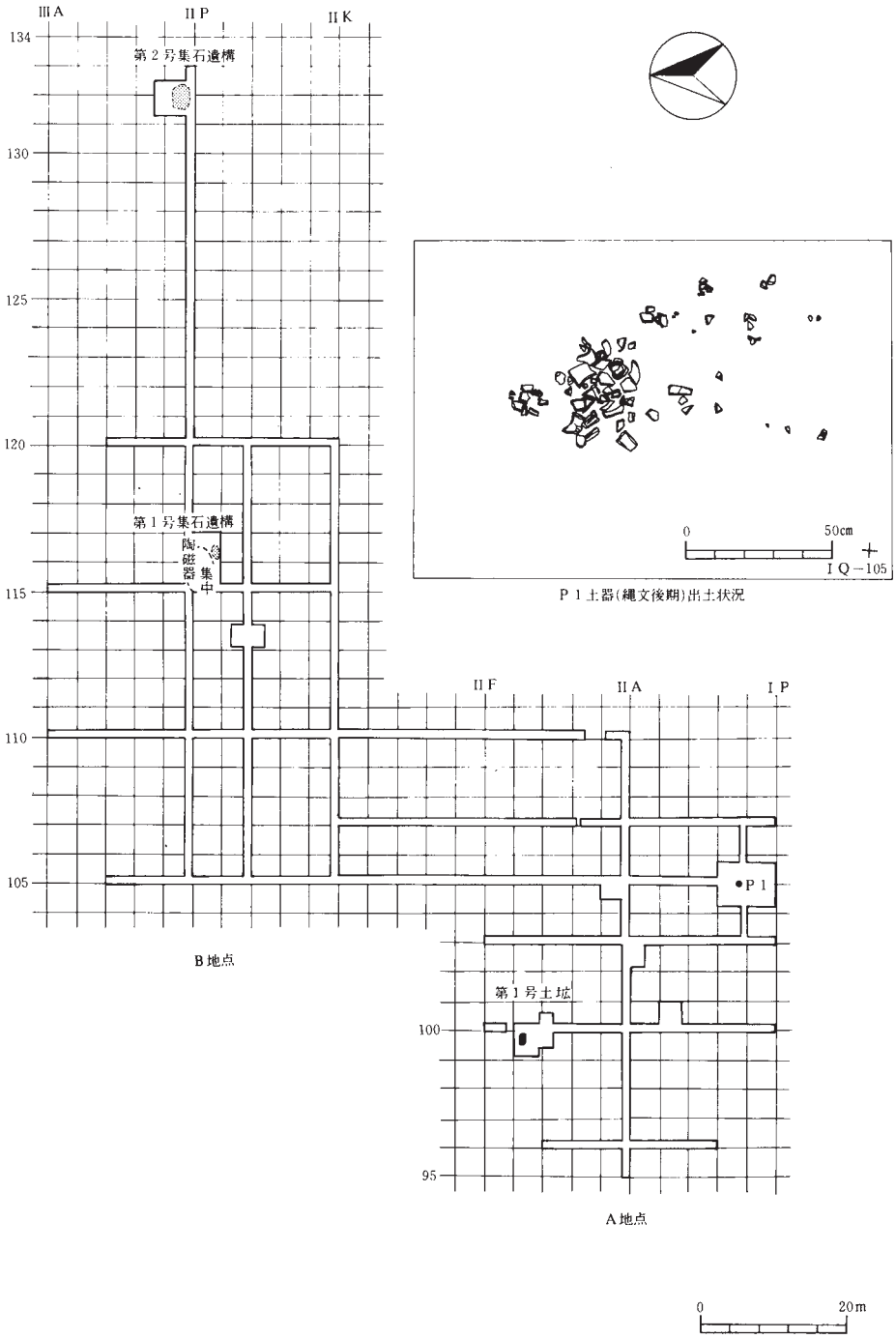
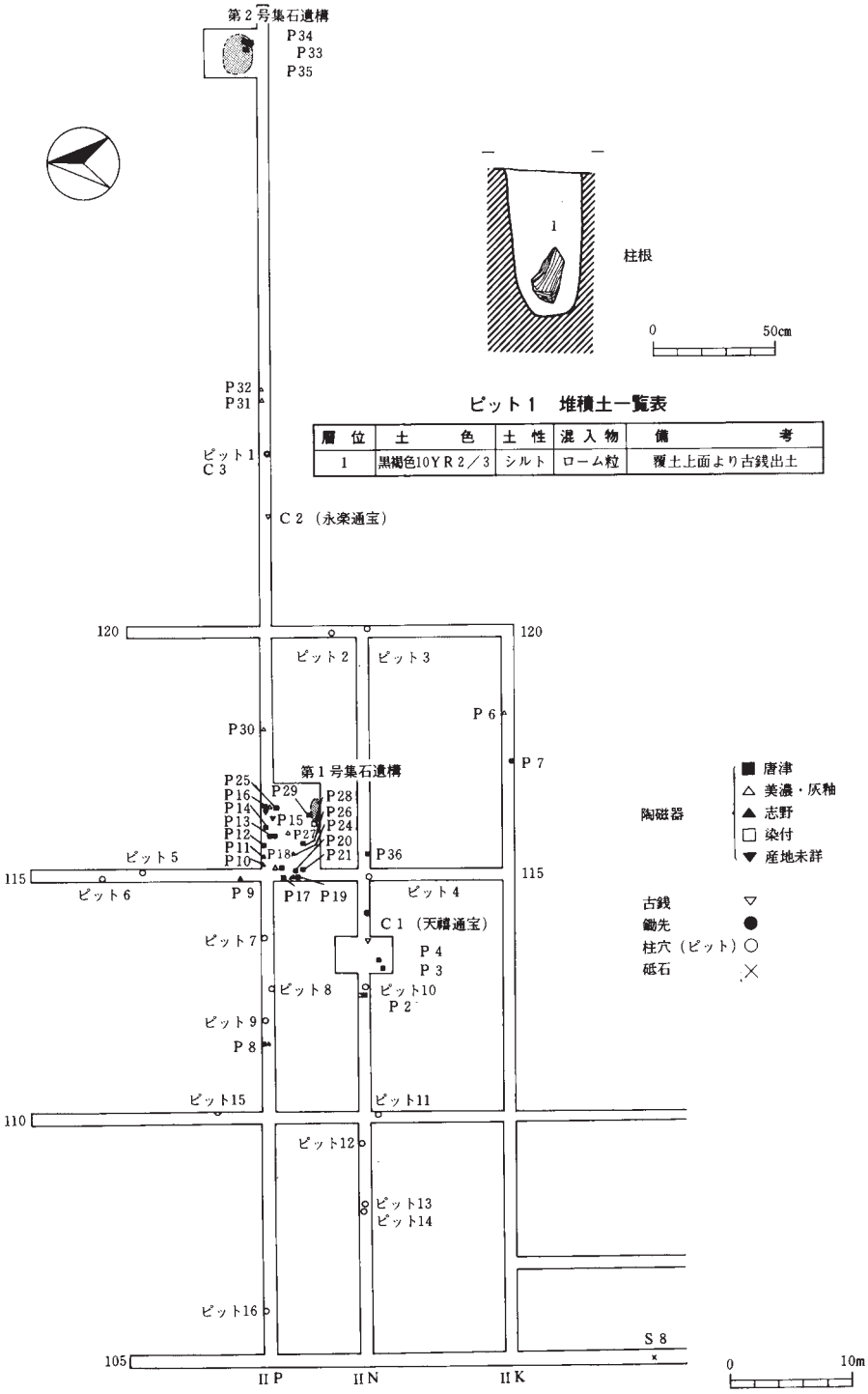


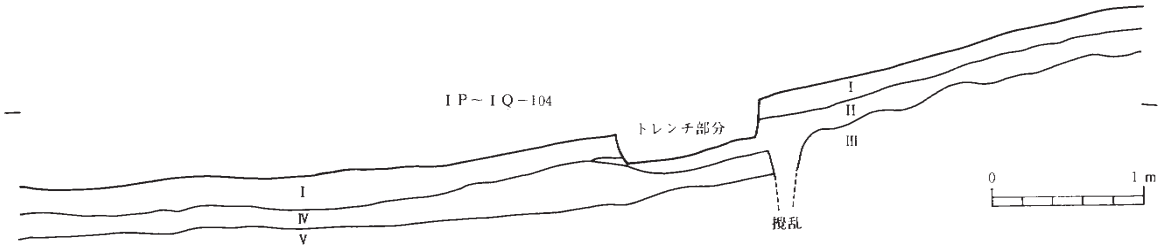
図101　浜通遺跡グリッド・遺構配置



ピット１　堆積土一覧表

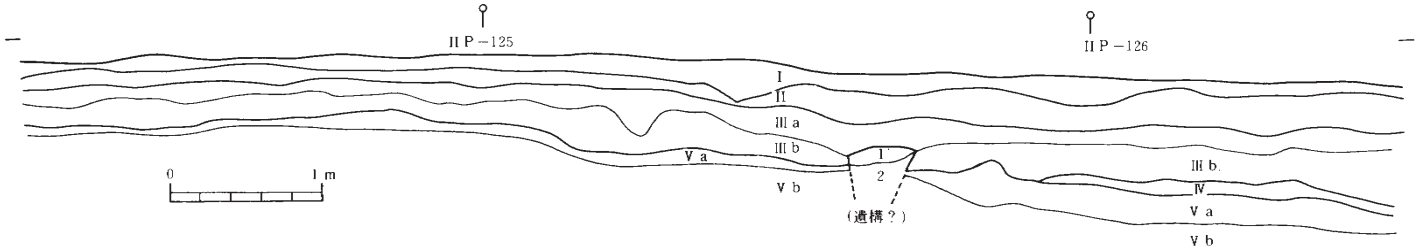
層　位	土　　色	土　性	混入物	備　　考
1	黒褐色10YR２／３	シルト	ローム粒	覆土上面より古銭出土

図102　浜通遺跡グリッド・遺構配置(2)



層　位	土　　色	土　　性	混　入　物	層の形成	備　　考
I	黒 褐 色　10YR2/3	シルト	草木根少量	耕作土	
II	褐　　色 7.5YR4/6	シルト	草木根少量	自然堆積	
III	明 褐 色 7.5YR5/6	ローム		地山	
IV	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト質粘土	細砂微量		
V	灰黄褐色　10YR5/2	粘　土			

図103　浜通遺跡A地点基本層序



層　位	土　　色	土　　性	混　入　物	層の形成	備　　考
I	黒 褐 色　10YR2/3	サンド質シルト	草木根多量	耕作土	
II	黒 褐 色　10YR2/3	サンド質シルト	草木根少量		
IIIa	暗 褐 色　10YR3/4	サンド質シルト			
IIIb	褐　　色 7.5YR4/4	サンド質シルト			
IV	暗 褐 色　10YR3/4	サンド質シルト			
Va	にぶい黄褐色 10YR5/4	ローム	細砂粒、腐植土混入	地山	海寄りでは、砂質が強まる
Vb	にぶい黄色 2.5YR5/3	ローム			
1	暗 褐 色　10YR3/3	シルト質サンド			
2	黒 褐 色　10YR2/3	サンド質シルト	炭化粒(0.2～1.5cm)火山灰		

図104　浜通遺跡B地点基本層序

3　遺跡の層序

台地上の小丘陵であるＡ地点と、折戸川沿岸の台地部分であるＢ地点とでは、堆積状態に相違が認められる。Ａ地点である小丘陵の主要部分の層序は、おおむね次のように区別できる。

第Ⅰ層は表土で、黒褐色を呈する。

第Ⅱ層は褐色のシルト層で、縄文時代後期前葉の一括土器が包含される。

第Ⅲ層はローム層で地山で、明褐色を呈する。

また、南側の湿地帯に接する地点では、湿性や流れこみのためか色調、土性共に異なる堆積がみられ、これを第Ⅳ層、第Ⅴ層とした。第Ⅳ層は、にぶい黄褐色のシルト質粘土層で、第Ⅴ層は灰黄褐色の粘土層である。

次に、Ｂ地点であるが、現汀線に近いという地理的環境から全般的に多量の砂の混入がみられ、現汀線に近づくほど、また、上位の層ほどその傾向が顕著である。現汀線から遠ざかるほどシルト質が強まる。

第Ⅰ層は表土で、黒褐色を呈する。

第Ⅱ層は異褐色の砂質シルト層である。第Ⅰ層と比較した場合、しまり・湿性が強く、砂質・草木根の混入度合が少なく明確な相違がみられる。16世紀後半から17世紀前半に比定される陶磁器の破片、古銭などの歴史時代の遺物は、すべてこの層の下部に包含されている。陶磁器片が集中的に出土したⅡＰ－115区付近では、シルト質が強い。

第Ⅲ層は砂質シルト層で、第Ⅱ層よりも砂質は弱まる。性状により暗褐色を呈する第Ⅲa層と、褐色を呈する第Ⅲb層とに細分される。

第Ⅳ層は暗褐色の砂質シルト層である。砂の混入は微量であり、シルト質が強い。現汀線に近い地点に堆積がみられる層である。

第Ⅴ層はローム層で、Ｂ地点における第Ⅲ層に対応する層である。第Ⅴa層としたものはロームが主体となる層であるが、第Ⅲb層若しくは第Ⅳ層の一部が入り込むため、汚れた様相を呈している。また、下層の第Ⅴb層はにぶい黄色を呈している。

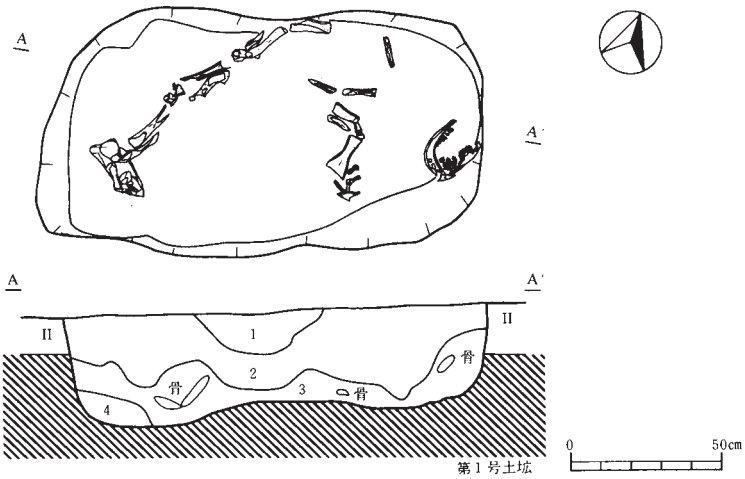
4　検出遺構と出土遺物

（1）検出遺構

Ａ地点から土壙１基と、風倒木痕10基、風倒木痕と思われるものの性格不明の落ちこみ４基、近年のものと思われる落ちこみ３基を検出した。近年のものと思われる落ちこみは、いずれも第Ⅰ層上部から切りこんで構築されたもので、焼土や炭化物の混入がみられた。

第1号集石遺構

0　50cm



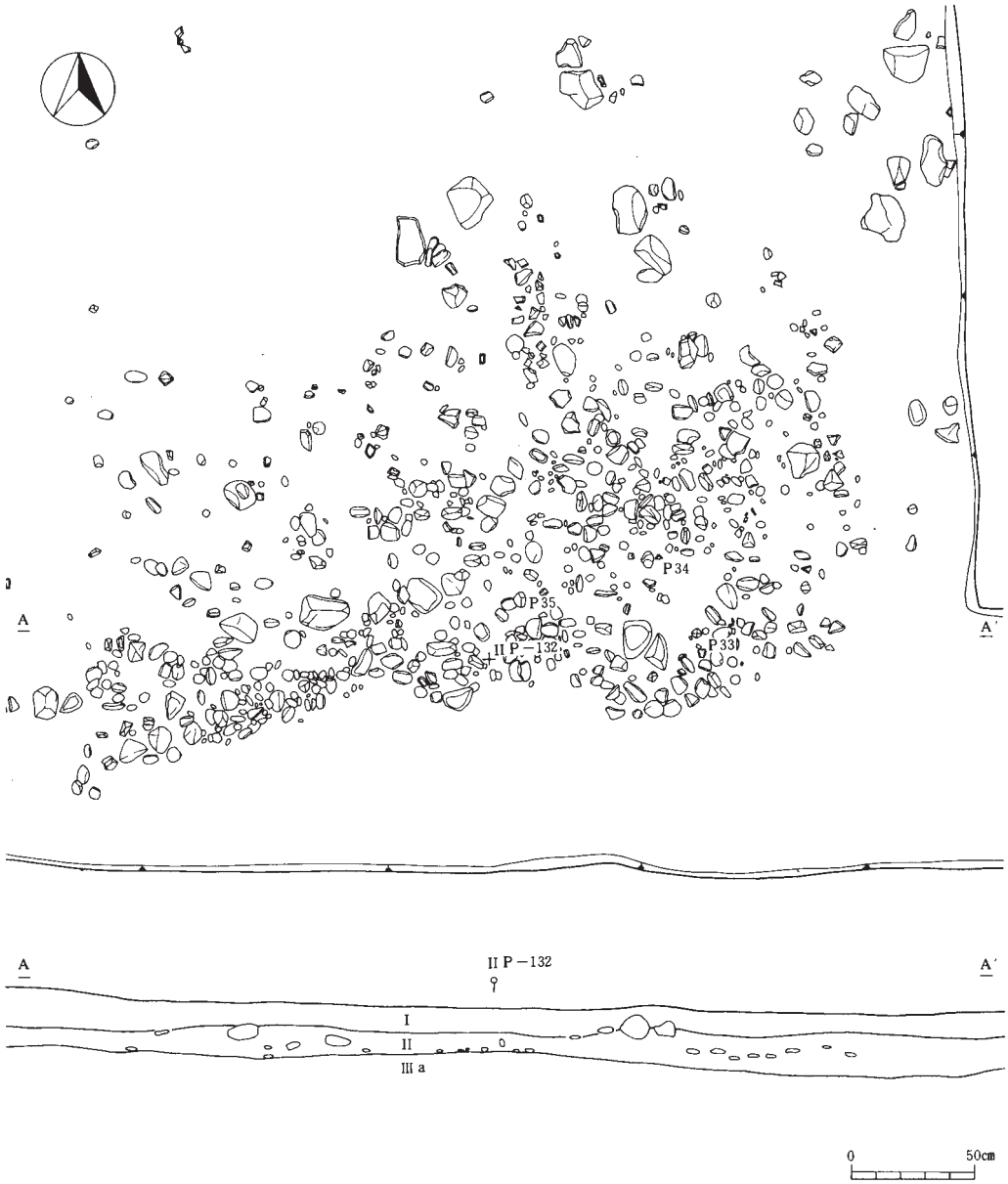
第1号土坑

0　50cm

第1号土坑堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	暗褐色 10YR3/6	シルト	ロームブロック・炭化物草本根を混入	人為堆積	
2	黄褐色 10YR5/6	ローム	暗褐色シルト混入		
3	にぶい黄褐色 10YR5/3	ローム	暗褐色シルト混入		粘性強い
4	黄褐色 10YR5/6	ローム	暗褐色シルト混入		

図105　浜通遺跡第1号集石遺構・第1号土坑



第２号集石遺構堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
I	黒褐色 10YR2/2	サンド質シルト		耕作土	基本層序 I 層に同じ
II	黒褐色 10YR2/3	サンド質シルト	小礫、大礫多量に混入		〃 II 〃
III a	暗褐色 10YR3/4	サンド質シルト			〃 III a 〃

図106 浜通遺跡第２号集石遺構

縄文時代後期前葉の土器片が出土したＩＱ－105区付近を中心に遺構確認に努めたが、住居跡等の遺構の検出はない。また、Ｂ地点においては、掘立柱建物跡と2基の集石遺構を検出した。

（i）**第１号土壙**（図105）

調査区ⅡＤ－99に位置する。第Ⅱ層の褐色土層の上面で、黄褐色ロームが多量に混入する隅丸の不整方形プランの落ち込みを確認した。土壙は、第Ⅱ層及び固いローム層である第Ⅲ層を切りこんで構築され、確認面からの深さは最深部で37㎝である。壙口径の計測値は長径（東西）146㎝、短径（南北）79㎝で、壙底径は長径（東西）132㎝、短径（南北）70㎝である。

土壙底面はやや起伏があり、壁はやや外傾している。土壙内の堆積土は４層に分層できたが、第２～第４層はロームで、第１層中にもロームブロックを含み、いずれも人為堆積によるものと思われる。

土壙内から獣骨が一頭分出土した。遺骸は頭部を東方に向け、体の右側を下にした状態で葬られていた。骨の残存状態はかなり良好であったが、脊椎骨及び胸骨は確認できなかった。この獣骨は子馬である。伴出遺物はなく、埋葬された年代は不明である。

（ii）**掘立柱建物跡**　（図102）

掘立柱建物跡の柱穴を多数検出した。その分布範囲は東西に70.5m、南北に22mとかなりの広範囲にわたる。合計16基で、15基は平面確認に留めたが、このうち精査を行ったものはピット１である。これは地山面で確認されたもので、柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、断面形態は円筒形である。径は31㎝、確認面からの深さは60㎝で、柱穴の下部には柱根が残存しており、腐植のため上部はなく、根部近くのみ遺存している。13.5㎝×7.5㎝の角材で、現存長は25.2㎝である。側面は平滑に面取りされている。柱穴の覆土は１層で、黒褐色を呈し、しまりが非常に弱い。また、覆土の上面から古銭（1/4破片、銭貨名不明）が1枚出土した。このピット１は掘立柱建物に付随する柱穴であるが、これに対応する柱穴は限られた面積での調査であったため、検出できなかった。

また、ピット２～16は地山面で確認され、平面形態はほぼ円形を呈する。径は最大36㎝から最小12㎝までで、径20～25㎝のものが約半数余である。確認面からの深さは略測であるが15～60㎝で、30㎝前後の深さを有するものがやはり約半数である。確認面の土層は大部分が黒褐色土である。これらのピットは平面確認に留めたため、すべてが柱穴であると即断できないが、多くのピットは掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。表４の「確認面からの深さ」は、ピット１を除けば、いずれもボーリング棒による探査結果である。

（iii）**第１号集石遺構**　（図105）

調査区ⅡＯ－116に位置し、表土である第Ⅰ層上部でその一部を確認した。これらの集石は主に第Ⅱ層に包含されており、一部の石は第Ⅲa層に食い込んでいる。石は20～30㎝程度の河原石

表４　浜通遺跡ピット一覧

ピットNo.	調査区	径	確認面からの深さ	確認面の土色	ピットNo.	調査区	径	確認面からの深さ	確認面の土色
1	ⅡＰ－123	31cm	60cm	黒褐色	9	ⅡＰ－112	17cm	15cm	褐　色
2	ⅡＮ－120	23	30	〃	10	ⅡＮ－112	25	25	黒褐色
3	ⅡＮ－120	25	30	〃	11	ⅡＯ－110	30	25	〃
4	ⅡＮ－115	16	15	〃	12	ⅡＮ－109	36	30	〃
5	ⅡＲ－105	22	40	〃	13	ⅡＮ－108	20	25	〃
6	ⅡＳ－105	23	50	〃	14	ⅡＮ－108	18	15	〃
7	ⅡＰ－113	12	25	〃	15	ⅡＱ－110	22	20	〃
8	ⅡＰ－112	25	60	〃	16	ⅡＰ－106	33	30	〃

が主体であり、東西２m、南北１mの範囲に密集しているが、南側は未調査であり若干範囲は広まると考えられる。この遺構の性格は不明であるが、集石の下部に土壙が存在する可能性がある。なお、集石の石と石の間から、明の染付の破片（図108－１）が１点出土した。

（iv）**第２号集石遺構**　（図106）

調査区ⅡＰ－131～132に位置し、東西トレンチの北側セクションの第Ⅱ層中で確認した。その部分を４m×４mの規模で拡張したところ、無数の石が密集しているのを検出した。石は大きなもので20cm程度で、５cm未満の大きさのものが多数を占め、特に東西3.5m、南北２mの範囲に密集している。これらの石は第Ⅱ層に包含されるもので、同一レベルに位置するものが多いが、一部攪乱をうけている。また、大部分の石は火を受けたような痕跡が認められる。集石の石と石の間から、唐津の破片３点（図109－５）が出土した。この遺構の性格は不明である。

以上の柱穴や集石遺構のほか、風倒木痕と思われる落ちこみ１基と性格不明の落ちこみ２基を確認したが、平面確認に留めたため遺構かどうか不明である。

（2）出土遺物

Ａ地点では縄文時代後期の十腰内Ⅰ式に比定される無文土器が一個体分出土し、Ｂ地点では16世紀後半から17世紀前半のものと思われる陶磁器の破片、古銭、鋤先、砥石が出土した。

（i）**縄文時代の遺物**　（図107－１、図101）

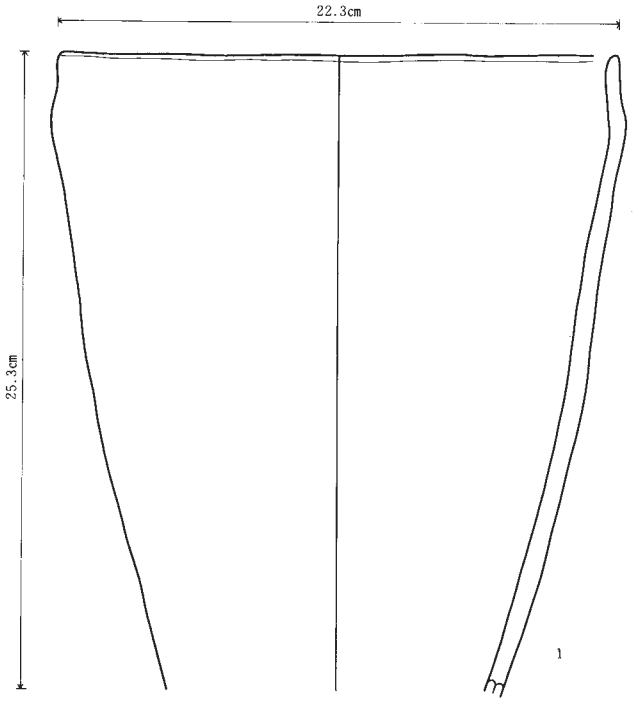
調査区ⅠＱ－105の第Ⅱ層中から、縄文時代後期前葉と思われる無文の土器の破片が出土した。その付近を８m×６mの規模で拡張を行ったが、ⅠＱ－105区以外からの出土はない。

この土器片はいずれも同一個体の破片で、縄文後期の十腰内Ⅰ式に比定されるものである。器形は深鉢形を呈する。口縁部は平縁で直立する。無文で、内外面とも調整されている。胎土に多量の細砂及び粗砂を含有し、焼成は不良である。内面の一部に炭化物が付着している。

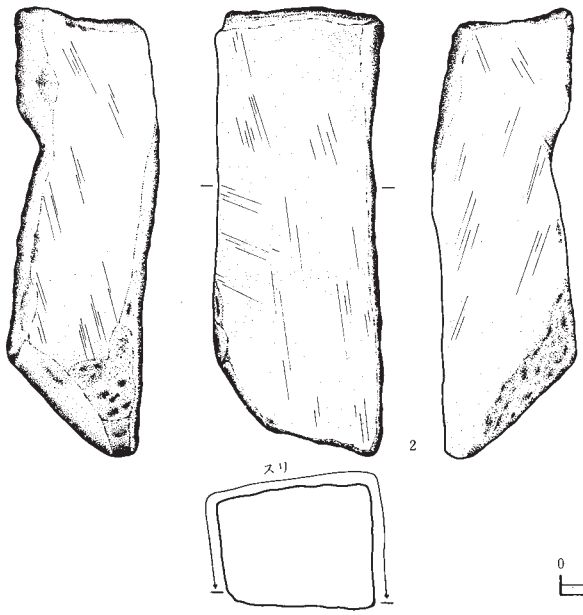
（ii）**歴史時代の遺物**

ア．陶磁器

第Ⅱ層の下部の同一レベルから、16世紀後半から17世紀前半に比定される陶磁器が出土した。唐津、美濃、志野などの国産陶磁器と、明の染付である。いずれも破片で、完成品は１点もな



層　　位：II層
時　　期：十腰内Ⅰ
外面文様：無　文
内　　面：横位調整
胎　　土：細砂粒及び粗砂粒混入
備　　考：内外面の一部に炭化物付着
登 録 No.：80, 浜通ⅠQ－105P1



砥　石　観　察　一　覧

図版	層　位	大きさ(長さ×幅×厚さ)mm	重量(g)	石　質	備　考	登録番号
2	II H－105 Ⅳa層	175×67×50	988	砂　岩	3 面 磨 痕	S 8

図107　浜通遺跡出土遺物

かった。出土範囲は東西方向に82m、南北方向に23mとかなりの広範囲に及ぶ。特に調査区ⅡＰ－115付近で集中的に出土し、ほかは散発的な出土状態である。

ａ．舶載陶磁器

〔染付〕

明（16世紀）の白磁染付が 2 点出土した。白地に呉須で給付けされている碗の破片 1 点と、素地が淡い橙色を呈す破片が 1 点である。

図108－１、写真41－35の素地は灰白色（2.5Ｙ8/1）を呈す。呉須は藍色を呈している。透明釉で、素地、文様がきれいに反映している。見込中央には草花文とその周辺を巡る 2 条の線が、外面にも 2 条の線と、判別できない文様が描かれている。高台内には輪積み成形痕が明瞭に残る。高台の高さは 7 ㎜前後である。

写真41－36の素地は淡橙色（５ＹＲ8/4）を呈す。釉は灰白色（2.5Ｙ8/1）を呈している。焼成がやや不良である。内面に藍色の呉須で、線が描かれている。碁笥底の小皿と推定されるが、細片のため判別できない。

ｂ．国産陶磁器

〔美濃〕

《美濃灰釉》　6 個体、いずれも小皿である。これらを口縁部の形態により 2 類に大別し、更に内面文様の有無で 2 つに細分した。

Ⅰa類　口縁部内面に一条の段を有する灰釉菊皿である。１個体。（図108－２、写真40－１）

素地は灰黄色（2.5Ｙ6/2）で、釉はオリーブ黄色（５Ｙ6/4）である。菊花文は内面をヒダ状に削り、釉掛けして花びら文様を描いている。外面に細く浅い沈線文がみられる。

Ⅰb類　口縁部内面に一条の段を有する灰釉小皿である。３個体。（図108－3～5、写真40－２～４）

3　写真 2 の素地は灰黄褐色（10ＹＲ5/2）で、釉はオリーブ黄色（7.5Ｙ6/3）を呈している。口縁部の内外面の段の部分と、見込の釉溜りが著しく、オリーブ黄色（7.5Ｙ5/3）を呈している。

4　写真 3 の素地はにぶい黄色（2.5Ｙ6/3）で、釉はオリーブ黄色（7.5Ｙ6/3）を呈している。口縁部の内外面の段の部分で、釉溜りがみられる。

5　写真 4 の素地は灰黄褐色（10ＹＲ6/2）で、釉はオリーブ色（５Ｙ5/4）を呈しているが、全体に薄く施釉されている。外面は胎土と釉の様子がまだらな色合いを示している。

Ⅱa類　口縁部が波状を呈する灰釉菊皿である。１個体。（図108－６、写真40－５）

素地は灰黄褐色（10ＹＲ6/2）で、内面をヒダ状に削る手法のものである。釉は内外面の口縁部付近で浅黄色（５Ｙ7/3）を呈しているが、見込はオリーブ灰色（10Ｙ5/2）を呈し、釉溜り

がみられる。見込中央は無釉で明褐色（7.5ＹＲ5/8）を呈している。これは施釉された後に拭きとられたものと思われる。

以上のほかに、口縁部が不明の灰釉小皿が１点出土した（図108－７、写真40－６）。素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）で、釉はオリーブ灰色（10Ｙ5/2）を呈している。見込中央は無釉である。削り出し高台である。高台内には１条の沈線が施され、またトチの痕跡が残っている。高台内際から高台際に釉溜りがみられる。Ｉb類に属するものと思われる。

《美濃灰釉絵付》　１個体。（図108－８、写真40－７）

推定径11㎝の小皿で、口縁部は内湾して立ち上がる。素地は灰白色（10ＹＲ7/1）で非常に緻密である。ガラス質の釉は灰白色（7.5Ｙ7/2）を呈している。下絵は黒褐色（10ＹＲ2/2）の鉄絵具で描かれているが、詳細は不明である。

〔志野〕

志野も美濃産陶器の一つであるが、釉薬は長石単味の白釉手であり、独特な釉調を呈する。本遺跡出土のものは、いずれも小破片であるが、それから推定できる器形としては、小皿（径15㎝内）、小鉢、碗がある。これらは絵志野と無地志野に大別できる。

《絵志野》　３個体。（図108－９、写真40－８～10）

９　写真８は推定約13㎝の小皿で、口縁部は内湾して立ち上がる。素地は灰白色（7.5ＹＲ8/1）を呈す。釉は明褐灰色（7.5ＹＲ7/1）で、光沢がなく、二次火熱を受けた可能性がある。内面には、にぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）の鉄絵具で簡素な絵が描かれている。草花文と思われるが、細片のためはっきりしない。

写真９は、口縁部がやや内湾しながら立ち上がる小皿である。素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/4）を呈している。釉は淡黄色（2.5Ｙ8/4）を呈す。内面に、にぶい黄色（2.5Ｙ6/4）の鉄絵具で絵付けされている。

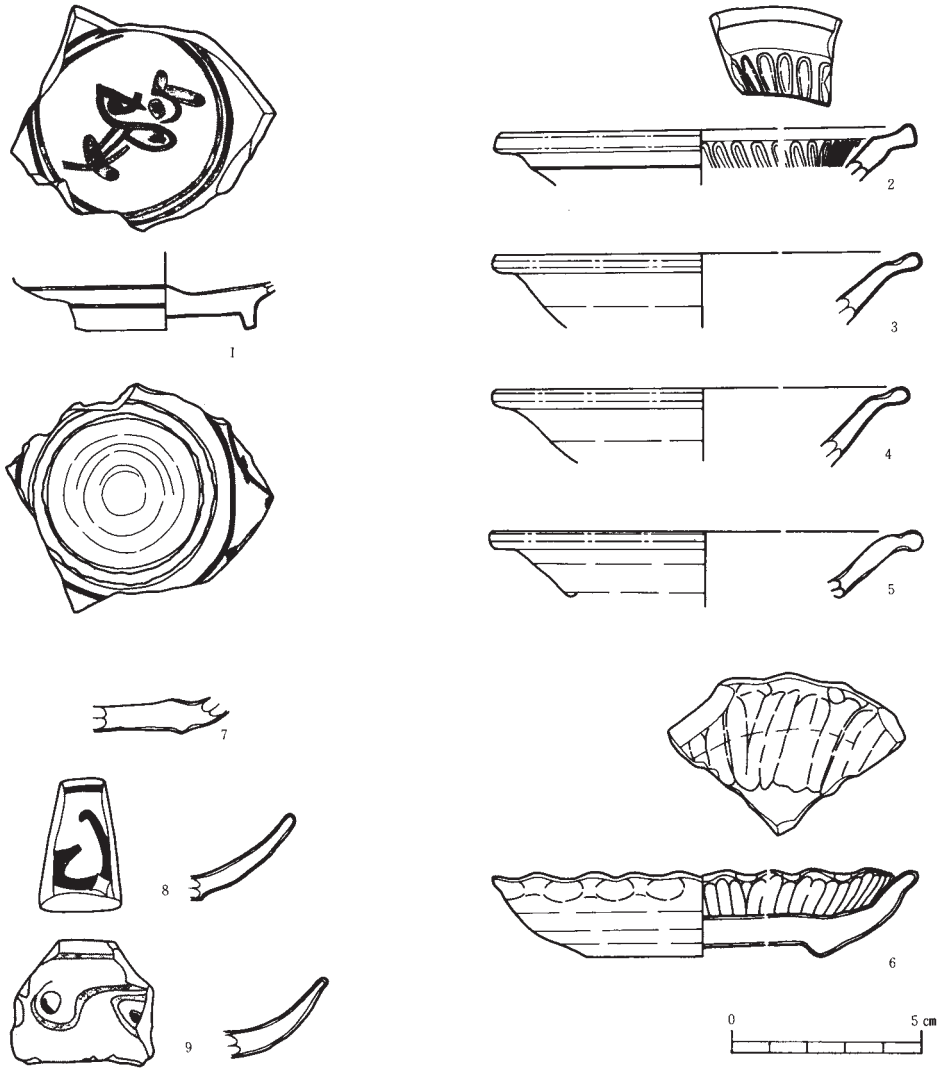
写真10の口縁部はまっすぐに立ち上がり、器形は碗か小皿と思われる。素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）を呈している。釉は光沢があり、灰白色（5Ｙ8/2）を呈し、暗褐色（7.5ＹＲ3/4）の鉄絵具で絵付されている。

《無地志野》　３個体。（写真40－11～13）

11の口縁部は外反して立ち上がり、胴部でややふくらみをもつ。小鉢と思われるが、皿かも知れない。素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）を呈している。釉は灰白色（５Ｙ7/1）を呈し、非常に厚く掛けられている。貫入がみられ、外面には小さい凹穴がみられる。

12は小皿の底部破片である。素地は浅黄橙色（10ＹＲ8/3）を呈している。釉は内外面とも薄く掛けられている。高台際で釉溜りがみられる。胎土が一部露呈している。

13は器形不明の破片である。素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/3）を呈している。釉は灰白色（5



陶　磁　器　一　覧　(1)

図　版	写　真	出 土 区	層 位	名　称	器　種	備　考	登録番号
1	41－35	II O－116	II	染付(明)	碗	見込中央に草花文	P28
	41－36	II N－113	〃	〃	皿		P 2
2	40－1	II O－115	〃	美　濃	〃	折縁菊皿	P18
3	40－2	II K－118	〃	〃	〃	折縁皿	P 6
4	40－3	II P－118	〃	〃	〃	〃	P30
5	40－4	II O－115	〃	〃	〃	〃	P27
6	40－5	II P－125	〃	〃	〃	菊　皿	P32
7	40－6	II P－116	〃	〃	〃	内面にトチ痕有	P16
8	40－7	II P－124	〃	〃	〃	灰釉絵付	P31
9	40－8	II P－111	〃	志　野	〃	絵志野　二次火熱か	P 8
	40－9	II P－115	〃	〃	〃	〃	P 9
	40－10	II O－116	〃	〃	碗か皿	〃	P24
	40－11	II P－115	〃	〃	小鉢か皿		P10
	40－12	II P－115	〃	〃	皿		P11
	40－13	II O－115	〃	〃	不　明		P19

図108　浜通遺跡出土陶磁器(1)

Ｙ7/1）を呈している。11と釉調がよく似ているが、素地にやや違いがみられる。

〔唐津〕

唐津はすべてが小皿で、16個体である。高台は、底中央部を回転させながら箆状の施具で削り取った、削り出し高台である。口縁部があるものについては４類に分類した。

Ⅰ類……内湾ぎみに立ち上がるもの

Ⅱ類……やや外反して立ち上がるもの

Ⅲ類……波状を呈し、内湾ぎみに立ち上がるもの（絵唐津）

Ⅳ類……波状を呈し、外反して立ち上がるもの（絵唐津）

Ⅰ類　６個体。（図109－１～４、写真40－14～19）

１　写真14の素地はにぶい赤褐色（５ＹＲ5/4）を呈し、暗灰黄色（2.5Ｙ5/2）の釉が掛けられている。内面は全面施釉であるが、外面は胴部中ほどまでであり、その下部は地膚が露呈している。内面にトチの痕跡が点状に４点残っている。縮緬高台である。

２　写真15の素地はにぶい赤褐色（５ＹＲ5/4）を呈している。釉はにぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）を呈している。内面は全面施釉、外面は胴部中ほどまでである。内面にトチの痕跡が４点残っている。高台は厚く、縮緬高台である。

写真16の素地は、にぶい赤褐色（2.5ＹＲ4/3）を呈している。釉は暗オリーブ色（５Ｙ4/3）を呈している。

３　写真17の素地は灰黄褐色（10ＹＲ6/2）で、釉はにぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）を呈している。内面は全面施釉、外面は胴部中ほどまでである。高台は丁寧に削られている。

写真18の素地は、にぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）を呈している。釉はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）を呈している。絵唐津であるが、細片のため詳細は不明である。

４　写真19の素地は、にぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）を呈している。釉はにぶい灰黄褐色（10ＹＲ6/2）を呈している。外面の釉は胴部中ほどまでである。

これらの皿には、ガラス質で光沢のある釉調のものと（１、２、３、写真16、18）、光沢のにぶい艶消しされたようなもの(4)とがある。

Ⅱ類　１個体。（図109－５、写真41－20）

素地は灰黄色（2.5Ｙ6/2）を呈し、釉はにぶい黄色（2.5Ｙ6/3）を呈している。外面の釉は口縁部直下ほどまでであり、その下郡はにぶい黄橙色（10ＹＲ6/4）の地膚を露呈している。口縁部内面に、わずかに一条の段を有し、また、外面にロクロ目の調整痕が明瞭にみられる。

Ⅲ類　３個体。（図109－６、写真41－21～23）

６　写真21の素地は、明赤褐色（５ＹＲ5/6）を呈している。釉はにぶい褐色（7.5ＹＲ6/3）を呈している。口唇部に暗赤灰色（2.5ＹＲ3/1）の絵付けがみられる。

写真22の素地は、にぶい赤褐色（５ＹＲ5/4）を呈している。釉は黄灰色（2.5Ｙ6/1）を呈し、口縁部外面で特に厚く釉掛けされている。口唇部に黒褐色（10ＹＲ2/2）の絵付けがみられる。

写真23の素地は、にぶい赤褐色（５ＹＲ5/4）を呈している。釉は灰黄褐色（10ＹＲ6/2）を呈している。口唇部に褐灰色（10ＹＲ4/1）の絵付けがみられる。

これらは絵唐津であるが、紙片のため詳細は不明である。

Ⅳ類　１個体。（図109－７、写真41－24）

素地はにぶい黄橙色（10ＹＲ7/3）を呈している。釉は灰色（５Ｙ6/1）を呈している。外面に暗褐色（10ＹＲ3/3）の絵付けがみられるが、細片のため、詳細は不明である。

以上のＩ～Ⅳ類の外に、口縁部のないものが６個体出土した。但し１点はⅡ類のものと同一個体。（図109－８～11、写真41－25～31）

８　写真25の素地は、褐灰色（10ＹＲ6/1）を呈している。釉はオリーブ色（7.5Ｙ5/2）を呈し、光沢がある。外面の胴部中ほど以下は無釉である。丁寧に作られた削出し高台で、器形はＩ類に属するものと思われる。

９　写真26の素地は、にぶい赤褐色（５ＹＲ5/3）を呈している。釉はオリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）を呈し、光沢がある。所々に釉溜りがみられる。外面の胴部中ほど以下は無釉である。内面に点状にトチの痕跡が残る。丁寧に作られた削出し高台である。器形はＩ類に属すると思われる。

10　写真27の素地は、にぶい褐色（7.5ＹＲ6/3）を呈している。釉はにぶい橙色（7.5ＹＲ7/3）を呈し、光沢はややにぶい。外面は無釉部分だけの残存である。内面に点状にトチの痕跡が残っている。削出し高台で、やや粗雑な作りである。器形はＩ類に属すると思われる。

11　写真28の素地は、にぶい赤褐色を呈している。釉は灰褐色（５ＹＲ6/2）を呈し、光沢はにぶく、艶消しされたような釉調である。外面の釉は胴部中ほどまでである。内面に点状にトチの痕跡が残っている。縮緬高台である。Ｉ類に属すると思われる。

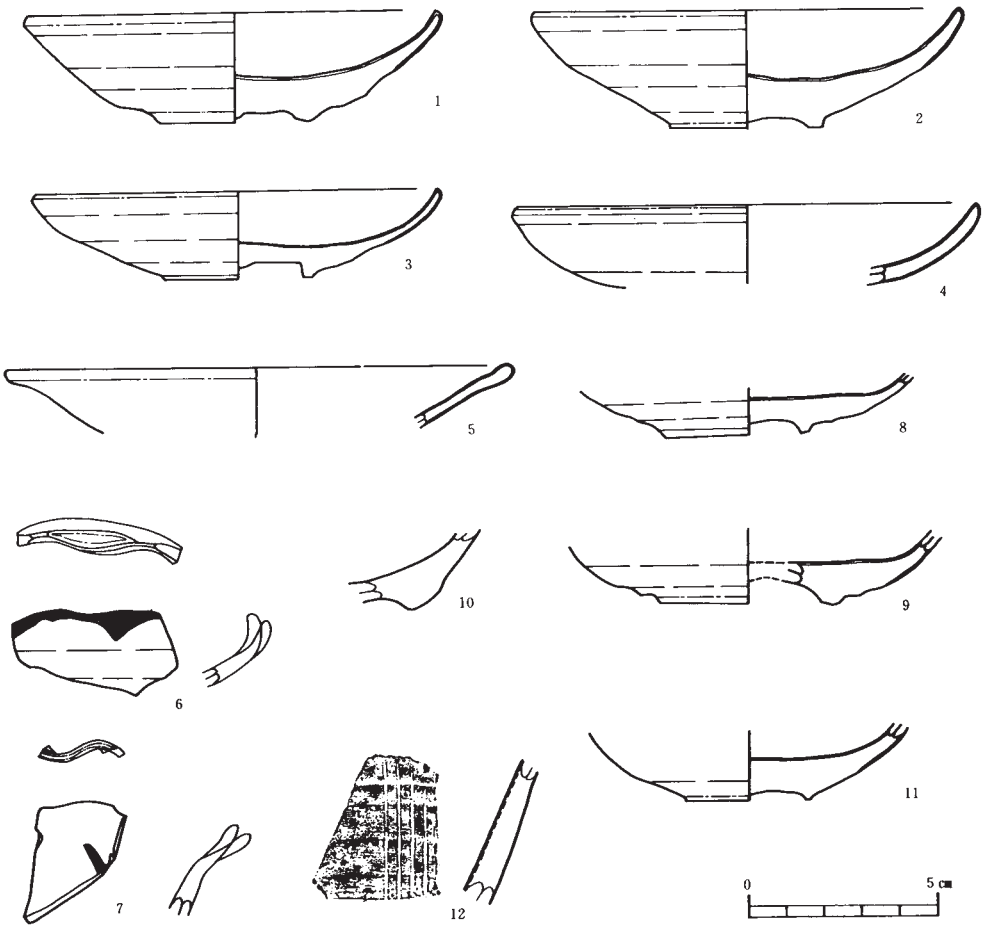
写真29は素地、釉調とも、図109－５に非常によく似ており、同一個体と思われる。

写真30、31の素地は、にぶい赤褐色（５ＹＲ5/3）を呈している。釉は灰黄褐色（10ＹＲ6/2）で、光沢はややにぶい。

〔産地未詳〕　２個体。

図109－12、写真41－32は小型（径20㎝以内）の摺鉢と思われる。無釉で、色調はにぶい赤褐色（５ＹＲ4/3）を呈し、胎土は灰色（10Ｙ4/1）を呈す。器面にロクロ調整の際の凹凸がみられる。内面に一定の間隔で、おろし目が刻まれている。

写真41－33の素地は灰オリーブ色（５Ｙ5/2）を呈している。釉はオリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）を呈している。くびれの部分で釉溜りが著しい。外面の釉の中に、灰色がかっている粒子の沈



陶　磁　器　一　覧　(2)

図　版	写　真	出　土　区	層　位	名　称	器　種	備　考	登録番号
1	40－14	II O－116	II	唐　津	皿	内面にトチ痕有	P29
2	40－15	II O－116	〃	〃	〃	〃	P17、19、25
3	40－17	II P－116	〃	〃	〃		P16
	40－16	II M－113	〃	〃	〃		P 4
	40－18	II O－115	〃	〃	〃	絵唐津	P18
4	40－19	II P－116	〃	〃	〃		P12、13
5	41－20	II P－132	〃	〃	〃		P33、35
6	41－21	II O－115	〃	〃	〃	絵唐津	P20
	41－22	II O－115	〃	〃	〃	〃	P21
	41－23	II O－115	〃	〃	〃	〃	P26
7	41－24	II O－116	〃	〃	〃	〃	P13
8	41－25	II P－111	〃	〃	〃		P 8
9	41－26	II K－117	〃	〃	〃	内面にトチ痕有	P 7
10	41－27	II K－115	表採	〃	〃	〃	P表採
11	41－28	II N－115	II	〃	〃	〃	P36
	41－29	II P－132	〃	〃	〃	図5と同一個体	P34
	41－30	II N－113	〃	〃	〃	同一個体	P 2
	41－31	II M－113	〃	〃	〃		P 3
12	41－32	II P－119	表採	産地未詳	摺　鉢		P表採
	41－33	II P－116	II	〃	不　明	同一個体	P28
	41－34	II P－116	〃	〃	〃		P 2

図109　浜通遺跡出土陶磁器(2)

澱物がかなりみられる。

写真41－34の素地は灰オリーブ色（５Ｙ5/2）を呈している。内面の釉は褐色（7.5ＹＲ4/4）を呈し、ロクロ調整の際の凹凸がみられる。外面釉はオリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）を呈している。上記の写真34と同一個体と思われる。器形からみて花瓶の頸部と思われる。

本遺跡から出土した陶磁器は、33個体である。（以下、点数は個体数を示す。）このほとんどが第Ⅱ層下郡に集中していることから、比較的限定された時期の遺物と思われる。その中で産地が判明しているのは、舶載陶磁器では明の染付２点、国産陶磁器では美濃の製品13点（灰釉６点、志野７点、うち絵志野４点）、唐津16点（うち絵唐津５点）で、産地未詳のものは２点である。また、器種は皿が大部分である。これらの明の染付、美濃、唐津はほぼ16世紀後半から17世紀前半に比定されるものと思われる。

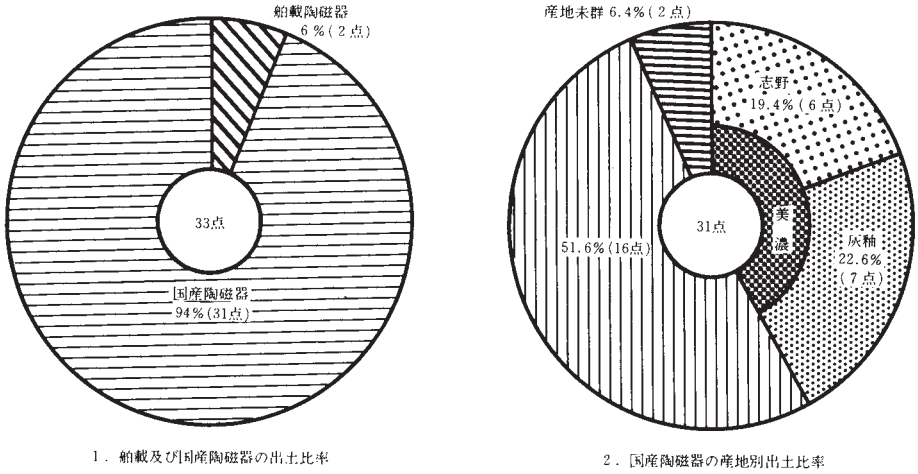
県内の16～17世紀の、中世から近世にかけての遺跡で、発掘調査が行われている遺跡は極めて少なく、浪岡城（浪岡町教委、1978、1980、1981）、根城（八戸市教委、1979、1980）、掘越城（弘前市教委、1978）等の城館跡が知られる程度である。これらの城館跡と本遺跡出土の陶磁器を比較してみるとき、試掘調査のため限界や危険性があるものの、本遺跡出土の陶磁器の特色は、概して次のとおりである。

第１に舶載陶磁器の出土が少ないことである（図110－１）。明代の染付の破片２点のみで、白磁、青磁は出土していない。本遺跡の性格は明確でないものの、いわゆる城館跡ではなく、当時の支配層の居城であった上記の３遺跡とは、この点でも一線を画するものである。

第２に、国産陶磁器の中では唐津の出土が多いことである（図110－２）。３遺跡ともに美濃灰釉、志野、唐津が出土しているが、浪岡城は美濃灰釉陶器が主体で、唐津は僅少である。堀越城、根城は美濃灰釉が中心であるが、唐津の出土は比較的みられ、浪岡城よりは廃絶年代の新しい堀越城、根城にやや近い。また、本遺跡では口縁部がやや外反している唐津皿が１点出土しているが、根城には類例があり、浪岡城では未だ出土していない。いずれにせよ、これら３遺跡に比べてはるかに唐津の出土比率が高いことが大きな特色であり、それは主として遺跡の存続年代の差異によるのではないかと思われる。

第３に、美濃の製品中、志野の割合いが高いことである。美濃灰釉と志野とがほぼ同じ割合で出土しており、他の３遺跡では美濃灰釉がはるかに多い。また、本遺跡で出土している灰釉皿には、古い時期から作られた丸皿が全くなく、大部分が折縁皿であることも一つの特色である。その中に、内面をヒダ状に削る折縁菊皿が１点出土している。また、わずかに１点であるが、口縁が波状を呈する皿で、内面をヒダ状に削る手法のものが出土しており注目される。

第４に、17世紀中頃から陶磁器交易の主体となる伊万里が出土していないことである。



1．舶載及び国産陶磁器の出土比率　　2．国産陶磁器の産地別出土比率

図110　浜通遺跡陶磁器出土比率

以上のような本遺跡の陶磁器は、浪岡城、根城、堀越城出土の陶磁器と比較し、更にこれら3城館跡の存続年代をも勘案してみるとき、16世紀後半から17世紀にかけて、その中でも特に17世紀前半の特色を有するものではなかろうか。このことは本遺跡の存続年代を知る上で重要な手がかりを与えるものであるとともに、この時期の陶磁器の組合せを考える上で、重要な資料となろう。

しかし、限られた調査面積では資料も十分でなく、即断できない点が多い。将来の本調査に期待したい。

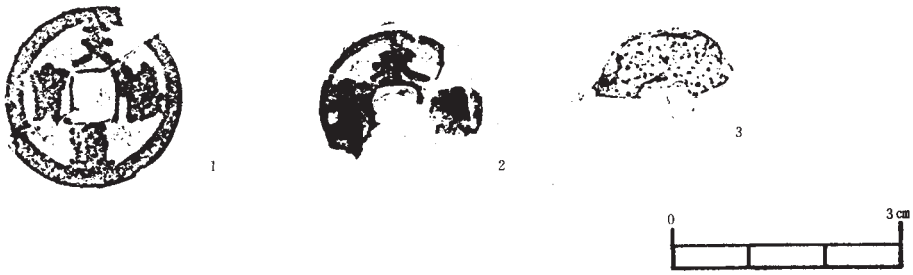
イ．土製品

陶磁器が出土した同じＢ地点から、素焼きのミニチュア土器が１点出土した。素地は明赤褐色（５ＹＲ5/6）を呈す。時期は不明である。

ウ．古銭　（図111－１～３）

古銭は３枚の出土であるが、単発的な出土状態である。第Ⅱ層から２枚、柱穴の覆土上面から１枚出土した。１枚は天禧通宝（北宋）で、１枚は2/3破片であるものの、上の字が“永”であることから永楽通宝（明）であろう。残りの１枚は1/3破片で、かつ腐食が激しく、銭貨名は不明である。天禧通宝、永楽通宝共、いずれも中国からの渡来銭であり、日本銭の出土はない。

青森県における出土古銭に関する諸報告によれば、出土した渡来銭は時代別には北宋銭が最も多く、天禧通宝はその北宋銭の中でおおむね２～３％の割合を占めている。また、永楽通宝は、明銭としては我国に最も多量に輸入されたもので、県内での出土例・枚数ともに多く、渡来銭の中では一般的な貨幣である。



古　　銭　　一　　覧

図版	銭貨名	初鋳年代	出土区	層位	直径	残存状態	登録番号
1	天禧通宝	北来天禧元年(1017年)	ⅡN－113	第Ⅱ層	24.0mm	一部欠損	C－1
2	永楽通宝	明永楽6年(1408年)	ⅡP－122	第Ⅱ層	20.5mm	2/3破片	C－2
3	不　明	不　明	ⅡP′－123	Pit1フク土上面	不明	1/3破片	C－3

図111　浜通遺跡出土古銭

エ．鉄製鋤先　（図112）

調査区ⅡN－114の第Ⅱ層下部から出土したものである。同一層から16世紀の陶磁器の破片が多数出土していることからみると、これらの陶磁器に伴出するものと理解される。

鋤先は銹化が著しいが、原形はよく保存されている。刃部の重量は2.37kg、全長43.0cm、最大幅19.0cm、先端部の幅9.5cmで、刃部の厚さは先端部で0.1cm、最大厚は1.3cmである。また、刃部における風呂入れ部分の長さは26.5cm、同最大幅は15.4cmである。柄や刃部を据える風呂部分の出土がないものの、刃部の重量・長さ・形態から鍬先ではなく、鋤先であると思われる。

一般的に鋤の使用法は、足をかけて掘り込むものである。近年まで畑作の盛んな南部地方で多くみられた踏鋤は、畑の耕起に用いられたものである（青森県立郷土館1978）。また、江戸時代後期に大蔵永常が著した『農具便利論』によれば、田面の排水のための溝の掘削や、砂地の掘削などの用途も知られる。本遺跡で出土した鋤先は、縦に長いという形態から深耕用に適していると思われる。

今回出土した鋤先の類例は、現状では極めて少ない。平安時代の住居跡等からは比較的出土しているが、その形状はU字形であり、本遺跡出土の鋤先とは明瞭な差異がある。また、中世を中心とする遺跡として知られる広島県草戸千軒町遺跡出土の鋤先は（広島県教委：1977）、刃先きの長さが刃部全体の1/2ほどを占め、更に刃先きから刃の根元の部分に向かって外側に開くなどの類似性があるものの、本遺跡出土の鋤先の方がはるかに大型で、縦に細長い点で違いが認められる。その点では、江戸時代後期の『農具便利論』に図示されているものや、近年まで使用されてきた鋤先に相通ずるものがあるが、刃先きの形状など細部においては差異が認められる。

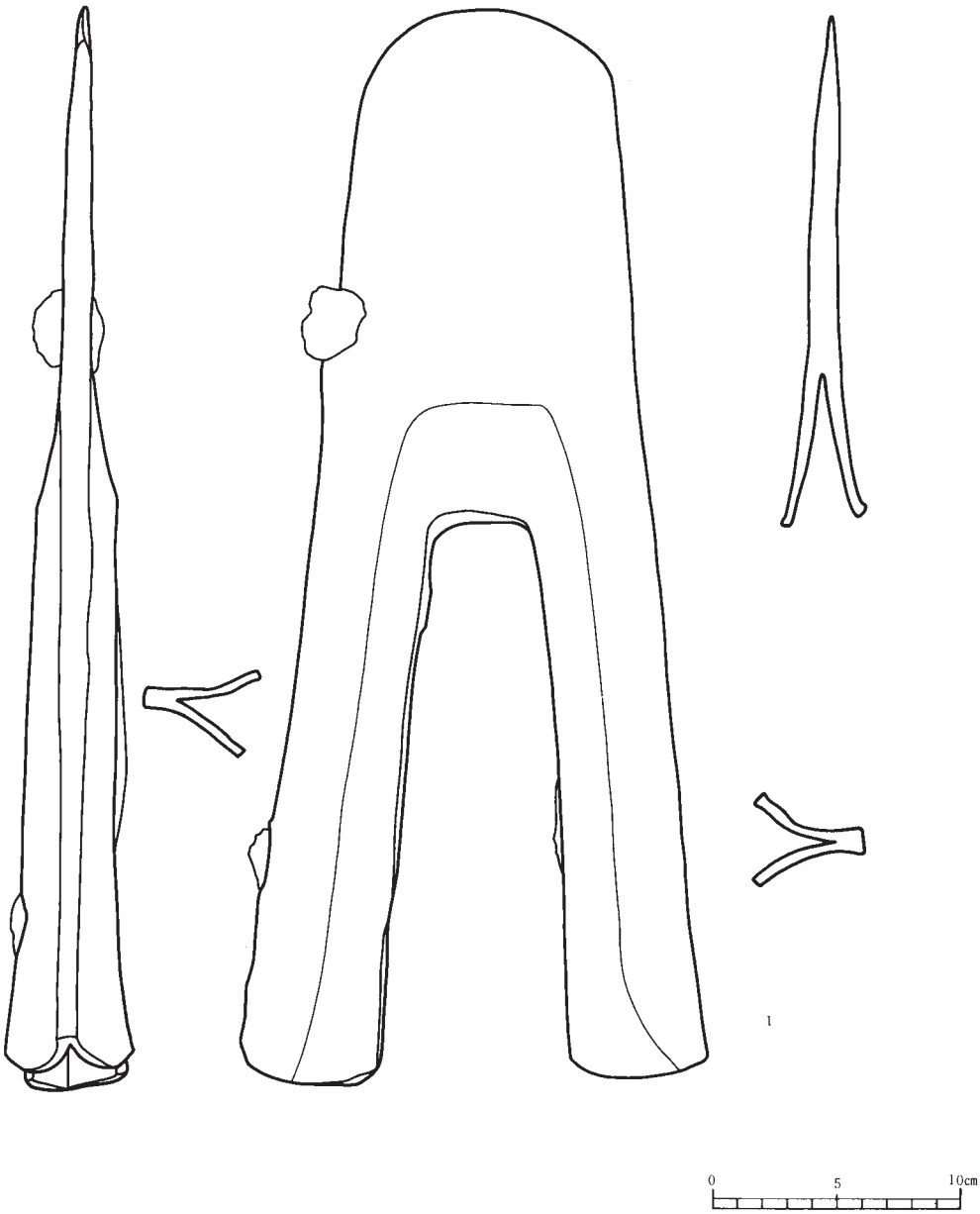


図112　浜通遺跡出土鉄器

こうしてみると本遺跡出土の鋤先は、同一形態の類例がないため断定はできないが、刃部が縦方向に長いという点では近世的な特徴を有しており、刃部が狭Ｖ字状に外反すること、刃の先端部が丸味を持つことなどでは、草戸千軒町遺跡出土等のものと共通するものがあることから、中世から近世にかけての鋤先として考えられよう。

オ．砥石　（図107－２）

陶磁器と同様、第Ⅱ層からの出土である。片方の端が欠損している。研磨面は上面及び両側面の３面にわたるが、主な研磨面は上面である。研磨面には摩滅痕や擦痕が観察される。小刀などの鉄製品の研磨に用いられたものと思われる。

5　小　結

Ａ地点においては、第１号土壙を除けば縄文時代後期の十腰内Ｉ式土器に比定される土器片が一個体分出土したのみで、ほかには出土遺物もなく、住居跡等の遺構も一切みられない。このことから本遺跡のＡ地点は、縄文時代後期のハンティング・キャンプ地としての性格を有するものと考えられる。

一方Ｂ地点においては、古銭や鋤先とともに16世紀後半から17世紀前半にかけての陶磁器の破片が多量に出土し、このことから16世紀から17世紀という、中世末期から近世初頭にかけての遺跡としてとらえることができる。更に、この地点からは掘立柱建物跡の柱穴を１基、柱穴と思われる円形の落ちこみを15基確認した。その分布範囲は東西に70.5m、南北に22mとかなりの広範囲に及び、仮に、それらをすべて柱穴としてとらえた場合、青森県内の根城や浪岡城における掘立柱建物跡の規模からしても、数棟以上の建物跡の存在が考えられる。

16、17世紀の下北半島の情勢をみると、康正３年（1457年）、蠣崎蔵人の乱を根城南部氏13代政経が鎮圧して以来、約１世紀半にわたり下北は根城南部氏の支配下に置かれた。元和３年（1617年）に盛岡南部氏との間に領地交換がなされた後は、この地は盛岡南部氏の支配下に入るのである。本遺跡では、当時、支配階級や富裕階層以外の所有が考え難い明代の染付や美濃の菊皿などが出土していることから、根城南部氏との関連が考えられる。ただし、文献面からの裏付けを未だ得られない現状であり、確証を得るに至っていない。

次に、本遺跡における掘立柱建物跡として把握できる施設を地形との絡みで見た場合、東は海浜となり、北には小河川が流れ、西・南の後背地は湿地帯となっている。農耕の場としては、太平洋側特有の偏東風による冷涼な気候のため、水田耕作には不適の地である。また、周囲が広汎な湿地帯であることからも、大規模な畑作ということも考えにくい。港湾施設という点では、現在の地形からすれば、台地の北側を流れ、すぐ海に注ぎ込む折戸川の水量が貧弱で、か

つ浅く、砂浜海岸であり、港湾の立地条件としては極めて悪い。しかし、『伊達家治家記録』の慶長16年（1611）10月28日の条に、「巳刻過ぎ御領内大地震津波入ル……其節南部津軽等モ海辺の在家人馬等三千余溺死ス」と記されているのをはじめ、太平洋岸はたびたび大津波に洗われており、往時の地形と相違がみられる可能性も無視できない。そのほか、この地方の海浜に多量に含まれる砂鉄を使用した製鉄や、広大な砂浜を利用した製塩、あるいは牧に付随する施設か、ということも考えられないわけではないが、限定された調査面積から結論を下し得ない。これらについては、今後の調査課題となるであろう。

なお、遺跡推定面積は約15,000㎡である。

（大瀬　秀男・須藤　節子）

〔引用・参考文献〕

浪岡町教育委員会　（1978）『浪岡城跡』

〃　（1980）『浪岡城跡Ⅱ』

〃　（1981）『浪岡城跡Ⅲ』

八戸市教育委員会　（1979）『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ』

〃　（1980）『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ』

弘前市教育委員会　（1978）『堀越城跡』

佐々木　達夫　（1981）『日本海の陶磁貿易』日本海文化第８号別刷

工藤　清泰　（1981）『浪岡城跡よりみた中世末期の陶磁器交易について』東奥文化第52号

楢崎　彰一　（1976）『瀬戸美濃』日本陶磁全集９　中央公論社

林屋　晴三　（1975）『志野』　〃　15　〃

佐藤　雅彦　（1976）『唐津』　〃　17　〃

成田　末五郎　（1938）「津軽地方発掘古銭の研究」『青森県郷土資料集』第２集他

飯沼　二郎・堀尾　尚志　（1976）『農具』法政大学出版局

中村　たかを　（1981）『日本の民具』弘文堂

青森県立郷土館　（1978）『青森県民俗資料図録第５集　青森県の農具』

大蔵　永常　『農具便利論』ただし秋山高志ほか（1979）『図録農民生活史事典』柏書房

広島県教育委員会　（1977）『草戸千軒町遺跡』第21～23次発掘調査概要

土井　義夫　（1976）「鉄製農工具研究ノート」季刊どるめん10号

宮崎　道生　（1970）『青森県の歴史』山川出版社

森　嘉兵衛　（1970）「漁業経営の危険」『日本避地の史的研究』下巻　法政大学出版局

工藤　竹久　（1981）（八戸市根城跡発掘調査概要〉『青森県考古学会会報』第15号

遺跡全景

第１号集石遺構

第２号集石遺構

写真36　浜 通 遺 跡

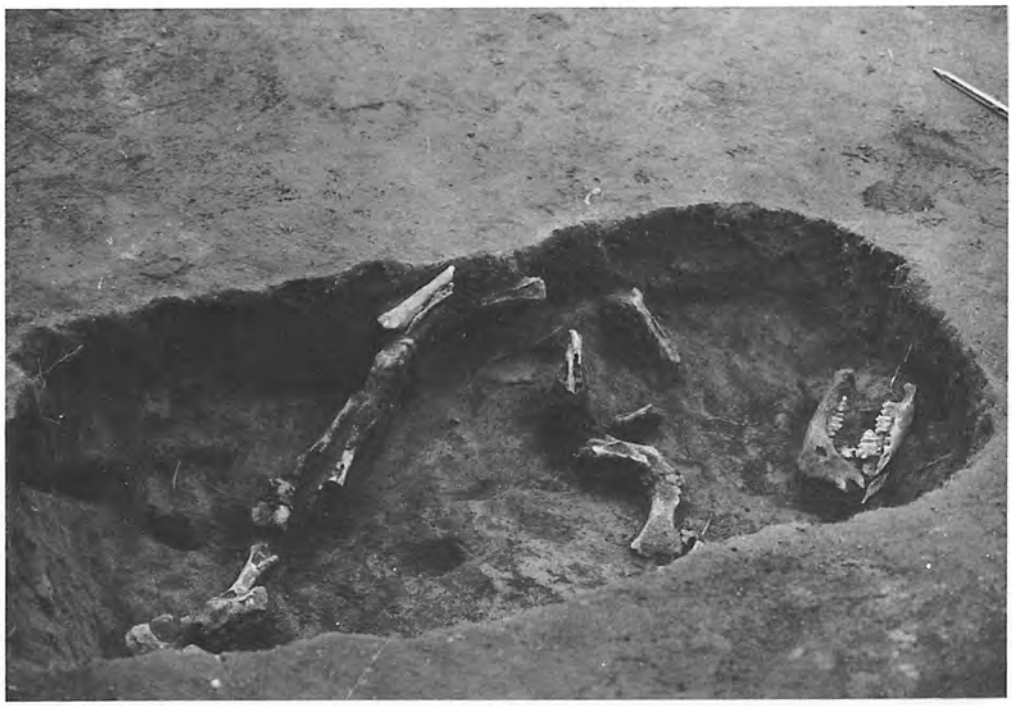
A地点縄文後期土器出土状況

B地点鋤先出土状況

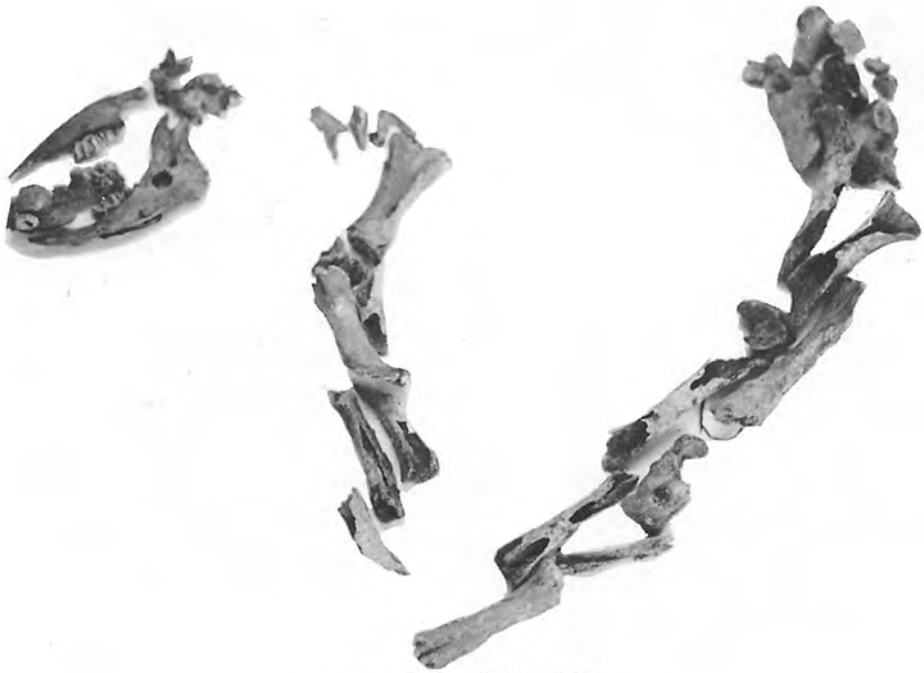
B地点陶磁器出土状況

掘立柱建物跡柱穴

写真37　浜 通 遺 跡



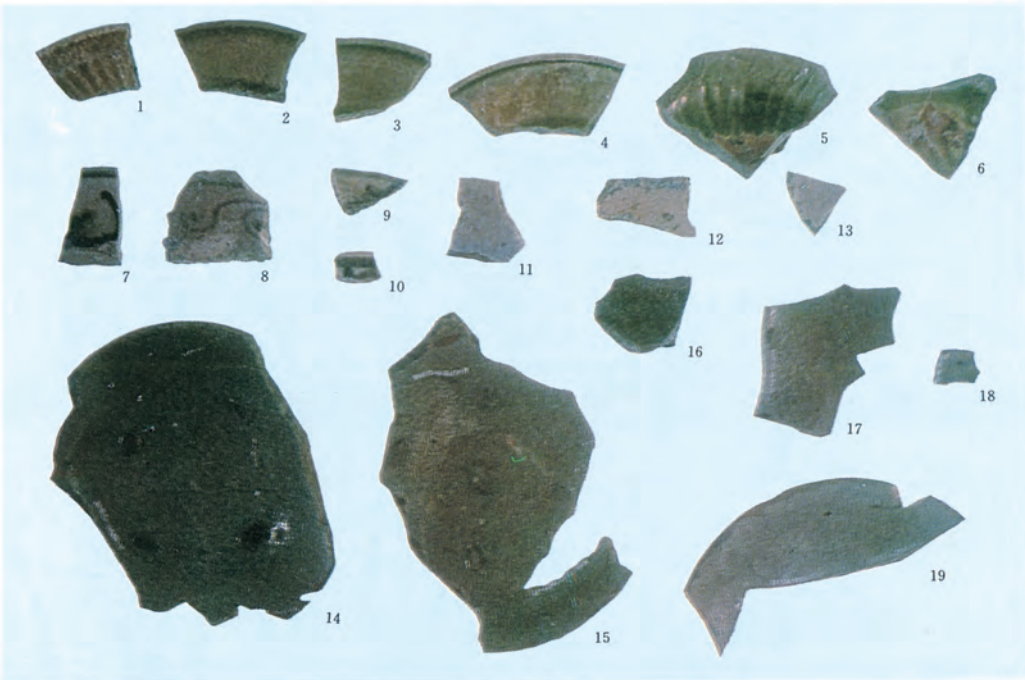
第１号土坑全景



第１号土坑内出土馬骨

写真38　浜通遺跡第１号土坑

写真39　浜通遺跡出土遺物



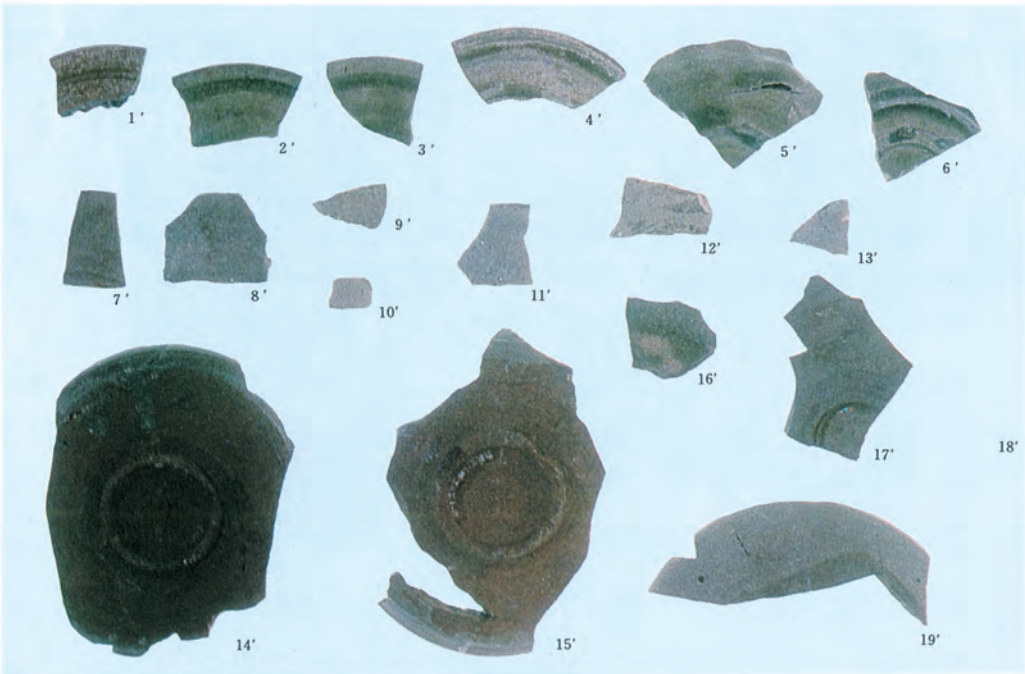
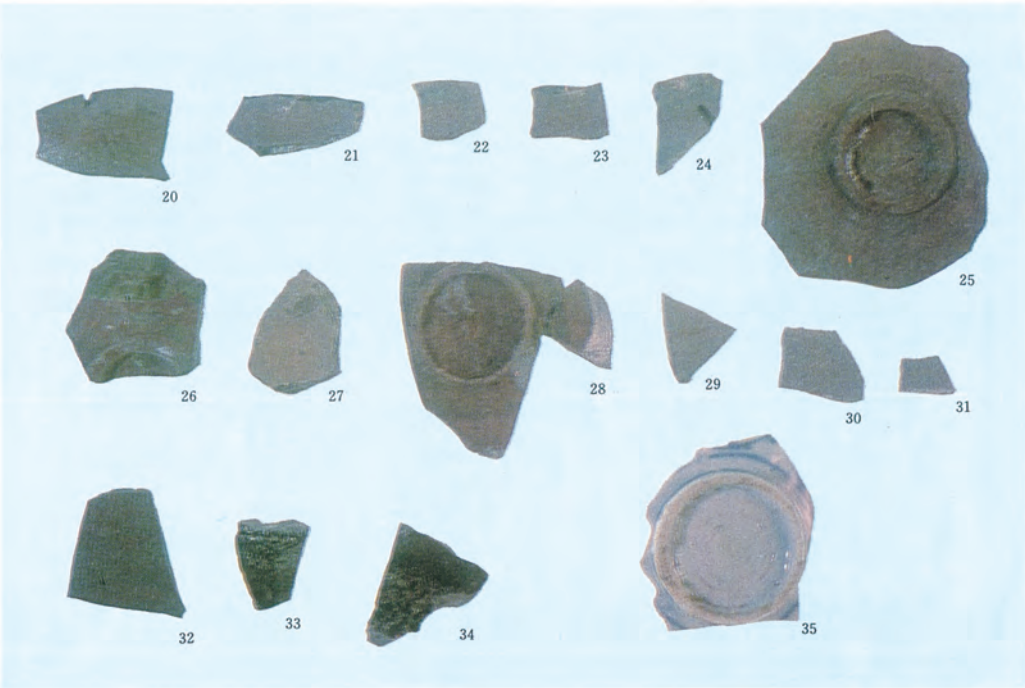


写真40　浜通遺跡出土陶磁器(1)



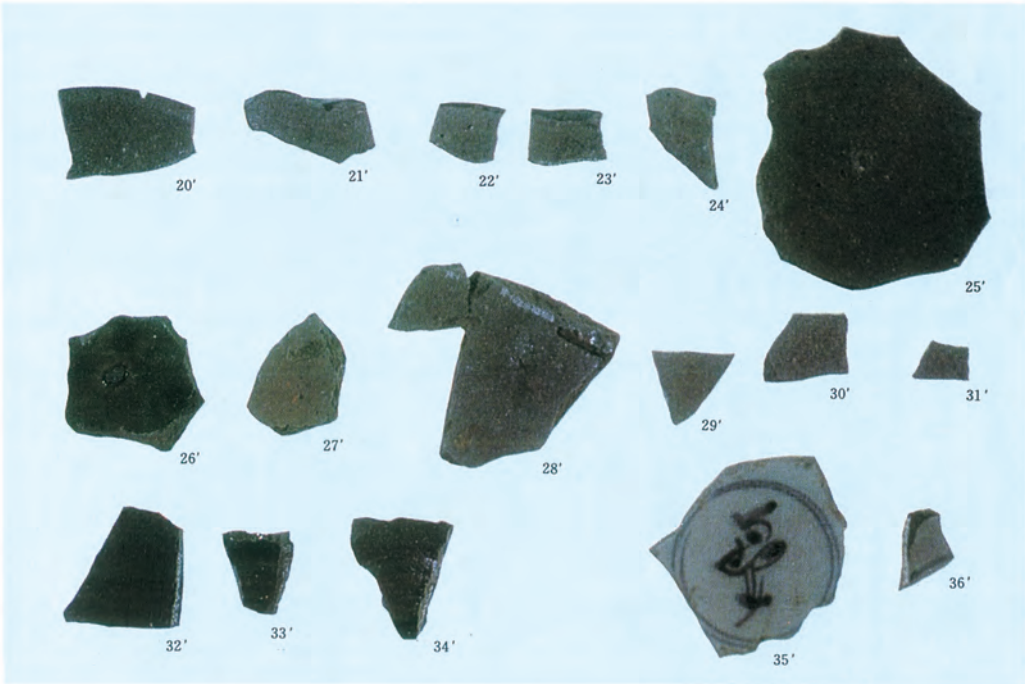


写真41　浜通遺跡出土陶磁器(2)

第20節　アイヌ野遺跡

1　遺跡の立地

下北郡東通村大字小田野沢字南通 2 の133ほかに所在する。遺跡は太平洋の現汀線から約500m離れた、標高17m～22mの洪積台地上に立地する。この台地の西・南・北側はいずれも狭い湿地帯になっており、東側は海岸の砂丘に連続する。このため、台地は狭い独立丘となっている。また、南側・北側の湿地帯には幅約 1 mの小河川がある。湿地帯の一部は近年水田に開田されている。台地の大部分は樹齢数百年の松林となっており、その間隙にはクヌギ、ウルシ等の雑木やカヤが密生している。

台地中央部の最高位面は、近年約500㎡の規模で土取りが行われ削平されている。

2　調査経過と調査方法

本遺跡が注目されたのは、下北半島をその研究のフィールドにした故中島全二氏による昭和36年 8 月の踏査以後である。この時点で中島氏は、約30ヶ所の竪穴（凹地？）を確認されたとしている。また、地元の小田野沢地区では、「アイヌ野」あるいは「アイヌ森」として古くから土器類を出土する場所として知られている。

その後、昭和46年度に青森県教育委員会が実施した、むつ小川原開発に係る遺跡分布調査において土師器片が採集されたものの、松林と雑木のため竪穴を確認することはできなかった（青森県教委：1977）。

更に昭和52年度の分布調査（青森県教委：1978）の時点でも竪穴を確認するまでに至っていない。

このような状況のもとで、今回の試掘調査をむかえた。このため調査にあたってはまず、第１に、故中島氏が発見したとされる30個の竪穴（凹地？）を確認すること、第 2 に竪穴分布範囲、及びその包蔵状況を把握することとし、第 3 に竪穴（凹地）が住居跡であるのかどうか、更に住居跡であった場合、土師器及び擦文土器のいずれを伴うものなのか、等を明らかにすることを目的とした。

まず、遺跡推定地全域の松の下枝、及び雑木を刈払うこと、その後に20m単位のグリッドを組み、グリッドラインに沿って１m幅のトレンチを設け、遺物及び遺構を発見すること、更に、発見された竪穴のうち最も代表的なものを精査し、その内容を把握することとした。

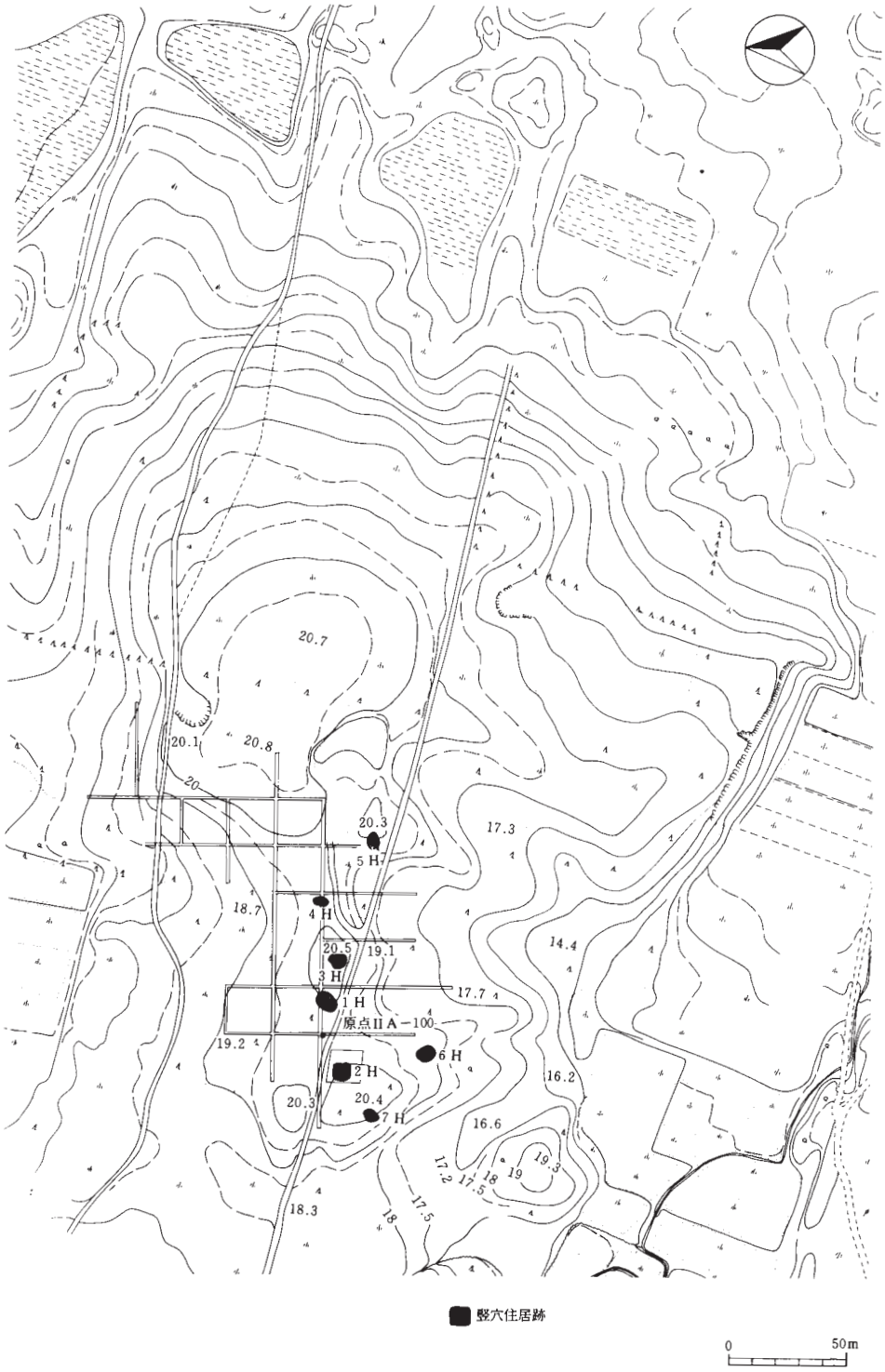


図113　アイヌ野遺跡地形・調査区配置

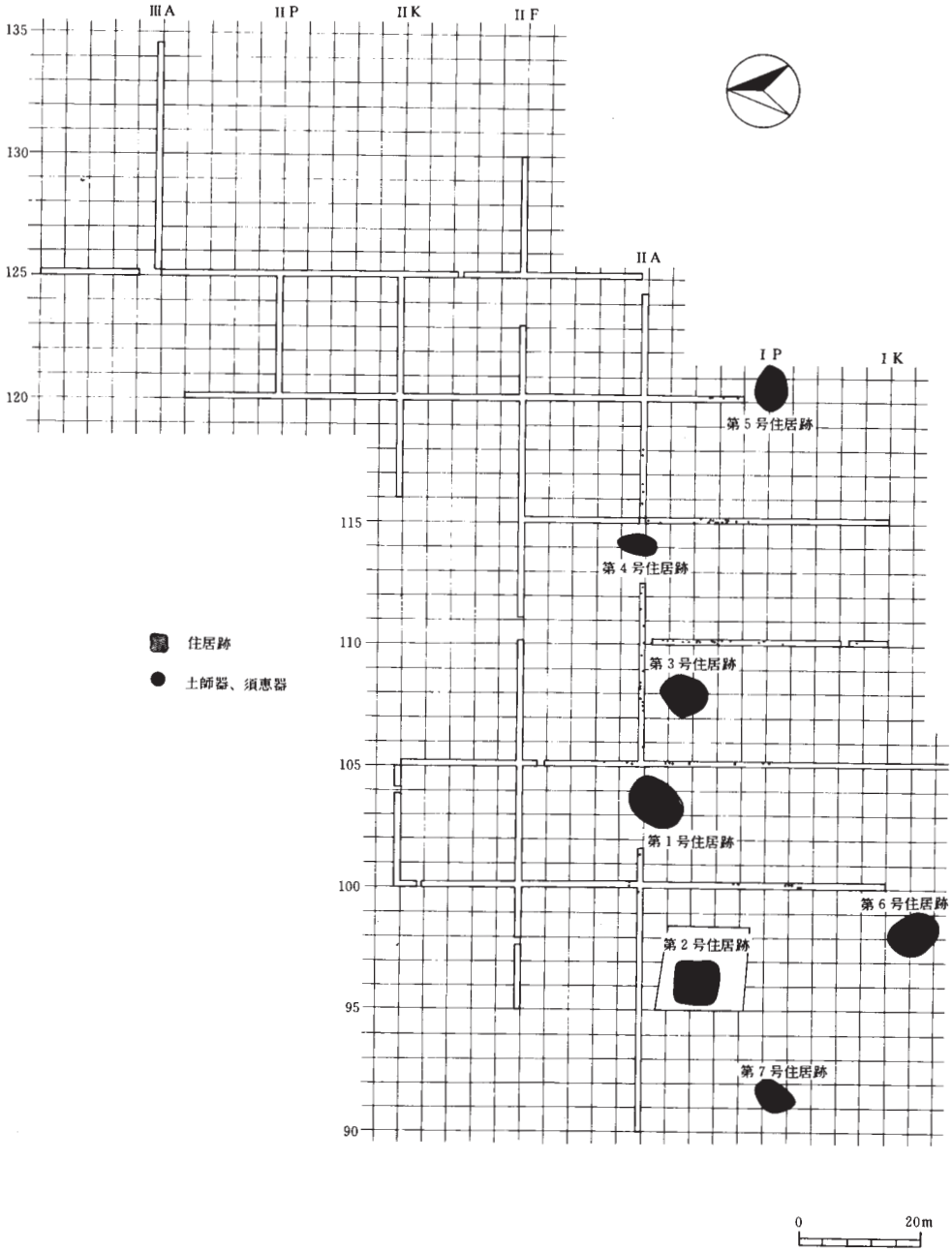


図114　アイヌ野遺跡グリッド・遺構配置

9 月下旬から約 3 週間余りの期間をかけて松の下枝や雑木等の刈払いを行ったが、この間、雑木にまきついているツタウルシのため、皮膚炎症をおこすものが続出し、作業は困難を極めた。

しかし、刈払作業の後半には、竪穴住居跡と思われる円形の凹地が数ヶ所で確認されはじめた。

グリッド設定終了後の10月上旬には粗掘り作業に入った。竪穴の住居跡と思われる凹地は遺構保存のため、極力トレンチを入れないで残すことにした。各トレンチの遺物は、土師器及び、須恵器のみで、しかも、凹地の存在する周囲からのみ出土する現象を把握できた。

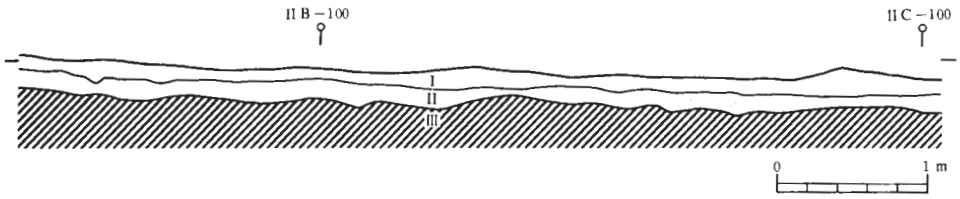
10月中旬には、 7 基の凹地のうち、最も保存の良好な 2 号住居跡を選び、この竪穴の精査に入った。

この第 2 号住居跡は凹地の外周が、付近の平坦地よりやや高くなっており、盛土をしている可能性があったため、精査対象をこの盛土縁辺まで広げることにした。

10月30日には本遺跡の調査の全作業を終了した。

3　遺跡の層序

遺跡が立地している台地の層序は、 3 層に区分される。第Ⅰ層は表土層であるが、地点により層厚に大きな違いがある。近年開墾され、畑地として利用されている台地の中央部や、北側では比較的厚く、20cm～30cmである。しかし、樹齢数百年とも思われる松林内での堆積は 5 cm～10cmで、薄く分布するにすぎない。この松林内では耕作された痕跡が全く無く、しかも凹地として竪穴が確認されることから、竪穴住居が廃絶された以後、ほとんど人為による攪乱は受けなかったものと思われる。この松林内の第Ⅰ層の大部分は、まだ腐植段階の枯草や雑木根で構成される。



アイヌ野遺跡基本層序一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
Ⅰ	黒褐色 10YR3/3	シルト		耕作土	
Ⅱ	暗褐色 10YR3/4	シルト	ロームブロック、炭化物混入	自然堆積	竪穴住居掘り込み面
Ⅲ	黄褐色 10YR5/8	ローム			

図115　アイヌ野遺跡基本層序

図116　アイヌ野遺跡第１号住居跡

第Ⅱa層は黒褐色のシルト層である。層厚は５㎝～10㎝で比較的薄い。各トレンチ内から出土した土師器、須恵器のほとんどはこの層中に包含されるものである。

第Ⅱb層は暗褐色のシルト層である。遺跡内の大部分でほぼ均一的に認められる。遺物は全く包含されていない。

第Ⅲ層はローム層である。第Ⅱb層と、ロームの純堆積層との中間には、暗褐色シルトと、ロームの混合土層が見られる。この層を第Ⅲa層として、その下層の黄褐色ローム層を第Ⅲb層とした。

4　検出遺構と出土遺物

確認できた遺構は、７基である。このうち１基（第２号住居跡）のみを精査した。この結果、平安時代の住居跡であることが判明した。ほかの凹地も、形態や規模から第２号住居跡同様に、まだ埋まり切らない竪穴住居跡と思われる。

（1）第１号住居跡、第３～第７号住居跡

６基の凹地は表５に記した通りの観察結果である。このうち第１号住居跡と第５、６号住居跡の３軒は、その周囲に土手状の周堤をもつ。また、その周辺の竪穴外に設けられたトレンチ内からは、いずれも土師器、須恵器の細片が出土した。

（2）第２号住居跡

〔遺構の確認と位置〕　調査区ＩＰ～ＩＴ－95～98の地点で直径約６ｍほどの円形擂鉢状の凹地を地表面で確認した。また、この周囲には、付近の平坦面よりやや高い帯状のマウンドも確認できた。

凹地は中央部が最も深く、周囲より60㎝程下がる。

〔平面形・規模〕　東壁辺6.7m、西壁辺6.5m、南壁辺6.5m、北壁辺6.8mのほとんど均等の壁を有する。しかし、南東コーナー及び北西コーナーの内角は80～85 ℃のため、全体の形状はやや菱形である。

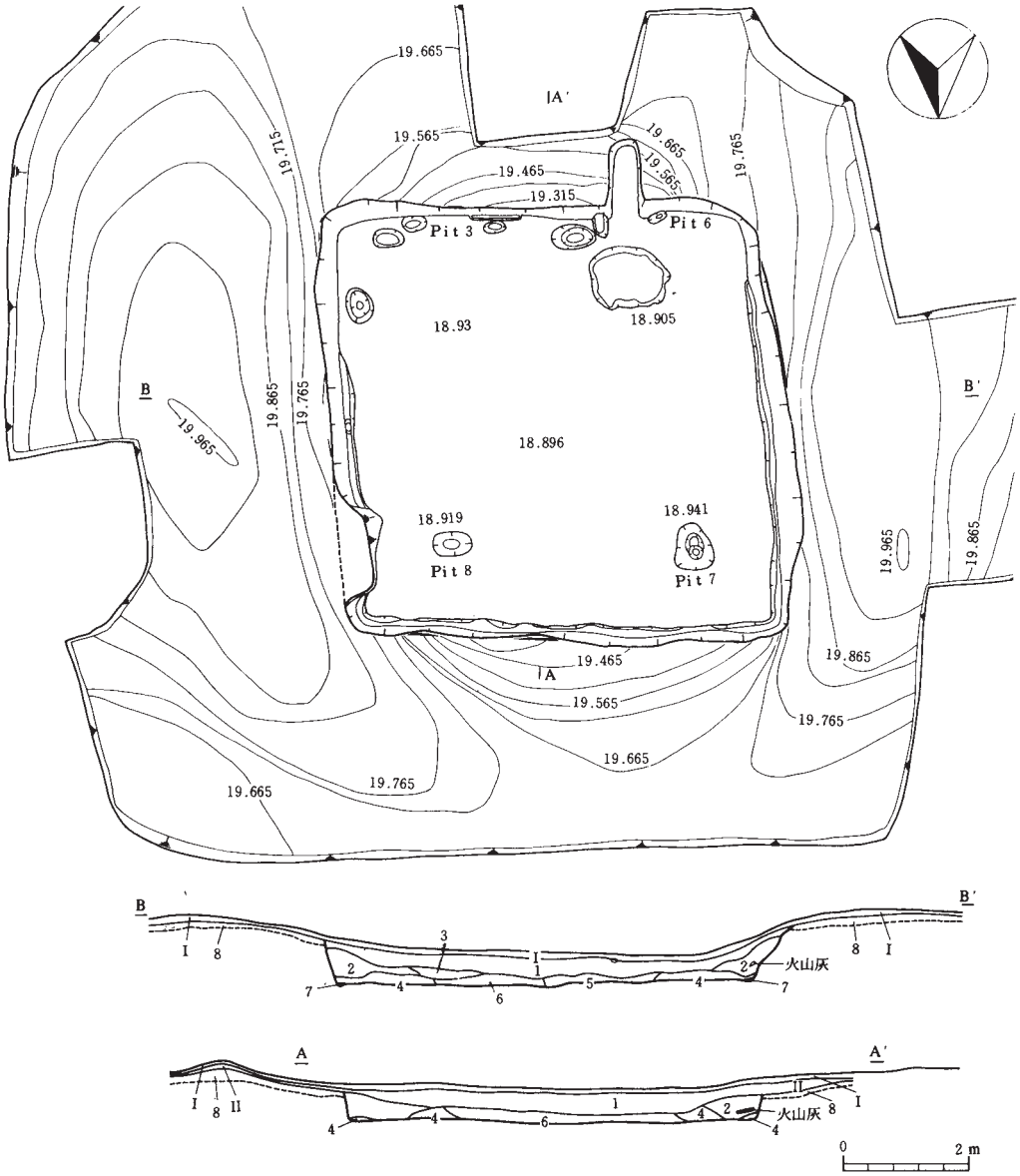
床面積（柱跡あるいはかまど本体を含める）は43.1㎡で、土師器を伴う住居跡としては比較的大型のものである。

〔壁〕　当時の生活面から、竪穴内床面までは、東壁及び南壁が盛土のため最も深く、東壁で82㎝～95㎝、西壁で80㎝～92㎝である。盛土の認められない南・北壁では37㎝～75㎝、南壁で55㎝～75㎝である。

壁面は南・北壁で地山のローム層をそのまま利用しており、東・西壁で、地山のローム層上に盛り上げられた20㎝～30㎝の盛土（竪穴を掘り下げた時点の排土を利用している。この盛土と地山の中間には腐植土は認められない。）をも利用している。

東壁辺の北東コーナー寄りの一部（約１ｍの長さ）は、松の巨木のため、精査することができない。

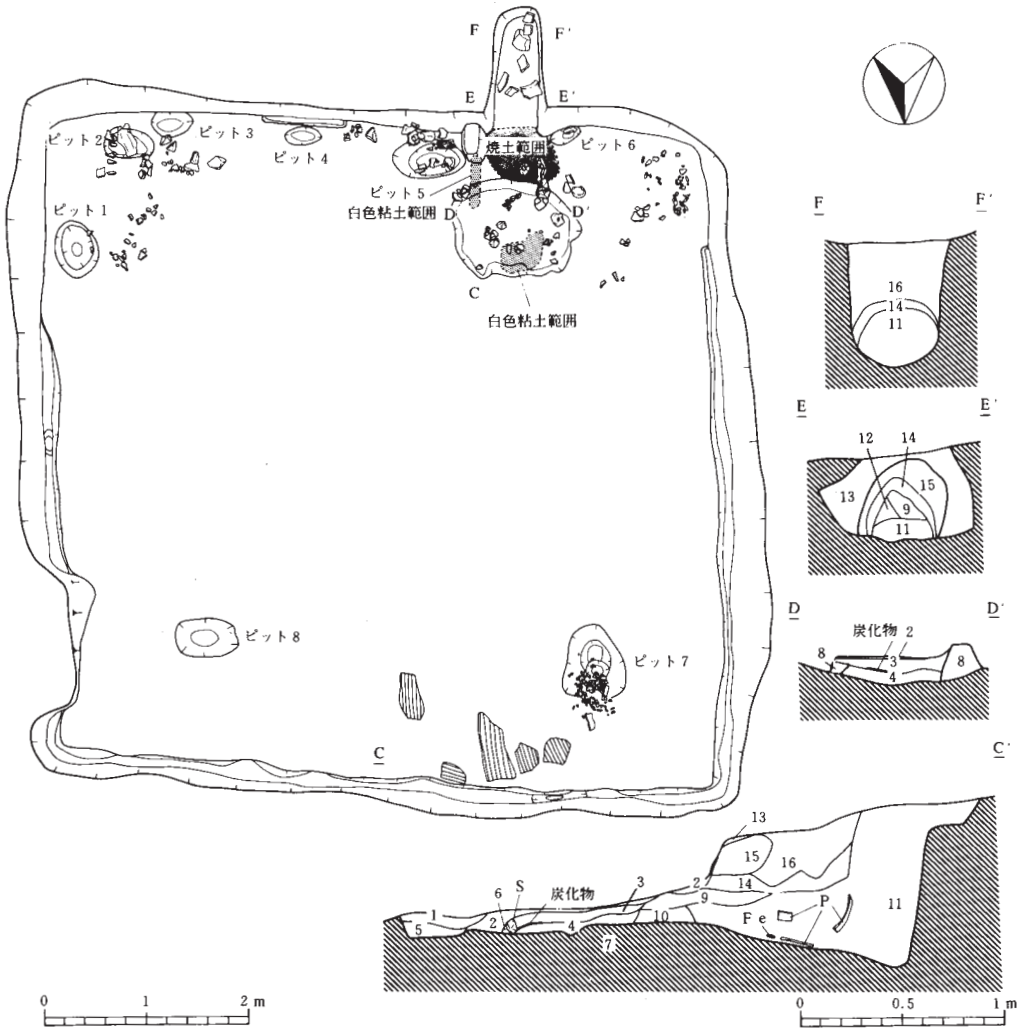
〔床面〕　床面は全体にわたってほとんど平坦である。竪穴中央部からかまど前庭部にかけ



第２号住居跡堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト		表土	
1	暗褐色 10YR3/3	シルト	ローム粒(0.2~1cm)、炭化物(1cm)	自然堆積	
2	褐色 7.5YR4/6	シルト質ローム	一部に火山灰(１～３cm)	人為堆積	火災後に埋め戻した土層
3	灰褐色 7.5YR5/4	シルト質ローム			
4	褐色 7.5YR4/4	シルト質ローム	一部に炭化物(１cm)		
5	黒褐色 7.5YR3/1	シルト	一部に炭化物(0.5~1cm)焼土(0.5cm)		上屋の炭化材
6	黒褐色 10YR3/3	シルト	一部に炭化物、焼土		
7	褐色 10YR4/6	シルト質ローム			周溝内堆積土
8	褐色 7.5YR5/6		ロームと暗褐色土の混合土		竪穴外盛土

図117　アイヌ野遺跡第２号住居跡



第2号住居跡かまど内堆積土一覧

層位	土色	土性	混入物	層の形成	備考
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	焼土粒、木炭粒混入	自然堆積	
2	暗褐色 10YR3/4	シルト	焼土粒、木炭粒混入		
3	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土		かまど天井部	焼土
4	暗赤褐色 5YR3/6	シルト		火床面	焼土
5	灰黄褐色 10YR6/2	粘土			
6	黒色 10YR1.7/1	シルト			
7	黄褐色 10YR5/8	ローム		地山	
8	赤褐色 5YR3/4	シルト質粘土		かまど袖部	両袖の内面焼土
9	褐色 7.5YR4/6	シルト			
10	にぶい赤褐色 5YR4/3	シルト		自然堆積	
11	暗赤褐色 5YR3/4	シルト	焼土粒、木炭粒混入		
12	明褐色 7.5YR5/6	シルト	焼土混入		
13	褐色 10YR4/6	ローム		煙道部側壁	焼土
14	赤褐色 5YR4/6	シルト		煙道天井部	焼土
15	赤褐色 5YR3/6	シルト			焼土
16	黄褐色 10YR5/8	シルト			

図118　アイヌ野遺跡第2号住居跡平面・かまど断面

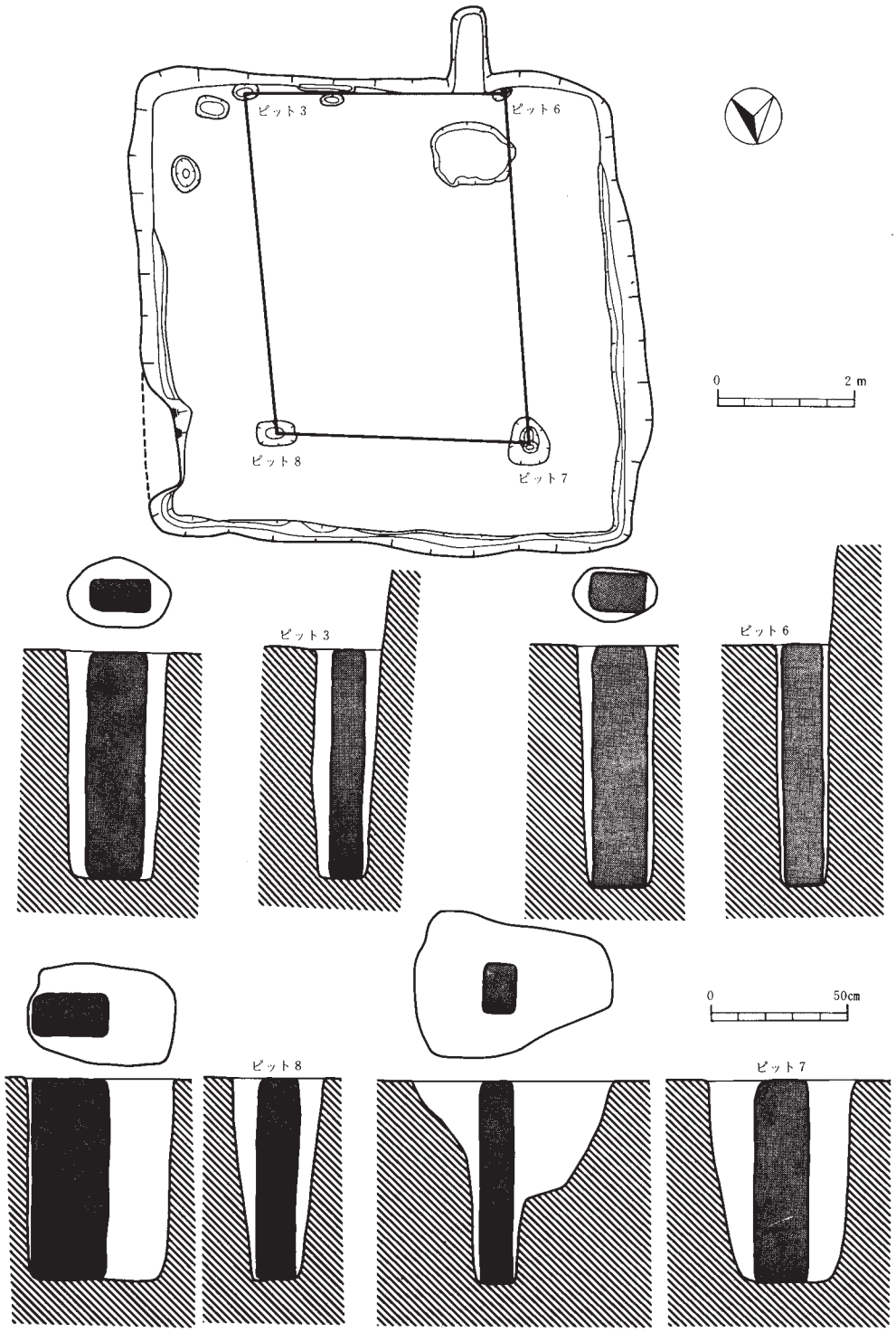


図119　アイヌ野遺跡第2号住居跡主柱穴配置と柱痕跡

ては細かい凹凸が激しく、しかも、堅緻である。逆に、東・西・北壁から 2 m前後の幅では地山を常時踏みしめている痕跡は見られない。

〔柱穴〕　竪穴内で検出したピットは 8 個である。このうちピット 3、ピット 6、ピット 7、ピット 8 の 4 個には柱痕跡が見られ、しかもこれらは床面下74㎝～94㎝のほぼ類似した深さであることから、主柱穴と思われる。

ピット 3 及びピット 6 は、南壁直下のややコーナー寄りに、また、ピット 8 及びピット 7 は竪穴の対角線上の、北東及び北西の各コーナー寄りの床面上に位置する。

ピット 6 は、かまどの右袖外壁にほぼ接している。これらの主柱穴では、埋土と柱根跡とを明瞭に区別できた。前者はロームブロックが多量に占める土層で、後者は黒褐色単一の腐植土層である。

ピット 3 の柱痕跡は幅12㎝、長さ24㎝ほどの長方形の断面をもった角柱である。断面の長軸を壁に添わせ、柱穴掘り方底面に接した状態で柱を埋設している。ピット 6 の柱痕跡は幅15㎝、長さ20㎝ほどの長方形の断面をもった角柱である。しかしピット3の柱痕とは異なり、全体にやや丸味を有した形状であり、これも断面の長軸を壁に添わせ、柱穴掘り方の底面に接した状態で埋設している。

ピット 7 の掘り方は、ほかのそれとは異なり、床面下40㎝程の位置で段をなしている。柱痕跡は幅12㎝長さ20㎝ほどの長方形の断面をもった角柱である。これも掘り方底面まで連続している状態で検出できた。

ピット 8 もほぼ長方形の掘り方である。柱は、幅15㎝、長さ28㎝ほどの長方形の断面をもった角柱である。柱の埋設位置は掘り方の西壁に接した場所で、これも断面の長軸を東西方向に位置させている。

この 4 個の柱痕は、床面で確認した形状が、ほぼ、そのままの状態で、掘り方底面まで連続することから、竪穴廃絶後に柱を抜き取ったものではなく、埋め込まれた状態のまま腐植したものと推定される。

〔周溝〕　東・西・北壁辺直下で検出した。しかし、東壁辺のものは、南東コーナー寄りの約1/3では存在しない。いずれも壁に接した位置である。

幅は 5 ㎝～20㎝で、探さは 6 ㎝～23㎝と一定でない。板材や杭等の痕跡はない。

周溝内の堆積土はロームのブロックが多量に混入する黄褐色土層である。

〔その他の施設〕　4 個の主柱穴以外に竪穴内で検出したピット 1 、ピット 2 、ピット 4 、ピット 5 は底面が浅い鍋底状を呈し、しかもこの 4 個のピットは堆積土の状態から竪穴使用段階で、堆積土のない空の状態であることが理解できた。

ピット 1 は、南北にやや長い楕円形で、床面からの探さは22㎝である。底面全体が強い火熱

をうけたためか、赤変している。底面近くの焼土内からは重さ110gと10gの 2 個の鉄滓が出土した。小鍛治施設の可能性もあるが、これだけでは判断ができない。

ピットでは、南東コーナーに位置する長径50㎝、短径30㎝の楕円形のピットである。

このピットの堆積土中から、かまどの芯材に用いられたと思われる凝灰岩質の礫が数点出土した。ほかには特記すべき事項がない。したがってその性格も不明である。

〔竪穴内堆積土と出土遺物〕

堆積土　竪穴内の堆積土は 6 層に細分される。

第Ⅰ層は表土で、草木根及び落葉が主体の層である。耕作等は全く行われていない。

第Ⅰ層は暗褐色のシルト層で、竪穴内にレンズ状に厚く堆積している。この層も人為的な攪乱はほとんど受けていない。

第Ⅱ～第Ⅳ層は、地山を形成する褐色ロームが主体の層である。この層は住居が火災を受けた直後に埋め戻されたものであろう。竪穴の壁際に約 1 mの帯状に分布するだけである。なお、第Ⅱ層中には灰黄色の降下火山灰が薄く認められた。

第Ⅴ～第Ⅵ層は、木炭及び焼土を多量に含むシルト層である。この層の分布状態から推定して住居の上屋が、火災で焼け落ちたものと思われる。

出土遺物　竪穴内外から出土した遺物は土師器、鉄製品である。これらの大部分が床面及びかまど内から出土しており、しかも略完形のものが多い。

出土した遺物の大多数は土師器である。これは坏・小型甕・甕・堝である。また、須恵器は坏・鉢・長頸壺及び大甕の破片である。

〔土師器〕

甕　長胴甕は 9 個体出土した。このうち出土状況や接合関係等で、竪穴廃棄直前まで使用されていたと思われるものは 8 個体である。

図123－ 1 は煙道内に埋め込まれていたもので、破片は散乱していたが、欠損部分はない。肩部に最大径をもち、口縁部が大きく外反する長胴の甕である。巻き上げ成形によるもので外面を口縁部が指ナデ、体部全体を縦方向のヘラナデを行って調整している。また、底辺部の一部には斜位方向のケズリが見られる。

図124－ 2 の大部分の破片は、かまど左袖のピット中から出土したもので、煙道内の 1 破片と接合する。この土器は器形や、成整形技法の面で、図123－ 1 と全く類似する。

図123－ 2 、124－ 3 、 4 、 5 、125－ 2 の 5 個体は比較的小型の甕で、いずれも床面出土のものである。123－ 2 、124－ 4 は口縁部の外反度合が少なく、しかも器厚がやや厚い点で類似する。

図124－ 5 は、小型の割に口縁部が広い器形である。内外面の調整技法は他の甕と同一である。

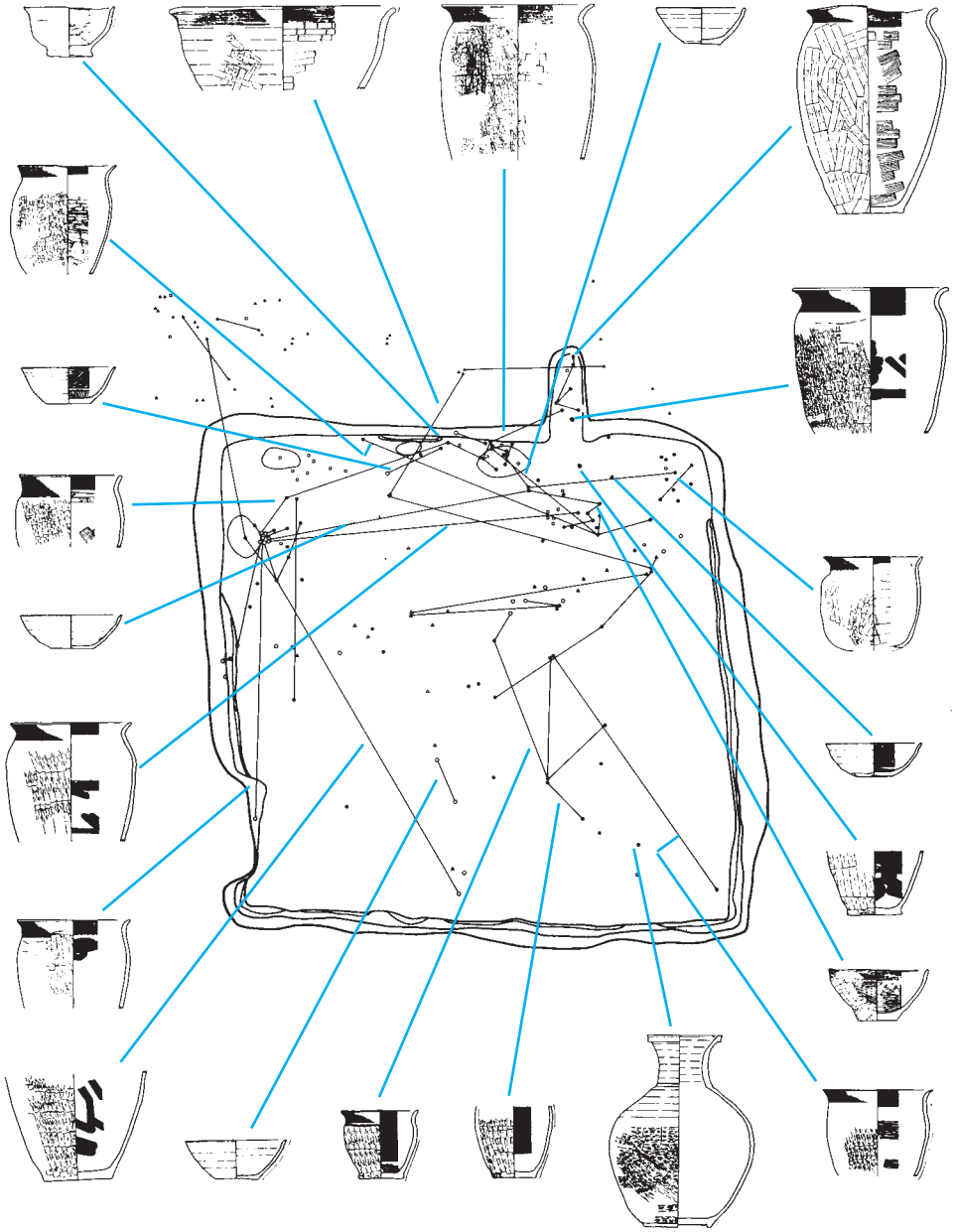


図120　アイヌ野遺跡第２号住居跡遺物出土位置

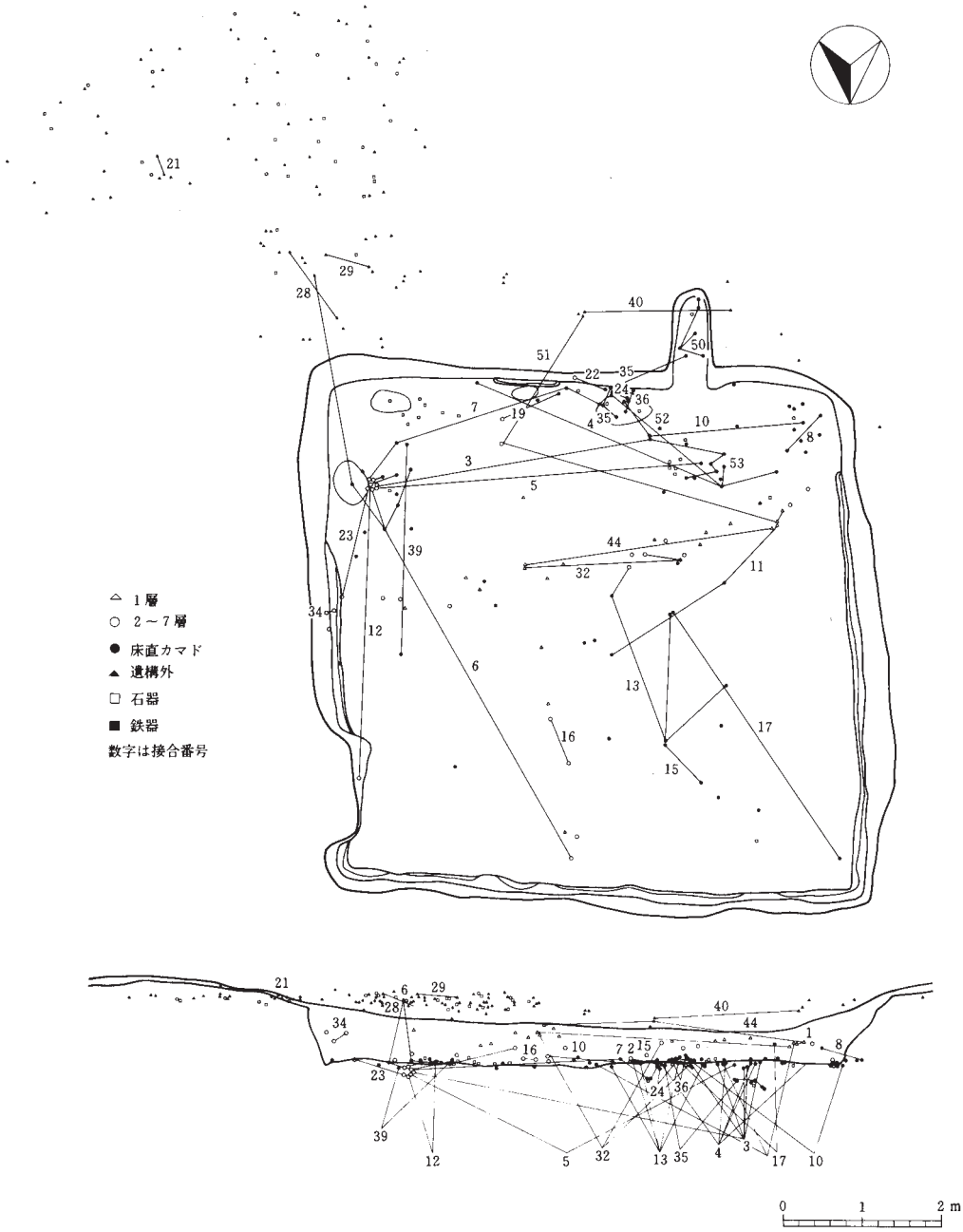
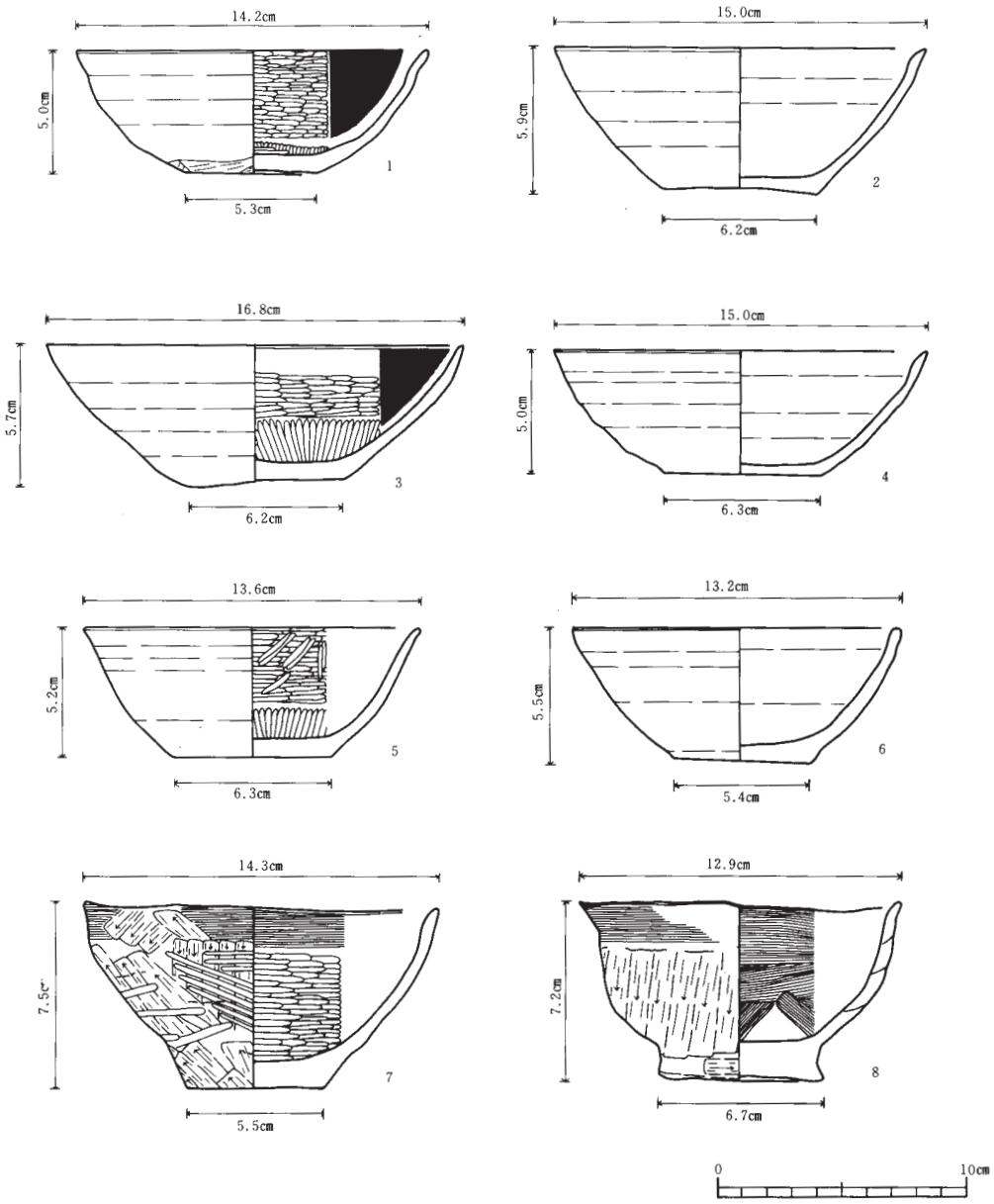


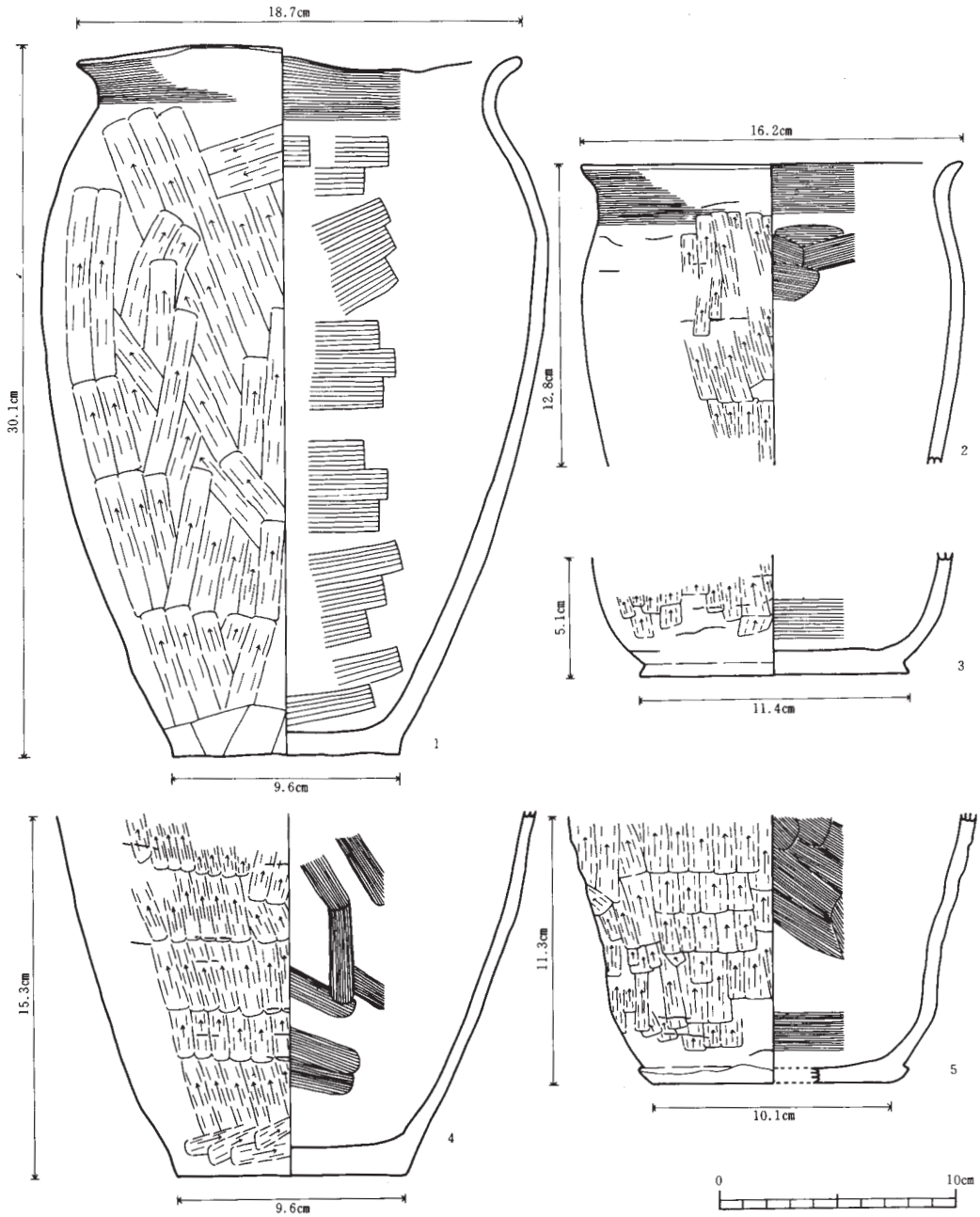
図121　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土遺物分布



土師器、須恵器観察一覧

図版	層位	器種	部位	外面	内面	備考	登録番号
1	2Hカマド付近	坏	—	ロクロ、底辺部ヘラケズリ	放射状のミガキ	黒色処理	P23
2	2H床面	須・坏	—	ロクロ、底部に回転糸切痕	ロクロ	再調整なし	接16
3	2H覆土3層	坏	—	ロクロ、底部に回転糸切痕	放射状のミガキ	黒色処理	P300
4	2Hカマド付近	須・坏	—	ロクロ、底部に回転糸切痕	ロクロ	再調整なし	接3
5	2Hカマド付近	坏	—	ロクロ、底部に回転糸切痕	放射状のミガキ		接19
6	2Hカマド付近	坏	—	ロクロ、底部に回転糸切痕	ロクロ	再調整なし	接52
7	2Hカマド付近	坏	—	上半部ミガキ下半部ナデ	ミガキ	ロクロ不使用	接53
8	2Hカマド付近	坏	—	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ	ロクロ不使用	接7

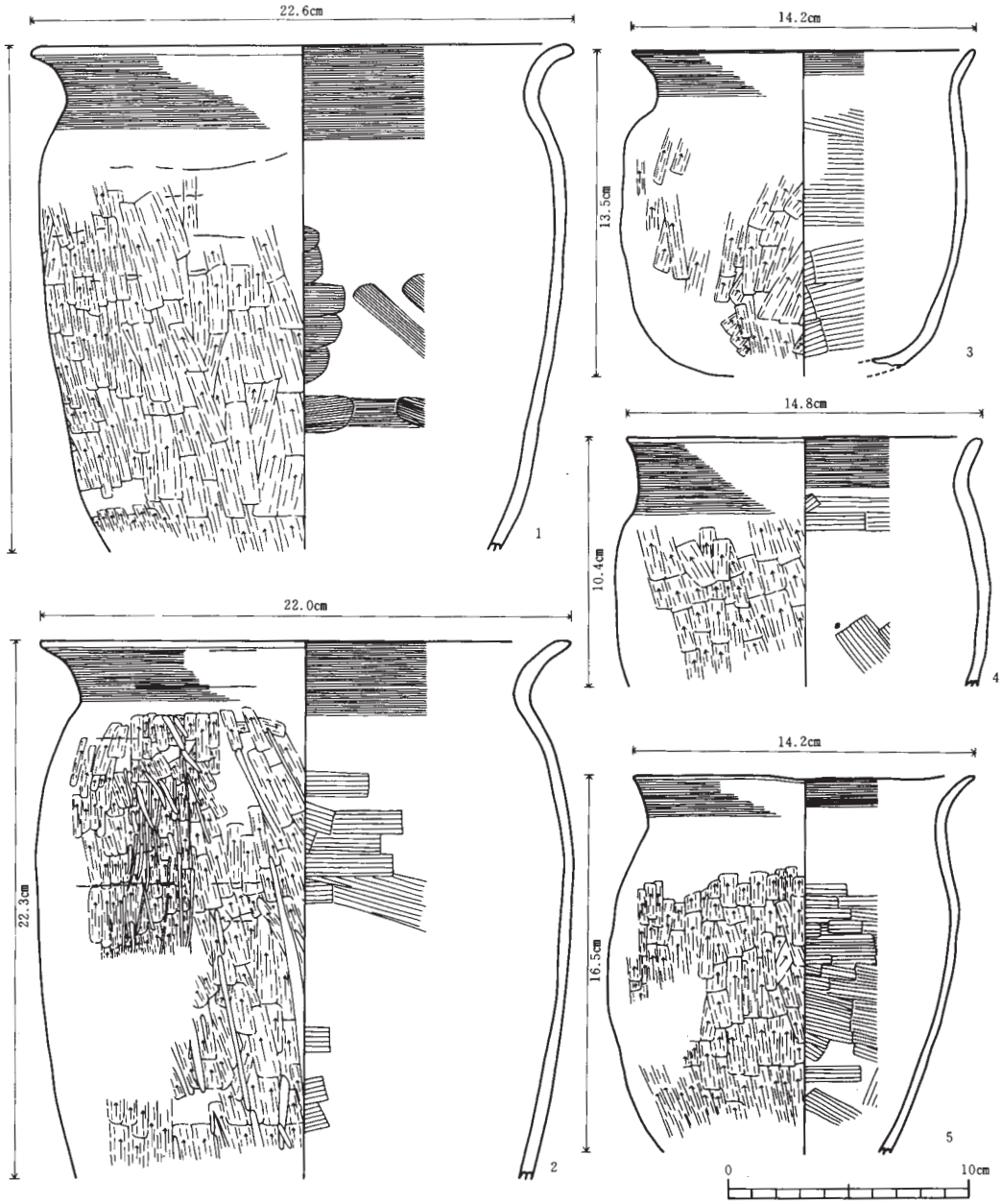
図122　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土土器(1)



土 師 器 観 察 一 覧

図版	層 位	器 種	部 位	外 面	内 面	備 考	登録番号
1	2Hカマド内11層	甕	—	ユビナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	ユビナデ、ヘラナデ		接50
2	2H覆土3層	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ	外面に炭化物付着	接12
3	2H覆土4層	甕	底 部	ヘラナデ	ユビナデ		P70
4	2H床面	甕	底 部	ヘラナデ	ユビナデ		接6
5	2H覆土4層	甕	底 部	ヘラナデ	ユビナデ		P301

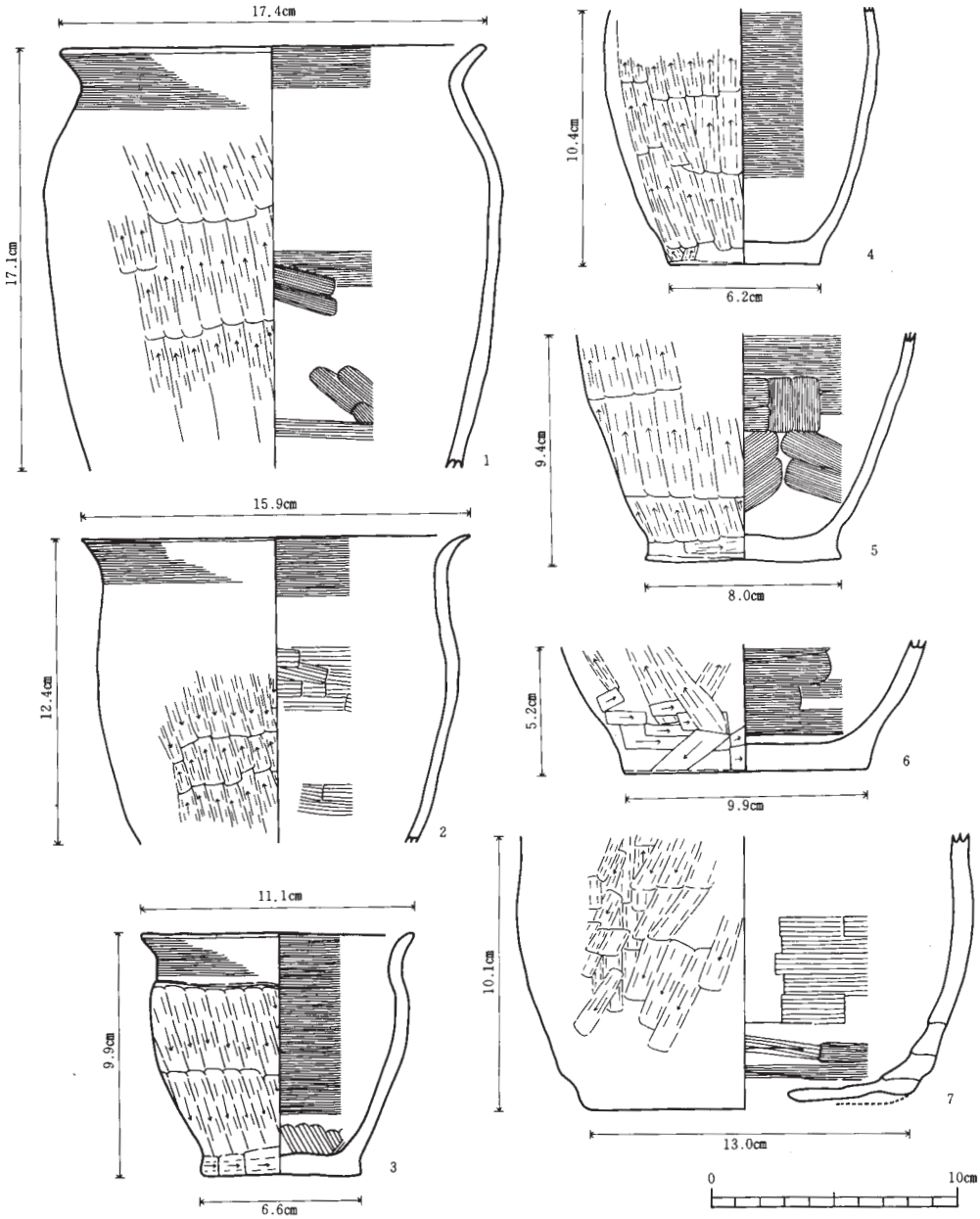
図123　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土土器(2)



土 師 器 観 察 一 覧

図版	層位	器種	部位	外面	内面	備考	登録番号
1	2Hカマド内11層	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ		P 2
2	2Hカマド	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		接35
3	2H床直	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		接8
4	2Hカマド付近	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ	内外面に炭化物付着	接7
5	2Hカマド付近	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		接4

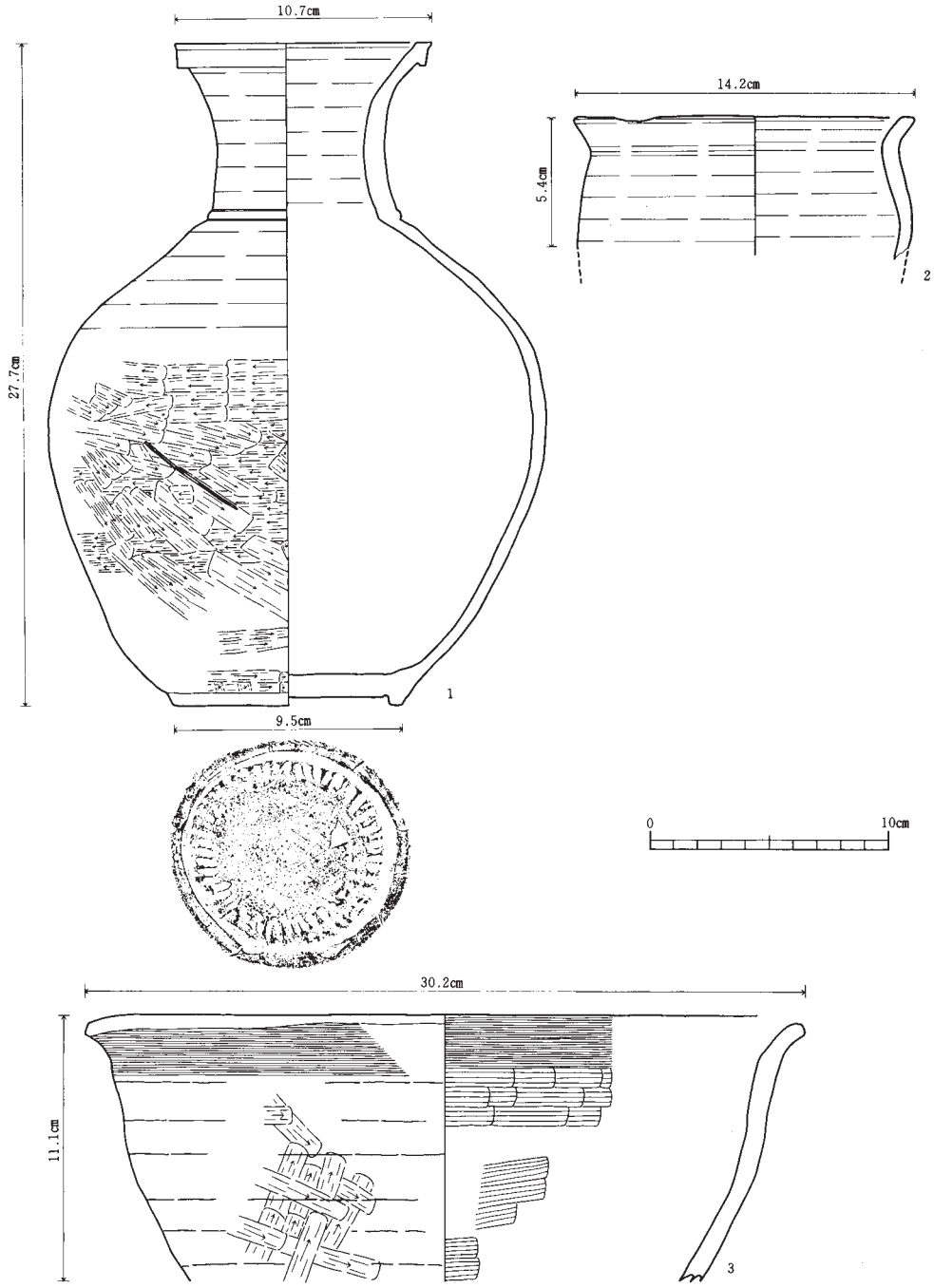
図124　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土土器(3)



土 師 器 観 察 一 覧

図版	層位	器種	部位	外面	内面	備考	登録番号
1	2H床面	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ	内外面に炭化物付着	接5
2	2H床面	甕	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ	内外面に炭化物付着	接17
3	2H床面	小型甕	—	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		接13
4	2H床直	小型甕	底部	ヘラナデ	ユビナデ	外面に炭化物付着	接15
5	2Hカマド支脚	甕	底部	ヘラナデ	ユビナデ		P1
6	2Hカマド内11層	甕	底部	ヘラナデ、ヘラケズリ	ユビナデ		P2
7	2H覆土	甕	底部	ヘラナデ	ヘラナデ、ユビナデ		P35

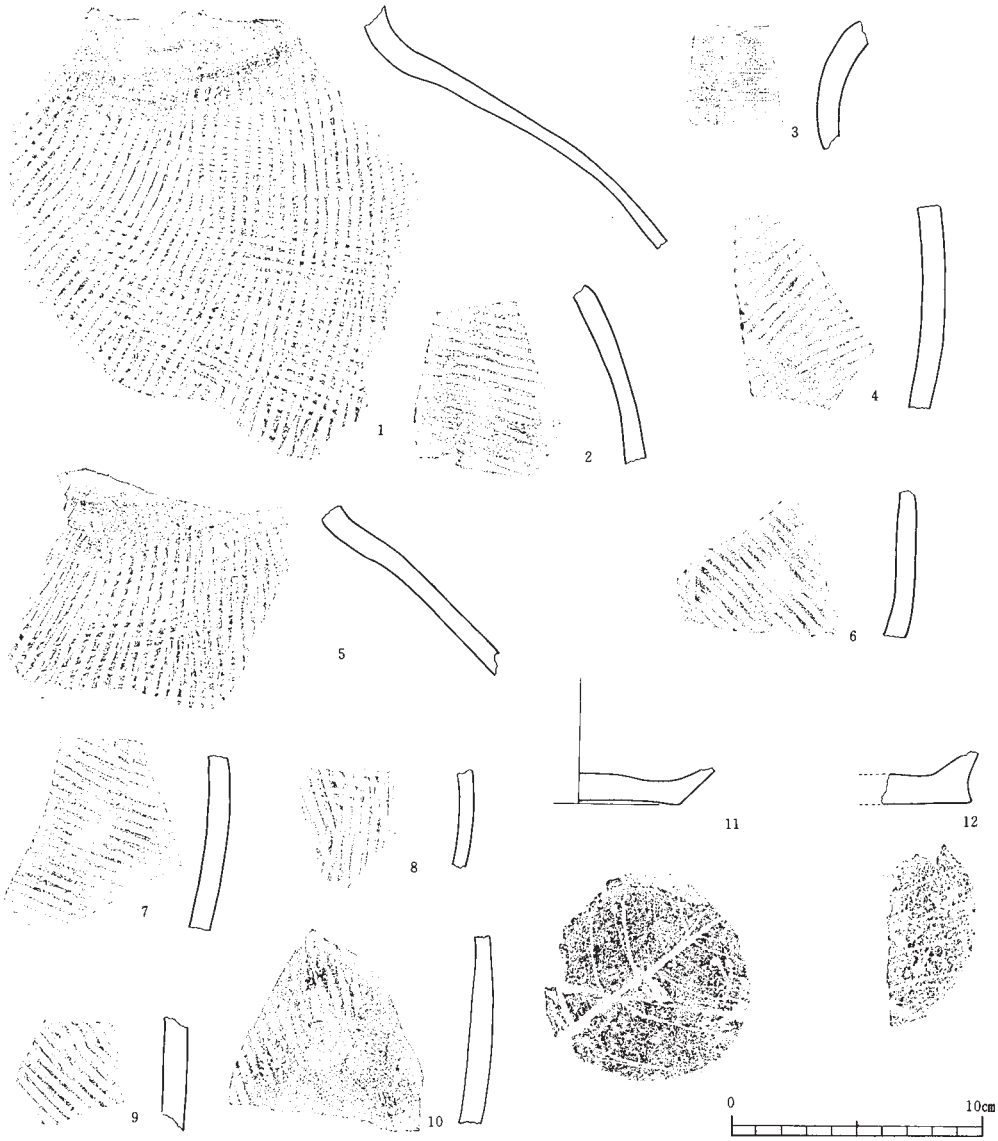
図125　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土土器(4)



須恵器、土師器観察一覧

図版	層位	器種	部位	外面	内面	備考	登録番号
1	2H床面	長頸壺	—	ロクロ（頸部）ユビナデ（胴、底部）ヘラナデ	ロクロ（頸部）	底部に菊花状調整痕	P302
2	2H床直	小型甕	口縁部	ロクロ	ロクロ		P4
3	2H覆土3層	埦	口縁部	ユビナデ、ヘラナデ	ユビナデ、ヘラナデ		検51

図126　アイヌ野遺跡第2号住居跡出土土器(5)



第２号住居跡出土須恵器、土師器観察一覧

図版	層位	器種	部位	外面	内面	備考	登録番号
1	２Ｈカマド付近覆土	甕	胴部	叩き目	当木痕	須恵器	Ｐ24
2	２Ｈカマド付近覆土	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ25
3	２Ｈ外Ⅱ層	甕	口頸部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ４
4	２Ｈ外Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ３
5	２Ｈ床直	甕	胴部	叩き目	当木痕	須恵器	Ｐ61
6	２Ｈ外Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ10
7	２Ｈ外Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ14
8	ＩＲ－110Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ67
9	２Ｈ外Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ26
10	２Ｈ外Ⅱ層	甕	胴部	叩き目	ユビナデ	須恵器	Ｐ６
11	ⅡＤ－125Ⅱ層	甕	底部	木葉痕、底辺部ケズリ		土師器	Ｐ127
12	２Ｈ外Ⅱ層	甕	底部	木葉痕		土師器	Ｐ57

図127　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土器(6)

図124－３は、内面調整に箆状工具が用いられている。しかもヘラナデが粗雑で多数の不規則な段をなす。

図125－５は比較的小型な甕の胴下半部である。かまどの支脚として用いられたもので二次火熱をうけているため、外面の剥落が激しい。

小型甕　２点出土している。図125－３は略完形。４は口縁部を欠いているもので、ピット７の柱穴付近の床面出土である。この２個体は製作技法上で特色のある土器である。巻き上げによる成形はほかの甕と同様であるが、粘土がかたくなった段階でヘラナデ調整しているため、器面全体に無数の深い沈線様の痕跡が残っている。３の内面は黒色処理されている。

坏　６個体出土している。このうち３個体が床面出土の略完形品である。この３個体はいずれもかまど周辺に集中している。

図122－７、８の２個体は成整形で、ロクロを使用していないものである。７は巻き上げ成形後、内外面をヘラミガキを行ったもので、８は土師器の甕の製作技法が用いられている。すなわち、巻き上げ成形後、体部外面を縦方向のヘラナデ、内面及び口縁部内外面をユビナデで調整している。また、胎土内に多量の粗砂粒が混入していることも甕に類似する。

図122－１、３、５の３個体はロクロ調整後、内面をヘラミガキされ、更に黒色処理されている。なお、１は底辺部外面がヘラケズリされている。

図122－６は、ロクロ調整以外の調整は行われていない。明赤褐色であるが一部は灰褐色を呈する。

堝　図126－３の１個体のみである。破片の大部分は竪穴外の生活面上からの出土で、ほかは竪穴内第３層中に含まれていたものである。底部と、体部約３分の１が欠損している。器高の割に口径の大きなものである。口縁部はやや外反している。成形は巻き上げによるもので、器外面全体に1.5㎝ほどの粘土紐の痕跡が明瞭に見られる。器厚は甕に比較して厚い。体部下半の器面は二次火熱をうけており剥落が激しく、しかも上半には炭化物が多量に付着していることから、煮沸容器としての機能をもったものであろう。

〔須恵器〕　須恵器は、坏が２個体、長頸壺の略完形品が１個体、鉢が１個体、更に大甕の胴部破片が出土した。大甕は２個体分の破片である。

長頸壺　北西コーナー寄りの床面上から約100片の細片で出土したものである（図126－２）。器形上の特徴は口縁部、頸部、体部にある。口縁部は「コ」字状をなし、しかも口唇部が平坦に面取りされている。頸部は外反の度合が少ない。また、体部最大径は体部中央に近く、結果として「なで肩」となっている。調整技法は須恵器長頸壺に一般的に用いられるものと同一である。体部上半から口唇部にかけてはロクロ調整で、下半はヘラナデである。底部には付高台をもち、更に箆状工具で「菊花」状の調整が行われている。

甕　図127－１はかまど右袖に密着して出土した胴部破片である。外面には木目様格子目の叩き痕が、また内面には平滑なあて木痕が見られる。

図127－３、５は頸部から肩部にかけての破片と胴部破片で同一個体である。外面には平行叩き痕が見られる。

鉢　図126－２は比較的小型な鉢である。内外面ともロクロ調整痕が見られる。

坏　図122－２は青灰褐色で、軟質である。図122－４は灰褐色で、内外面にはロクロ目が明瞭に観察できる。いずれも再調整が行われていない。

5　小結

標高17m～22mの洪積台地上に立地する平安時代の集落遺跡である。遺跡の一部は土取りにより破壊されているが、主体部は集落の廃絶以後、ほとんど人為的な攪乱がなく今日に至っている。

このため、まだ埋まり切らずに残っている竪穴住居跡が７軒確認された。これらはすべて、台地の南端に集中し、しかも、各竪穴は10m～20mの間隔で配置されている。これは比較的限定された短い期間内での集落展開の結果であると思われる。

また、各トレンチ内及び住居跡内から出土した遺物は、桜井清彦（桜井：1958）による東北北部の第Ⅱ型式に属する土師器と、須恵器が主体であり、擦文土器の出土は全くない。

これは、遺跡を残した人々が土師器文化の担い手であることを示すものである。

第２号住居跡は、南壁につくりつけのかまどのある竪穴住居跡である。この住居跡は上屋を支える４本の主柱をもち、いずれも角材を使用している。この４本の主柱の配置は、対角線上の北西、及び北東コーナー寄りの床面上に２本、更にそれに対応する２本が南壁直下である点で注目される。この住居は竪穴掘削の際の排土を盛り上げたものであるが、このような例は極めて珍しい。これが住居構造上、どのような役割を果たすものかについては今後の研究課題であろう。

第２号住居跡床面から出土した土師器・須恵器は、製作技法上の諸特徴から平安時代に位置づけられる。しかし幾つかの点で、これまで知られていなかった事実も判明した。坏の調整技法で、９世紀に一般化されたロクロ調整後、内面を異色処理、底辺部外面をヘラケズリしているものが、10世紀から11世紀代に主体を占めるといわれる赤褐色土器と共伴している。この事実は、単に本遺跡のみの現象か、あるいは県内全域の現象か、即断できないが、いずれにしても土師器編年の上で欠くことのできない問題となろう。

また、須恵器は完形の長頸壺と、平行叩目文の見られる大甕破片は、前田野目窯跡群（坂詰：

1968、1972、村越・新谷：1974）のものと製作技法上、類似する点が多い。しかし長頸壺は形態と胎土で、また、大甕は叩目文と胎土で違いが認められ、前田野目窯跡群から供給されたものとは思われない。また坏は、器形、胎土、焼成のいずれの面でも明らかに前田野目窯跡群のものとは異なるものである。青森県内には、現在まで前田野目窯跡群以外の須恵器生産地は知られていない。したがって県内にこの窯跡群以外に生産地が存在することは明らかである。この窯跡の発見も今後の課題であろう。

（三浦　圭介）

〔引用・参考文献〕

青森県教育委員会　1971　『むつ小川原開発予定地内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第１集

青森県教育委員会　1977　『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第43集

桜井清彦　1958　「東北地方における土師器と竪穴住居に関する諸問題」『館址』東京大学出版会

坂語秀一　1972　「東北北部における須恵器の生産」『北奥古代文化』第４号　北奥古代文化研究会

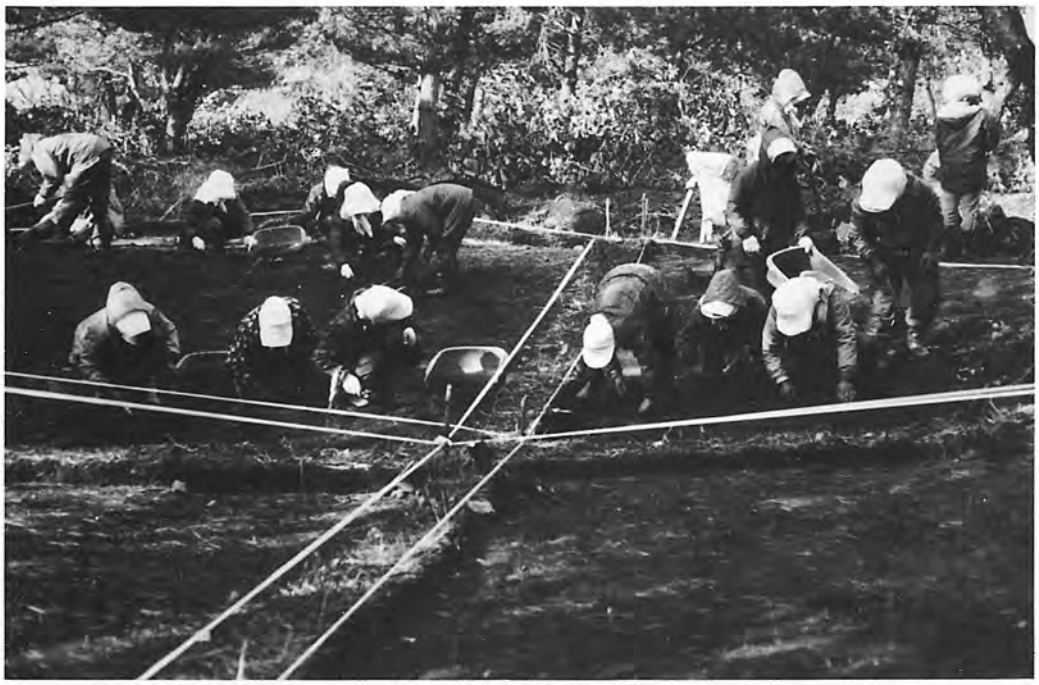
1975　「津軽前田野目窯跡群をめぐる課題」『北奥古代文化』第７号　北奥古代文化研究会

1968　『津軽・前田野目窯跡』五所川原市教育委員会

村越潔・新谷武　1974　「青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報」『北奥古代文化』

表５　アイヌ野遺跡住居跡（凹地）確認状況一覧

住居跡名	長　軸（ｍ）	短　軸（ｍ）	深　さ（cm）	備　　考
１号住居跡	8.9	6.0	55	周囲に盛土
３号住居跡	7.4	6.9	60	
４号住居跡	6.9	4.0	52	
５号住居跡	7.3	5.6	55	周囲に盛土
６号住居跡	7.9	6.7	75	周囲に盛土
７号住居跡	7.0	5.0	55	



第２号住居跡調査風景

第２号住居跡全景

写真42　アイヌ野遺跡第２号住居跡

第２号住居跡かまど全景

須恵器長頸壺出土状況

写真43　アイヌ野遺跡第２号住居跡

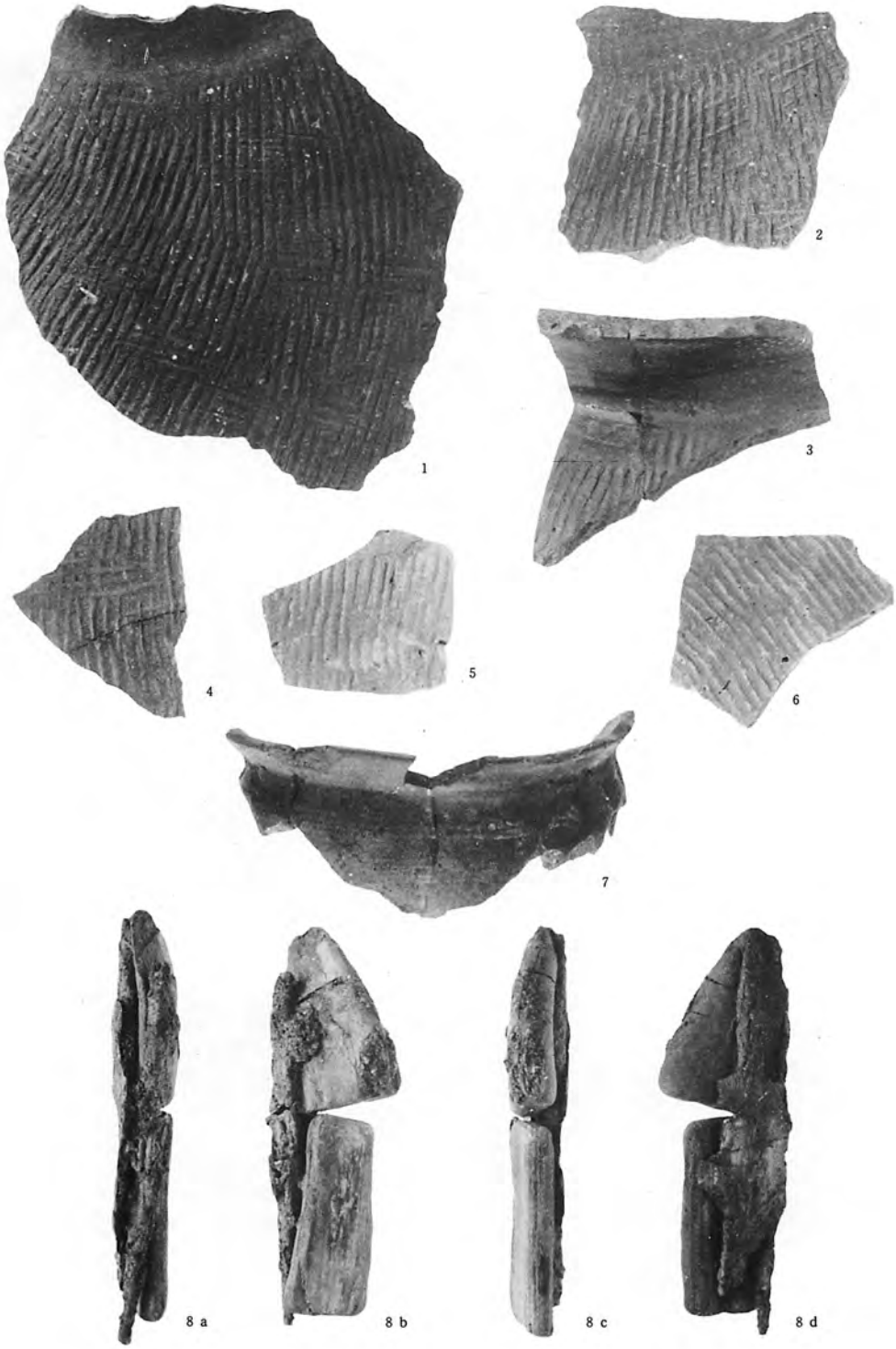


写真44　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土遺物

写真45　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器(1)

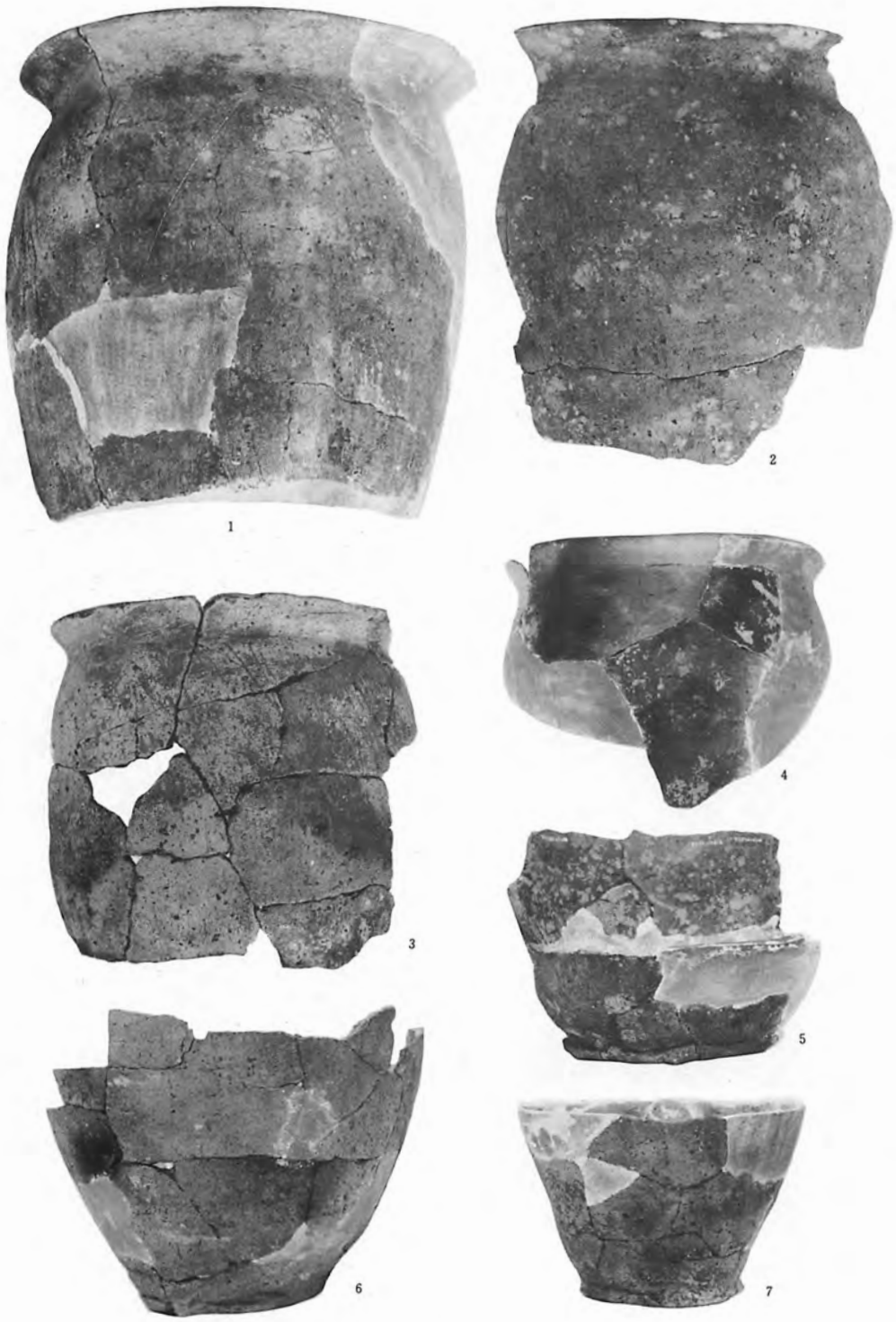


写真46　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器(2)

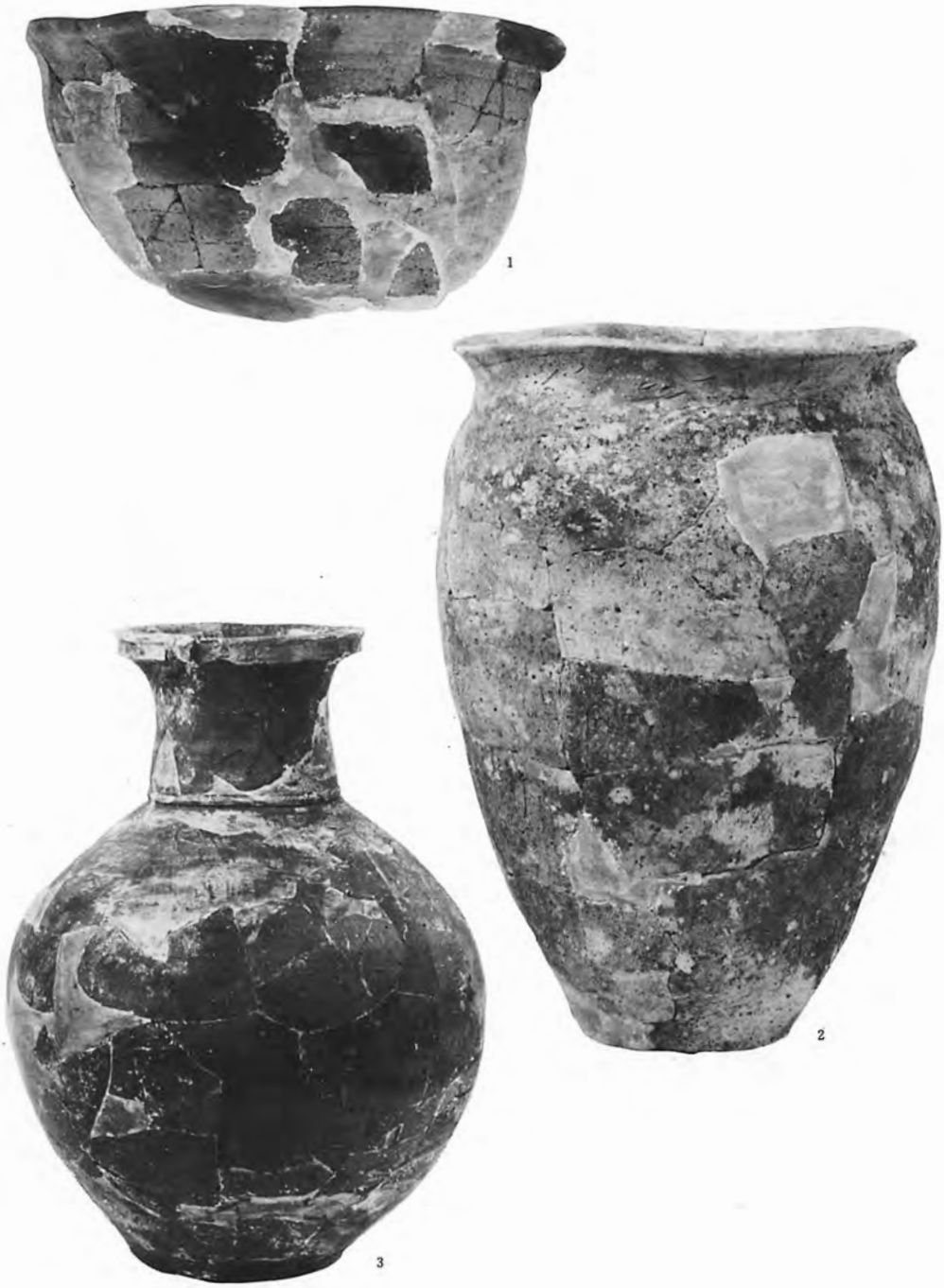


写真47　アイヌ野遺跡第２号住居跡出土土師器・須恵器

第Ⅲ章　ま　と　め

約900haの広大な用地を有する下北地点原子力発電所建設予定地内には、周知の遺跡に加え、昭和52年度の分布調査の結果、20遺跡が確認されている。今回の試掘調査で検出した遺構や、出土遺物、あるいは包蔵状態等の概要は、前述したとおりである。以下、この調査によって得られた成果をまとめるとともに、この地域における各時代の遺跡のあり方やその構造、遺物の様相上のいくつかの問題点を指摘し、今後の保護、活用上の課題としたい。

(1) 遺跡を各時代、各時期単位に見ると、表６のようにいくつかの注目すべき事実が指摘される。

第１に各時代をとおして、いくつかの間隙が認められる。その中でも縄文時代前期中葉から中期中葉までと、晩期の全型式を通じての期間が最も注目される。前者は円筒土器文化期で、後者は亀ヶ岡式土器文化期である。いずれも東北地方北半部を中心とする極めて発達した遺跡数の多い文化期といわれている。しかも、下北地方の太平洋岸側での主要河川である老部川及び小老部川を擁する本地域の中で、該期の遺物が発見されないことの理由を明らかにすることは、生産活動の問題とも合わせ今後の課題となろう。

第２に、これとは逆に、十腰内Ⅰ式の単一型式の遺跡が７遺跡も発見されている。いずれも少量の遺物が散発的に出土したにすぎず、遺構は全く発見されない。しかも遺跡は、主要河川流域を含め、原発予定地のほぼ全域に平均的に分布する。これは、該式期の集団における生業のあり方や、集団の領域の問題とも係わり合うものであろう。このような遺跡の調査が比較的実施されていない現状では貴重な資料と言えよう。

(2) 前坂下(3)遺跡は、東北地方北部における縄文時代終末期から弥生時代初頭の集落跡として特筆される。特に第１号住居跡においては、その構造（下部構造）が明確にされたこと、あるいは遺物の組成が明らかになったことなどは大きな成果であろう。

この成果は、近幾地方の一部や北海道北半までその影響下に置いた亀ヶ岡式土器文化が、弥生文化に変容する過渡的段階の文化内容を解明する上で、大きな手がかりとなるに違いない。

(3) 奈良、平安期の遺跡としては、銅屋(3)遺跡、前坂下(1)遺跡、前坂下(6)遺跡、アイヌ野遺跡等があげられる。その中でも銅屋(3)遺跡の第１号住居跡は最も古く、東北地方の土師器編年上の第Ⅰ型式から、同第Ⅱ型式の過渡的段階のものとして把握される。甕形土師器は器形上の多くに第Ⅰ型式的様相を残すが、住居構造上では他遺跡の第Ⅱ型式を伴出する住居跡に類似する。土師器編年上では貴重な資料と言えよう。

また、アイヌ野遺跡では、現在もまだ埋まり切らない竪穴住居跡を７軒確認できた。住居廃

絶後、約1,000年の間、全く人為的な手が加わらずに保存されてきた結果である。この現象は、全国でも、東北地方の一部と北海道に認められるにすぎない。

このうちの１軒である第２号住居跡は、竪穴の周囲に土手状の盛土を有することが確認できた。この盛土は、壁辺の３辺に認められ、出入口及びかまどの設置されている南壁辺が開放されている。このことは、主柱穴の特徴的な配置とともに、平安時代における竪穴住居の上屋を想定する場合に、重要な役割を果たすものと思われる。

また、第２号住居跡は火災を受けたために、床面上からかなりの復原可能土器が出土した。これらは、消費及び廃棄時期が同時である点で大きな意味をもつ。すなわち、平安時代後半期の特徴的な土器組成として把握され、土師器編年の上で貴重な資料となろう。

更に、第２号住居跡で検出した降下火山灰は、重鉱物及び軽鉱物分析の結果（山口：1982）中国大陸にその噴出源を有し、東北地方北部から北海道石狩低地帯まで分布が確認されている苫小牧火山灰（町田ほか：1981）であることが濃厚であるとされた。

この火山灰は、六ヶ所村発茶沢遺跡等の平安時代の集落跡でも認められており、今後、これを鍵層とした場合の、各遺跡間の時間的な係わりを究明可能にするものと思われる。

（4）中世末から近世初頭の遺跡としては、浜通遺跡、前坂下(1)遺跡がある。特に浜通遺跡からは、比較的まとまった陶磁器や古銭、鋤先等が出土し、更に、掘立柱建物跡の一部も検出できた。陶磁器は唐津、美濃、志野、明代の染付であり、これらは、製作の特徴から、16世紀後半から17世紀初頭に生産されたものである。

今回の調査では、遺跡の具体的な性格を明らかにすることはできなかったものの、本地域は当時、根城南部家支配地であること、一般民衆の入手困難な白磁染付が共伴すること等を考慮すれば、南部家と直接係わり合う施設跡であることは想像に難くない。

これまで調査されてきた東北地方の、中・近世遺跡の主体は、城館遺跡であったことからすると、本遺跡の発見とその調査は、今後の本県の歴史考古学上重要な役割を担うことになると思われる。

（5）３基の孤立丘が見られる見知川山遺跡は、「赤人（あかひと）もり」と称される伝説のある遺跡で、外観上は終末期古墳群の墳丘に類似する。しかし、試掘調査と、深さ７mにも及ぶ試錐調査の結果、この孤立丘は、後背地の山地から自然の営力でもたらされた岩塊流によって形成されたものと理解された。

しかし、試掘調査を行ったのは３基の孤立丘のうちの１基であり、しかも孤立丘全体に及んでいないことから判断すれば、「赤人もり」伝説に見られる「異人の墓」の解明は、今後の調査の課題であろう。

（三浦　圭介）

〔参考文献〕

山口義伸　（1982）　「遺跡周辺の地形と層序について」『発茶沢遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会

町田洋ほか（1981）　「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51－9　岩波書店

表6　下北地点原子力発電所建設予定地内における遺跡形成時期一覧

	時期	東北地方北部の土器型式 （　　）は東北南半部	青森県内主要遺跡	原発予定地内遺跡
縄文時代	早期	日　計 白浜・小船渡平 寺ノ沢 吹切沢 物見台 ムシリ 赤御堂 早稲田5	日計遺跡 白浜遺跡 寺ノ沢遺跡 吹切沢・下田代納屋遺跡 物見台遺跡 ムシリ遺跡 赤御堂貝塚 早稲田貝塚	前坂下(1)遺跡
	前期	長七谷地Ⅲ 早稲田6 表　館 深郷田 円筒下層式 a b c d 1 2	長七谷地遺跡 早稲田貝塚 表館遺跡 深郷田遺跡 石神遺跡	前坂下(13)、銅屋(2) 前坂下(5)遺跡
	中期	円筒上層 a b c d e 〃 〃 〃 〃 榎　林 中ノ平Ⅲ （大木10）	榎林遺跡 中ノ平遺跡 妻ノ神遺跡	
	後期	十腰内 Ⅰ 〃 Ⅱ 〃 Ⅲ 〃 Ⅳ 〃 Ⅴ	十腰内遺跡	銅屋(3)、前坂下(3)、同(5)、同(8) 同(10)、同(11)、同(12)、浜通遺跡 銅屋(2)遺跡 前坂下(5)遺跡
	晩期	大　洞 B B C C 1 C 2 A A′	亀ヶ岡遺跡	
弥生時代	前期	砂　沢	砂沢遺跡	前坂下(3)遺跡
		二枚橋　五所	二枚橋・瀬野遺跡	
	中期	宇鉄Ⅱ 田舎館	宇鉄Ⅱ遺跡 田舎館遺跡	銅屋(3)遺跡
	後期	（天王山） （桜　井）		
古墳時代		（塩　釜） （南小泉Ⅱ） （引　田） （住　社） （栗　囲）	細越館遺跡	
歴史時代	奈良	土師器第Ⅰ型式（国分寺下層）	鹿島沢古墳群 浅瀬石遺跡	銅屋(3)遺跡
	平安	土師器第Ⅱ型式（表杉ノ入）	近野遺跡 鳥海山遺跡 源常平遺跡	アイヌ野遺跡 前坂下(1)、前坂下(5)遺跡 前坂下(6)遺跡
	鎌倉 室町 安土 桃山 江戸		板留(2)遺跡 尻八館 根　城 浪岡城 弘前城	浜通遺跡、前坂下(1)遺跡

青森県埋蔵文化財調査報告書第71集

下北地点原子力発電所建設予定地内
埋蔵文化財試掘調査報告書

印刷発行　昭和57年3月31日

発行　青森県教育委員会
青森市新町二丁目3－1

編集　青森県埋蔵文化財調査センター
青森市大字新城字天田内152－15

印刷　青森オフセット印刷株式会社
青森市本町二丁目11－16